

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 9 No.4

第36号

March 2019

対人援助学会

NO. 36 M O K U J I

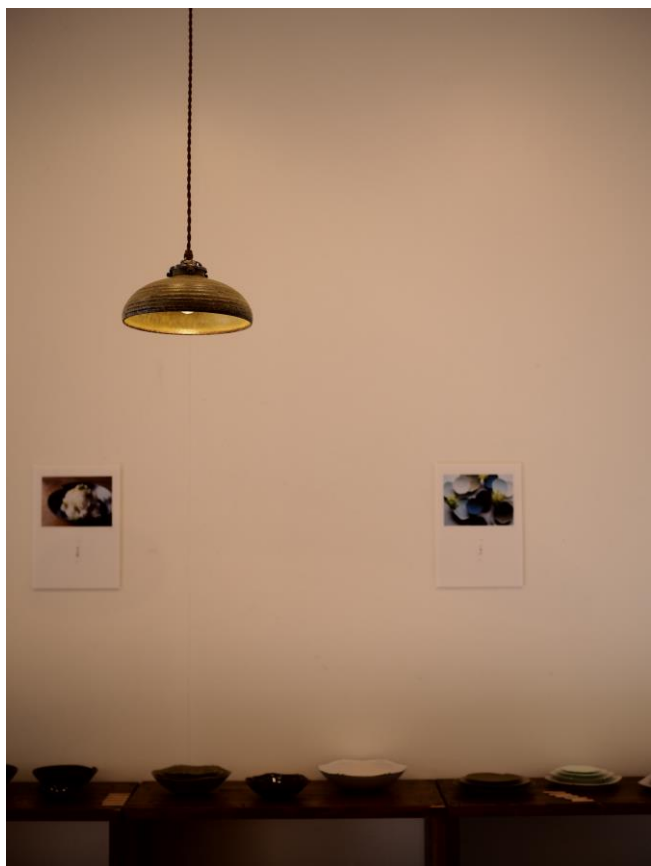
目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
知的障害者の労働現場	千葉 晃央	016-019
臨床社会学の方法(24)	中村 正	020-029
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団 遊	030-033
カウンセリングのお作法(18)	中島 弘美	034-039
集団精神療法を振り返る(1)	藤 信子	040-042
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援	岡田 隆介	043-051
「続・家族理解入門」(6)	団 士郎	052-062
社会的養護の新展開 5	浦田 雅夫	063-064
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村 真也	065-096
幼稚園の現場から	鶴谷 圭一	097-100
福祉系対人援助職養成の現場から	西川 友理	101-106
境界あれこれ(11)	河岸 由里子	107-109
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	110-112
対人援助学&心理学の縦横無尽(24)	サトウタツヤ	113-118
高齢者とのドラマセラピー	尾上 明代	119-122
きもちは言葉をさがしている(35)	水野 スウ	123-129
盆踊り漫遊(5)	竹中 尚文	130-136
男は痛い!(30)	國友 万裕	137-144
周旋家日記(27)	乾 明紀	145-147
役場の対人援助論(28)	岡崎 正明	148-151
臨床のきれはし(4)	浅田 英輔	152-153
新版K式発達検査をめぐる	大谷 多加志	154-157
講演会&ライブな日々	古川 秀明	158-162
養育里親~もうひとつの家族~(24)	坂口 伊都	163-167
周辺からの記憶 —東日本大震災家族応援プロジェクト—(22)	村本 邦子	168-187
対人支援 点描(17)	小林 茂	188-189
「あ! 萌え」の構造 番外編6	斎藤 清二	190-198
精神科医の思うこと(12)	松村 奈奈子	199-202
「ケアプラン」の価値	馬渡 徳子	203-204
東成区の昭和 思い出ほろほろメモ	柳 たかを	205-212
介護福祉を巡る断章	臼井 正樹	213-215

町家合宿 in 京都 (10)	山下 桂永子	216-220
そうだ、猫に聞いてみよう(13)	小池 英梨子	221-224
先人の知恵から (23)	河岸 由里子	225-230
私の出会った人々	関谷 啓子	231-232
うたとかたりの対人援助学	鵜野 祐介	233-236
ああ結婚 (9)	黒田 長宏	237-239
PBLの風と土(8)	山口 洋典	240-245
接骨院に心理学を入れてみた(7)	寺田 弘志	246-251
現代社会を『関係性』という観点から考える(7)	三浦 恵子	252-255
対人援助通訳の実践から(7)	飯田 奈美子	256-268
マイクロアグレッションと私たち(6)	朴 希沙	269-272
保育と社会福祉を漫画で学ぶ(5)	迫 共	273-275
「余地」—相談業務を楽しむ方法—(5)	杉江 太朗	276-281
統合失調症を患う母とともに生きる子ども(4)	松岡 園子	282-291
生体肝移植ドナーをめぐる物語(4)	一宮 茂子	292-301
「盲ろう者」として自分らしく生きる(3)	中條 與子	302-310
復活連載 ころろ日記「ぼちぼち」	脇野 千恵	311-312
編集後記	編集長&編集員	313-314

ハチドリの器 19

見野 大介

Mino Daisuke



- 上：蒼天釉平盃
- 左：翠釉ランプシェード
- 下：檜灰釉波紋菓子皿
鳥ノ子釉ティーポット
鳥ノ子釉湯呑





大石仁美

病児保育奮闘記

私この度静養のため、しばらくお休みをいただくことになりました。70歳を過ぎたころから、急に体力、気力の衰えを感じ、「老化とはある日突然階段を一段二段降りたと感じるものだ」とある人から聞いていたので、ああ、こういうことなのかと、妙に納得しつつ、いやいや改善の余地はあるはずと、筋トレに通ったり、ご飯を減らしてその分タンパク質を増やしたり、朝のテレビ体操やワンの散歩もかかさず、努力と言えないまでもそれなりに生活しておりました。

御所で夕方に仲良しのワンちゃん同士集まって、キャッチボールあそびをしますが、ワンはもちろん飼い主の私もそれなりに楽しみで、時間に遅れないようにつけつけたものです。今思うと、昨年の夏過ぎごろから、ボールが投げられないとか、すぐ疲れて息切れがしていました。腹部に痛みを感じることもありましたが、そのうち忘れてしまう程度なので、そのまま放置していました。

不思議なことに、今年に入ってから、私亡き後の連れ合いの生活を気にしている自分がいて、今のうちに孫にも出来るだけのことをしてやりたいという気持ちが以前にも増して湧いてきて、ん～？やっぱり検査してみるかと十数年ぶりに検査を受けました。

結果は、想像していたよりも悪かったです。

2月に手術を受けますが、その後もしばらくはゆっくり、のんびり過ごさせてもらおうと思っています。のんびり出来るのは、70過ぎまで走り続けてきた私へのご褒美だと思って。

皆さまどうぞお体をお大切に！「車は車検、人は健診」公の場ではそう言っていたので、笑えます。



復活連載 脇野 千恵

また対人援助マガジンに再登場させていただきました。よろしくお願ひいたします。

昨年12月、私の住む市のまちづくり事業団の助成金が出る企画に応募してみたところ、見事採択されてしまいました。たいしたプレゼンではなかったのですが、驚きでした。地域の市民団体のグループとして活動もしているので、以前から何かやってみませんかと声を掛けてもらっていました。長年研究している性教育の実践と成果をアピールしたのが良かったようです。今まであまり光があたりなかった性に関する問題について、審査員に関心をもってもらえたことが何よりだと思っています。4月から、2年間の具体的な活動を始めなくてはなりません。思春期にある子どもたちに絞ってのサポートと、居場所作りを考えていますが、うまくいかいかないかより、何かを始める時のドキドキ感を楽しんでいきたいと思っています。

こころ日記「ぼちぼち」part II
p301～

岡田隆介

1月の三連休の初日、なんとなく腰が重い。二日目、腰から大腿部にかけての痛みで歩行が辛くなる。三日目、我慢できず整形外科の当番医にかけこむと、駐車場も待合室もいっぱい。患者はみな後期高

齢者だ。

長く待って、検査して坐骨神経痛と言われ、鎮痛剤の内服薬とある程度の諦めを処方される。その後も痛くて歩きづらいため、医者をやめて人生初の整体に(精神科から民間療法へ変わる感じ、違うか?)。劇的な効果はないが、丁寧さ・一生懸命さ(文字通り汗を流してくれる)が心地よくしばらく通う気になった。

痛みと付き合いは年齢との折り合いだ。(文字通り)ゆっくり歩くことにする。

エア絵本 -ビジュアル系子ども・
家族の理解と支援(3)-
p43～

一宮 茂子

映画「ボヘミアン・ラブソディ」。この冬、映画館へ何度も観に行った。英国の「クイーン」という伝説的ロックバンド。主人公はヴォーカル&ピアニスト&ソングライターであるフレディ・マーキュリー。バンド結成から1985年に行われた「ライヴアイド」でのパフォーマンスまでを描いた伝記映画。ライブでは8万人～10万人のオーディエンスの心を一つにするフレディの圧倒的な歌唱力とパフォーマンスは圧巻。それらは人々を団結させる力となり、自分らしく生きる人生の応援歌となっている。ゲイであるフレディは1991年エイズによる肺炎で永眠。45歳。

ストーリーテリングは彼の実像とパフォーマンスを重ねて、生き急いでいるように見える有り様を、観る人にたたみ込むように語りかけてくる。観るたびに感涙した私は結局7回観に行った。こんな経験は初めて。この爆音映画、上映が終わるまでにもう一度観て強く記憶に留めたい。

生体肝移植ドナーをめぐる物語(4)
P282～

松岡 園子

今、しているお仕事の一つに、訪問介護のお仕事があります。訪問介護は、利用者さんのお宅に伺って必要な援助をすることから、自分がその方の生活の中に「なじむ」ということを意識させられます。うまくなじむことができると、私たちは利用者さんの生活の一部になることができます。それが一番自然で心地よいことなのではないでしょうか。ですから、日々の援

助を通してその利用者さんを知ることから始めようと思い、1人ひとりの方とよくお話しすることを心がけています。

**統合失調症を患う母とともに
生きる子ども(4)**
P272~

中條 興子

前回35号はお休みしましたが、今回『盲ろう者』として自分らしく生きる』の3回目を執筆させていただきました。

連載を始めたものの、これから書いていけるのだろうかと不安でしたが、この冬、初心に戻ることができ、3回目を完成させることができました。自分が自分の障害とどのように生きてきたのかということに真剣に向き合い、今回、ずっと言語化できなかった事が言葉にできたり、忘れかけていたことも思い出せました。過去の時間は戻りませんが、その時々起こった出来事を、思い出して考えることで、もう一度、生きなおしているような気持ちになりました。これからもよろしく願いいたします。
「盲ろう者」として自分らしく生きる(3)
P292~

杉江 太朗

児童相談所で働いています。メディアでは、大注目を浴び、国家資格化なんてことも騒がれています。

児童相談所は、戦争孤児の対策に始まり、不登校や非行の子の対応を経て…。今や虐待に関する専門機関としての役割を求められるようになりました。

今も昔も変わらないことは何でしょうか。それは、子どもを通して社会に働きかけることではないでしょうか。社会とはその子どもの家族であり、その子どもの所属です。目の前の虐待というエピソードに振り回されずに、少しでも社会がマシになるように働きかけ、少しでも子どもの生活の質が高まることを目指して奮闘しています。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-(5)
P276~

迫 共

保育や社会福祉について考えられる漫画を紹介する企画を考えたのが2年前。すぐにネタが尽きてしまうのではと心配していましたが、そんなこともなく、むしろ一

見するとまったく保育や社会福祉に関係なさそうな作品からも考えていくことができるものだと気づかされています。

同僚に紹介されたのが、今回とりあげた『花もて語れ』でした。こんな作品があるよと教えてもらえるのも嬉しいものですね。専門書を読む時間もないなか「まんだらけ」に足しげく通い、コスプレの店員さんに「この漫画ありますか？」と聞きまくる、ダメ人間化を進めています。



保育と社会福祉を漫画で学ぶ(5)
P273~

朴 希沙(Kisa Paku)

早いもので年も明け、もう2ヶ月が経とうとしている。私はここ数年、大晦日には1年を振り返り、今年目標を考える。実はここ10年近く、1年を振り返っては、毎年がよりよいものになっていると感じる。よく、昔はよかった、若い頃はよかった、あの時代に戻ればという人がいる。私は、全然そう思わない。高校生の頃実家を出て、新しい出会いの中に飛び込み、一人で韓国に渡り、自分にとって本当に必要だった学びや本に出会い、日々変化していく中で自分がより幸福になっていると感じる。新しいことを知れば知るほど、長い付き合いの友人たちとの関係が毎年深まれば深まるほど、自分の人生がよりよいものになっていると感じる。そしてそれを一番感じるのは、朝起きた瞬間だ。

子どもだったころ、私は学校も家も嫌いだった。朝起きてもちっとも面白くなく、なんとなく毎日憂鬱でどこか満たされない思いがあった。しかしここ5年ほどは、毎朝起きるたびに自分の中に力が湧いてくるのを感じる。目が覚めたときに、身体の中から幸せな気持ちが溢れ出てきて、爽や

かな風が吹き抜けるような感覚がある。「いつ自分はこのように変わったんだろう？」と時々不思議に思う。多くの出会いが、私を変えていった。人からどう評価されるのではなく、私自身にとって必要なこと、大切なことを何よりも尊重してくれる人との出会い、在日という属性についても気にせず思いっきり勉強し友情というものについても知った韓国での環境、学ぶということは社会的地位を得るためではなく、自らの視点を広げ自由に考えられるようになることだと古典や哲学を教えてくれた韓国の先生たち。私自身の視点を理解し、いつも支えてくれる人々との出会いが、私を変えていった。だから私は、自分の人生に、実際とても満足している。

しかし最近、日本社会では嫌なことばかりが起こっている。沖縄では無理やり基地が作られようとし、政府の汚職や性暴力も十分に追求されるどころか野放しに近い状況になっている。だから私も、こんな社会の中で自分が満ち足りていることに少々驚かされるのだが、それだけではやっぱりよくないので自分に出来ることを少しずつ重ねていこうと思う。ほんの少しの影響を、誰かに届けられることを願って。

マイクロアグレッションと私たち(6)
P269~

浅田 英輔

実は今年、臨床心理士の更新でした。更新書類の提出締め切りが1月31日。同じ時期に更新した同業者と話していて、「臨床心理士の更新は済んだしね」と言われて、「え???」となったのが1月30日。焦りましたが、資格認定協会の方は優しく「だいじょうぶですよ」と。ああよかった。公認心理師の登録証の色は気になりますが、見分けやすい色だからいいか、とします。

臨床のきれはし(4)
P152~

三浦 恵子

昨年暮れに配偶者の父を見送った。私自身の実母についても長い在宅介護や施設入所、長期入院を経て平成26年春に見送りを行ったが、またその時とは違う様々な思いや体験を重ねつつ今日に至っている。

今回の執筆テーマは以前から暖めていたものではあったが、義父の看取り・見送りで感じたことを、当事者の視点から書かせていただいた。粗削りの部分はどうかご寛恕いただきたい。

介護や看取り、見送りの形は、ある意味家族の在り様を示すものだと実感している。

周囲の方々にも本当に多くの支えをいただいたが、とりわけ同じ家族介護者としての立場から支え合ってきたグループの方々への感謝の気持ちは大きい。当事者相互の支え合いの大きさを改めて思い起している今日この頃である。

現代社会を『関係性』という 観点から考える(7)

P252～

寺田 弘志

このマガジンの執筆者の中島弘美さんと。最近かわした会話です(多少、編集しています)。

寺田(以下 T)「もう次の原稿は書けましたか？」

中島(以下 N)「いいえ、まだです。2月は短いから締め切りが早く来ますね」

T「次は、偽解決を書こうと思うんですけど」

N「おもしろそうですね」

T「偽解決の話をはじめて聞いたのは中島さんからですよ」

N「そうなんですか」

T「暑いときに「暑い、暑い」って言って「あっ、偽解決」って付け加えてはったの、覚えてます？」

N「そんなこと言いましたっけ」

T「私の記憶違いかもしれないです。ただ、偽解決って言葉、妙に印象に残ってるんですよえ」

ずいぶんと昔の話ですが、会社勤めをやめて、心理療法の仕事に転職しました。その職場の先輩が中島さんでした。私より年下ですが、よく勉強されていて、いろいろ教えてもらった覚えがあります。

難しいことでも、たとえ話を入れ、噛み砕いて話されるので、「じょうずにしゃべらるなあ」としばしば感心したものです。

ただ、教えてもらった内容のほうは、記憶が苦手な上に、柔道整備の方に再転職したため、ほとんど忘れてしまいました。

(中島さん、ごめんなさい)

たぶん、勉強会か何かで、中島さんが偽解決の説明をされたと思います。

「暑いときに、解決にはならないけれど「暑い、暑い」って言うのも、偽解決のひとつです」などなど。

その後、普段の何気ないときに「暑い、暑い……あっ、偽解決」、忙しいときに「忙しい、忙しい……あっ、偽解決」とつぶやかれるのです。

こんなご指導のお陰で、偽解決という言葉は私の記憶に残り、接骨院で施術をするときに役立っています。

そして、中島さんにお声かけしてもらったお陰で、このマガジンに原稿を書いています。

接骨院に心理学を入れてみた(7)

P246～

飯田奈美子

今年のバレンタインは、娘(4歳)の「友チョコ」デビューになりました。テレビで、最近のバレンタインは手作りのチョコレートを友達にあげるのが流行っているというのを見て「作りたい！」と大張り切りで前日からチョコ造りを行いました。型に入れたチョコレート(これは母担当)にトッピングを載せる作業をしました。40個全部のトッピングを娘が1人でやり、ラッピングもして、当日、保育園の先生、いつも遊んでくれている小学生のお姉ちゃんたち、マンシヨンのコンシェルジュのお姉さんに渡すことができました。みんな喜んでくれて、保育園の先生からは「女子力高い！」と言われていました。母は準備が大変でしたが、途中で投げ出すことなく最後までチョコづくりを行った娘に感動して、少し誇らしい気持ちになりました。

対人援助通訳の実践から(7)

P256～

山口洋典

去年の今頃は日本への帰国を前に、デンマークにも春の訪れを感じていたと思いついて、現地から「緊急事態」という標題の電子メールが届きました。

2月2日に届いたそのメールでは、私もお世話になった文化心理学研究センターの2名の教員が「今後の大学ビジョンに合

わない」「学部の将来構想に合う職能ではない」「その他の業務に関わる個人的資質」という標準的な理由で解雇し、センターを閉鎖する計画があると伝えられました。この呼びかけがメーリングリスト宛になされたことで、多くの人々から追加の情報が寄せられ、過去4年間でデンマークの教育関連予算は2,000万DKK(約338億円)削減されていること、大学は年間2%削減が強いられていること、人件費を抑えるために准教授クラスが解雇の対象となっていること、研究よりも教育に集中することが余儀なくされていること、そうした状況が共有され、世界の各地からも意見が寄せられました。



早速、執行部宛のメッセージが募られることになって私も賛同しましたが、特に人文社会系が軽視されている(STEMや医療系が上位に位置づけられている)ことや、将来的なことを考えてなのか若手の芽が摘まれていることは、日本にも通じる点であり、陳腐な有用性で未来の可能性を手放していないかと案じてしまう今日この頃です。

PBLの風と土(8)

P240～

関谷 啓子

昨日、久しぶりに映画を見た。

「空と風と星の詩人」 戦時下の日本、同志社に留学中「治安維持法違反」で警察に捕らえられ獄中死した韓国の詩人尹東柱の生涯を描いた作品。

週一回、自転車で過ぎる通りに小さな碑が立っていて花が途切れる事がない。

もう何年も通り過ぎていたが、ある日止まってじっくりとその碑を読んだ。

「尹東柱」という若い詩人が昔住んでいたアパートの跡地で、同志社の学友たちが彼を偲んでこの地に建てた・・・と彼の短かった生涯とその建立の意味が刻んであった。初めて尹東柱という名前を知り、彼について少し読んだ。



知り合いの韓国人に彼のことを尋ねると、みんな知ってるよ・・・と知らない私を不思議そうに見た。

ネットで、詩集で少しずつ身近に感じるようになった。

つい最近、TVでも取り上げられ、彼の亡くなった福岡と最初に入学した立教大学で彼の詩を読み継いでいるグループのあることを知った。2月16日は彼の命日で同志社では彼を偲ぶ会が行われ、参加者に一輪の花を持参して欲しい・・・との新聞記事も見つけた。

映画は、激しい拷問のシーンなどを覚悟して行ったのだが、結果的には彼の詩のような柔らかなしかし強靱な思いが残った。素晴らしい映画だった。彼の詩の中で「生きる事は難しいのに詩を書く事が容易い、それが恥ずかしい」という一行がありよく理解できなかったのだが、映画を見てその背景がわかると深く心に沁みた。

京都シネマという小さな映画館が満席だったのは嬉しかったが、観客のほとんどが高齢の人で、私の見た回では若い人は皆無だったのが残念だった。

今の時代、若い人にこそ見て欲しい映画だったのに。

生きがたきにたは易く詩の書けること
恥づかしといひし尹東柱忘れず

「田中」にあらず「金玉齡」と立ちて名乗りし友敗戦の日に

神谷佳子

歌集「窓」より2首

私の出会った人々

P231～

黒田 長宏

経緯の詳細は本文に展開されておりますが、1月23日に、『婚難救助隊』というサイトを個人事業で開始しました。マガジン連載開始の頃はこの開設をまったく予期していませんでしたが、これをライフワークとして、私は、特定の男女が結婚して子供を育てる繰り返しというシンプルな昔から多く続いた方法論のほうを支持し、発言して行きたいです。

<https://konnankyuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚 (9)

P237～

鶴野祐介

「今年も3・11が近づいてきました。明日(3月1日)から3日間、仙台を拠点に、昼間は宮城県内各地をレンタカーで廻って民話の語り部さんにお話を伺い、夜は友人と地酒や海の幸・山の幸を堪能する予定です。

うたとかたりの対人援助学 (10)

P233～

臼井 正樹

延べ10回、2年半に渡る「介護福祉を巡る断章」と題した連載にお付き合いいただきありがとうございます。

介護福祉の社会的価値向上のために、もうしばらくの間、出来ることを出来る範囲で取り組んでいきたいと思っております。皆さまのお力添えをいただければ幸いです。

介護福祉を巡る断章

P213～

山下桂永子

昨年末にスリランカに行きまして、そして2月の連休には北海道に流水を見に行きました。気温差は50度近い。我ながら振り幅がすごいなと思います。

その合間にもちょこちょこ関東一人旅やら友人と牡蠣の食い倒れ旅行やら、家族と日本海温泉旅行やらも行っておりまして、旅が多い今日この頃です。よく考えたらこの10年ほどは、毎週1回は特急に乗って仕事に行ったりするし、ほぼ毎日通う

職場も通勤時間片道1時間半はかかるので常に旅をしているのかもしれない。

どんな旅でも楽しいのですが、昔から何事も準備や片付けがぐずぐずして、整理整頓の苦手な私は、行く前の荷物のパッキングや、帰ってからの荷物の整理は少し憂鬱になってしまいます。結果、旅に行く前も行った後も部屋が荒れ放題です。

というわけで、今回はそんな旅に臨む不安について書いてみたくなりました。読んでいただければ幸いです。

町家合宿 in 京都 (9)

P196～

尾上明代

春休み中は、普段なかなか引き受けられない講座やセッションを国内のあちこちで実施していますが、来週は札幌にある大学に行きます。

いただいた依頼内容は、学生ピアサポーターを養成するにあたり、「相手とのコミュニケーションを図りながら、自己洞察へと向かうような演習」を、ということでした。そしてメンバー同士がお互いを知って距離が縮まるように、でも相手と距離が近づきすぎないようにバウンダリーを保つことを体験できるワークも、とリクエストされました。

今の若い世代は、友人たちの空気を懸命に読み、SNSでも常に繋がり、過度に共感合っているような状況なので、ピアサポートの場で適切な境界線を保ち、より良い関係を創れるようになることは、いうまでもなく最重要ポイントの一つです。

お互いの距離を縮めるセッションは簡単にできますが、その逆はちょっと工夫がいります。バウンダリーの重要性は、口頭で講義すれば、すぐに頭では理解してもらえるでしょう。でも身体的、感情的にも、ホリスティックに体感してもらいたいので、そのワークを考案しているところです。

アイデアを出して新しいゲームやワークを創るのは、本当に楽しい！ それにいろんな場所でたくさんの人と新しい出会いができるのも嬉しい！ そのような仕事ができること、出会いを創って下さる方々に、改めて感謝している毎日です。

高齢者とのドラマセラピー

P119～

小池英梨子

猫との知恵比べの毎日です。息をこらして車に潜んで、仕掛けたトラップに保護したい猫さんが入ってくれるのを待っていると…



「何してんの？」とボンネットに…。

はあ…。

あの手この手と作戦を変えて、この子は3回目のチャレンジで無事保護することができました。

そうだ、猫に聞いてみよう(13)

P221～

松村奈奈子

私、夜景が大好き。

冬は空気が澄んでいて夜景がキレイな季節。そんなもんで、以前から気になっていた新幹線徳山駅から見える工場夜景、仲間3人と見に行っちゃいました！



周南市の観光協会が主催する工場夜景ツアー。小さな漁船に3人で乗り込み、海から工場群のすぐそばまで行きます。24時間稼働する工場の音と神々しい光。圧巻です。観光協会のお兄さんの説明を聞きながら1時間はあっという間に過ぎました。その後は、工場夜景認定ドライバーのタクシーに乗って、地上からの写真ばっちりスポット巡りの1時間。これまた違った目線で、解説を聞きながら工場の周りをドライブ。いやー、堪能しました。最後に、手書きの説明メモと地元の観光パンフレットがいっぱい詰まった袋を手渡してくれました。

屋間、新幹線徳山駅前の商店街を散歩すると、そこには閉店したデパートとたくさんの野良猫たち。なんだか複雑な気持ちになりましたが、バリバリの山口弁で熱く我が街自慢を語る観光協会のお兄さんとタクシーの運転手さん。地方都市で「じーん」とくるいい時間でした。

精神科医の思うこと(12)

P199～

奥野景子

専門学校に入学して約一年が経った。最近「自分が今やるべきことは何なのか？これからやりたいことは何なのか？」をより具体的に考え始めているように思う。その中の一つに「書く」ということに思いを巡らせている部分がある。‘どこで、なにを、どんな風に、何のために書くのか？’自分のこれからに向けて思考を巡らせると同時に、動かなきゃいけない時期がもう目の前に迫っているような気もしている。

今回のマガジンは、今までのように‘流れの中の一つ’として書いてはいけなかった。だから、今回は短信のみ書かせてもらった。次回のマガジンまでに自分なりにどこかに辿り着いていたいと思う。

柳 たかを

奈良の家の敷地内に植えてある木々や垣根の剪定をサボると葉が生い茂り、ランダムに伸びた枝葉でとても見苦しいことになる。暖かくなると新旧の枝と葉が密集した風通しの悪い木には病気が虫が発生しやすく、サザンカなどにはチャドクガが大量発生したりする。

実際にチャドクガの棘が肌につきかぶれて激しい痒みに襲われたことがある。最初は家ダニを疑ってダニ用殺虫剤など買ってきて右往左往したが、病院皮膚科でチャドクガの体毛(毒針)の疑いを言われ、そもその原因が庭木の剪定をずうっと放置していたことにあると気がついた。

剪定には大きく二種類「刈り込み」「切り戻し」の方法があり、前者は植木の外側を剪定バサミなどで刈り込む方法だが、内側の枝は放置されるので、刈り込んだ直後は綺麗だが、すぐ切り口から新しい枝葉が伸びて輪郭が崩れる。なので密集した枝や葉を透きとってやる「切り戻し」剪定がどうしても必要になる。

遅まきながら、ようやくその事に気づき「切り戻し」剪定を勉強中、庭に毎年明るいムラサキ色の花を咲かせてくれるオオムラサキツツジのドーム型の樹木があり、この木の切り戻し剪定をした。

木の輪郭表面まで伸びて先端に葉をつけている枝を手でかき分け、木の中心部をのぞくと葉のついてない無数の枯れ枝がびっしりと密生している。内側から日光を求めて木の表面へ伸びて来て、今は役目を終えて茂みの中で朽ちている感じだ。日が当たる表面に届き緑葉をつけている枝は細くても簡単に折れないムチのような強さがある。隣の同じぐらいの太さの葉がない枝をギュッと掴んだら「ポキッ」と乾いた音を立てて崩壊してしまった。日を浴びることが出来ないと光合成ができず、木全体の成長に貢献出来なければ枯れていく運命だ。枝をかき分け枯れ枝を切り落としながら、人間の世界でもスクスク健康に「育つ時期」と何故かうまく「育たない時期」との区別があると思った。

というのは、かつて兄の息子(甥)の1人が中学生の頃に引きこもり状態になり、心の塾などを紹介され兄夫婦は藁にすがる気持ちで甥に参加させたりしたがほとんど効果はなかったようだ。

やがて無理して進学や就職を目指さなくても「生きてさえいればいい」という思いに変わっていったと思う。私が甥と最後に言葉を交わしたのは彼が20代の中頃、もう20数年昔のことだ。性格は素朴で恥ずかしがり屋、話しかけると照れ笑いをしながらボソボソと一言二言返事してくれる少年だった。

昨年、近い身内の仏事の会場で久しぶりで甥と会った。20数年ぶりの時間を感じさせる風貌に変わっていたが、引きこもり中は、運動不足のせいかでつぶりしたお相撲さん体型だったのが、別人のようにスラリとした体型に変身していて驚いた。私はいろいろ話してみたい誘惑をおさえ「元気そうやね」と努めて明るく簡単な挨拶をした。するとニコッと笑い「うん」と少年のような返事を返してくれた。照れたような笑顔は少年時代と全く変わらないなと思うと、それ以上次の言葉が出てこなかった。

人も植物も外側だけみて安心していると内部で知らないうちに荒廃が進んでいるかも知れない、やがて異常が発生して

ようやく気づくことになる。とはいえ、生きていさえすれば、必ず次の道は見つかる、そこから無理せず再度スタートし直せばいいのだと、そんなことを考えた。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P205~

齋藤 清二

早いもので、今年度も終わりに近づき、暖かくなってきたと思ったら、あっという間に花粉に悩まされる季節となりました。「花粉を飛ばしている杉の木にしか使わないと約束するから、巨神兵を貸してくれ、頼む！」と叫びたくなるような季節です(笑)。

ところで、ようやく登録が終わり、晴れて公認心理師を名乗ることができるようになりました。これが最後の国家資格取得となると思いますが、少しでも後進の教育の役にたてればと思っています。

「あ！萌え」の構造 番外編5 P190~

小林茂

年が明けてから、ひと月かふた月に一度の休みが取れるようなそれまでの生活から変化があった。休みがひと月に二度くらいとれる生活になり、近年になく時間にゆとりがあるようになった。

だが、結局は休みの日の使い方がよろしくない。普段の疲れのためか、午後の3時ごろまでゴロゴロと過ごし、あとは掃除など家事をこなし、という生活になる。休みの前の日には、「明日は、あれして、これして」と希望を膨らませるのだが、当日になるとそうならない。毎日、生産性のある生活を送らなければならないという信念は持っていないのだが、まだアンバランスな生活なのだろうと思わされる。

もう少し暖かくなれば、外での活動も増えていくことを期待したい。

<温泉紹介>

☆鶴の湯温泉

由来：明治の初め頃、フモンケの原野(現在の安平町)に放牧馬を監視にきた牧夫が、しばしば病んだ鶴が沢地に舞い降りていき、冷泉に浴(湯浴み)して病気を治し飛び去って行くのを見ました。この話を聞いた井上利三郎氏がケガをした人と家

畜をこの泉に浴させてみると、疾病は忽ち治り、神のごとき効能があったので、これが霊泉であることがわかりました。

鶴に教えられたことから“ツルの温泉”と名付けられ、この事が広く道内に知れわたり、ツルの温泉が“鶴の湯温泉”と呼ばれるようになったのです。



温泉質：冷泉含硫黄ナトリウム炭酸水素塩泉

泉温 14.5℃(冷泉) 湧出量：130L/分

浴用適応症：神経痛・創傷・皮膚病・きりきり・やけど・筋肉痛・疲労回復・冷え性・慢性婦人病・うちみ・関節痛・糖尿病・慢性皮膚病・五十肩・運動麻痺・関節のこわばり・痔疾・病後回復期・水虫

〒059-1506 北海道勇払郡安平町早来北町5番地

TEL 0145-26-2211 FAX 0145-22-3338

対人支援 点描(17)

P188~

中島弘美

「就職が決まりました。〇〇で働きます！」「留学で〇〇に行きます。卒業後は、現地で就職する予定です！」「もうすぐママになります！」

この季節の報告はうれしい話題が多いです。

そうか、そんなふうに関心したんだと、それぞれが選んだ道と思うと、応援したい気持ちでいっぱいになります。私に手伝えることはないけれど、きっとなんとかやっていくに違いない、それだけの力を持っているし、きっとたくましくなっていくだろうと思っている。

新しい場所で新しい役割でみんなが動き出そうとしている、新しい年号を迎える春です。

カウンセリングのお作法(18)

P34~

藤信子

応用人間科学研究科の最後の院生を送り出すので、この3月には衣笠の研究室のものを茨木キャンパスに移動することになった。講義等で使用する書籍は夏休みに移していたので、残りのものを片付けなければならない。

あと1年で定年なので、あまり持って行っても面倒だけれど、今すぐ自宅に移すとするとこれはまた入れる場所がない。衣笠で捨てる物は捨てて、1年かけて自宅の要らない本を捨てようと思う。一時は本など捨てるとは思わなかったが、この頃はこれから先繰り返し読むかどうか、考えながら整理しようと思う。これからも継続すること、時間ができるからこそしたいこと、もう関係ないと思える事などを、ぼんやり考えているところだけれど、年度が新しくなり、連休や夏休みになると、ぼんやりはしてられないなと思っている。

千葉晃央

ミスをしたときこそ、チームメイトがその当事者にタッチをする。そんなスキンシップは次のプレーへの力水だ。落ち込むよりも、次うまくやればいい。これができるチームとそうでないチームは雰囲気はまるであらう。

怒鳴りまくる、正しい指示を出しまくるタイプの指揮官もいる。プレイヤーは指示通りに自分が動くことができているのかが気になり、目の前の局面に自分自身が100%で向き合えていない。これらはバスケットボールの試合を見て感じたことだけれども、仕事でも同じだと思う。

ミス後のタッチ。クライアントを保障するという対人援助の原則は、チームスポーツでも当然生かされている。それは、次の局面が続くからであり、そこによいことが起こる可能性が十分に残されているから。

観ていたのは、21年ぶり自力でのワールドカップ出場を決めた男子バスケットボール日本チームの試合！ドーハの歓喜！アカツキファイブおめでとう！8月の中国大会も応援しよう！

知的障害者の労働現場

P16~

中村正

昨年の秋から情状鑑定をしていた裁判

が結審した。検察は殺人罪で懲役15年を求刑した。裁判員裁判では嘱託殺人罪が適用され、5年6月となった。

治療的司法・修復的司法の観点から力をいれてきたので少し安堵している。もちろん社会問題としては複雑なものを背景にしているので心身共にクリアではない。

こうした事案は親密な関係性における暴力の事例に多いから、その錯綜具合は半端ではない。介護殺人も同じような構造となる。事例毎にみると本当は難しいものばかりである。そして何よりも家族関係を鑑定するのも難しい。あとは検察が控訴するかどうかだ。社会も、そして私も、家族臨床の糧にしていくなかと思うと、いつこの近況を書いている。

臨床社会学の方法(23) P20~

団遊

大学でキャリアの授業をはじめて10年近くが経ちました。月に1回程度、大分にある立命館アジア太平洋大学という学校に行き、大学生と対話しています。

授業の一環で「仕事を探す上で何を重視するか」を考えるワークがあります。「収入」「福利厚生」「仕事内容」「会社の業態」など並んだ項目から選び、順番をつけていきます。誰一人として同じ順番になることはなく、そこにはその人の価値観が反映されます。その価値観をお互いに話し合うことで、自身の価値観に改めて気付いてもらうのが目的です。

このワークで毎回興味深いのは「人間関係」の項目をどこに置くかです。上位と下位が、如実に分かれるからです。上位に置く人の言い分は「仕事は人とするものだから、人が一番大切だ」というもの。下位に置く人の言い分は「仕事と友達関係は違うから、もちろん大切ではあるけれど、それより大切なものがたくさんある」というものです。人間関係重視派と非重視派に分かれてもらうと、どことなく人としての雰囲気似ています。

ほか的な解釈では、これはつまり「コントロールできるものを重視するか、コントロールできないものだからこそ重視するか」の差だと思います。「人間関係」はどれだけ重視しても、収入や仕事内容ほどコントロールできません。だから「気にしても仕方

ない」と考えるか「だからこそ気にするのだから」。皆さんはどちら派ですか？

人を育てる会社の社長が、 今考えていること P30~

村本邦子

前々から心惹かれていたが、今年は、天草、島原、長崎と回り、「隠れキリシタン」について学んでいる。ちなみに、これまで「隠れキリシタン」と呼ばれてきたものは、現在、「潜伏キリシタン」と「カクレキリシタン」とに区別されるらしい。

禁教が解かれた後、公式にキリスト教登録したのが「潜伏」、登録を拒否して独自の宗教を維持しているのが「カクレ」なのだそう。なお、キリスト教の弾圧に対して、①殉教 ②抵抗 ③潜伏 ④転びの4つの選択肢があった。私はキリスト教ではないが、姿勢として、ずっと抵抗を好んできたと思うが、年を取った今では、潜伏がいいかもと思いつけている。



また、長崎のキリスト教は、原爆を「五番崩れ」「崩れ」とはキリスト教集落の大量検挙事件のことで、信仰心への試練と捉えられていることを知り、感銘を受けた。これまで苦難を生きのびてきた人々の歴史に、これからの時代を生き抜く知恵を学びたいと思う。

周辺からの記憶 一東日本大震災 家族応援プロジェクト(22) P168~

國友万裕

最近、実家の家族が啓発セミナーに通っているらしく、そのセミナーで「誰かの美点を10以上あげろ」という指示が出されて、そこで僕の良いところを次のように羅列し

たとのこと。です。

- ① 映画や趣味に一途なところ
- ② facebookを毎日更新するところ
- ③ 映画に詳しいところ
- ④ 英語が上手なところ
- ⑤ 京都で一人で頑張っているところ
- ⑥ 最近きれい好きになったところ
- ⑦ おしゃべりなところ
- ⑧ 学生や若い人とも仲良くなれるところ
- ⑨ 家の行事があると贈り物を送ってくれるところ
- ⑩ 何かあるとマメに連絡するところ
- ⑪ 最近大人になったところ

長所と言えるかどうか(笑)、映画や趣味に一途だったり、京都で頑張り続けたりしていることはこだわりが強いせいで、物事に執着し過ぎるということだし、おしゃべりなのは口が軽くて、チャライという言い方もできます。FBを毎日更新するのは孤独で誰かに承認して欲しいからです。学生と仲良くなれるのは精神年齢が低いから。最近大人になったと言うけど、逆に言えば、もう55歳なのに、最近まで大人ではなかったということなわけだから…思わず、笑ってしまいました。

とは言うものの、家族が僕の性格をポジティブに捉えてくれたことは素直に嬉しかったです。もちろん、啓発セミナーの人にポジティブに人を捉えることを教えられたからなのでしょうが、家族が僕のことを受け入れてくれていることは事実なのでから。

家族から受け入れてもらっている以上、自分を無理に変える必要はないのかもしれない。自信を持って、生きていきましょう。今年は55歳。Go! Go! です(しょーもない、笑)。

男は痛い!(30) P137~

北村真也

認定フリースクール 学びの森 代表
<http://manabinomori.co.jp>

京都府亀岡市で、さまざまな学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。

不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験の

ある若者たちが学ぶ「ユーススクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の5つのスクールを展開中。亀岡市教育委員。

不登校経験を持つ若者たちの もう一つのキャリアパス P65～

古川秀明

最初は自分よりうんと年上の方の回想ライブをしていたのですが、いつのまにか主流が自分に近い年齢の方の歌が中心になってきました。

しかも凄く盛り上がるので、昭和20年、30年、40年代の方は是非一度お越し下さいませ。(シンガーソングライター)

講演会&ライブな日々 P158～

西川友理

京都西山短期大学で保育者養成をしています。それから、出来る範囲での支援者支援をしています。

色々新しい仕事が増えて来て、今までにない責任も増える予感。その中で、感覚的に分かってきたことの中に、「我慢はしない、努力をする」ということと、「誰とするか、どこでするかより、“何をするか”を大事にする」という事があります。

我慢はしんどいけど、努力は楽しいです。「何をするか」が明確になると、誰がかかわりどかが担当するかは自然と見えて来るおまけみたいなものです。これを実感すればするほど、いいかんじにわがままになりつつあります。

日々の仕事、3カ月に一度の勉強会、2カ月に一度の当事者研究会。その他諸々の出来事。トラブル続きは相変わらずですが、何とか楽しくやっています。

福祉系対人援助職養成の現場から P101～

坂口伊都

来年度、娘は大学受験に突入です。今から気が減入ります。娘の希望は生物系で、その中でも水産系に行きたいと言っています。まずは、どこにあるの？からで、まず思い当たるのは近大マグロ。調べるとキャンパスは、何故か奈良でした。後は、

静岡、長崎、北海道…。これだけ大学がある関西在中なのですが、近くにない。

そう言えば、娘が「私は劣性遺伝でできている」とドヤ顔をしていました。たれ目の一重、アルコールテストは全然飲めないMM型、耳の中はドライ型だそうです。MM型は、日本人全体の4%しかいないそうです。ちなみに私は、飲めそうな顔をしていますが、全く飲めません。飲酒をすると手のひらも目の中も真っ赤になり、身体が痒くなって、心臓が口から飛び出しそうになります。

さあ、来年度はどうなるのでしょうか。憂鬱。娘は、マイペースで頑張り屋ですが、繊細なところがあります。ちよつとしたことで凹み、高校受験の時も宥めたり、背中を押してみたりと大変でした。まあ、応援するしかないですね。何処の大学を志望するのか、そこから見守っていきま～す。

養育里親～もうひとつの家族～(24) P163～

河岸由里子(臨床心理士)

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

最近、自分が信じられなくなった。やったつもりが終わっていないことや、忘れ物が増えた。

先ず一度で事が片付かない。先日も、事務所に行くのに、事務所の扉の前まで行って、キーホルダーに事務所の鍵がついていないことに気づく。途中で落としたのか、或いは車の中か、駐車場まで戻って車の中を確認するがない！あれ？来た道を戻りつつ、ポツンと雪の上に落ちていた鍵を見つけてホッとする。「そうそう、このキーホルダーの輪、緩んでいたんだ！」と思ひ出すが、注意が散漫になっていてチェックすることを忘れてしまう。大反省！

家を出る時も同様。あれとこれとそれを持ったと思って出たら、それを忘れていたから、また取りに戻る。色々な事務仕事も、一つのこと、あれこれやらねばならないことがあると、何かしら抜け落ちる。予約のダブルブッキングが起こってしまったり、次年度のシラバスや成績を作成して、送信したつもりが保留になっていたり…。

こんなことを繰り返して思うことはただ一つ。「ボケ？」

60代も半ば、ボケてきても当たり前かもしれない。ボケを何とかするには、やはり

刺激を多くするしかないか。

周りの人は優しく、「忙しすぎるからだ。」と言ってくれる。確かに昨年から今年前半までは、用事が沢山重なりすぎている。自分の処理能力を超えているのかもしれない。一つずつ、確実にこなすように、常にメモを書き、メモを確認しながらやっているつもりだ。それでも抜け落ちる。溜息しか出ない。今年は年明けからあまり良い流れではないので、何とか今を乗り切り、良い流れにもっていき、抜け落ちたり、忘れてたりすることが無いよう気をつけて過ごせたらと思う。頑張り、自分！

境界あれこれ(11) P107～ 先人の知恵から (23)P225～

岡崎正明

会見場に現れたその人は、記者たちに神妙な顔で会釈をした。それから司会者と目で合図をし、少し下を向いて小さく深呼吸したかと思うと、覚悟を決めたかのようになり、まっすぐ前を向いて語りだした。

「このたび私たちも関わりを持たせていただいていたお子さんが亡くなりました。このことについて、所員一同深い悲しみと、言い表しようのない無念さを感じております。亡くなられたお子さんのご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

今回何よりもかけがえのない命が失われたこと。そしてその親御さんが加害者となってしまったという、ご家族にとって最悪の結果となってしまったことが、ただただ、本当に残念で、残念でなりません。児童家庭相談に関わるものとして、これほど強い無力感にさらされる出来事はありません。本当に悔しく、悲しく、筆舌しがたい想いで一杯であります。

当所としましては、その都度できる限りの対応をしてきたつもりではありますが、結果としてこうなってしまったことを重く受け止めています。今後は、もっとできることはなかったのかを点検しながらも、今この瞬間も支援を必要とするご家庭や子どもたちが多数待っている状況ですので、さらにきめ細かく、今私たちに最大限できる、子どもたちに寄り添った支援を進めてまいりたいと思っております。

結果としてこのようなことになったことについて、最終的な判断をする立場にある私自身の力不足はもちろん感じておりま

すし、様々なご意見やご批判も受ける覚悟でおります。ただ、現場では日々正解の見えない中、職員が本当に悩みもがきながら、懸命に子どもや家族の支援しております。当所において、子どもさんの命がどうでもいいなどと考えて仕事をしている者は、1人もおりません。その点は所長として、確信をもって言えるところであります。



職員は万に1つの事件につながってはならないと、最悪の事態を想定しながら対応すると同時に、残りの9,999件の、困難を抱えたご家族の支援という、ときに矛盾する現実と葛藤しながら、現状で最大限の努力をしてくれております。残念ながらうまくいっているケースについては、あまり知られる機会はなく、全国の現場では心の病で休む職員が後を絶たないという、苦しい状況もございます。

今回の当所の対応に関しまして、またこの記者会見に対して、当所へのご意見やご批判等あれば、現場の責任者である私がお受けします。最終責任者は私です。ただどうか、職員に対しましては、今後も応援してやっていただけたらと思います。本当に職員は精一杯やっております。皆様のご理解や応援がないと、今後この現場に志をもった優秀な人材が来なくなってしまうことを、私は憂慮しております。どうかにとぞ、よろしくお願いいたします。

合わせてみなさまの身近にいる子どもや、その家族。そして子どもの支援に関わる人々へのご理解とご支援を、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。本日はご清聴ありがとうございました

上記はすべてフィクションであり、実在の事件や人物・団体等とは関係ありません。

役場の対人援助論(27)

P148~

浦田雅夫

くりかえされる虐待死事件。

児童福祉司になるための要件として、「子ども家庭福祉士」なる子どものソーシ

ヤルワーク専門資格を作ろうという動きがある。

「社会福祉士」は？どうなるの？注視したい。

社会的養護の新展開 4

P63~

団士郎

相変わらず暇にならない。そうありたいと思っているのだから、文句はないのだが、それにしても慌ただしい。大学を定年退職になってもう1年になるのか、あつという間だったなあが実感である。

スケジュール表を見ると、先まで予定はびっしりだ。年間仕事、季刊仕事、月間仕事、週間仕事と並んでいて、我ながらあきれる。そこに、単発の打診やぶつ込みが入る。

今年は今から6月の家族療学会(札幌)のグラフィックメディスン関連と、8月の中国・蘇州での表現性心理学会での講演&WSが定例外仕事だ。

その合間を見つけて、新たな何かを作りたい。久しぶりに専門領域の啓蒙書風のモノも書いてみるかと思ったり。

現任者対象で続けている家族理解WSが全国に広がっているのは本意なことだ。まだまだできる間は果たすべき使命があると思っ生きています。

「続・家族理解入門」(6)

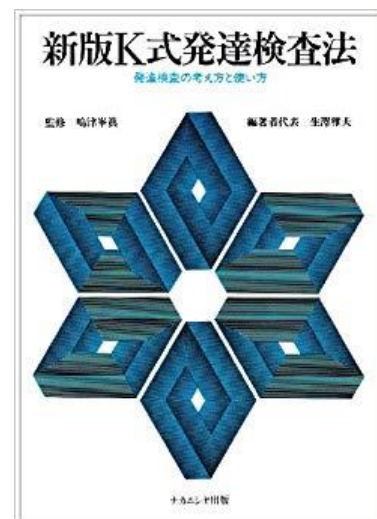
P52~

大谷多加志

連載のテーマにしている「新版 K 式発達検査」のリニューアル版(改訂版)の発行が1年後に迫りました。2013年からの7か年計画で進めてきて、ちょうど6年目を終えようとしていることとなります。現在の進捗状況から考えると、ひとまず当初の予定通り2020年の発行にこぎつけられる見込みで、個人的に、これは大したものだと思っしています。

計画を立案した時点で、改訂版作成のためのデータの収集の体制作り、研究協力者や協力機関の確保、具体的な改訂の内容や最終的なデータ処理など、ほとんどのことは未定で、また自分の手に負えるものなど皆無という状況でした。だからこそ時間的な猶予だけは確保したいと

考えて7か年計画にしたというのが、正直なところでした。



この7年の間に、思いがけない形で、さまざまな人や機関の協力を得ることができ、またいくつかの具体的な成果を形にすることができましたが、計画を立案した時点で予測できたものはほとんどありませんでした。予定調和として完成品を作り上げたというよりは、その時々で最善と思われる対応を重ねた結果として、現在の精一杯のところとしてたどり着いたものが、来年発行する改訂版であると思っしています。

短期的な労力やコストと、費用対効果でしか未来を語れないのは弱い。意味があると思っ営みを継続していくことが結果として形を成すのだと、実感をもって教えてくれたものの一つが、このマガジンであると思っしています。ここ数回、自身の連載について、少々行き詰まりを感じながら書いていましたが、今回はちょっとだけ壁を越えられたような気がします。以前、マガジンに2本併行で連載していた時(マガジン19号から28号まで。もう1本のタイトルは「知的障害の家族の日々」)の要領を取り入れて、挿絵入りで原稿を組み立ててみました。自分としては、よい方向に動き始められたかなと思っしています。

新版K式発達検査をめぐって

P154~

馬渡徳子

今年の冬は、金沢も暖冬で、あんなにもうんざりした昨年の豪雪が、なんだか懐かしい。

暖冬なので、大丈夫かなと、油断してい

たら、1月に入り、すわ毎年恒例のギックリ腰になりそうになった。

流石に、「3年連続の休稿は無しやな」と、早めに、予防的リハビリに通うことにした。私たち夫婦の仲人を務めて頂いた医師が開業されており、思い切って、週2回 早朝6時半からのリハビリ通院。朝早く目覚める習慣の自分にはぴったりで、スッキリとした気持ちで、出勤できる。

若い理学療法士さんの、士気を上げる励まし言葉で、「キュン」となるので、「筋トレ」ならぬ「キュントレ」と命名して、真面目に自主トレメニューも、就寝前に実行している。一昨年夏から、ずっと続けてきた「5分間瞑想」と合わせて行うことにした。

びっくりしたのは、今年2月中旬の職員検診で、昨年よりも1cm背が伸びていたこと。体重は1.5kg増えているのに、腹囲が3cmも減っていた。

うーん。体幹鍛えると、姿勢が良くなり、内臓も上がるんだなと。

「キュントレ」一応2月末で、卒業らしい。私が、相当、残念そうな顔をモロにしたのだろう。「悪くなって来院するのではなく、良くなった自慢をしにいらして下さい。」と声をかけられた。

デイサービスやデイケアに通うとお洒落が復活する人生の先輩女性方の心持ちに、大いに共感した。

「ケアプラン」の価値Ⅳ P203～

竹中尚文

【料理】今回はスモークサーモンのパスタ(2～3人分)

まず、簡単なスモークサーモンを作る
準備:スモーカー、スモーク用のチップ(ヒッコリーチップかホワイトオークチップ)、吸湿シート、一夜干し用のかご、甘塩の鮭 ※道具は東急ハンズのようなお店でほぼそろそろ。スモーカーはどこで使うかによって選ぶ。キッチンのガスにかけられるなら小型。屋外で煙を出してもよさそうなら大型。必ず温度計付きのもの。

- ① 甘塩の切り身の鮭を2切れ。それぞれを吸湿シートで包んで、冷蔵庫で1～2日置く。②吸湿シートをはずして、かごに入れて、半日～1日、日陰に吊す。決して、日光にあてない。③鮭をスモーカーに入れて、チップ

を一握み程、入れる。④60℃～70℃で1～2時間、熱を加えた乾燥。⑤ウッドを一握み入れて、70℃～80℃。煙が出なくなるまで約1時間。⑥冷蔵庫で1日ねかせる。

準備:スモークサーモン、玉葱半分、生クリーム 200ml、パスタ

- ① スモークサーモンが切り身なので、皮と骨をはずして、大きめに身をほぐす。②玉葱をスライス、フライパンに入れて塩コショウを少なめに加えて、炒める。③パスタを塩水で茹でる。④玉葱を炒めたフライパンにサーモンをいれて、かるく炒める。さらに生クリームを加えて温める。⑤茹で上がったパスタをフライパンでからませる。

【音楽】今回はジョージ・マイケル。映画のヒットでまたクイーンの人氣が復活した。フレディ・マーキュリーの追悼コンサートでジョージ・マイケルが歌った Somebody to Love は圧巻だった。エルトン・ジョンとジョイントした Don't let the sun go down on me も捨てがたい。2年余り前のクリスマスに亡くなった時は、世界中で Last Christmas が流れた。

盆踊り漫遊(5) P130～

鶴谷 主一

働き方改革について、前号、前々号で紹介してきたが、僕が原町幼稚園に就任する前から勤務していた主任が今年度で定年を迎え退職することになった。良い仕事もしたが、人間関係にムラがあった。

いわゆるお局様となって、気に入る人と気に入らない人の扱いに差が出ていた。身を引いてもらえないなら私が辞めるという声も1件ではなかった。

後任の主任は、経験10年の若手(幼稚園では中堅)が抜擢された。後任が4月からの体制を構築する準備期間が必要だった。でもお局様がいたりやりにくい…

そんなこともあったり、ICTを導入して進めていくという大義名分もあって、3月を待たずに身を引いてもらうこととなった。1月から3月まで有給休暇として休んでもらったのだ。

職員室の中は1ヶ月でガラッと雰囲気が変わり、2月末にはかなりの新体制が出来上がっていた。課題や準備すること

は相変わらず多いが、働き方改革のキモは人が変わることかな、とも思うこの頃である。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P97～



乾 明紀

乾燥肌による発疹と痒さ、風邪かストレスによる腹痛とトイレに行き過ぎたことによるお尻の痛さ。さらに花粉症が数日前から発症…。そりや社会保険料にかかる費用も増えますよね。でも、病院と社会保障制度のお陰で QOL が悪化しすぎずに暮らせております。

周旋家日記(25) P145～

水野スウ

前号短信中で、この3年間に書いた2冊の『けんぼう BOOK』が、「平和・協同ジャーナリスト基金 荒井なみ子賞」をいただいたことのご報告をしたのですが、今号はそのことをもっとくわしく。新刊『たいわけんぼうBOOK+』づくりの裏話もふくめて書いてみました。国民投票のまえにぜひ知ってほしい改憲についてのポイントが、今号マガジンにはぎゅっと詰まっているので、本一冊読む時間はないけど、って方にこそ、「きもちは、言葉をさがしている」のページを探して読んでいただけるとうれいなあ、と思います。

あいかわらず県内外に憲法のおはなしの出前にいっています。つい先日の会場は、県内のフェアトレードショップの、靴をぬいであがるカフェでした。

いつもはキッズスペースになっている場所を、個室空間にしてのおはなし会。参加してくれたのは18人(若いママ&ミドルさん、女子大生さん、男のかたも1人)プラス&赤ちゃんやちいさなひとが8人も。

憲法きほんのきから、紅茶の時間の話。誰もが身の丈に認めてもらいたいと願って生きていること。それが人権ってことだよ、と話しながら、憲法が私たちの暮らしの足もととどうつながっているか話していきます。いごちのいい空間で、ママたちの反応を確かめつつ、伝えたいことを言葉にしていく、私にとっても至福の時です。

この日、こんなにも若いママたちの参加比率が高かったのは、このお店がもともと、赤ちゃんや子連れで行きやすいお店であろうとしているからだと思います。行けば、子ども大好き店長さんが、ようこそ、って迎えてくれる。子どもが大切にされて、迷惑がられないので、ママたちも安心していられる。2人の子とのランチタイムなど、ママがいそがしい時は店長さんが代わりにちょっと抱っこしてくれたりする。

そんな店長さんが企画してママたちによびかけたけんぼうかふえだから、おなじみのお客さんたちも、いつもは高そうに見える憲法のハードルをひょいと飛び越えて参加してくれたのかもしれない。店長さんが、ママたちにどうしても知ってほしいな、聞いてもらいたいなと、心込めてかいた呼びかけの便利も、きっとみなさんの背中をおしたのでしょう。

このカフェでは、ほかにもいろんな集まりや上映会があって、そこで出会った人たちのなかで少し子どもさんの手が離れたママたちは、見守り隊って感じでそこにいて、一緒に話を聞いてくれている。そういうのがあわさってのこの日の空気感だったんだ、とあとからわかりました。

このけんぼうかふえの企画もふくめて、こういった日々なのが、私の大好きな友人でもある店長さんの、ふだんの努力の「12条する」です。

憲法の講演会しても若い人が集まらなくてね、ちっとも来てくれなくてね、って声、あちこちでよく聞きます。それは一つには、ふだんから自分が、若い人にどう接しているか、上から目線のものいいでなく平らに

話しているか、年下の人の話も聴こうとしているか、相手にありがとうと言っているか、といったことごとが問われてもいるんだろう、と思うのです。この日のおはなし会には、そのヒントがいっぱいありました。

きもちは言葉をさがしている(34) P123~

荒木晃子

昨年10月に始まった新たなチャレンジ。数年前から取り組んできた立命館大の研究プログラムがJSPS日本学術振興会研究助成事業に採択され、現在も研究メンバーとして忙しく活動中である。60才を過ぎてはなお、社会貢献活動の一端を担えること、また、それを継続できることに感謝の日々を送っている。

精神科、生殖医療施設のカウンセラーとして20年以上カウンセリング業務に就き、数百、もしかすると1千人を超えるクライアントの語りに耳を傾けてきた。しかし、過去に、これほど多くのLGBT等セクシュアルマイノリティ当事者の語りを聴く機会はなかった。彼らのライフストーリーの語りを聴くたびに、これまで私が知ることのなかった当事者の苦悩の一片を見つけ、分析し、それを支援につなげることが研究者としての私の役目だと思っている。

当事者の語りから、その人となりを知り、理解することから始まる支援がある。単に、「さぞかし辛かったでしょうね」では済まされない事象の中を生き抜いてきた当事者の語りは、まさに今、私の中に浸透し、新たな支援のあり方への気づきをもたらしてくれている。自ら望んで受け入れた私の中の変化を、うれしく思うと同時に、彼らの抱える苦悩に押しつぶされないよう、さらに強靱な心を備えた援助者であらねばと思っている。

唯一の反省点としては、常時インプットばかりで頭の中が膨れ上がり、アウトプット作業が追いついていないこと。能力にも体力にも限界があることを、時折忘れることがあること、かな。

生殖医療と家族援助 P110~

見野 大介

先日初めてテレビ番組の生放送に出演しました。NHK奈良の18時半からの生放

送でしたが、生放送が始まるまでにリハーサルを何回も重ね、内容をまとめ上げていって本番を迎えるという流れで作っていることに感心しました。

とはいえ、感心したなんて思ったのは生放送が終わってから数時間経ってからのことであって、リハーサルから本番終わって帰宅してしばらくの間、ただひたすら緊張していました。元々こういうのは苦手やったので覚悟はしていたんですが、想定をあっさり上回る緊張状態で本番を乗り切りました。

これからは、テレビで緊張しまくっている若手の芸人やアイドルに対して寛大な心で見守ってあげようと、考えを改める良い機会になりました(笑)

ハチドリの器 P4~



久々 サトウタツヤ

久しぶりに寄稿することができた。

約1年前に取材した、太政官布告のパロディ「万歳三唱令」の起源を解き明かした会談。その道のプロにはそれぞれが目指す「北極星の展望」なり「勲章」があると思いますが、噂の研究者にとっては、その起源を解き明かすことがそれにあたりまです。至福の時でした。

対人援助学&心理学の縦横無尽 P113~

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

36： 窓を救え！

千葉 晃央

施設から、窓がなくなっている。もちろん、窓はある。しかし、窓の本来の目的を果たせているのか？という状況が起こっているのである。

窓は①採光の窓、②換気の窓、③排煙の窓、④消防（消火・救助・避難）活動の窓、これらの4つが建築基準法で定められている。こういった法律に基づいて、知的障害者の労働現場の建物は当然設計されている。他にも窓には、眺望の目的でも設置される。しかし、設計段階はそうであっても、その運用はどうであろうか。

天気の話ができない

作業をしていると、手元を見ることが多い。集中すると周囲のことは忘れて、手元の作業に没頭することも多い。手や、首、目が疲れて、顔をあげる。そこには窓があり、外が見える。気付かない間に吹雪になっていることもあるし、虹がかかっていることもある。「うわ！虹やで！」「めっちゃ吹雪いているやん！なあ？！」そんな声で、しばし手を止めてその日の天候をみんなで共有することもある。「曇ってきて、雨降り

そうだから、置き傘を持って帰ろう」そんな言葉を交わしながら、作業をする。特に雨の時、この頃はゲリラ豪雨もあり、天候の変化には敏感でなくてはならない。そうした危機状況を事前に予測するためには窓からの外の景色は欠かせない。

手元に集中すると目が疲れる。近いところにピントを合わせてばかりだった目を休めるためにも、窓から見える遠くの景色はありがたい。私の経験では、緑も多い景色に目も心も癒された。よく観ていた作業場から見える景色は、手前の近いところが低い土地で、奥に行けば行くほど高くなり山になっていた景色で、これは忘れられない。暑い日も、寒い日も、雨の日も、雪の日もその景色を見ながら、作業をした。

刺激対策の分断

図書館にある自習スペースでは衝立がついているところも多い。そこで勉強をしていると、とても集中できる。時間がたちすぎて驚くこともある。逆に、目にいろんなものが飛び込んでくる環境だと、人はその景色に集中を切らされてしまう。漫画があ

れば、手を伸ばし、テレビがあると観たくなるのが人の性分かもしれない。そういう意味では、衝立などにより、視覚刺激を制限することは効果があるだろう。ここでの効果とは、つまり作業に集中し、作業の生産性をあげるための効果である。TEACH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children 自閉症及び関連するコミュニケーション障がいをもつ子どもたちのための治療と教育) が広がると、この支援方法をヒントに作業場でも視覚刺激の制限による利用者への働きかけが増えた。作業場の窓から見える幹線道路に、市バスが見えると、気を取られて、作業が進まない。そういうときにはもちろん作業の場所を窓からの景色が見えにくいところにした。バスが見えても影響を受けない方にそ

の場所での作業工程をしていただいたこともありました。それでも作業場の構造や作業しているものの大きさなどで、なかなかそれができないときもあります。そういう時をきっかけに窓に紙を貼る。そうすると作業に集中する。そうするとその作業が終わっても、窓の紙を取らず、そのままになる。そんな場面をよく見ました。それがその後には、ブラインドで遮られることも。

何もない人工的な日常

こうした動きで、短期的な成果としては、作業能率は上がりました。ただ人は作業をするために仕事をしているのでは、ただのロボットです。職場に行き、職場の仲間と様々な経験を共有します。仕事を覚え



ること、ノルマを達成できることも仕事の喜びです。それと同じくらい、職場に行き職場の仲間とその日の天気、景色、風、窓から見える景色も共有し、コミュニケーションをとる楽しみ。そのきっかけにもなるのです。「今日はいつもと違う車が来ている」「ほんまや」そんな何気ない会話も含まれているのが日常と思うのですが、その機会は随分減っています。

暑さ対策による日よけも流行っています。そもそも日本の建物のガラスが薄いことも防音対策、暑さ・寒さ対策には厳しいと聞きます。とはいえ、夏は日差しが入ると熱いので日よけシートを窓の外に設置したりします。以前はよしずも使っていました。これらも、完全に窓からの景色を遮断するわけではありませんが、9割程度は見えなくなります。夏に着けると、しばらくするとそれが寒さ対策にもなるとか、そもそも外すのが大変！とそのまま1年を通じて設置されることも多いように思います。そうしたことで窓の採光、眺望という機能は失われています。

窓に目隠しを求められる福祉施設

それ以前に都市部の建物には、隣との距離が近いとすりガラスがはめられていて外が見えないこともあります。これは法律でも定められているようです。法律以外にも近隣から、施設の目隠しを求められることも増えました。黒いカーテンが3階で常にひかっている作業場も見たことがあり、息苦しい思いを感じたことを覚えています。

窓の換気という機能の側面では、その作

業場に花粉症の人がいるかないかにも左右されているように思います。本来、作業場はモノを作っているところなので、ホコリや粉塵はつきものです。その対策には窓を開けるとというのが基本です。しかし、春の季節は花粉が入ることを防ぐために窓を開けなくなります。そして、最近では温度設定ができるエアコンが普及し、窓を開けなくても年中、快適な温度を保つことができるようになりました。エアコンの邪魔をしないためにも、花粉はもちろん、**pm2.5**、黄砂が入ってこないためにも、ますます窓は開けなくなります。

排煙の窓は建物の上のあたりについていることが多いです。クルクルまわすハンドルが壁にあり、その上にある排煙窓が開くという仕組みもよく見てきました。この排



煙窓も普段使っていないくて、使おうと思うと壊れていて窓が開かないということもありました。では、壊れては困るから普段触らないでおこうとなるといざ必要な時に役に立たないということも起こりかねない。でも、壊れると構造的に難しく、高所作業をとまなう修理作業は高額になるとも聞きます。とはいえ、高所にあり、排煙を目的にするぐらいですから、喚気にはもってこいです。ただ難点は、高所にあるので開けっ放しで閉めるのを忘れてしまうということです。戸締りをして帰ろうとして、排煙窓が開いているということも少なくありません。そのため、戸締りの観点からついつい開けなくなるということも起こります。

様々な面から、「窓」は危機的状況です。労働者にとって、失われるものがあるから法律でも窓をわざわざ定めてき多と思うのですが…。皆さんの職場はいかがでしょう？

BACK ISSUES

- 別れ 35 2018年12月
- 人生をかける意味があるか？ 34 2018年9月
- 業務の適正化はできるのか？ 33 2018年6月
- 安全衛生委員会 32 2018年3月

- 施設というコミュニティ 31 2017年12月
- 職場づくり 30 2017年9月
- 健康管理 29 2017年6月
- 音 28 2017年3月
- 救世主になりたい援助職 27 2016年12月
- 事件について 26 2016年9月
- クルマ社会と福祉政策 25 2016年6月
- 施設が求める「障害者像」はあるのか？ 24 2016年3月
- 連絡帳 23 2015年12月
- におい 22 2015年9月
- 作業着 21 2015年6月
- 食べる 20 2015年3月
- 通勤 19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用 18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月
- 触れる 16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月
- 情報の格差 15 2013年12月
- 20年前のノートから 14 2013年9月
- そうじのねらい 13 2013年6月
- 個別化の暗部 12 2013年3月
- グループワークの視点 11 2012年12月
- 実習生がやってきた！ 10 2012年9月
- 月曜日のせいやな 9 2012年6月
- 所得を決める福祉職？ 8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方 6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは？ 巻末座談会 2011年9月
- 旅行がない！ 5 2011年6月
- 職員の脳内回路 4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ 3 2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に！ ？ 1 2010年6月

臨床社会学の方法

(24)番外編：講演録「暴力を乗り越える」

中村 正 *

*Ritsumeikan University

虐待と DV がらみの事件が多く、取材や原稿の依頼も多くなり、適切なかたちで表現しておくことは必要だろうと思っている。鳥取市の人権センターから依頼された講演録をもとにして簡潔にまとめてみた。

.....

暴力を乗り越える～ともに生きる「家族」の在りかたとは～

本日は、「暴力を乗り越える～ともに生きる「家族」の在りかたとは～」というテーマをいただきました。このようなテーマについて、私は、研究はもちろんですが実践していることもありますので、そのことをもとにお話をしたいと思います。DV（ドメスティック・バイオレンス）や虐待など、暴力はさまざまに存在しているわけですが、特に「男性の暴力」に関心があり、研究をしています。

いま、暴力がとても目立ってきていると感じています。スポーツにおける体罰もそうですが、いじめ、ハラスメントなどさまざまな形の暴力が社

会問題としてあらわれているのではないのでしょうか。元々あった問題が、あぶり出されているような気がしています。

元々あったということに関していえば、暴力は「家族」の中に存在していました。その暴力に対してできてきた法律のプロセスなどもお話ししたいと思います。

私自身は、数多くの現場にかかわってきました。現場に関わる機会、「仕事」が増えてきたように感じています。その一例を少し紹介させていただきたいと思います。

奈良少年刑務所があります。網走刑務所のような古いレンガ造りの建物です。耐震の問題があって現在は閉鎖となっています。

私は、奈良少年刑務所に2006年度から10年間、スーパーバイザーとして勤務していました。そこでは性犯罪者たちの処遇改善プログラムをしていました。性犯罪ですので、男性の受刑者です。男性被害者もちろんいて、女性被害者とはまた異なる独特の傷つき方をするのですが、ここでは男性加害者を中心に実践しています。

性犯罪にも種類はいろいろありますが、刑期は

多くの場合長期に及びます。刑法が変わり「強制性交等罪」と呼称が改められましたが、古い言い方は「強姦」です。いろいろある刑期ですが、たとえば八年で刑務所に入ってきたとします。その八年の刑期中、アセスメントをもとにした処遇改善プログラムとしては最長でも一年くらいしかできていないというのが現状です。

それでも認知行動療法をもとにして性問題についてプログラムを受けるのは初めての体験となります。この経験は私にとっては貴重でした。

さらに児童虐待とDVの脱暴力について取り組んでいます。大阪府内全域で児童相談所といっしょになって、この問題に取り組んでいます。大阪府内には児童相談所が全部で八カ所ありますが、児童福祉行政に協力をして「親対策」(親面談、親指導)を実施しています。「親対策」ということにご協力してやっていますので、のちほどそのことを紹介したいと思います。

それから、DVの加害男性、体罰をする教師などにもかかっています。体罰に関しては、大阪で桜宮高校のバスケットボール部でおこった体罰事件がありました。体罰をもって指導されていた部員が自殺してしまったという事件です。

この事件がひとつの契機になったのかどうかは定かではありませんが、その後体罰の告発が相次ぎました。学校運営上すべての教員を懲戒解雇にすることはできませんので、研修を実施したほうがよいのではないかとということになりました。なんらかの懲戒処分を受けたところで、体罰をした教員の「教育観」や「スポーツ観」が変わるわけではないので、そこをどう教育して、職場復帰の希望と可能性があればということで取り組んできました。加害者にたいして刑事罰だけを科すだけ

でいいのかということもありますし、例えば人格攻撃のような心の暴力にたいしては刑事罰を科すまでには至らない場合も多いので、そのような暴力に対してどうしようかということも考えてきました。どうアプローチするべきか、そう考えれば考えるほど既存の法律では対処できないことがわかってきました。ならば放っておいていいのか、教育現場、福祉現場に任せておけばいいのかといえば、もちろんそんなことはないのです、このことに取り組みたいと思ってきました。

新たな課題～加害者臨床・司法臨床～

20世紀から21世紀の変わり目にかけてこの種の対人暴力についての法律ができていきます。ストーカー行為規制法ができ、それ以降、DV防止法、児童虐待防止法、いじめ防止対策推進法など、この間暴力防止にかかわるさまざまな法律が施行されてきました。

関連して近年離婚が増加傾向にあり、離婚後の親子関係問題があります。離婚後の親権は8割がた母親側がもつのですが、「面会交流」という機会があります。そこで、ストーキングや誘拐、殺人などさまざまな問題が浮上してきたので、離婚後の親子関係、とくに父子関係について解決しなければならぬ問題を提案してきました。

法律はさまざまな暴力にたいして介入(犯罪化)することが大きな目的となっています。しかし先ほども申し上げたようにすべてが刑罰になるわけではないので、介入だけでなく暴力をしてしまう人に対する支援や回復、治療、復帰の取り組みをしたほうがよいのではないかと思います。

加害者が暴力で問題解決をはかろうとすることに対して、対話(認知再構成)や修復、治療、回

復などをとおして、暴力を何か別のものに置き換えていくことが必要だと思うのですが、社会システムの変更がそこまできていないというのが現状です。諸外国ではすでに取り組みがなされているので、そういった取り組みを調査・分析して政策化すべきことを、主張もし、自ら実践してきました。

若者に浸透するコントロール型暴力のかたち

先日大学の「社会病理学」の講義の後で女子学生からこんな相談がありました。彼氏から、「俺のっている講義が休講になったのでこれから会いたい」とメールがきて、彼女はどうすべきか悩み、またそのことに悩んでいる自分に悩んでしまったというのです。私の講義では、暴力の話やDVの話をしているので、そのなかでの彼女の気づきがあったのだと思います。私としては女子学生とデートバイオレンスの話にもっていきたいのですが、みなさんだったら教員としてこの女子学生になんと言うのでしょうか。少し相談してみてください。

- ・女子学生に同じメールを彼に送ることができるか聞いてみる
- ・断ったら彼になにされるかわからないという恐怖がある
- ・悩む自分に悩むのは仕方のないことだよと声をかけてあげる
- ・彼も講義に誘ってみてはどうかと声をかける

ありがとうございます。みなさんの回答は、優しくサポートティブですね。実際に私が女子学生に対して言ったことは「あなたは同じことを彼に対してしますか」です。そうすると彼女はしたくないと言いました。一方通行なんですね。彼から

はこんなメールがいつも入ってくるといいます。悩んでいるのはいつも彼女で、その関係性は対等とはいえない状態でした。断ったらどうなるんだろう、とその先に不安を感じて、そのことに悩んでいる自分に悩んでしまっていたからです。

論点を整理すると、一方的にいつも愛情を注いで、相手のことを慮り、要請があったらデートをしないといけないというような役割は、女性の方に割り振られていることが多いのです。「愛情供給係」のようになってしまい、ケアすることが常になってしまっています。先ほどの女子学生の場合も、彼からのメールが命令口調であったかどうかは別で、嫌なことにはきちんとノーと言える人間になって欲しいなと思うのです。

そういった観点から、暴力の話をするときに「コントロール」ということを学生たちに伝えていきます。殴る蹴るといった有形力の行使というわかりやすい形の暴力だけでなく、とくに親子や男女といった関係における暴力には、コントロールされてしまっていることが多くあります。女子学生の場合、悩んでいるのが彼女自身だけであれば対等ではありません。悩んでしまうことを悩んでいるということ自体、気持ちがコントロールされていくことにほかならず、さらに自分が自分の人生を生きる権利が奪われ、時間を拘束されてしまっています。このように、暴力の兆しが見え隠れするなかで、いまの若いひとたちが人間関係を構築しているなという光景もたくさん見てきました。

いろんな事案がありますが、私がびっくりしたのは、別れた男性が嫉妬深く、元彼女がなにをしているかツイッターで追跡しているという事案です。いまスマートフォンを持っていることは当たり前であり、SNS を利用した暴力が発生していま

す。

もしかしたら、それも「暴力」かも一拡大する「暴力」の定義

この種の対人暴力は、身体的、心理的、感情的、言語的な暴力として定義されています。さらに、DVが子どもの前であれば虐待として位置づけられるようにもなりました。面前DVといえます。保護すべき責任ある人が必要なケアをしないネグレクトも暴力とされる。暴力の対象が徐々に拡大されてきたのです。

暴力の予防や加害者対応を考えていく上で重要なことは、こうした形態や類型をもとにして暴力を把握するだけではなく、「関係性の暴力」であることの理解です。私は、社会学者であるエヴァン・スタークの言う「強制的なコントロール(coercive control)」というアプローチを参考にしています。

著書の中でこのように説明します。①威嚇(脅す)、②孤立させる、③コントロールする——という3つの要素を重視して、この種の対人暴力を把握している。退陣暴力はDVや虐待だけではなく、誘拐・監禁、ハラスメント、ストーキング、カルト集団のマインドコントロール、いじめの起こる仲間関係にも見られるというのです。

親密な関係でも「強いる行為」は暴力

この考え方に依拠しながら、英国では、従来、心理的・感情的な暴力として定義してきたものをさらに詳細に記述した法改正がなされたのです。

「重大犯罪法」の2015年改正で、「家庭内虐待」の項に「親密な、あるいは家族関係においてコントロールするあるいは強いる行動」の文言が追記

されました。

DVを受けているのに彼といるほうが安全だと思う一関係性に巣くう「不穏なもの」

確かに、これらとよく似たことがDVや虐待の加害者から語られます。

「自分のものを買うときにいつも一緒に付いてくる。『僕の好みの女性になってほしい』と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」、「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。『運転が下手だから』って言う。だからいつも彼の車で行動することになる」、「『習い事をしている』と言うと、『それは男性から教わるのか』って聞いてくる」

「『同窓会に行く』と言うと嫌な顔をする」

「DVを受けているのに、なんだか彼といるほうが安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着く」

「『今日は何をしていたのか』と聞いてくる」

「『死んでやる』と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」

(先の事例)の「授業の前に携帯メールがあった。『俺のとっている講義が休講になったのでこれから会いたい』と。彼女はこれから講義がある。そうしないと愛情が薄いと非難されると思うと怖い」このような被害者の声を聞いていると、近い関係性の中で、愛情の名の下にコントロールされている様子がうかがえます。

これらが直ちに「暴力」だというわけではない

のですが、関係性に巣くう「不穏」があるといえます。

愛情とはなにか

よく暴力の被害にあった人からこんな発言を聞きます。「私が医者に行くといつもそれは男性の医者だったかって聞く」、そういう加害男性がいるんですね。医師の分布でいえば圧倒的に男性医師のほうが多いので、男性医師に診察をうける確率も高くなります。また、「服をかうときにはいつも一緒についてくる。僕の好みの女性になって欲しい」と言って注文が厳しい。自分のセンスが活かさない感じがする」というもの。これは「愛情」なのかただの「ストーキング」なのか。「免許をとらせてくれず、いつも彼の車で行動することになる」、こういったケースは愛情という名のもとにコントロールされていしまっていて、こういった束縛の話もよく耳にします。

DVをうけた被害者（女性）が、加害男性のもとに戻ってしまうというケースもあります。実家に逃げて追いかけてくる、逃げている間にメールが頻繁に入ってきて落ち着かない、けれど一緒にいればそういったこともないので結局そのほうが安心する（してしまう）という心情があります。みなさんは一日に何通くらい愛情という名もとの束縛されるようなメールが入ってきたら鬱陶しさを感じますか。ストーキング行為規制法では、SNSやデジタル追跡行為が指定されていて、一日に200通のメールが入ってきたらストーキングになるとされています。ある調査では、一日に平均2.7通入ってくると鬱陶しさを感じるといわれています。相手のことを思って送っているつもりが、まったく相手のためになっていない、これを愛情

といえるのでしょうか。

中高生に話をする機会もありますが、それでは遅いとも感じています。学校教育だけでは補えないので、家庭教育の段階がとても大切だと思います。なぜなら、家庭の中でもと他人同士の大人（夫婦）がどう関係性を築いているのかをみて子どもは育っていくからです。家庭での夫婦関係が、子どもたちが大人になったときにどんな男性、どんな女性になるのかに影響を与えることがあります。

また高校生のときの上下関係に浸ったまま大学に入学してくる生徒が近年とても増えてきています。上級生のいうことはよく聞くんですね。しかしそれが本当に納得しているのか、または上級生を尊敬しているのかという点必ずしもそうではない。自分たちが上級生という立場になったときに、自分たちのいうことを聞く下級生が入ってくるというサイクルの中にいるわけです。この高校生文化のようなものを断ち切ることも大学教育の新たな役割となっています。日大のアメフト部の問題も記憶に新しいですが、それに近いことはどの部活やあるいはサークルでも起こりうるのかなと思います。指導者もプレイヤーのときに暴力のなかにいたので、それを繰り返してしまっている。この問題もとても根が深いです。

関係性のなかの暴力

元々、「男女」とか「親子」というのは非対称な関係性で、対等ではありません。力関係にも同じことが言えます。非対称な関係であるので、もともと一方が配慮する役割を持たされています。これは女性役割いう場合もあります。子どもは子どもで暴力から逃れられない、高齢者は高齢者で逃

られないというように、関係性のなかで脆弱さをもっている側の人たちは非対称な関係の中でしか生きていけない面があります。実際には非対称な関係であるからこそ、恋人関係、友人関係が築けたり、配慮したり、誰かをケアしたりするという、人間の能力として大事なものが育まれるというように肯定的にとられることのできる側面のほうが多いのですが、裏腹の関係で、それがコントロールになってしまうことがあります。親密な関係性はリスクをはらんでいるのです。

私は、京都府でDV防止計画を作成する会議の座長もしていて、DV被害にあった母子に対してどのような支援が必要なのか考えるためにヒアリングをしたことがあります。

子どもが三歳くらいのときにDVがあつて、DV防止法で保護命令を受け最終的には離婚をしていくという経験をした母親に、子どもが大学生になったころに話をきいたことがありました。子どもが三歳ころに、「アンパンマンが嫌い」と言い始めたそうです。アンパンマンは殴るからです。アンパンチのシーンで目を閉じたり、耳をふさいだりする。面前DVの結果、そのような影響が及んでいたのです。母親はその光景をみて離婚を決意したと言っていました。

アンパンマンはバイキンマンを殴る。理由はバイキンマンをやっつけるためです。これは「正義のための暴力」です。「正義のためなら暴力をふるってもいい」と子どもたちは学んでいくのではないのでしょうか。先ほどの母子の場合も「お前が悪い」と母親が暴力をふるわれているのを見て育っていますし、しつけという名の暴力もそうです。冒頭にお話しした奈良少年刑務所の受刑者たちも、七、八年の刑を受けているにも関わらず、いまだ

に自分が被害者だと思っていることが多いのです。

「通報したあいつが悪い」「付いてきた相手が悪い」というように。裁判の中で問われないままに、心が閉ざされてしまっている状態なのです。そこをやはりプログラムで解決をはかっていくしかないと思います。

Unlearn (アンラーン=そぎおとす) する

アメリカで調査をしていた頃に、市バスに貼ってあったポスターにこんな言葉を見つけました。アメリカサンフランシスコ市の警察がつくっているポスターで、ひとつはDVの話、もうひとつが男の子同士の暴力の話です。DVは男性から女性へ向かうことが多いですが、暴力全体では圧倒的に男対男が多いです。「Is this what it takes to be a man?」(男になるってそういうことなの?)と書いてあります。「暴力は学習された行動です」とも書いてあります。みんな最初からモンスターなわけではないということです。

暴力が学習されていくものであれば、それは「アンラーン Unlearn」できるはず、そぎおとしていくことができるという意味です。アメリカではそういう機会となる場所がたくさんあり、DV・虐待の場合の受講命令、参加命令の受け皿となっている。日本では現在DVがあつた場合保護命令が出ます。これは地方裁判所の命令で、加害者は被害者に近づいてはならないという結構重たいものです。虐待の場合は親子分離、ストーキングの場合も接見禁止であるように、すべて「離す」行為です。

そうして分離したあとに何をしているか、いまの日本は残念ながら何もしていません。アメリカや韓国、台湾などでは加害者に対して更生プロ

ラムを受講しなさいというような、「受講命令」「参加命令」が出されて、そのような体制もかなり整備されていますが、日本では保護命令のような分離させることしかされていません。更生プログラムでは、暴力について考えたり、行動パターンを新しく学んだり、「被害」と「加害」の転倒した意識を整理したりします。日本でも取り入れて欲しいというお願いをしていますが、一向に実現しません。

家族としての再出発

そこで私の仲間とともにいろんな取り組みをはじめました。まずサンフランシスコで、受講命令などの参考にされていた書籍の翻訳作業をしました。メンバーが自らの暴力にまつわる体験を出し合いながら進めました。男同士の関係、いじめの話、デート中にあった出来事、ふり返れば男の人生に暴力って結構つきものだなと気づいていきます。

私たちは、従来なかった虐待加害の男性（親）向けにグループワークをはじめました。歪んでいる女性観などを見つめ直す作業です。父親の暴力は破壊的で、家族関係を一気に破壊するので、そこに介入する必要性を感じていました。大半は子どもへの暴力、妻への暴力があるなどして、子どもが児童養護施設に保護されている人たちが集まります。妻がシェルターに逃げている場合もあります。安全を確保し、児童養護施設のケースワーカーと協力して取り組んでいます。

現在月に2回、土曜日を基本とし、時間は1回2時間で年中実施しています。「男親塾」と呼んでいて10年間継続しています。マンツーマンの個別面談などではだめで、加害者が相互に語り合うこと

に大きな意味があります。男性の虐待加害者と女性の虐待加害者では少しテーマが違うので、それぞれがグループワークしていくことが必要だと感じていて、このモデルをもとに全国的に広めていきたいと考えています。

参加者の会話のなかで、例えば暴力をふるって（殴って）しまった理由として「子どもが嘘をついたから」ということがあがります。「それはかまって欲しいからだ」と別の参加者がいう。自分の子ども時代にかまって欲しくて嘘をついたことがあるけれど、親はかまってくれなかった。こういうやりとりがなされていきます。殴ってしまった理由を含めて、この話の流れを子どもの立場で聞くかどうか、ということに参加者に問いかけたりします。そうすると「自分が責められているみたいだ」というのです。「嘘をついたから殴った」これは間違った考え方ですね。嘘をついても殴らないという選択肢が彼らにはなかった。本来であれば子どもが嘘をついたときに親の子育ての力が試されるはずなのです。悪いと思って謝ったり、嘘をついてしまったあとどうやって自分で解決していくのかを身につけさせることが親の役割なはずなのです。

別の事例では、2年ほど「男親塾」に通っていた男性で、長女が人のお金に手を出したことがきっかけで暴力をふるってしまい、子ども四人全員を保護されたという方がいました。妻が鬱になって子育てを一手に引き受けることになり、苦悩を抱えていると語っていました。私は、この男性の話をもとに疑っていました。「妻が鬱」というのは彼の理由づけにすぎない。またDV被害者は鬱になりやすいという傾向もあるからです。自らが怒り役に徹していたとも語りましたが、それは勝

手な言い分です。自分の行動をまったく振り返っておらず、相手に暴力の原因を求めるとどまっています。また、長女はのちに発達に障害があることが分かってくるのですが、父親である彼は検査を拒否しました。自分の子どもに障害があるということを認めなかった。これは父親によくあることなのです。さらに「生きるか死ぬか考えていた」というような極端な思考が入っていました。

「死んでやる」という言動が妻や子どもを追い詰めていく。とても暴力的な言動なのです。相手に選択肢を与えることをしない。この言動からみても彼自身の生き方そのものが暴力的であったことは否定できませんでした。妻は最終的に離婚を選択し、そして男性も受け入れていきます。その決定に大きな影響をあたえたのは、当時中学一年生だった長男です。保護されていた長男と父親は手紙のやりとりをしていたのですが、その手紙に彼はこう書きました。「お父さん、ぼくはお父さんのようになりたくない」。これはもちろん暴力があったからという理由もあります。そして「ぼくはお父さんのようになってしまうのが怖い」と続きます。もちろん遺伝子が暴力を連鎖させるものではありませんが、父親は自分の生き方が長男が生きていくプロセスにこんなにも影響を与えていたのかと、この一文にとってもよく反応しました。そこで私たちが考えたのは「結婚には失敗したけど離婚には成功しよう」ということです。離婚しても親子関係は残るので、暴力を乗り越え、父親として存在し続けることを目指しました。

暴力を乗り越える

私たちの生きる社会はこれまで、あらゆる暴力を見つけ告発してきました。「火をつけてきた」訳

です。ストーキングにはじまり、最近ではリベンジポルノ、そしてヘイトスピーチ、ヘイトクライムなどさまざまな法律もできてきました。「暴力」を声高に告発し続けてきたこと、これは間違いではありません。しかし私たちはつけた火を消さなければなりません。つまりどうすれば暴力から脱出できるのかを考える必要があります。それが被害のケアと加害への対応です。「火を消す」ほうに、加害者への受講命令があります。いまは大阪にしか参加できる場所がありません。さらにDV防止法と児童虐待防止法は法律の系統がちがうので、横につないで欲しいと思います。間違いなく国の責務であり、政治の果たすべき責任です。最近ようやく薬物依存者やアルコール依存者にたいして、受講命令の道が開けてきました。これから、いじめ加害者、刑務所を出所した人などに応用していけると思います。暴力によらない生き方というのを提案し、選択できるようにしなければなりません。

つまり、「愛の鞭」ではない

「愛の鞭」「コミュニケーションとしての暴力」として容認されてきた日常の暴力がたくさんあります。

とりわけ、親子・夫婦の家族関係、男女や同性同士の恋人関係、指導がつきものの師弟関係などにおいてです。これらは距離が近く、相互に希求しあう関係性である。その関係は対等ではなく、優劣のある非対称的といいます。ここで生じる暴力は、ジェンダー関係が反映されることが多く、男性が加害者というケースがほとんどです。

しかし、2000年代になり事情は変化します。夫婦喧嘩や痴話喧嘩ではなくDV、しつけではな

く「子ども虐待」、指導や叱咤激励ではなく「体罰」、熱い恋愛ではなく「ストーキング」、遊び・からかい・おふざけではなく「ハラスメント」・「いじめ」・「いじり」、介護疲労ではなく「高齢者虐待」として名づけられてきました。

とはいえ、その境界ははっきりしない領域です。確かに、こうした行動の度が過ぎると問題になるし、程度の問題だという場合もある。しかし、いったん暴力が肯定されると、行動は倍加していくのです。だから、そのまま放置しておいてよいものではありません。けれどもすべてを刑罰で対処するわけにもいかないのです。

では、この種の関係性に宿る暴力に対して、いかにして積極的に関与できるのか。

先にもいいましたが、保護命令・退去命令、接近禁止命令、親子の分離措置など被害者保護の取り組みは進展しているが、加害者対策はできていないのです。体罰、ハラスメント、いじめに関しても、その予防策や加害者対応は不十分です。

こうして脱暴力をどのようにすすめるのか、名づけた後の課題が大きくなったのです。

暴力を性欲やアルコールのせいにする—被害者にも落ち度があるという意識

DVや虐待で、暴力加害者のする説明には特徴がある。

「俺を馬鹿にしているのか」、

「暴力はコミュニケーションである」、

「俺は正義である」、

「アルコールが入っていて頭が真っ白になっていた」、

「ささいなことだった」

「相手が俺を怒らせる」

「愛情の証しとしての暴力だ」

これまで私が対話してきた加害男性の多くは、実際にこのような言い方をします。

「被害—加害関係のねじれ」と言えるでしょう。被害者にも落ち度があるという意識を加害者が保持しています。時には、暴力を誘発したのは被害者であるという意識が加害者にはあります。被害者非難です。

理由にならない身勝手な言い分です。弱者に依存しているともいえます。これらを見做して性暴力や性的虐待、セクシャルハラスメント、パワーハラスメントの加害者が暴力を正当化する理由として用いられるのです。この心理的背景には暴力をとおして得られる満足感や達成感があり、征服欲も満たされます。

もちろん被害者は悪くありません。DVや虐待などの親密な関係性における暴力から被害者を保護して救済する。地方裁判所から「近寄るな」という命令をだしてもらうのです。保護命令といいますが、それを無視して接近すると刑事罰となります。配偶者暴力相談センター等で相談をしていることを前提にして、安全な場所の提供、日常生活の支援、さらには就労支援にもつなげることがあります。また、被害は身体的な暴力だけではなく、言葉による暴言、無視（ネグレクト）もあります。妊娠している時にもDVがあります。

問題があるので懲らしめる

さらに、男性は自らの暴力を性欲やアルコールのせいにして、「欲望機械」として、あたかも自動的な反応をしているかのようです。

そして、加害者には、原因を他人や環境に求める他罰性の意識が強いのです。これを支えている

のは「自らが正しい」という認識です。被害者に問題があるので懲らしめているだけだとも言います。親密な関係性であることから他者であることの認識が弱く、一体的な感覚を相手に向けているのです。

スタークはこれを「関係コントロール型暴力」といいました。コントロールされるのは被害者の意識と心理です。ねじれの結果、被害者は「関係を続けることが安全だ」という転倒した意識状態に陥ることもあります。これは加害者の視点の内面化・同一化という。一種の生き残り戦略です。加害者は、被害者の自責の念を利用してコントロールする。被害者は自己非難や自尊心の低下を招くのです。

経済的な生活を加害者に依存していれば、ますます関係性は固定していきます。

家族の中に暴力が起きるワケ—暴力の基本型としてのDV

「男女」「親子」「師弟」といった非対称な関係性は、ケアすること、相互に扶助すること、愛情や友情を育むこと、愛着を感じることに、適切な対人関係を学ぶこと、教をを請いながら敬うこと、といった基本的な人間性をつくりだす。

他者同士が共生を試みる基本的なかたちである恋人関係はパートナーシップをつくりだす典型である。「対の関係」の出発点であり、親密な関係性となる。二人関係・二者関係であり、社会のなかの人間関係をつくる基礎となる。

子どもは、パートナーシップを両親(夫婦関係)を通して体験する。ただ、対等な関係ではないことが多いのです。社会の不公平なジェンダー関係は、家族の中にも表れます。子どもは日常的にそ

れを目の当たりにするのです。

脱暴力へ向かう学習機会の提供

関係コントロール型暴力が家族の中で常態化していくと、暴力性の度合いが高まっていきます。しかし、コントロール行動それ自体の暴力性は見えにくい。モラルハラスメント、いじめやいじり、ネグレクト、マインドコントロール、ねじれた被害と加害から成るこのような行動をいかにして問題として可視化できるのでしょうか。

DV、虐待、いじめ、体罰、ハラスメントなどの行動改善に向かう、問題からの離脱や回復へと当事者を内発的に動機づける仕組みが求められるようになってきました。

脱暴力へ向かう学習のための機会提供が受講命令制度として諸外国では政策化されている。それらを扱う特別の裁判所もある(DV特別裁判所など)。「治療的司法(Therapeutic Jurisprudence)」という考え方も構築され、脱暴力の機会を提供する司法の役割もあります。

臨床実践が司法に接ぎ木されていく。脱暴力支援を行う受け皿を「治療的コミュニティ」といいます。「治療」という言葉を使っているが、医療と同じ意味ではなく、心理—社会的な面を視野にいった脱暴力の機会を提供する取り組みのことです。関係コントロール型暴力から離脱するための選択肢として日本においても社会的に取り組みを開始すべきでしょう。

なかむらただし(臨床社会学・社会病理学)

人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 2

低レベルの仕事ってなんだ？

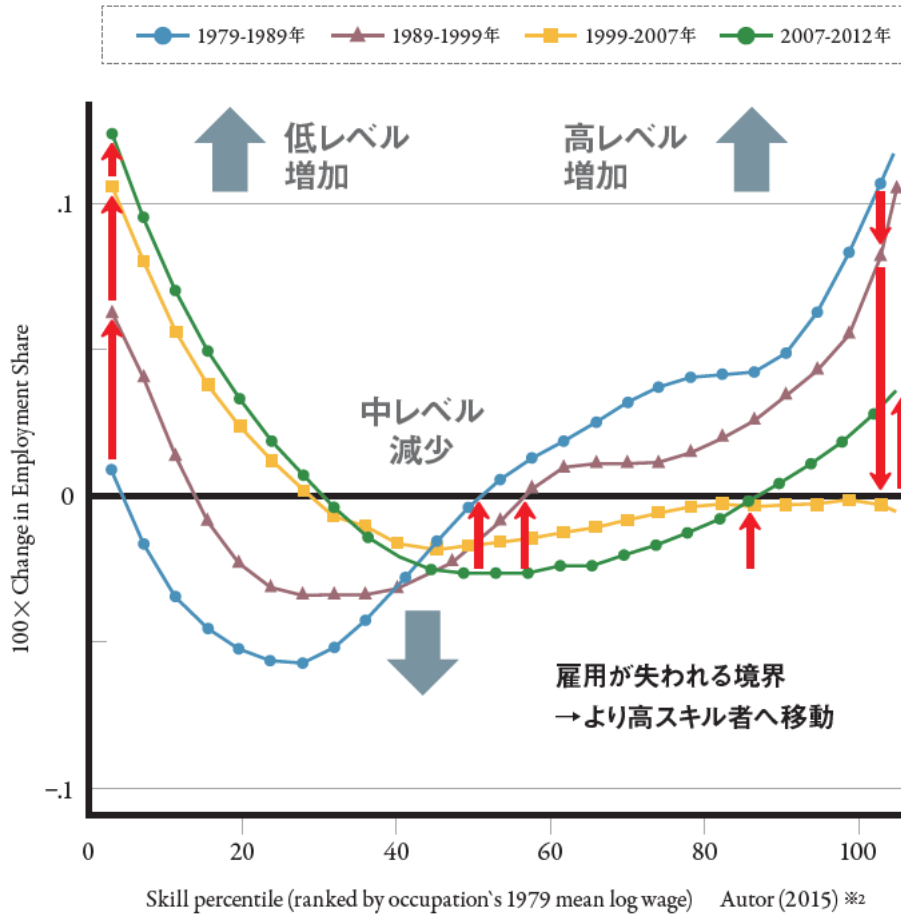
AI や RPA の活用で仕事なくなる、という話がある。今ある仕事の半数以上は何十年後にはない仕事だ、という話もある。いずれも、なんとなく人を不安にさせ、益々頑張らないといけない気にさせられたり、諦めに近い気にさせられたりする。特に仕事経験の浅い若い人が、こういった情報に気持ちを動かされやすいように思う。

そんな話が広まった発端？は、2013 年にフレイ&オズボーンが「アメリカにおいて 10～20 年以内に労働人口の 47%が機械に代替されるリスクは 70%以上」という推計結果を発表したことだ。

ただ、その後たくさんの研究者がこの結果を検証し、この推計は過大だと評価は定まった。現在の世界的コンセンサスは「機械に置き換わるのは 1 割程度」だとされる。機械化で減る仕事がある一方で、新しい産業が生まれて減った分がカバーされるので雇用の総量は大きく変わらない、のだそうだ。しかし、だから安心してね、という話では終わらない。気になるのは、雇用の構造が大きく変わっていきそうなことだ。

労働経済学という学問がある。ぼくはその世界に詳しいわけではないが、先日、日本生産性本部・岩本さんという研究員の話聞いた。その中で、労働経済学を学ぶ人の中では知らない人のいない、デビットウォーターが作成した労働力需給表の話が出た。この表は、職業をスキルの高低順に並べ、それぞれのスキル水準で雇用がどのくらい増減したか 10 年おきにプロットしたものだ（次頁参照）。

米国：スキル度別職業に見た10年ごとの雇用割合の変化



※パーソル総合研究所「別冊 HITO～労働推計 2030～」より引用

この表からわかるのは、中レベルの仕事に従事する雇用者がどんどん減っているということ。一方で、高レベルと低レベルの仕事に従事する雇用者は総じて増加している。理由は中レベルの仕事をした雇用者がどちらかに流れているからだ。さらに言えば、低レベルの伸び幅が大きいことから、こちらに舵を切る人が多いことが見て取れる。中レベルの仕事から高レベルの仕事にステップアップすることが、現実的には難しいからだろう。

中レベルの仕事が減る背景には、AIやRPAが代用しようとする仕事、中レベルの仕事に集まることも挙げられる。低レベルの仕事は、AIやRPAで代用しても費用対効果が低いため、雇用する側の積極的投資が行われにくい。大手ファッションメーカーが製造背景を中国からアジア、さらにアフリカへと求めていく様子からもよくわかる。

つまり、テクノロジーの発展は高レベルの仕事と低レベルの仕事を増やし、中レベルの仕事をなくす方向に作用する確率が高いと言える。アメリカで起きている経済格差の原因は、この現象によるものであると経済学ではほぼ断定されているようだ。

同じ流れは、日本でも感じられる。「ベーシックインカムを導入を」というような話が出る背景も、低レベルとラベルされる仕事の雇用者が増えていることと関連性が深いのではないかとぼくは思う。低レベル雇用者は非正規雇用であることも多く、決して北歐的な福祉国家思想が根底にあるわけではない。

☆☆☆

そんな状況の中で、会社をどうマネジメントし、所属しているメンバーにどう成長機会を提供するかが、人を育てる会社の社長が今考えている課題である。間違っても「俺についてきたら大丈夫、安心しろ」的な無責任なことは言わないし、売り上げと粗利益の最大化を目指して自分だけは逃げ切ろう、とも思わない。

私が代表を勤める会社のひとつ、アソブロック株式会社は10年ほど前から兼業を必須にしている。その理由は、その方が高レベル人材にステップアップしやすいと考えたからだ。ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨けないように、人は人でしか磨けない。そうであれば、多様な人と出会う機会を最大化させることが、人の成長を加速させることにつながると思い舵を切った。これだけの多様化社会では、社内で人材を育成するという考え方自体が時代遅れだ。もちろん、社内での人材育成はして当然であるが、それだけで留めておいていいわけがない。

先日、大学生と話をしていたときに、周りに信頼できる大人がいない、という話になった。45歳のぼくの若かりし頃も、周りに信頼できる大人などさほどいなかったと思うが、肌感では、ぼくの時代以上にいないのだろうと感じた。

現代は「今だけ・金だけ・自分だけ」の世界だと言った人がいた。一方で、誰もそんな世界に生きたいと思っていないことも事実だと思う。高レベル人材によるテクノロジーの進化スピードは本当に早く、大半の人がそれに追いつかない。囲碁や将棋の世界がテクノロジーのフォロワーになりつつある時代、一般社会は遥か前からテクノロジーのフォロワーになっていると考えるのが妥当だ。テクノロジーの進化を志向する開発者たちは、今日も「より豊かな社会」を創造しようと日々研鑽を積んでいる。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な9つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに； <https://goo.gl/bFQdpC>

カウンセリングのお作法 第十八回

CONカウンセリングオフィス中島 中島水鳥 弘美

★ グループと事例検討

困難な状況に陥っている人々のカウンセリングは、順調に解決に向かうばかりでなく、停滞することがあります。

そのような場合、カウンセラーは、スーパーバイズを受けたり、職場の会議や研究会で事例について、参加者に考えてもらったりするなど、カウンセラーをサポートする方法があります。今回は、グループと事例検討について考えてみます。

スムーズに進んでいないケースについて、検討を依頼するとなると、事例を提出する人が、少し負担に感じる場合があります。

事例提供をする人は、できるだけ早く今後の

見通しをつけたいと思いつつも、検討会の準備のために経過の文書を作成するなど、時間をとられます。

時間の負担だけでなく、どんなことを指摘されるかも正直、気になります。まな板の鯉になった気分とを感じる人もいます。

というのも、職務経験が浅い人ほど、自分のやり方がまずいから、解決に至っていないと考える傾向があるのです。

一方、経験が比較的長い人は、うまくいかなのは、クライアントや家族の問題の根が深くてややこしい、そのため、この事例の課題はクライアント側にあると、とらえてしまう傾向があります。

今後どうするかが描きにくい

事例検討そのものに注目してみると、これまでの事例検討の進め方の多くは、何が悪いか、誰のどの行動が適切でないかなどの問題点指摘や原因追求の話題が中心で、次につながる具体的な話が出てきません。

そして、事例検討に参加している構成メンバーの発言は、経験の豊かさからの意見が重視される傾向があります。

もうひとつ、事例の中で特徴的な話題が見つかるとその話題に集中するあるいは、その反対で話題があちこちに飛んで、深まらないなど、今後の方針について、描けなくなるのです。

これまでの事例検討の傾向

- ・何が悪いのか原因追及が中心になり、具体的な対策が立てにくい
- ・経験の豊かさからのアドバイスが優先される
- ・話題があちこちに飛ぶ、あるいはある一定の話題を繰り返す



事例検討会、実は気が重いです、
資料作りに時間がかかるし、何を
指摘されることやら、、、

はてな子さん カウンセリング初学者



事例検討の目標は次が見えること

- ・とびぬけた支援方法があるわけではない
- ・支援にかかわっている人および支援を必要としている人とその家族が何とかやれているところに注目しながら、今後どう変化していくのがよいかを描く
- ・事例検討の目標は、支援にかかわっている人たちが
あっと 発見がある **ほっと** 安心が見つかること





『グループと事例検討』

事例検討で大切なこと

事例検討は提供者中心に

事例検討をする上で大切なことは、事例提供者が多くの人々の声を聴くことで、よかったと思うこと、つまり、今後どんな行動をしていくのが良いのかが自然に浮かび上がることです。事例検討は、ずば抜けた解決法がすぐに見つかるわけではないことをおさえてから、取り組めます。

ここで前々回お話ししたリフレクティングの再登場です。

リフレクティングチームの事例検討版(表)は、いくつかの利点があります。

まず、事例提供者の負担はほとんどありません。経過文書を作成する必要はなく、その場で

事例について話します。そのため、緊急時に関係者が話しあうときに適しています。

必要なことは、どうしてその事例をとりあげたのか、何を望んでいるのかの理由を明確に伝えることです。

事例の詳細は必要ではなく、事例検討に協力してくれる人たちに、事例提供者が知っておいてもらいたいと考える情報を優先に話します。これは事例提供者が判断をして語ります。

その段階を経て、A質問時間がスタートします。

気付きにつながる問いかけ

事例検討協力は、ひとり、ひとつずつ、質問を事例提供者にしていきます。このとき、事

例の詳細をたずねる問いかけではなく、解決につながるような、気付きを促進するような問いかけであることがなによりも、鍵になります。

B事例検討協力者役すべての話し合い

さらに、効果的と考えられることは、さまざまな角度から事例を考えることができることです。話し合いの時間は何を話しても良いフリートークです。話題があちこち飛ぶことがあったとしても、事例提供者は、その話し合いを黙って聴いているだけで、必要とする点を中心に受けとめます。どのような話し合いがなされていても、大きく影響することはなく、事例提供者が必要を取捨選択できる自由が確保されています。

リフレクティングチーム 事例検討版

かかわっている事例を取りあげ、グループ全体の力を借りて、問題解決する体験

進め方 それぞれの役割を決める

事例提供者役 1名 事例検討協力者役 事例検討に直接協力する人 5～6名

オブザーバー役 事例検討全体を見守る人 何人でも可

→さまざまな意見を聞きながら、感じたこと、浮かんできたことを確かめながら進行を見守る

	時間	事例提供者役 1名	事例検討協力者役 5.6名
A 質問時間	45～ 60分 (8分)	<p><u>準備 0</u></p> <p>事例提供者は、どうしてその事例を取りあげたのか、その理由、何を得たいと思っているのかの内容を説明する。(事例の詳しい説明は不要)</p> <p>例 私がよく陥るパターンである いろいろな人の意見をききたい 具体的な方法対策を望んでいる</p> <p><u>スタート 1</u></p> <p>提供者が現在、困っていること、事例を簡潔に説明し、事例検討協力者役からの質問に順番にこたえていく。 (答えながら頭の中に浮かんでくことに注目する)</p>	<p>協力者役は決められた時間まで、ひとり一問ずつ順番に提供者役に質問をしていく。</p> <p>そのときに、事例提供者役が、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのようなことを話したがっているのか、 ・解決力を引き出すにはどうしたらいいのか、力づけることを想像しながら質問、問いかけをする <p>例) これからどのようになっていったら良いと思いますか?(目標設定 方向確認)</p> <p>例) 最も恐れていること、心配していることはどんなこと、どうなることですか?</p> <p>例) これまでためしてみたことで少しでも役立ったこと、効果があったことはどんなことですか?</p> <p>例) 現状を維持するために配慮すべき点はどんなことだと思いますか?</p>
B 事例検討協力者役すべての話し合い時間	25～ 30分 (5分)	<p>少し席を離れて、座る (絶対に言葉を発しない、顔かない)</p> <p>協力者役達の話し合いを黙って聴き、自分の内面に浮かんでくる思い、考え、ひらめきなどを確かめる。</p>	<p>事例提供者が聴いていることを前提に、事例について、事例研究協力者役全員で自由に話し合う。共感したところ、具体策、提供者さんの良い点、うまくいっている点のまとめ、経験談、社会資源の提供、評価、感想……など。(事例提供者さんに絶対に話しかけないこと、追加で質問しないこと)</p> <p>オブション</p> <p>★時間があるときオブザーバー役が自由な感想を述べる</p>
C 事例提供者の感想発表	5～10分 (1分)	<p>Bの話し合い(+オブザーバーの感想)を聴いて、感じたことを自由に話す</p>	<p>協力者役の話し合いのどの部分が役に立ったのかを確かめながら、事例提供者の話、感想を黙ってきく</p>

参考文献「ナラティブ・セラピー～社会構成主義の実践～」シーラ・マクナミー ケネス・ガーゲン編 野口裕二・野村直樹訳金剛出版 1997年

★『グループと事例検討』

リフレクテイティングチーム事例検討版の効果

オブザーバーの助け

事例について直接考える、事例検討協力者以外に、オブザーバーの存在があります。人数は何人でもかまいません。

事例について話し合いをしている人と、事例提供者を含めた全体を見守る役割は、直接かわっていかないからこそ、気がつく点があります。

事例検討協力者の話し合いが順調に進行すると良いのですが、ときに客観的に考えられない場合や、大切な点を見逃して、ヒートアップしてしまうこともあります。そのようなとき、オブザーバーからの意見が大いに助けになります。

時間にゆとりがある場合は、オブザーバーか

らの感想を、事例提供者に示します。そのことでより全体的な視点から事例をみるようになります。

C 事例提供者の感想発表

事例提供者の感想を聴きながら、参加者の意見のどのような点が役立ったのかに注目します。

ここでは、自由に感想を話せる雰囲気求められる。何が役に立ったのかを実感できるのは、事例提供者本人だけだからです。

このあと、追加で質問をしたり、提案をしたりすることはできません。この相互のやりとりが事例検討の成果を象徴するところです。

ひとり事例検討

もしも私が事例提供者の立場ならどう考えるか、クライアントの立場だったらどう感じるのかなど、事例を通して学ぶことはとても有意義です。しかし、事例検討は長時間かかる場合もあります。また、どうしても事例検討する環境が整えられないこともよくあります。

そこで、一人何役もこなしながら、ひとり事例検討をするのもひとつの方法です。その点検項目を取り上げました。

家族の建設的などころ、強みは何かなどを自問自答することで、かかっているケースを見直します。



ひとりで事例検討する場合の点検内容を
掲げってみました！
解決につながるような問いが中心です

CON 子さん 心理カウンセラー

ひとり事例検討 点検項目

- 質問 1 このひとり事例検討会から何を得たいと考えますか
- 質問 2 クライアントさんやそのご家族の建設的な能力関心態度
(強み) はどのようなところですか
- 質問 3 クライアントさんやそのご家族について何が心配ですか
- 質問 4 すでにトライしたことは何ですか
- 質問 5 どんな効果に気がつきましたか
- 質問 6 望ましい行動がおこるときはどんなときですか
- 質問 7 そのとき何が違いますか



家族の強み
は何だろう

自問自答するひとり事例検討



ひとり事例検討って
自分で点検するんだ
客観的になれるかど
うかむずかしい

はてな子さん カウンセリング初学者

集団精神療法を

振り返る

藤 信子

1

東日本大震災等の関係者の相互支援グループについて書いた時に、災害支援者が無力感や罪責感で傷ついている時に、グループ（集団精神療法、以下グループ）で話すことについて、そのコミュニケーションの増大の中で、「なぜそうなのか」「何がそうさせているのか」「明らかにしなければならない意味」などについて考えることによって、変化が生じる（Pines 1989）ということ。また Yalom（1995/2012）の療法的因子と引用して、その有効性を述べた。そしてグループのセッションを続けることによって得られる体験は、講義で得られることとの違いがあると述べた。日本における伝統的な学習で、講義で教えられることで得ら

れると思っている人には、体験することの大切さを認識せってもらう必要があるようだと、グループを続けてきている数十年の感想である。この頃は「グループは私の考えを探す場」だと説明している。それが今の私のグループ体験について、当てはまることばだと感じている。

ここではどのようにグループという場を作り、コミュニケーションが促進されるためには、何が必要なかを考えてみる。集団精神療法には、言語によるグループだけでなくサイコドラマなどのアクティビティを使うものもあるが、ここでは言語のグループについて見ていく。田辺（2017）は集

団精神療法を、以下のようにまとめている。

「1) 3名以上の集団(2名以上のクライアント(以下、CT)、1名以上のグループサイコセラピスト(以下、GP)が一定の時間枠で行う精神療法。2) 目的は参加するCTの ①症状や行動の改善、②心理的問題の解決や緩和、③人格的成長 3) GPは目的に合うように集団を構成する(サイズ、疾患や問題、自我機能のレベルなどを考慮する) 4) GPは集団力動(メンバー間のコミュニケーション、集団のこころの動き)を活用する 5) GPは集団力動に関する訓練を受けている」。これをみると、GTが1名いて、メンバーとなる人が2名以上いるとグループは作れるということである。私自身のグループの始まりは入院中の統合失調症の人が対象のグループで、7-10名くらいのメンバーにGPが1名か2名のスモールグループを実施していた。入院患者とのグループは、病棟全体を対象としたコミュニティ・ミーティングがある。これは強制ではないが、病棟の全員(入院患者、病棟スタッフ)に呼びかけるために、30-60名くらいのメンバーになる。これくらいになるとラージグループとなる。ラージグループの大きいものは日本集団精神療法学会や国際集団精神療法集団過程学会での500名くらいの大きなサイズのものもある。また20名くらいのサイズのグループをメディアングループと呼ぶ。サイズの違いによって、メンバーのこころの動きが違ってくようで、スモールグループでは、家族という観点から理解を深めていくことに対して、メディアングループでは、社会文化的領域(社会的無意識)を探求すると言われている(Lenn & Stefano, 2012)。

それでは、そのようなグループにおけるコミュニケーションはどのようにしたら治療的なものになるのだろうか。鈴木(1999)は、集団精神療法は「安全を保障された枠組みの中で、これまで健康的に体験することの少なかった『集団』の中で起きるいろいろな事柄を体験しなおす。」「これまで十分に繰り返し体験することのなかった役割と役割関係、人間関係のあり方、感情や考え方の表出を実験的にすることが可能」「他の人の実験をよく見ることができるといふ「実験の場」であるとしている。そして「実社会での生活、あるいは家庭でできない自分の感情の吟味が、集団精神療法の場では可能であり、その体験の積み重ねが、グループにとっても新しい体験ともなり、あるいは耐性を高める力の源となる」と感情の吟味のできる場であることを述べている。このコミュニケーションを可能にするために、GPは、グループの構造を作らなければならない。それは、グループを実施する場所、時間、メンバー等を決めることから行うと言える。グループは「容れ物」と表現されることがある。容れ物であるためには、内と外がある、このグループの内と外の区別を明確にし、それを守ることをまずGPはしなければならないとされている。その内と外を分けるのが「バウンダリー(境界)」である。このバウンダリーを守ることの大切さを、トレーニングの過程で何度も言われるが、メンバーが今までできなかった役割を取ってみたり、感情を表出することを安全感・安心感を持ってできるためには、ここは外の世界とは別だということを確認しておく必要があるからである。私

はある学会でスモールグループに参加した時に、そのグループの場所は、閉じられた部屋ではなく、静かで人の出入りは殆どないが大きな空間の一角をスクリーンで区切ったところだった。最初ちょっとびっくりしたけれど、4日間続くうちに慣れていったと思っていたけれど、なぜか GP が攻撃されることが多いグループを振り返り、この場所がしっかり区切られていないことが、グループに対する安全感を持ちにくかったためではないかと最後のセッションで言った。それはバウンダリーの持つ意味を改めて考えさせられたグループだった。

今回は治療グループの目標について等を見ていきたいと思っている。

文献

Lenn, R. & Stefano, K. (ed.)(2012) Small, Large and Median Groups. London, Karnac books.

Pines, M. 式守 晴子訳 (1989) グループ状況の中での個の変化. 集団精神療法 5 (1) 11-16

鈴木 純一 (1999) 集団精神療法.臨床精神医学講座 第15巻 精神療法. 中山書店.179-192

田辺 等 (2017) 集団精神療法の基礎事項と実践の概要.集団精神療法の実践事例 30 グループの臨床的な展開. 創元社 25-36

Yalom,]I. D. (1995) The Theory and Practice of Group Psychotherapy. 4th. Ed. Basic Books (中久喜 雅文、川室 優監訳 2012 ヤーロム グループサイコセラピー 理論と実践 西村書店)

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

4 . 超具体的に
コミュニケーション
を支援（児童期編）



次ページのシーソーは、前回の幼児期編に積み上げる児童期のスキルです。
この時期、幼児期に確保した「家の居場所」を基地に、子どもたちは社会（学校）に出て行きます。

ちなみに、学校は教育と競争と協調の場です。なにせ3Kですから、家とは違って戸惑うことは多いでしょう。

2. 学校の居場所につながる “児童期の課題”



心のバランス

A horizontal green bar with the text '心のバランス' (Mental balance) centered inside it.

学校に居場所がないまま、義務で週五日
6〜7時間を過ごす。しかもそれが何年
間も続くなんて、もう地獄です。
そんなことにならないようにと、今回も
ママ友パパ友が知恵を出し合います。

※ マンガは団士郎氏の許諾を得て、木陰
の物語と家族の練習問題から転載していま
す。

ええで



(1) 予測と選択

下の子なんだけど、自分で決められないうえに、なんでも人のせいにするところがあるの。なんとかしたいんだけど、どうしたらいいかな？



“こうすればこうなるだろう”と結末予測付きで複数の選択肢を伝え、その上で自分で決めるように導いたらどうかな。自分にとってどちらが得か、という目盛りも必要かもね

(2) 原因より目的

「(学校で) なんでケンカになったんだ?」と問うといいわげばかり言うんだ。それでだんだん腹が立ってきて、結局、怒鳴り散らすだけで終わってしまった。こんなとき、どう言ってる?



「目的はなんだったんだ?」
「それならもっといい言い方があるよ、たとえば~」、どう?
これだとお互いに怒りが生じない。再発防止にも繋がるし

(3) 頼み上手

夫が、頼まれもしないのに
子どもに手を貸すのは過保
護じゃないかと言うのよ。じ
ゃあ、お節介や手助けとの
違いは？と聞くと、それは知
らん！だって



「手伝えることがあったら言って」
と伝えておいて待つ、それがい
い“手の貸し方”だと思う。社会
にでたら手伝ってと言わないと
誰も助けてくれない、亭主はそ
れを言いたかったんじゃない？

(4) 四通り、プラス・アルファ

10歳までは、「えらいね、ダメよ、勝手にしなさい、できたらご褒美」の4通りを組み合わせれば何とでもなったのに、最近は難しいわ

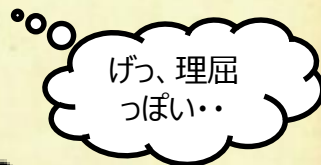


うん、それに加えて“提案、謝意、教えて”を活用するといいわ。これだとけっこう動いてくれるよ

(5) 理不尽さとの折り合い

登校を渋りながら、学校は何のためにあるのか教えてシッコイんだ。どう説明したらいいかなあ

ちゃんと教えた方がいいよ。学校の意味の一つ目は校内の“教室・運動場・自由時間”のいずれかに自分の居場所を見つけること。これは社会で生きていくための予行演習だ。二つ目は、“学校にいっぱいある理不尽さ”と折り合いをつけること。こっちは社会で生きるためのワクチン。で、どう？



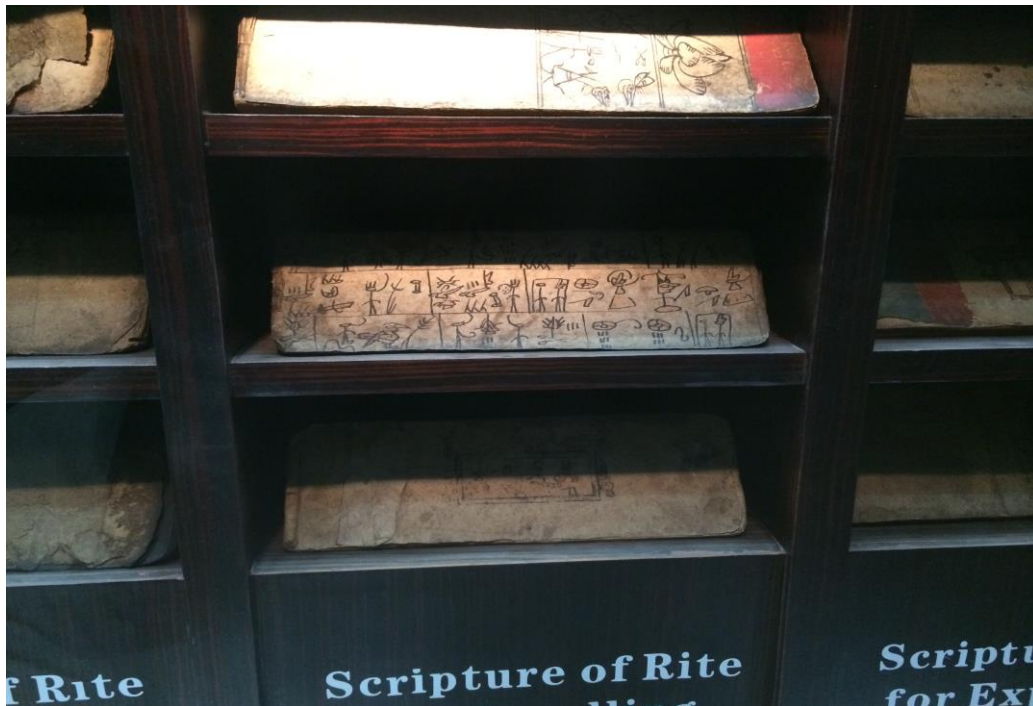
続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第6回

2019/03/15 版

団士郎



雲南省麗江にあるトンパ文化研究所の展示

十年前と

約十年前に連載していた文書を、読み返しながら加筆、修正しつつ掲載しているのだが、「家族」の基本的なところに変化があるとは思えない。一方、社会や、世間に漂う相互理解には、少なからぬ変化を感じている。

家族の面白いところは、社会と呼応しながら、矛盾をいっぱい抱えつつ、結局、存在は大して変化などしないがごとく見せ続けてきた所だ。

それが近年、家族を持つとしない人々や、生涯単身で暮らす選択をする人が増えてきた。交代する次世代の存在を、気にしていないかのような人々が希ではないということなのか。

自分世代で家族に区切りがついてしまう事や、自分一人で高齢化社会の一員であり続けることについて、どう考えているのだろうか。そんな選択も増えた世界で「家族」はどうあり続けるのか。今後、新たな何かが蠢き始めるのか、興味深く眺めている。

六 夫婦サブシステム

知恵

家族に起きた問題が峠を越した頃、初めて気づかされたお互いの事。こういう体験は多くのカップルの記憶にあるだろう。

もめ事の渦中にある時、たいていの人はそのことしか見えなくなっている。これは仕方がないことだ。だから同様に、幸せ気分の時もやはり、それしか見えていない。

夫婦に代表される親密性を持った人間関係をこういうものだと考えるなら、夫婦喧嘩の類は、多様性を持った相互理解の一回路だと言うことが出来るかもしれない。

だったら夫婦になった時に、カップルのこういうメカニズムを学習しておくのは、意味のあることだろう。婚前カップルのカウンセリングが実施されていたりするのには、こういう知恵だろう。

ウキウキ気分だけの二人に学べるのはせいぜい、万一上手くいかなかったら離婚すればいい、この程度の認識でしかない。

A・ビアスの「悪魔の辞典」の“フレンドシップ”の項には、「凧の時には二人乗れるが、嵐になると一人しか乗れない船」、と書いてあるそうだ。孫引きからの知識だが、なかなかの皮肉だ。

ならば、結婚したカップルのパートナーシップには、凧の日などないと思って航海に出るのが肝要だろう。そしてそれでも沈没してしまわないのが夫婦の知恵というものである。

さらに、親になった人は乗組員まで増えていくのだから、大変は当然である。何も起きないことをイメージしすぎるから、現実が負担の大きいイレギュラー事態のように感じられてしまうのだ。

本当は

息子の起こした問題で相談に来ていた夫婦が、突然別居してしまった。聞いてみると、かねてからの夫の問題解決への姿勢が、いよいよ受け入れられなくなってしまったという。

普通、問題が起きても、いきなりこんな結論を出してしまう人は少ない。やはり、ひとつひとつの原因究明や、それなりの回復努力がおこなわれる。そしてその中で、夫婦関係や家族力動の正体が見えてきたりするものだ。

ところが彼女は、長年の積み重ねに今回のことが重なって、失望してしまったらしい。

来談の訴えは中学生の兄が、小学生の妹に性的いたづらをしているという、少々やっかいな話だった。

だから、兄妹を伴って母が実家に戻ってしまったと聞かされたのには驚いた。来談要件と選択された行動につじつまが合っていないと思ったからだ。

しかし時間経過と共に、このカップルの問題の深さが明らかになってきた。

事情があつて途中から夫方祖母との同居に踏み切った一家だったが、そこでの嫁姑の確執がベースの問題だった。そこでは、一つ一つの問題より、解決に向かう夫の姿勢が妻には我慢ならなかったのだ。兄の問題行動は、潜在化していた課題を、表面化させる役割を果たしてしまつたと言つてよかった。

その後、兄妹間での問題行動再発はなかったようだから、母親のこの対応も不適切だったとはいえない。そして、夫婦の別居生活はずっと続くことになった。

夫婦の問題が子どもの症状という形で、表

面化する場合が少なくない。それは家族を守りたいと思う子どもの無意識な選択であることも多かった。

ただ、ひとこと断っておくと、こういう解釈はけっして合理的ではない。そのことは解った上で、こういう事に気づいておくのは意味のあることだろう。

義理の関係

わかりやすい話だが嫁姑、この古くからのテーマは「夫婦サブシステム」明確化のための踏み絵である。ニュアンスは様々だが要するに、「私かお義母さんか、どっちを取るの？」と妻から突きつけられている。

その問いに、「どっちかなんて選べない。両方大事だ・・・」と応えるのは愚の骨頂である。こういう人は、「私と仕事のどっちが大事なの？」と問われても、「子ども達と会社のどっちが大切なの？」と聞かれても、同じ事を答える人なのだろう。

家族関係の中には、冷静で公平であるだけでなく、偏って絶対の味方を宣言しなければならないことがある。ここで問われているのは客観的事実や結果ではなく、想いや決意なのである。そのことを多くの嫁姑関係に

関わるケースを見て学んだ。

それにこのような義理の関係の問題は、私たち(団塊世代)より上世代のテーマかもしれないと思った時期もあった。

若い世代は、自由に自分たちの選択を実行しているのではないかと思ったりもしていた。しかし実際はそんなことはなかった。むしろ、必要以上に囚われている人も少なくない現実を見た。

近年の関心(欲望)の中心は「争いにならない事」である。争っても得にならないことは止めておく。真理の一面ではあるが、これが蔓延しすぎると、目標の中心は「争わない」になる。この手っ取り早い対策は我慢である。

適切な主張をしない人が、なんとか上手くやろうとすると手立ては我慢しかない。そしてその破綻結果を、あちこちの場でストレスと称して語り、病む。

近年増えていると聞くマスオさんファミリーという居住形態。婿養子もあれば、そうではないケースもあるが、妻の実家で妻の実親との同居。これなら妻のストレスは少ないし、夫が上手に息抜きすれば・・・等と考えるのも、少々安易すぎることを知らされるケースに会った。

以下のマンガ、「夫婦のギャップ」である。

「夫婦のギャップ」 木陰の物語

in the shade of family tree

彼の担当ケースの
スーパーヴァイズを
することになっていた。



新婚半年という
男性と仕事を
していた時のことだ。



卒業後、カウンセラーとして
働きたいという希望を持っていたが、
なかなか実現の難しい道だった。



三人兄弟の
次男である彼が、
関西で仕事を
することになったのは、
大学が京都だったからだ。



彼自身の課題も感じたので、
いろいろな個人的なことも
質問することになった。



助言されたように
振る舞えない事を
悩んでいた。



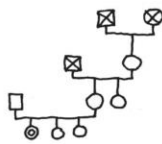
彼にすれば、
仕事もまだ始めたばかりだし、
収入も不安定な状態で……と
ためらいがあった。



彼が男三人の次男坊であると
知ってからは、
彼女の両親の方が
熱心なくらいだったそうだ。



彼女は
地元旧家の長女で、
婿養子と
絶対の条件と考えていた。



そんな中、私生活では、
偶然の出会いが
とんとん拍子に進んで、
結婚話が
もちあがっていた。



一年半のアルバイト生活後、
やっと希望の職につけた。
しかし週三日の
非常勤だった。



ところが彼は、
思いもかけない
問題に直面する。
食事のことである。



妻一家から
大歓迎され、
何も問題は
ないはずだった。



妹たち二人も、
これで自分たちは
出て行けると
喜んでた。



しかし
強く求められて結婚。
マス男さん状態の
同居の新婚生活になった。



共働きで自分たちを
育ててくれた母の夕飯は、
とにかく食べ盛りの
男の子三人が、
おなかいっぱいになる
メニューだった。



一方、
三人姉妹を育てた
旧家の食卓は、
繊細さに溢れていた。



妻の祖母も一緒にとる
上品な食事は、彼には
カルチャーショックだった。

何よりも腹が
ふくらまないのである。



夕食後も引き続き空腹。
そんな日々が続いた。
彼はこのことを
妻に言えなかった。
そんなことは
想像したことがない妻にも
分からなかった。



家計への貢献度の低さが、
それを口にするのを
ためらわせた。



仕方なく、
駅前のコンビニで
少し腹に入れてから
帰宅したりした。



「けっして老人食のようなことは
ないんです。
お肉も出るんですけど
少ないんです。
高そうな肉でね」

「安くていいから、
もっとたくさんなんて...」



「奥さんに
率直に言えばいいのに...」
とは言ったが、
彼の微妙な心境は
笑えなかった。



それが引き金になって、
いくつもの
カルチャーギャップが
噴出し始めた。



結局、これが理由で
離婚になった。
しかし食事の話は、
最後まで明らかに
しなかったらしい。



それぞれの育った家族は
国だと言っ
ていいのかもしれない。



結婚したら
新しいルールの
国を作るのが
一番わかりやすい。



相手のカルチャーに
合わせようとすると
壊れてしまうのは
馬鹿げている。



でも、こういう人が
増えているのでは
ないかと思う。



本陣の物語の単行本が発売中です



家族の練習問題 2
～本陣の物語～
著者：団 士郎
1365 円 (税込)
ISBN978-4-9901713-2-2



家族の練習問題 1
～本陣の物語～
著者：団 士郎
1300 円 (税込)
ISBN978-4-9901713-0-8

お近くの書店かオンラインブックショップ(クロネコブックサービス・アマゾン)でお買い求めいただけます。取扱書店はホンブロックのwebサイト(<http://www.honblock.net>)でご確認ください。

夫婦サブシステムの確立にとって重要なのは、時と場合によらない配偶者サイドでの努力だ。

そして同時に、きちんと対立や葛藤を抱えることもできる二人であるべきなのだ。安易に子どもや親族など、身近なところに援軍を求めない。だからこそ対等な連携ができる。これは当然至極のことなのだが、なかなか難しい。

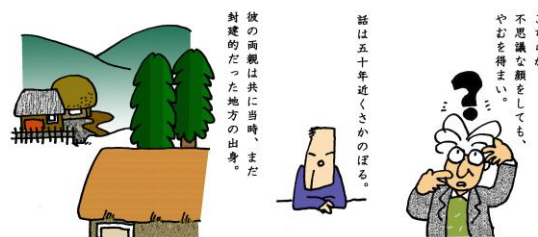
ぶつかるエネルギーを惜しみ、表面的調和と、裏側での不満をセットで、「親族関係のストレス」などと位置づけている限り、新たな局面が拓かれることはない。

忠誠心

子どもは自分が育った家族のルールを、世界として受け止めて生きる。やがて外の世界と出会い、我が家スタンダードと世間のそれとの差異にも気付く。そこを上手く両立させながら、やがて迎える独立、新生活の準備をする。

しかし時々、新しく営み始めた家族の中に、昔の忠誠心の名残を残したままの人がある。

それでも新しい生活が上手くいっていれば問題はない。新生活に支障を来すようになったら要注意である。



夫婦サブシステムの視点で言えば、彼の両親は強力なそれを築いて、やがて金婚式を迎えようとするカップルだ。しかし娘には、自分たちの一番大切にしてきた関係を築かせてやることは出来なかった。むしろ、この結果は親が押しつけたモノなどではないだろう。長女の人生の決断だと語るのが、妥当性は高いだろう。

そして息子にも、彼の夫婦サブシステムの中に、あらかじめ実家だけで継続する慣行は認めさせる立場をとり続けている。

これは世代間境界と夫婦サブシステムのことを考えたとき、実家から新しい家族への侵行的行為である。

しかし彼の妻はこれを、個別の困った事情として受け流しているという。話を聞くと、夫も又、妻の実家の両親や義兄弟達と酒を飲むときの方がリラックスしているという。

高齢化しつつある両親のことである。温泉行きはそのうち、物理的に不可能になるに違いない。

「それまでは、まだしばらくこのままで、女房と子ども達には負担をかけますが・・・」と彼は笑う。

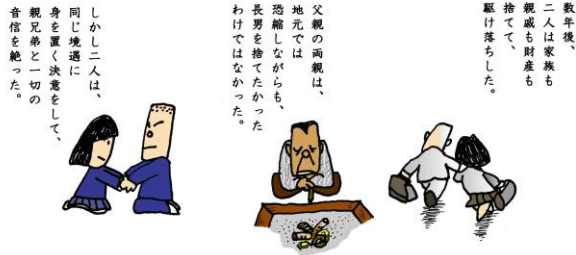
変則的でも、当事者が納得をして、上手くやれているならいっこうに構わないという一例である。



交際など許されないカップルだったそうだ。

しかし、素封家の娘だった母は、自分の恋を諦めなかった。

貧しい農家の長男だった父も、その思いに応える覚悟をした。



数年後、二人は家族も親戚も財産も捨て、駆け落ちした。

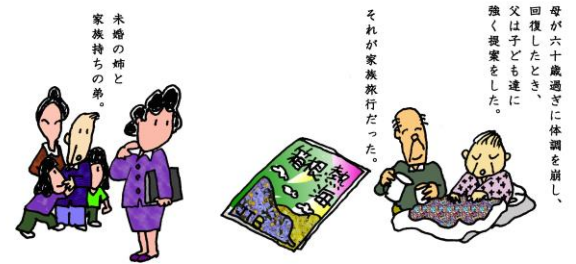
父親の両親は、地元では恐縮しながらも、長男を捨てたかったわけではなかった。

しかし二人は、同じ境遇に身を置く決意をして、親兄弟と一切の音信を絶った。



以来五十年、双方の両親の死も知らされないまま男女一人ずつ子どもが抜かれた家族を営んできた。

父には今も、あの時の妻の決断には、どれだけ厭いても過ぎることはないという思いがある。



母が六十歳過ぎに体調を崩し、回復したとき、父は子ども達に強く提案をした。

それが家族旅行だった。

未婚の姉と家族持ちの弟。



「どうする?」
「どーする?」
共に父の提案を断れなかった。

それから十年、この習慣になって今に至る。

入浴後の夕飯。



すっかり食の細くなった母は、「若いからお腹がすくだろう」と言っ、彼の皿につきつき、自分の膳のものを運ぶ。

「私ももう五十前ですよ。コレステロールが気になるから、無理して食べません」と笑う彼の観音行。

家族はそれぞれの歴史物語の今を生きている。



不況のおり、雇い主の側が強くなっている
リストラと天秤にかけるように迫られたりして、引き受ける人が増えているのかもしれない

単身赴任が増えているそうだから

サラリーマンなら単身赴任はやむを得ないのだろうか？
それはなんでもないことなのだろうか？



真つ当なはずの結婚生活だけに単身赴任が多い

かくも長き不在
in the shade of family tree
木陰の物語



四十代、五十代の単身赴任も少なくなない

家のローンある...
子どもの学校も...



夫婦がもめて別居中の家族で子どもが問題を起こすと「両親があんなことでは子どもも悪くなる」などと、分かったようなことをいう

父親不在なんて精神的なことではなく、本当に不在になってしまうことに心配はないのだろうか？



別の詩か？
「同棲」に対する世間の視線は、時代と共にあまり批判的ではなくなった

友人にも二人、五十歳を過ぎてから、独身寮生活をしていたのがある

45才から五年間...

発展途上国における国外への出稼ぎの話はよく耳にする
しかしそれを良いことだと語っているわけではない

なに...
生活維持のためなら親子バラバラでもいいなんて矛盾してないかい



考えてみると、同棲に別居はない

内縁関係や事実婚にも長期別居はないだろう



出たまま行方不明になつてしまつた家族を抱えた人が地域に結構いるのだという



東北からの冬の出稼ぎも、地元の人しか知らない現実を作っている

しかし単身赴任がきっかけで、
家族が崩壊してしまった例は
いくつもある



不在は関係を否応なく変えてしま
う。どう変化するのは誰にも分
からない



変わってしまったからはじめて、
こんなはずではなかった...と思
い至るのである



無論、単身赴任にしても出稼ぎに
しても、上手くやっている人も多
い。その後に起きる事態は
個別的事情だとい
う人があるかも
しれない

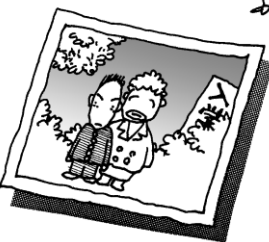
だがそんな人は、
中高年の
リストラ自殺も
ホームレス化も、
個別的事情だといって
済ませるのだろうか



選んだことの結果、
選ばなかったことの結果が
未来を作っていく



家族が一緒なら
起きなかったかも
しれないことが、
単身赴任や出稼ぎ中に
起こってしまう



「不在」は大きな
問題である



ニコラス・スパークス

映画「きみに読む物語」を面白く見た。アルツハイマーの妻に、自分たちのこれまでの何十年の愛の物語を毎日語り続ける年老いた夫の話だ。ちょっと通俗的で、そしてやっぱり感動的だった。

ありきたりとはなかなか奥深いことである。近年とくにそう感じる。何であろうと、限られた人にだけ解ることで、いい気持ちになりたがるエリート意識が好きではない。

それよりずっと通俗的で、ありふれているが、「でもやっぱり泣くよね・・・」なんて感想が、誰かから漏れてくるのが良いと思う。そして同時に、もしそこに大衆的愚かしさが混入しているなら、その修正努力はしておきたいと思う。

たまたま駅の書店で目にして、気まぐれに手にした「きみを想う夜空に」。出張経路を移動しながら、四百ページほどの単行本を、二日で読み終えてしまった。アメリカで大ベストセラーになったと書いてある純愛物語である。その筆者紹介で、「君に読む物語」の著者であることを知った。「君に読む・・・」も「・・・夜空に」も夫婦愛の物語だ。あきれほど唯一無二の愛の物語。

一人あたりの平均結婚回数は世界トップレベルではないかと思うアメリカ(調べたわけではないので、揶揄的冗談だと思ってください)で、これが読まれる背景を思う。

ないものねだり、あるいは、古き良き時代へのノスタルジーだろうか。はたまた、団塊世代の団塊ジュニア以下の行動への批判であろうか。この連想から、不況になると離婚が減るといふアメリカの、身も蓋もない事実も思い出した。

もともと日本の現状も今、類似の特徴にあると言えるかもしれない。青年期女子にとって結婚は、一つの失業対策である。「就職も

いいとこないし、やりたい事もないし、結婚でもしようかなあ・・・」は、十分選択肢として成立している。

だからフリーターやネットカフェ難民などとして登場するのは圧倒的に男子なのだ。「いい仕事もないし、内定も取り消されたから、結婚でもしようかなあ」と言えるのなら、助かる男子はいるに違いない。

*

こう書いたのが約十年前のこと。そして今、日本社会は男子、女子の差別問題から、富裕層と貧困層というテーマに移ってきている。みんな豊かになろうと励んだ高度経済成長の時期を経て、たどり着いたのがここである。

現実が見せる偏りは、ますます個々人の姿にいびつな影を落としている。貧富があらゆる社会的テーマに介在してきて、正論ははけない。

身もふたもない本音と称されただらしなさだけが、SNSを中心にまき散らされる。こんなはずではなかったと思っている人も多いだろう。

それでも大昔より豊かになったのは事実だ。今、思うのは慣れ親しんできた貧困対策だけではなく、ひずみのある豊かさへの適応行動の教育も行なわれなければならなかったという事だ。

経済だけが我々を充たしてくれると信じる世界の住人になってしまったのは、富裕層だけではなく、貧困層の人々もより一層だと言っても良いのかもしれない。

*

この小説の二人、当人達にはこの人しか居ないと思わせる出会いであった。しかしそんな出会いが実ることはなく、時間はそれぞれを、新たな運命に巻き込んでゆく。

後から考えたら、あの時が分かれ目だったなと思うことが人にはある。何度でもやり直しがきく事もあるが、たった一度しかチャンスは

なかったのだなと気づかされる事もある。

何度もチャンスを逸しておいて、こんな事になるとは思わなかったと後悔して、一騒ぎ起こすような人もいる。

2008年、NHK紅白歌合戦に五十三歳で初出場の女性歌手が話題になった。理由はその歌である。「夫婦愛」をテーマにしたものだといひ、中高年女性の圧倒的な支持だといふ。

不況になると離婚が減る話は先に述べた。日本では今、不況のさなか、団塊世代がリタイアを迎えて、どんどん在宅高齢者カップルが増えている。

この人達のメンタルヘルスを家族単位でしっかり確保させておかないと、社会が莫大な医療費や介護費用を背負うことになるのは、素人目にも明らかだ。

そんなわけで中高年は、「メタボリック」に続いて「夫婦愛」がブームの兆らしいが、これは社会行動学的に見ても理にかなった話だと思う。

「熟年離婚」はあっという間に消えて、次は「夫婦愛」。いずれにせよ、軽はずみな話にカップルが次々と巻き込まれているあたりが、いかにもだと思ふ。

少しの賢明さがあつたら、うかうかと時流に乗らないことが肝要なのは分かると思ふ。

相談実感

最近の相談の実感だが、感情的軋轢ゆえの厳しい決断を突きつける妻が増えている気がする。事態はそれぞれに個別の事情があるのだが、出した結論が厳しい。長年の夫婦関係の結末が、そんなことになるだろうかと思わせるものだ。

あるケースでは妻が夫に、家を出て、一人暮らしの母親の世話をすることを求めている。義母には少しぼけ症状が始まっていた。

そしてその居住形態を聞いて驚いた。母屋と離れ家の地続き隣家なのである。

夫は夕飯も入浴も家族と一緒にである。しかし就寝するときは、隣の祖母宅に行く。完全に夫婦である時間だけの拒否である。そして、祖母の介護にも一切手は出さない。

聞いているだけで、妻のかたくなさや拒絶がピンピン伝わってくる。どちらの分担かとか、誰の責任かを問うのではなく共に背負う。いろいろあつて、争いにもなつて、それでも雨降って地固まる結果を手にする。

これを可能にするために必要なのが夫婦サブシステムである。

社会的養護の新展開 5

— 社会的関心と社会的養護 —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

退所者による事件

私が所属する京都造形芸術大学芸術学部こども芸術学科では、保育士の養成を行っている。保育士資格養成課程では、保育実習として、保育所以外の児童福祉施設等での実習が必要であり、とりわけ入所型の児童養護施設等へ実習に行くこともある。

2019年2月25日、この日、私は、施設での実習に行っている学生を訪問指導するため車を走らせている最中、東京の児童養護施設で施設長が包丁で刺されたというニュースを聞いた。訪問を終え、夜になり、あらためて、そのニュースを確認すると、犯行を行ったとされる者は、現在22歳の元入所児童であること。そして、殺害された施設長とは、東京の児童養護施設、若草寮の大森信也さんのことであった。これには、大きなショックを受けた。大森さんは社会的養護分野では、名の知れた実践家である。私は、深いお付き合いはないが、何度かご挨拶をしたことがある。退所児童のサポートに尽力していた施設長が、そのサポートの対象である退所児童に殺害されるという、なんとも悲しい事件。正しい情報がない以上、今、まだ、この事件の背景は何もわからない。しかし、いま、この時代、

18歳で児童養護施設から出て、社会で生活していくことが、どれだけ大変なことか。まして、家庭、親という後ろ盾が十分でない若者が社会でひとり生活していくことに、どれだけの困難があるか。彼が背負った孤独感、孤立感はいかばかりだったろう。大森さんは、誰よりも自分事として、そのことを知っていたのだと思う。

アフターケアの必要性

私は、大学教員の傍ら、京都で社会的養護を終えた若者のサロン活動や相談援助をおこなっている。その事件の夜、私がかかわる若者から、「みんなは大丈夫なのかな？」とLINEがあった。「みんな」とはサロンに来ている「みんな」だが、さらに広い意味で、「みんな」は、大丈夫なのだろうか。連絡をくれた若者のように私もまた思う。この事件について、社会的養護を終えた当事者の若者たちは、どう感じたのだろうか。施設の職員はどう感じたのだろうか。そして、何よりも、その施設に住み、今日も生活する子どもたちは、いまどうしているのだろうか。そんなふうに「みんな」のいまが気になる。

先日、東京で全国社会福祉協議会主催の「社会的養護自立支援事業」に関する研修会が開催されたばかりであるが、近年、各自治体で、アフターケア事業を展開する団体が増えている。「社会的養護の新展開 3」でも述べたが、民間のアフターケア事業所の横の連携も作られ始めた。一方で、措置解除後も 22 歳の年度末まで支援が受けられる「社会的養護自立支援事業」の適正実施があらためて求められる。自治体間格差、施設間格差がとても大きい。

今回の事件では 22 歳の若者による犯行とされている。今後、社会的養護において、この「22 歳」もひとつのキーワード、分岐点にもなろう。一般家庭の多くの親子は、絶縁状態でない限り、永続的に関係性が続き、親は子の世話だけではなく孫の世話までする。しかし、里親や施設など社会的養護のもとでは「制度」の制約を受ける。

さて、大森信也さんは、高橋亜美さん、早川悟司さんとの共著『施設で育った子どもの支援』明石書店（2015）のなかでこう書いている。

「社会全体が子どもの権利を守ることに真剣になり、必要な支援を当たり前提供する。他人事ではなく、自分のこととして考えられるようにする。よく考えてみれば、それは自分たちのためにも必要なことだとわかるはずです。」「近年、子どもたちが施設を退所した後の様々な課題が明らかにされつつあります。しかし、それらすら氷山の一角なのではないかと思えます。なぜなら、本当に困っている人の声は、なかなか世間には届き難いのが世の常だからです。特に 18 歳（措置延長で最長 20 歳まで）以降、社会的養護の枠から外れ、自立していかなければならない現実。それは、

私たちが想像する以上に困難なものであると、改めて認識しなおす必要があるでしょう。」



社会的関心

東京の目黒や千葉の野田市での虐待死事件以降、これまで以上に児童虐待に対する社会的関心は高まっており、連日のように新聞やニュースで報道されている。社会的関心の中心は、専ら、ひどい親から子どもを救い保護することにある。その子どもたちがどこへ行くのか、その先どうなるのか、あまり関心は向かない。

虐待問題の延長線上に、自立支援上の課題もある。この事件は、里親や施設など社会的養護を終えた後も、子ども、若者たちには非常に困難な状況があるということを、世に伝えているかのようでもある。自分事として。

facebook : Minuet Kyotoaftercare
mail:kyoto.aftercare@gmail.com
tel:075-811-0600

不登校経験を持つ若者達の

もう一つのキャリアパス

第3章 キャリアの接合点

—南丹ラウンドテーブル—

北村 真也



2. ストレーターではない若者たち

「ストレーター」、それは大学まで一度も躓くこともなく進学していき、2回生の後期から就活のためのボランティア経験を重ね、3回生の夏にはインターンシップへ参加、そして冬から就活を本格的に開始するといったようなライフスタイルの、日本のマジョリティである人々を指すコトバです。前回のラウンドテーブルでは、まさにそんなストレーターである学生さんたちに集まっていただき、就活の実態を赤裸々に語ってもらいました。そして今回は、一転してストレーターではない若者たち。すなわち歳若くして様々な挫折体験を味わってこられた方々4人に集まってもらいました。具体的には、かつての知誠館の卒業生が2名、現役生が1名、そして知誠館とは直接関係を持たない方が1名です。

ストレーターではないみなさんは、果たしてどういったキャリア観を持ち、キャリア形成を経験されてきたのか。そんな話が聞けることを楽しみにしながら、ラウンド

テーブルはスタートしていきます。

塾長「知誠館の北村です。今日は、私の現役の生徒たちもいます。私のこういう姿をあんまり見たことがないので私自身もドキドキしてるんですが、宜しくお願いします。まず、ラウンドテーブルっていうのは何なのかを簡単に説明します。元々は、不登校とかひきこもりの支援に関して教育委員会や行政の方が入って、どういう風にしていったらいいかっていう会議を随分やってきました。ところが、一向に突っ込んだ話し合いができないんです。皆さんそれぞれに立場があるので、立場があるとなかなか話が進まないんです。基本的には、前例がないことはやりにくいっていうのがある。そのうち誰がこの会議に出るんやとか、そんな話も出てきたので、埒(らち)が明かないなっていう思いがあって途中で辞めました。それで、私は川畑先生と随分長いお付き合いをさせてもらって、二人という個人と個人で話していると結構いい話が出てくるので、そしたらそういう人たち…、個人として集まれて本音でしゃべれる人たち

が集まれる場っていうのをどうしても作りたいなっていうので、このラウンドテーブルを作りました。ここでは参加に際しての条件が2つあって、個人として参加してくださいということ。それから、もう一つは、当たり前とされることを問うてみたい、問い直しの場っていうのをものすごくしたいなって思いがありました。そして、この二つを柱にしてやってみたいなということで、川畑先生に協力してもらいながら、もうこれで3年目に入ります。大体年4回やってますから、過去10回くらいはやってきました。そして、ここではいろんなテーマについてずっとやってきたんですけど、その中で実は、さっき自己紹介していただいたHさんとの出会ってというのが、ものすごく大きくてですね。実はHさんがキャリアっていうことについてやりたいっていう思いを示していただきました。それで、ほのぼの屋さんっていう、精神障害のある方が働いている、すごくおいしい料理を出してくれるフレンチレストランがあるんですけど、そこに二人で行って、そこを作り上げられた西澤心さんっていう方とお会いする機会があったんです。いろいろインタビューをとることがあって、いろんなことを考えさせられました。今振り返って思うと、そこでは障害を持った方々のキャリアの実現っていうのがテーマとしてある。今まででは、なかなかお金もらえず、お給料っていうのも1ヶ月1万円とかだったんですけど、そこで働くようになって1ヶ月10万円とか、自分で部屋を借りて生活できるだけの給料をもらえるような、そういうことができるようになってたりするんです。その当事者の方のキャリアがありながら、もう一方で大事なのが、西澤さんっていう方のキャリアもこ

こで作られていってるんです。だからその方は、そういう取り組みをしながら自分自身のキャリアを作ってきたわけです。これはすごい、私にとっては面白かったんです。で、それからキャリアについていろいろ考える機会があって…与えられるキャリアって一体何やろう?とか。キャリアをデザインするって何やろうとか。いろんな問いが私の中でも出てきました。で、キャリア、キャリアって、世の中でもものすごくよく使われる。大体、そのキャリア支援は就職支援を指しているコトバなんですね。でも、果たしてそうなんだろうか?っていうことをものすごく思うんですね。実は前回のラウンドテーブルは、就活の渦中にある大学生を3人ここへ来てもらい、就活で一体どんなことが起こってるのかをしゃべってもらう機会を持ちました。有名な大学を皆さん出られてて、中学、高校と優秀にやってきて大学に入って、皆がやるように就活をして、就活も今結構ほんまに大変やっていうのもよくわかりました。その中で、最初は自分はこんなことをやりたいって思っていた夢がどんどん削がれていくっていう挫折があったわけです。しんどいこの辺でいいやって思って就職する子もいっぱいいるっていうのもわかりました。ある意味で彼らはストレーターって呼ばれる子たちです。つまりことなく真っ直ぐやってきている。マジョリティです。多数派なんです。その多数派の就職へ繋がる部分っていうのが、あんまり理想的な、夢のような世界では多分ないなど。けっこう厳しい世界なんやっていうのを私たちは改めて知るわけですね。一方で、例えば引きこもったり、一旦つまりいたりした人のキャリアをどう作っていくかっていうのは、なかなか普通の人みたいにな

いかない。少しそういうところをサポートしていかないといけないんじゃないか？っていう、そういうキャリアに対する考え方もある。それで今回は、ある意味いろんなところでつまずいたりした人たちに、つまずきながらそこで何か考えたりとか、思い返したりしながら、もう1回動き出そうとした人たちの話をぜひ聞いてみたいと思いました。それで、何人かピックアップさせてもらってお話を伺おうと。一応、ピックアップした人は、Aさん、B君と、Cさんと、D君と。ほとんど同じ世代。で、私がお願いしたのは、それぞれの人にそれぞれのテーマというか、キーワードがあって。Aさんの場合は、「地に足を着ける」という、あのコトバがものすごく残ってるんです。B君にもはっきりあって、「得体のしれない不安の解明」っていうのが、キーワードとしてずっとある気がする。Cさんは、このごろよく言うのが、「異文化との出会い」とか。そんなことをよく言う。それから、D君、彼は「自分のキャリアを作りたいということ。」キャリアを作りたいと思って、いくつも仕事を変えていくんですよね。彼にはこだわりがあって、いろいろ仕事を変えてきたような印象がある。それもすごく私にとっては印象深い。そのあたりを何か話を聞けたらと思うんですけど…」

この場に集まった、ストレーターではない若者たち。それは私たちの教え子であったり、このラウンドテーブルの参加者であったりするのですが、彼らのキャリアを私は以前から知っていました。そしてそのキャリアには、それぞれ私によって次のようなタイトルが付けられていくのです。

「地に足を着ける」

「得体のしれない不安の解明」

「異文化と出会う」

「自分のキャリアを作る」

これらのタイトルのついたキャリア、それはある文脈性を備えたキャリアであり、キャリアそのものが物語を描いています。その物語こそが彼らの生きている意味を表現しているのかもしれませんが。

では、Aさんから順に語ってもらうことにします。

Aさん「改めましてご紹介にあずかりました、Aです。昨日、9月27日で27歳になったんですけど、私の最終の学歴は高校の通信教育を19歳で卒業した…通常より1年長くかけて卒業したというのが最終学歴です。障がい者支援施設が運営している美術館の企画やプロジェクト、ワークショップをしたり、施設の中でも障害のある人や引きこもりの人達と一緒に畑仕事をしたりとか絵画のプログラムを作ったりとか、っていうことを今しています。私は元々は、物心ついた時から宝塚に入りたくて。宝塚の男役のトップスターになるというのをずっと夢見て生きてきたんです。子どもがあまりふわふわと夢見るっていうタイプではなくて、本気でなる、としか思ってなかったですし、テレビで流れてくる宝塚の映像を見ている、憧れの世界というより、私は必ずその世界に行くんだ、っていうかなり強い意識と…なぜか自信があったっていうような。そればかりを考えて生きてきました。で、そのためにバレエや声楽、ピアノのお稽古をしたりとかっていうことをしてたんです

けれども、ただ、逆にそういうことを考えていたからなのか、小学校から割と悩みが多くって。同じ学年の子たちと馴染まないな、っていうのを感じていて。でもとても仲は良かったですし、小学校は100人程度の小さな学校だったので、クラスも1クラスですと上がっていく感じで仲は良かったんですけど、自分と考えることとはどうも違うらしいっていう感じはずっとして。かまってくれたい、とかっていう気持ちはあったんですけど、自分が今考えていることを本当に共有できる同い年のお友達はいないな、っていう気はすごくしていました。で、家に帰って母と話したりとかっていうことの方が多くて。あとは宝塚のことばかり考えていたので、それはあまり苦痛ではなかったんですけど。でも、中学、高校と思春期になっていく時期に、そういうことがどんどん大きくなって。意識はしていなかったんですけども、大きな心が折れてしまう瞬間っていうのがあって。それは15歳の時だったんですけど、これまで行けていた学校にも行けなくなってしまった。体力も非常に落ちてしまった。もちろん宝塚を目指していたんですけども、それに組みあわせるような体力も気力もなくなってしまったっていうのが15、16、17くらいにあったんですね。で、宝塚っていうのは18歳での年齢制限がありますので、諦めなければいけないということが自分の中で来るんですけども、これで諦められたっていう気持ちもあったとは思いますが、これまで持っていた夢のようなものがなくなった瞬間に、次どうやって生きていけばいいのか分からない。それに似合ったものが見つからないといけないと

思っていたし、見つからない現実に対してとても不安で。どんどん不安も募っていくし、自信があつという間になくなっていくし、自己肯定感なんていうものが1ミリもなくなっちゃって、っていうような時期が10代、20代前半とかなり続いていました。そんな時に、施設で利用者の人達と過したりとか、施設はすごく自然環境に恵まれているので、そこで花を一つでも植えて見たりとか、いい空気の中に身を置いてみるっていうことからやってみたらいいんじゃないか、って提案してもらったのが19、20歳くらいの時だったと思うんですけど。で、施設の中で障害のある大人の人達と、あと一緒に畑仕事をするドイツ人の女性と出会うんですけど、彼女との真冬から始める畑仕事とが、私の中で大きな一つの転機になりました。その地に足が着いていないっていうエピソードを前に話させてもらったのが、畑仕事につながっていくんですけど。それまで、Bさんが感じていらしたような「得体のしれない不安感」っていうのもすごくあって。あと、全ての感覚がどんどん失せていくので、すごくつらいんですけども、なんか、感覚が非常に鈍麻になってきている感じもあったし、感動したりとか心が動くっていうようなことがなくって。何を見ても何に触れても笑いたくなかったし、っていうようなこともありました。明らかに自分が、社会の中に参加していない感じがすごくあった。本当にリアリティのないことを、すごくリアルに感じていた。しかもそれは、不安とか怖さを伴っていて。そういう社会に出て行くっていうことが、自分には到底無理だっていう風に思っていました。ですけど、思いがけず

畑仕事っていう…自分は全くしたことのない人間ですけど、真冬の亀岡で。そのドイツ人の女性はずっと農業をドイツでしてきた人だったので、彼女と、目の前に積んである落ち葉を丁寧に積み直して腐葉土を作るっていうことを始めて。それは本当に寒いところで、着込んで、白い息を吐きながら土を作っていくっていう、生まれて初めての経験をして。それが非常に気持ちよかったですね。人目も気にしないでいいし、自分はすごく身体が動かせて。で、気づいたら土が出来上がっていく。で、その土を使って春先に小さなハーブの種をまいていくっていうことをして。その芽が少しずつ大きくなって行って、また土に植えて行ってっていうことを毎日毎日空の下で…、寒いって感じてみたりとか、昨日より少し暖かいかもしれないとかって思いながら作業をしていくことが、自分が想像していた以上に、すごく感覚を研ぎ澄ましていくってくれて。「ああこの感じ、病気になる前に感じた感じだなあ」とか。何ともいえない抽象的な感覚になってしまうんですが、「この感じ、そういえば昔知ってたな」とか、「今私、この人とのやりとりで感じがちょっとリアルになった」とか…本当に日に日に体験としてあって。ある時、その施設から畑に行く農道を、テクテクと長靴を履いてその人と歩いていたことがあって。その瞬間に、「本当に今、地に足が着いた感じがする」って、すごく思う時があったんですよ。で、亀岡って冬場霧が多いじゃないですか。あの霧のかかった感じと、自分が足が着かず歩いている感じっていうのが、苦しかった自分の10代後半の時期をすごくイメージとして持っていて。それが「今、私は確か

に歩いている」、しかもそれは歩いているという身体的な行為と、自分の心の感じが一致している、っていうのを農道を歩きながら思っただけで、一人ですごく感動して、少し病気がよくなったかもしれない、って思えたのがその時だったんですね。それが21、22歳だったと思いますけれど、結局そのドイツ人の女性とお仕事をした丸々2年間の中で、敷地内にある畑を2人だけでずっとお仕事をしたんですね。で、もちろんコトバも通じないので。それが一つ大きなポイントだったのかもしれないんですけど。コトバが通じないから、日本語でとても不安になっていたコミュニケーションっていうのが、そもそも言語のコミュニケーションが成立していないので、とりあえず片言の英語で通じた時に大満足だし、ちょっとした単語の違いなんて関係のないディス・コミュニケーションにつながらなくて。出来た、とか関わられた、っていうことが一つずつ蓄積されていったっていうのもすごくよかったと思うし。で、少しずつ英語が話していけるようになったっていうのも、気づいたら自信になっていったっていう、後からのお土産みたいな感じですけど。そんなことがすごくあった。なので、私は畑仕事っていうものに思いがけないくらい助けてもらったし、自分の不安定なイメージっていうのが、身体と手と足を動かすことによって、その成果が出来上がってきた作物とか植物っていう存在によって確かめられるっていうことをその時期出来たっていうのはすごく大きかったのだろうなと。で、同じ時期に、施設ではアートプロジェクトっていうのがあって。アートを使って地域の人とか障害のある人とかと一緒に、新し

い関係を生み出していくっていうボランティアを始めたんです。今度はそのアートっていうのが、これまでの自分が持っていた価値観とか、主流のイメージとかっていうのにどんどん新しい視点を入れ込んできてくれて。私もこんなに自由に考えていいんだとか、若いアーティストとかは、子どもの頃のわくわくした感じを大人になっても同じように感じてコトバにしたり作品にしたりしているんだとか。そういったところが、私も同じように考えていいんだっていう助けにすごくなっていったということもあります。そういったところで不安だったことが、解消というより…、別の方法で出会いとしてもたらされて。それが畑だったりとか、アートプロジェクトでの作家との出会いとかっていうことにつながっていったんですけれど。そうやって少しずつ、一人また一人って出会っていく人が増えた。またその人とのやりとりっていうのが増えていくことによって、社会に自分が出て行っている感じっていうのも確かに経験ができて。で…、まあ少し端折りますけれど、気づいたら、美術館のスタッフをしているというようなところなんですけれども。一番大きな転機としてはそういうことが一つありました」

塾長「なるほど。ありがとうございます。すごいリアルに話してもらい…。」

川畑「土を作る…」

Aさん「花を育てたりっていうよりは、私は土作りが本当によかったなど。一番寒い時に土を作れたっていうのが一番よくって。今でも土を作っているのが一番好きです」

塾長「何て言うかな…、こう、毎日毎日、来る日も来る日も何かをし続ける。私は片一方でへ

レンケラーを思い出していて。リアルな感覚みたいなのが蘇っていく。そのためには、ずっと継続的にやり続けるものがある気がする。それともう一つは…こういうことがあるまで、Aちゃん自身はこれまでいろんな人と出会って、もちろん生きてたわけやけど、でも何か、それはもう一つリアリティがなかったのかもしれない。その感覚が蘇って来るといいたいことだったのかもしれない。」

久しぶりであったAさんの語りに、私は聞き入っていました。私の記憶の中では、このラウンドテーブルでAさんが初めて自己紹介をした時、「地に足がついてなかった」という表現をしたように思います。ですがその時の彼女は、まだほとんどコトバを持たない状態だったようにも思います。辛かった過去に触れるたびに感情がこみ上げ涙が流れていました。

そんな状態から彼女は自分のコトバを手に入れ、こうやって一つ一つ、確かめるように語り出していったのです。それは土づくりに表現されていたように、決して派手な過程ではありませんでした。毎日毎日、ただ黙々と続けられる作業を通して、彼女は自分と向き合い、自分のコトバを温めてきたのかもしれない。だからこそ、そこには彼女の物語が表現されているようにも思えるのです。

塾長「Aさんの話の中にB君の話もちよっとあったけど、「得体のしれぬ不安」みたいなものと、「地に足が着かへん感覚」それはちよっと近いかな…？」

Bさん「そうですね…確かに、近い感覚を持った

ことはあるんですけど。地に足が着かないというよりは、僕の場合は、周りとの距離感がいまいちよくわからないというか。僕が元々ここに来る前に、中学校時代に不登校になりました。原因が、いじめだったり中学校に馴染めなかったりとか。そういうものが原因というか。ただ、原因というのも自分の中ではまだはっきり分かっていないんですけど、そういうのがあって、ここに来て。いろいろ勉強したり、マツモトに買い物に行ったりしながら、ちょっとずつ周り慣れるような感じにはなった気はしたんです。だけど、未だに人との距離感というか、自分がどういう風に接したらいいのかとかがつかめていないところがまだ若干残ってる感じがしますね。ただそれはその後、高校でも友達と出会うんですけど、そういったところで個人個人とちゃんと付き合えたり、話してて楽しかったりとか。そういうところでちょっとずつ自分の実感として回復していった感覚はありましたね」

塾長「B君のことで思い出すのは、彼はものすごく本を読むのが好きで。本読んでたよな、割合と？」

Bさん「うーん、むしろここに来るようになってから読み出した」

塾長「GTという教材があって、小学校の。それを10級から1級まで全部終わらせたんですよ。結構難しい教材なんやけど。算数とか数学はいまいちだったかもしれないけど、国語はすごく長けていて。来る日も来る日もその教材をやり続けた。すると、何がかわるかって、彼は、最初動きもぎこちなかったんです。ロボットのように動いてたから。発する言葉も3パターンくらいしかなくて。何聞いても「まあまあ」とか「大体」とか。そんな風に

しか言わなかった。それがあつた時、お母さんが面談で、「手が動くようになりました」っておっしゃったんですね。それは、彼はほとんど引きこもってる状態で、カチカチに固まるので、手は一切動かない状態。それが、手と足が同時に出たりしてぎこちなかったのが、ようやく手が自然と動くようになりましたということ。それを私はエピソードとしてすごく覚えてて。小さい子どもの頃は、多分そういう風に動いてたと思う。でもそれがどこかの段階で、「地に足を着け始める」、そういう作業があつたのかもしれない。そんなことを少し思ったりもした。結構コツコツとやってたイメージがあるんやけど、どう？」

Bさん「そうですね…何がそう、っていうよりは、いろんな積み重ねがあつて緊張がほぐれたっていう方があると思うんですけど。亀岡には鍬山神社っていうところがあるんですけど。あの辺から通ってたんですけど、結構距離があるんですね。20分から30分くらいかかるんですけど、それをお昼間に自転車で動くことによって…、周りの目とかは気にしながらは来てたんですけど…、それがほぼ毎日続くことによって、別に外に出ても大丈夫なんだっていうのが、徐々にわかってきたっていうのもあつたんじゃないかと思います」

B君の場合も、積み重ねた自分の行動や経験が緊張を解いたと言います。人前に出ると過度の緊張に苦しんでいたB君。彼の表現を借りると、「得体のしれない不安」そして「相手との距離感」というキーワードが飛び出します。その2点が、よくわからないのだと言うのです。そんな中、お母さんに連れられて、知誠館へとやってきたB

君。実はB君こそが、私たちが初めて出会った不登校の生徒であり、初めて出会ったひきこもりの生徒だったのです。だから彼と出会うことがなければ、私がこうやってこの原稿を打つこともなかったのかもしれない。

そんなB君でしたが、知誠館に通い始めて1年半、彼はまるで別人のようになっていきました。高校では生徒会活動に参加、そして文化祭ではバレリーナに扮し、白鳥の湖を踊るわけですから…。そしてB君は今、大学院で不登校研究に取り組んでいるのです。「得体のしれない不安」にどう向き合うべきなのかを、論文にまとめていきたいのだそうです。

塾長「Cさんのことを少しだけしゃべると、Cさんは別に不登校…になったことはなかった？でも、学校には行ってなかったよね？」

Cさん「行かなかった時もありました」

塾長「引きこもってはいないよね？」

Cさん「遊んでました」

塾長「遊びに出た。何年生くらいにサボり始めるようになったんだったっけな？」

Cさん「中学2年生くらいですかね」

塾長「2年生くらいから、学校をサボるようになった。学校をサボって何をしてるかというと、サティ（大手スーパー）に行ったり。髪の毛は茶色。そういう感じで学校に行かなかった。でもまあ中学3年になって、ぼちぼち高校に行かないとなっていく風に思っ、ちょこちょこっと勉強して入れる高校に入ったものの、すぐ辞めるんやね。どれくらいで辞めた？」

Cさん「3ヶ月弱です」

塾長「3ヶ月で辞める。辞めた時は16歳かな？そこから、大体20歳くらいまで…」

Cさん「もうちょっとです」

塾長「21歳くらいまでだったら。そんな生活を送る。そこで、彼女は変わるわけ。助産師になりたいと思う。それが22歳。それで、看護助手という仕事なら資格がなくても出来るから、そこで働きたいと思う。ところが、中卒なんですよ。高校すぐ辞めてるんで。そうするとどこの病院も雇ってくれないということで、今、園部にある知的障害者施設で、介護の仕事をしている。それで、看護師になりたいと思って自分で勉強するもののテストは全然分からへん。っていうことで知誠館に訪ねてきたのがこの春です。それから、もう…びっくりするくらい勉強するんです。びっくりする。手本のような生徒。それと、ものすごく他の生徒達の面倒をよく見てくれる。彼女、ものすごく健気に勉強するんです。で、それをやっていくうちに、何か自分の中でも様々な変化が見られたりとか。こういう環境って、初めてでしょう、きっと。多分勉強して学校の時も機会としてはあったと思うんだけど、全然取り組み方とかが違う気がするんやけど」

Cさん「私が学校に行くのは、休憩時間とか放課後でした。そんな感じ。授業中は怒られるんで、保健室とかにいました」

塾長「すごく聞きたかったことで、昨日も聞いてたんだけど、そんな風に生きてたのが21歳くらいまで。何で変わるんやろうね？21歳って。何なんやろうね。自分の中で意識が変わり始めるのは。何があなたをそういう風に変えさせたんかな？」

Cさん「いつまでもふらふらしてたらだめやなって思ったのが最初ですね…」

塾長「そう思わせるきっかけみたいなものはあったの？」

Cさん「きっかけは…多分なかったんじゃないかな。これっていうきっかけは、私にはわからないです」

塾長「ふうん。じゃあもう一個。助産師っていうのは、どうして助産師になりたいと思った？」

Cさん「何で助産師になりたいか…」

塾長「Cちゃんにとって助産師って何なの？」

Cさん「えー…命を扱う仕事ですかね…」

塾長「看護師じゃなくて助産師になりたいんや」

Cさん「…ですね」

塾長「中学校時代、全くと言っていいほど勉強してないので、ベースは多分小学校くらいの知識。でも彼女は諦めないんですよ、絶対。何なんやろうって思うくらい。現代文の問題をやっても一問も合わない。でも彼女は諦めない。私は本当感動するわけ。この子はほんまに諦めへん。何か自分の人生を歩きたい、って思ってるし。「レジリエンス」というコトバがあります。辛い状況からの回復力といいますか、その強さのことです。自分のキャリア、自分の人生を作っていく強さなんですよ。皆と同じ人生を歩くっていうわけじゃなくて、私は私の人生を歩きたいから、っていう。そこの強さがある。そういうのをどこかで感じて。B君のひたむきさもどこかでそういうのにつながるかもわからへんし。Aちゃんのそういうところにつながるのかなあとか。そういうところに感動しますね」

Cさんには不登校経験があったわけではありません。彼女は、中学時代から学校をさぼる癖があったらしく、とりあえず高校へ入学したものの3ヶ月で退学、その後フ

ラフラと21歳まで過ごしていたと言います。ところがどういうわけか、ふと気がつくのです。このままではダメだと。そこから彼女は変わり始めます。

知誠館に入学し、高認合格を目標に勉強して、それから助産師になるために看護の専門学校の受験を目指し出します。そしてやがて私たちは、彼女の一生懸命に取り組む姿に魅かれ始めます。その強さやひたむきさ。そこに、決して諦めようとしなない彼女の人生への態度を見るのです。しかしきっとそんな彼女の強さは、まるで意味をなさなかったかのように思える21歳までの生活が支えているようにも思うのです。問題のある状況が新たな機会を生み出していく、まさに機会開発へと向かう変容過程を彼女は生きているのかもしれない。

塾長「D君も強いよな？」

Dさん「いやー、自分では全く今もそんな風に思わないですね。未だにそんなに強いなんて思ったことないし。小学校の時から僕は勉強嫌いで、ずっと勉強してなかったです。体育と音楽だけ4とか。高校までそのままつらつらと来てしまって、このままでは卒業出来ないってなった時に、知誠館に来させてもらって…ものすごく不純な動機で来たなど。そこからもう、小学校の学習からやり直して、ドリルみたいなので勉強して。今でも勉強はできる方ではないけども、ここに来た時に思ったのが、塾長がもっと若くて、深瀬と…、バーベキューとかしたはってね。この人はなんか、周りの今までの大人と違う生き方をしてはるなど。楽しそうに生きてはるなど。好きなことをやって、なおかつ家族を養う分の収入

は保ってはって。こういう生き方があるんや、こんな風に生きてもいいんやって。周りの環境に生き方が決められてるような感じやったんで。こんな、1を取ってて卒業も出来ないようなやつは、ある程度体力があつたら誰でも出来るような仕事をしないとイケないんだらうなと思ってたんだけど、そこを変えてもらって。そこから、楽しく生きないとなあと。今までは面白くなかつたんです。決められてて。選べるって言うけど、周りの環境見てたら選べないやん、って思ってて。そこでパンと変わったことは今でも忘れませんし…。そこからいろいろありましたけど、まあ子供ができたんでそこから大学は行かずに働くわけですけど。理想は決まってるわけですよ。塾長みたいな感じで、好きなことをやってお飯食べたいなど。でも自分のやりたいこともわからへんわけです。現実働いたら職場にこういう人はいないわけで。周りの優しい人、今までいらつしゃった先生たちも（職場には）いないわけで。ずっと延々と同じ作業をやって。「これ何の部品ですか？」って主任に聞いたら「わからへん」って答えられる感じやったから、これはあかんと思って。つまらないというか、それを調べるほど興味もない。じゃあこれは好きじゃないんかな、と。そういう感じで…いくつも仕事を変えた理由はそこかな。最低限ご飯を食べられる分だけは、っていうのが僕にとっての現実味。地に足を着けるポイントは、嫁と子どもを食わす、っていうところは最低限しないとイケないし。でも、楽しく生きたいんです。理想と現実の、その溝がこんなに大きいから。勉強も足りてないし、好きなことすらも分からへんし、何に懸けたらいいかも分からへんし。それが埋まるまでがずっとし

んどかつたですね。嫁との喧嘩も大量にありましたし。上の子がダウン症っていう形で生まれてきたので、それも多分結構大きくて。言い方はあれやけど、普通の健常者に比べたら出来ひんことがすごく多いし。ダウン症だからこそ出来るっていうことももちろんあるけど、それを見つけるまでも大変やし。自分も好きなことを見つけられてないのに、子どもにそんなこと見つけられるのか、果たしてっていう感じでちょくちょく塾長のところに来ていろいろ聞きながら少しずつ埋めていったのかな。自分なりにですけど。今は理想と現実の差がこれくらいに狭くなって来てますね。そのバランスを取るのが楽しかったりするんで。人生楽しいって言ったら大袈裟ですけど、上手に回せるようになり出したのは知誠館がきっかけですかね。そんな感じなんですよ。」

塾長「Dさんはだから…高校卒業して、大学行きたいって言ってて。海洋大学行ってイルカの研究とかをやりたいとか言ってたんやけど、付き合ってる彼女がいて、その間に子どもが出来るっていう。それで彼は泣いて。やっぱり要するに自分は行きたかつたんだけど、その夢を諦めないといけないと。私に泣いて言った記憶があった。だからあれが…年齢で言ったら19かな？」

Dさん「そうですね」

塾長「それでその子は、ダウン症だったんや。まあ…神様はそうやって彼に一つの試練を与えるんかって片一方で思ったりもしたんやけど。職も、彼の中では転々としていくわけやけど、ただ転々としてるわけじゃないわけよ。いろいろ模索しながらで。今彼が何してるのかというと、保険の…あれは自営みたいな形？」

Dさん「そうですね、一応ファイナンシャルプランナーっていうのをしています…」

塾長「そういう仕事を彼はしています、二人の子どもがいて。こうやって生きてるわけやね。たいたもんやなって思いながら。家族がいながらそうやって彼は生きようとしてるわけやから。そういう世界なんですよ。何でこういう話を話してもらいたかったかっていうと、皆豊かなんですよ。私からすると豊かな世界なんですよ。だから、普通のマジョリティの学生たちの就活ってあんまり豊かなイメージがなくて。それは通過をしていれないといけないのかもわからへんけど。こっちは話はすごいドラマになってて。それぞれあれやこれやといろんなことがあるような気がするんやけど…」

D君の話では、私がそれまで知っている大人たちとは違い、実に楽しそうに生きているという感想を持ち、「自分もそんな風に生きたい」と思ってくれたようです。どういふわけか、私自身に憧れてくれるようになったのです。憧れはとても強い動機になります。憧れの存在とは、生きたモデルのような存在です。従って、日々観察の対象となり得るのです。それまでどこか諦めかけていた自分の人生に、彼はどこか希望を見出し始めます。

それからは勉強も大変頑張っってやり始め、大学進学を目指すようになっていくのですが、そんな志も挫折せざるを得なくなります。当時お付き合いをしていた彼女が妊娠、そして結婚、出産と、めまぐるしい流れの中でD君は若いお父さんになっていきます。そうせざるを得なかったのです。そして彼

は、家族を養うためとにかく働くのですが、彼の頭の中には依然、楽しみながら働きたいという思いが存在していました。結局D君は、職を転々としながらもそんな人生を追い求めることになるのです。そしてとうとう、ファイナンシャル・プランナーという、自分で納得のいくキャリアを手に入れたのです。

塾長「ありがとう。ざっとこれで4人の話を聞かせてもらって、1時間まわってしまいました。最初に言ったけれども、このラウンドテーブルっていうのは「問い直し」っていうのが大きなテーマとしてあるので。私はキャリアっていうことをものすごく問い直したいっていう思いがあつて。ストレーターじゃない人達って、ある意味つまづいた人。でもそのつまづきっていうことこそが、大事なキャリアだよなと思ったりする。つまづかないとわからないというようなことがね。でも従来のキャリア支援っていうのは、つまづかないような道をどういう風に提示しますかとか、どういう風に支援しますかとか。そういうような方向性を持っているように思う。でも実は、つまづく事はすごく大事だつて…。でも片一方で、ここに来る生徒たちは本当に、最初は自分の物語を描けない状態でやってくる子がほとんどです。地に足が着かなくて、どうしようもない状態で来る子ども達、若者達っていうのがほとんどです。要するに、つまづきの中で壊れていくとか、閉塞状態になっていくとか…。でもやっぱりつまづきことっていうのはものすごく大事な過程なんやと思う。でも片一方でそうやってつぶれていく人たちがいて、また一方でもそこから、自分の物語を作り上げていく人たちがある。一番

最初のAちゃんの話で言ったら、地に足を着けてる感覚を蘇らせる、みたいなこと。その違いって実はものすごく大事なのかなって感じがするんですよ。そう考えると、キャリアっていうのを考える時に、そこら辺が実はポイントかなってのがあって。そんなことを思いつつ、川畑先生にバトンを渡そうかなと思ってるんですけど…。」

川畑 「いやー…僕、今の話聞いててめっちゃ面白かった。そんな面白い話を聞くのも面白いけど、そんな面白い話を私は出来るやろかって思ってね。そんなことを考えると悔しくてね。今からちょっと話す話は、全然関係ないじゃないかって思われるかもわからへんけど、私の中では一緒だね。今仕事でも興味としてでもやってるのは、中学生とか小学生のみなさんとかにやる、心理検査があるんですよ。審判形式発達検査っていうのがね。子どもと遊ぶ検査なんですよ。赤い積み木をならべて積んで、それと同じトラックを作ってもらおうとかいう検査があるんですよ。発達検査って聞いたら嫌いやって言う小児科医がいるくらいだね。変な心理職が検査して発達指数が80やって言ったらお母さんがそれを悲しんだりっていうことなんかから、役に立つどころか害ばかり与えてるじゃないかって言うようなことが今でもあるようなものなんやけど。そうじゃなくて、子どもと遊ぶわけでしょ。そこから、その子どもの目には世の中がどんな風に映ってるのか。聴覚障害がなければ世の中のいろんな音が届いてるわけやけども、その中でどんな意味を感じて、見たり聞いたりすることが、その子の行動にどのように影響を与えているのか。それでどうやって動いて生活してるのか、どんなことがス

ムーズに行かずに生きにくいという風を感じてるんやろうか、みたいなことを検査やった私が、あたかも自分のことのように語りたいていうのが、それ以上なくそれ以下でもない思いというか、願いなんです。だから、検査というものを子どもとの間に置きながら、どんな風に僕と人間関係を作るんやろか、みたいなことを全部見てね。そこからそういう仮説を出す、っていうことを一生懸命やって。そのために、出来るのと出来ないのとは何の差があるんやろう、出来ない子にはどんなことが見えてないんやろうって一生懸命考えるんですよ。そうして見ていって、なるほどなというイメージが浮かぶ。それを適切にコトバにしたりする。形式発達検査を使ってお仕事をしてる人たちにその話を話したりすることも多いんだけど、そのことが結構役に立ってもらってるところがあって。いや、それがね。自分が面白いなって思って、してる事と、それを使ってお仕事してる人のニーズに合って、自分としての、びしっとしたことをやれてるな、っていう。やっこの年齢になって感じてみたりね。そういう感じがすごくあるんですよ。それでね。そういう体験っていうのは…大人と子どもの違いは何だっていう中で、大人っていうのは、思ってる事と言う事が違う。そういう側面を持ってないと大人の世界は生きられないから。だけど子どもは、思ってる事とする事が一緒の方が天真爛漫やし、そう言われるわけでしょ。そういう意味で言えばね、価値じゃなくて、いろんなことが一致してる、子ども体験、みたいなことなんかと思ったりね。子ども体験っていうのが…塾長さんが言うような、つまりきの中にある価値、みたいなものにつながるようなところがあるんかなとか思ったり

ね。みたいなことを今思ってるんですけどね。
…まあ、序論として」

面白い展開になってきました。本来進行役の川畑先生が、当事者たちの話に感化され、自分自身のことを話し始めたのです。場がいつもとは、少し違った磁場を作り始めることになります。

塾長「私とか、自分のことを大人と思ってないかもしれません。結局大人になれないのかなとか思いながら。死ぬまで子どもか、とかって。私、50歳になった時焦ったんですよ。50歳ってというのは、ある程度出来上がった人になるかなって思って。40代までは、まだ若造かって言われるんやけど、50歳になった時プレッシャーがあつて。わあ、50歳か、とかって。そんな感じがものすごくありました。だから、生徒がここにいて、彼らを子どもだとかつてあまり意識してないかもしれません。例えば、CちゃんにはCちゃんの人生…っていうコトバはちょっと大きいかもしれへんけど、それを私と出会うことで、どこかで共有してる感じがする。私の中にCちゃんの人生がどっか入り込むっていうか。その反対の事もあるかもしれません。その感覚が、何となく私にはあります。それはKちゃんにも、Mちゃんにもあるのかもしれないけど。それは彼らの人生でもなくて、私の人生でもなくて。どこか共有されていくような世界。だからどっかDさんともそんな感じやと思うねん。Dさんのことは、自分の一部でもあるような感覚がありますね」

私も感化されていたようです。ここでの私の主張は、援助者と被援助者とが、実は

双方向の関係にあるということ、そしてそれは決して上意下達的なものではないということです。援助の過程ではその関係の中に、それぞれが関わる世界が出来上がっていき、その世界を共に大事にしていく。そんな援助観を表現しています。

塾長「Gさんも、現場で多分いろいろ支援とかつていう枠組みの中で仕事されているわけですが、いろいろと感じられることがあるんじゃないですか？」

Gさん「いや…あんまりね。支援ということを考えててないんですよ。まあそこまで行っていないのは未熟だからかなっていうのもあるんやけど、これ以上、悪くならないように、目の前にいる人とただ対話をしてるだけ。そのことが悪くならないことにつながっているのかもわからないんだけど、とりあえず前の人の話を聞いてるだけ。それしか出てないし、それしかすること無いかと思う。その後ろでは、働いてもらわないと駄目なんですけどね。制度とか何とかがつていうのは活用していかないとあかんのやけど、とりあえず目の前の人っていうことしか思わないな。今の話聞いてて、学校に行かなかった人たちがいて、でも私は学校は行ったけど、そう言えばその時習ってた書道塾はかなり行かなかったなと思った。まず、行かれて言われて行き出したのが嫌やったのかもしれないけど、途中で行かなくなりましたね。バレまして、ものすごく怒られて。行かへんのやったら辞めろって言われました。で、辞めなかったんですよ。で、辞めなかったら今でもやってるんですよ、実はね。これ何なんやろうって…」

塾長「へえ。今もまだやってらっしゃるんです

か？」

Gさん「やってるんですよ、性懲りもなく。長いな～って、ふと。でもよく考えたら学校は行かないと仕方ないものって割り切ってたのかもしれない。だけど、その書道塾にはなぜ行かないといけなかったのかが、その時はわからなかったのかもしれない。でも辞めろって言われたら、負けん気が強いから、「なにくそ、辞めへんわ」って思って、まだ続いでるんですよ。というか、これしか残ってないんですよ。最後これで食べれたらいいわっていう思いもあるというか。そんな感じやなあ、子どもの頃の自分を思い出したね、皆さんの話聞いてて。でもそれも出会いとかタイミングが偶然組み合わせあって、出来たこと。ほんまに偶然なんじゃないかなあ。今の自分がこの状況であるのが偶然なんじゃないかなあってすごい思いますね。仕事もずっとこの仕事をしてるわけじゃないじゃないですか。私だって、転職といえば転職ですよ。3年か5年経ったらあれやってこれやってってね。全然違うことやるわけですよ。ある種の転職を重ねてきたなっていう感じはある。でもどの仕事も面白かったし、どの仕事も楽しもうと思ったところはありませんね。だから、たまたま違うことになったものに興味を持てる自分やったのかもしれないけど。興味っていうのを、じゃあそれを楽しもう、また変わったらそれを楽しもう、っていう感じ。それをしみじみと感じました。皆さんのお話を聞いてて。そんな感じです」

川畑「どうですか」

Hさん「いや、皆さんの話聞いてて、なんか豊かやなあ。私は…大学までスツと来て、今の職場に入る時は1年間ゆっくりさせていた。だけど、そこまでは順調に行ってて。

そこからの人生は違うんですけど。いろんな出会いがあったり。全然違う分野に異動しますからね。転職するかのようにつき合う人たちが変わるので、そこからの人生はいわば広がりがね、専門分野で特化していないその分だけ、いろんな人とのつながりとか広がりが出るんですけども。でもそこまでの人生って、学校生活で知り合った人くらいしか幅がないですよ。でも、今のお話を聞いてると、その中でいろんな転機を経て、今があるわけですよ。それは大きな出会いがあったり、いろんなことをしているわけで。その時は、非常に大変で、苦しかった思いを抱えてらしたのかもしれない。けれど、そこが何かのきっかけで変わっていった時に、何かすごく豊かな感じとか、そんなものを感じるんですよ。で、自分を振り返ってみると、小さなつまづきはいっぱいしてます。大きなのをしてないだけで。それって、どうなんやろなあ、結構皆さん、そういうことを経た後はしなやかに生きてはるよなって。今聞いてたら。外から見てたら、そういう風に見える」

Iさん「だけど、しんどいと思いますよ」

Hさん「うん、しんどいのはしんどいと思いますよ」

Iさん「いやー、今いい意味で聞いたんですけどね。学校は行かなあかんとこやと思った。それからね、異動…転職を受け入れつつ。でも転職っていう一から違う分野に入れられるっていうのを絶対に受け入れながらそれに合わせていかはる能力ってすごいなって思ってる。行政の方とお会いする度に思うんですよ。そして吸収して、見事にこなされますでしょ。だからすごい能力やなって思うんやけども。それで、豊かやって言っていたけど。そんなの思えないでしょ。ものすごく辛

くて、今ちょっと明かりが見えたりちょっと自信も出来たりするのかなと思うけど…。例えばやけど、GさんとかDさんとかってやっぱりある意味強いんですよね。それで、今豊かやって評価してもらってる皆さんってやっぱり、いわゆる不器用。それで、その時はいたたまれない思いをして。苦しくて、精神的にもある意味で病んでるとか。問題視されてたりとか。そういうのって、学校から見たら大変じゃないですか。で、そういう評価ってピンピン感じてるじゃないですか、本人たちは。で、めちゃくちゃ弱いんですよ。受け止めていけない。だけど合わせられないという。で、合わせられないけど、これをやるという強いものも見つかってないという」

Dさん「それがわかったら、早いんですけどね」

Iさん「そうそう。だからこう、迷ったり隠れたり。それから自分の中でね、いつ明けるとも知れない暗闇にいますよね。その時のいたたまれなさとか、苦しいって思うし。選ぶうと思っと思って選んでるわけじゃないし、どっちがいいとかじゃなくて、選べないんですよ」

Dさん「気質みたいなもんやね」

Iさん「そう。だからそれで私、Gさんが偶然というコトバを使わはったのも面白いなど。偶然やと、全ては。でも必然やとも言えるんですよ。その個体に備わってる道は、なれない者にはなれない。だけど、大多数が学校は行かなあかんものや、とかってというのが作られてると、なかなか外れるのは難しい。外れたくて、外れてるわけじゃない。やっぱり行かないといけないところに行けないようになっていくしんどさっていうのはある。けども何とか、道を見出した人たちは、そりや面白いし、すごいなあ。こんな道もあるやん、って言ってあげられるじゃないですか。で、

そういうのと言ってあげられるのを、ちょっと前に言ってあげられたり受け止めていてあげられたらね。親や学校がね。そんな生き方もあるんやなあ、ええなあ、今、道を探したはるんやなあ、とか言えるようになるくらい…。この頃、段々月並みになってきましたけど、多様やということが普通になっていたらいいなあ。だからどっちがいいっていうものじゃないし、格好いいなあと思いたしたよ、Gさん」

Dさん「その対応力の方がすごいと思いますよ。こちらからしたら出来ないわけですから」

Iさん「そうですね。強いし、しなやかですよ。これもまた豊やし。強いし。それこそ一つのことを続けたはるんですよ。その中でいっぱいいろんなことを獲得したはるんやろうなと思いますよ。それで書道続けてはるとことか、面白い。でも苦しいやろうなあって。ほとんどの人がやってる時にやれないしんどさ。それが思春期の時にやって来るし。思春期やから揺れるしね。Cさんが、何でじゃあ学校行こうと思うようになったのかっていう時に、いつまでもフラフラ出来ないしって言わはったけど、それだけじゃない何か、動かされる、決断するものっていうのがあるんやろうし。そんなことに皆、この4人は、ここでなんとかしないとあかんあつていうのが、意識できる時とできない時があるけどやって来る。やって来るものを持ってるということは幸せやけど、なかなかそれが来ない人もいるって思いますね。」

挫折からの再出発。それは「セカンドキャリア」としての意味を持ちます。ファーストキャリアが個人の人生を保証しきれない時代の中では、むしろセカンドキャリア

をどう構築できるかが問われているように思います。セカンドキャリアは、ファーストキャリアの反省の上に成立します。「自分が本当にしたかったことは何か?」、「どこに問題があったから自分は挫折したのか?」、「これからどんな風に生きていきたいのか?」。様々な問いの上に、セカンドキャリアは成立するのかもしれない。

川畑「例えば、赤ん坊が生まれた時っていうのは100%世話してもらわないと生きていけないから、完全に守られてるわけでしょ。それで段々子どもが大きくなっていくんだけど、やっぱりほら、ずっと世の中から守られんと生きていけへんからね。だけどその中で大人になってくると、守られてることの中にも決められてると、飽きてくるとかね。どこかの時点で、もう誰も守ってくれへんから、自分で自分を守らないとあかん時に入るんやと思います。だからその時に、自分で自分を守る時に何か支えがないと立ってられないとか。その支えがなかなか見つからへんとかね。みたいなことがやっぱり起こってくるのかなあと。で、何で20歳過ぎてからっていうのがあったでしょ。ちょっと間違いかもしれないけど、体力のピークっていうのが19歳くらい、っていうね。そこからもう下がってくるっていうことを思うとね、体力だけじゃなくて、脳機能もいろんなものも19歳にピークが来てね。そういつた時に、なんて言うのかなあ…一人で生きていかないとあかんっていうようなことを思うような時期に差し掛かる。20歳前後で。それが制度で言えば成人式過ぎてからとか、その前からとかいろいろあるけどね。なんか、そうなるんやろうなあ。そういう時に何か見つければいい

んやけど。見つからなかったらなかなかしんどくなるのかなあと…」

Dさん「なんか、そういうタイミングが来るのが早い気がしますね、今の時代っていうのは。情報がすごく錯綜してる時代やから。成人式ってずっと昔に20歳って決められたんだと思いますけど、今の若い子って…」

Iさん「でも、もっと昔はもっと早かったですよ」

Dさん「そうですか」

Iさん「14歳とか、その辺で元服してるじゃない」

Dさん「それくらいで、いいんやいますかね」

Iさん「そっちの方が、私は理に適ってると思うんですよ」

Dさん「そうですよね。そっちの方が…」

Iさん「つまりそれ以上は、今度はちょっと近代化っていうか…いろいろ知力の時代になっていくから。学力を身につける期間も長くなっていくし。でも個体としてはぎりぎり20歳くらいまでって言われたように、そうなんだろうねえと。だから昔は仕組みが追いついてなかったから寺子屋で終わったし。不登校が出来るっていうのは、学校があるから不登校って言われるのでね。小学校でやめといてあげたら、それなりに皆どっか手伝いに行ったり、勉強好きな子は勉強したり、っていう風出来るわけですよ。だからやっぱり、高度…何て言うんですか。そういう社会になってから、その人に合った道はある意味で狭められていってるんやあって。まあしょうがないからね。逆戻りは出来ないから」

川畑「戦後も不登校多くてね。でも、不登校してただけど家の手伝いはするとかね。それだったら仕方ないな、って、問題にはならなかったんやね」

Iさん「そうそう。やっぱり第一次産業が主体やった時はいいんですよ。だからやっぱり知力

偏重の時代、社会になっていく中で、能力の格差、そこで判断されるようになってくるからコンプレックスを持たないといけないようになっていって。それで精神的にもしんどくなるよね」

Eさん「学力的な能力と、第三次産業に入っていたのと、もう一つ、学校とかで言う「生きる力」とか出てきた時代に道徳心の教育っていうのが出てきたみたいに、問われる能力が増えてきてる。それ自体が、個人に押し付ける能力っていうところになってきてるんじゃないのかなっていうのは、何となく僕は産業の流れでは、思う節があつて。多分コミュニケーションの話には、なっていくでしょうけど。やっぱりその、空気を読んでいかなきゃいけないとか。空気なんて読めやしないのに。そういったコトバが出てくるのも、どうしても個人が何に対して付けなきゃいけない能力かわからずに、皆がそれぞれを気にしながら生きていくっていうのは、やっぱり教育場面と、そこから大学卒業以降の就職へと差し掛かる現場に見られる教育と現場の一致しない関係。そういう現状には差し掛かっているのかなって思いますね」

今回は、参加者同士の中で、どんどん話が展開していきます。これは過去のラウンドテーブルの中では、際立った傾向だったのかもしれませんが。支援される側の当事者たちの語りが、参加所の語りの世界を誘発しているかのように私たちには映っていました。そんな中、大学卒業後5年間のフリーター生活を経験し、再び大学院へと舞い戻って来たE君のライフストーリーにみんなの関心が集まります」

Iさん「フリーターを5年ですか？」

Eさん「はい」

Iさん「それから、大学院の学費というか、それの一応の目処を立てるだけは貯めたんですか？今からもそんなに不安とかないんですか？何とかなる？」

Eさん「それは、めちゃくちゃあるのはあると思うんですよ。やっぱり皆の流れっていうのを考えると、就職をされていて。会社が潰れるか潰れないかの不安っていうのは、経済の流れであるかもしれないんですけど、やっぱりその基盤を持たないっていう不安はありますよね。でもまあ、最悪路上で過ごすってなった時は、税金払いたくなるんだろうなって思ったりするんで。あの、まあある程度の食っていく仕事はしていけないかなって思いますね」

Iさん「ある程度食っていくために必要なお金って、どれくらいやって思っておられるんですか？別に正しい数値じゃなくて、感じで。去年の日本人の平均年収が403万円とかっていうのを、昨日聞いてたんやけど。それを高いねえ、低いねえっていういろんな感想がありましたけど、今自分はそれより低いですって答えてる非正規職員もいたしね。それをどう思うかということやけどね」

Eさん「僕、月12万くらいあればいいじゃ…」

Iさん「いいんじゃないだろうかと」

Eさん「そうですね。あとは家賃をどんどん下げていかなきゃいけないのか。いいステーキを食べたくなったら服を古着屋に売りに行くのっていう選択肢がだんだん迫られてくるのかなっていう風に思いながら、いる感じですけど」

Iさん「そう、403万円だそうですねよって言ったら、街頭で女性たちが、「これで子ども出来たら

苦しいよね。無理だよ」とかいう感想を言
ってましたけど。ふーんと思って聞いてた
んですけどね」

塾長「まあ所帯持ってたの話ですよ。子どもが
出来て、みたいな話でしょ」

Iさん「子どもが出来たら苦しいよねっていうよ
うな話でね。述べてましたけどね」

塾長「そうですね」

Iさん「でもサラリーマンの平均やったから、そ
んな人達も含まれてるし、いろんな職種があ
るとは思うけど」

Hさん「非正規の人も、入ってたんじゃないです
か？」

Iさん「入ってるのかな？だから、どういうこと
を基準に何を目的に生きていくか、何を優先
にして生きるかっていうところによって変
わってくるけど。でもさっきのDさんの立
派な理由、奥さんと子どもを食べさせないと、
っていうところから始まるのって、いい動機で
すよね。そこからキャリアが本当についてい
くっていう」

川畑「いい動機っていうか、地に足が着いた、基
本、根っこみたいなところですよんか。そこ
は外せないみたいなね」

Dさん「そうですね。まあそれも行き当たりばつ
たりで出てきただけなんで、別に…」

川畑「逆に言えば、出てきたことやからって言っ
ても「知らん」って言うわけじゃないじゃな
いですか。そこを根っこにしてね」

塾長「やっぱり、でもずっとこれまで人間関係を
つないできたもんな。その仕事をずっとつな
ぐ…、誰かに紹介してもらってこうなったと
か。いろいろあったやん、これまでも…」

Dさん「はい、ありましたね。周りの人には恵ま
れてますよね」

ストレーターではない若者たちのキャリ
ア形成には、必ずと言っていいほどそこに
「出会い」があります。要するに、他者の
介在が存在するのです。「変容」と「他者の
介在」、そこにはとても重要な関係が存在し
ているようです。

塾長「全くそれはすごいと思う。私、割と最近に
ある銀行マンと話したんです。銀行マンって、
30いくつくらいになってくると、やっぱりい
ろんな意味でストレスが増えてきて。自分と
しては納得が出来ないことをやらないとい
けなくなる。不条理で自分では到底、納得出
来ないわけですよ。でもそれは、やってい
かないといけない。しかも30歳くらいにな
ってくると立場的には管理職になっていく。
ということは、部下にそれをやらせないとい
けなくなる。そんな不条理なことをしなければ
ならないことも、かつて日本が豊かな時代、
年々所得が上がっていく時代は、少なかった
かもしれません。例えば不条理なことをやら
なくても、売り上げは上がってたかもしれない
からです。そういうことがやっぱりあって、
大体管理職になるくらいに退職する人って
結構多かったです。でも、子どもさんはい
ないんやけど、やっぱり所帯はあるので、辞
めても次の選択肢がないっていう風に思う
し、そこでずっと続けられないといけなくなる。
そういう話をわりと最近して、そういうこと
は現実に結構ある話なんかなっていう感じ
を持ちましたね。ただそういう状況の中であ
っても、自分が納得できるものを見つけてい
くのかなって思ったりもするんやけど。私は
組織の中に居ないので、わからないんですよ、
その感覚が。D君が、私のことをやりたいよ
うにやってきたはるって言ってましたけど、

現実はなかなかそう簡単には運ばない。上手くいかないこともいっぱいあるけど、でも組織にいないだけ、痛みは自分で背負ったらいだけって思えるので、まあ不条理っていうものをあんまり感じないかもしれないなあ」

Hさん「組織の中にいると、あれですよ。あまり気が進まないこともやらないとあかんし、辞令一枚でどっか行って仕事しないとイケないわけやから。そういう辛さとか、本当はこの仕事がしたいんやけどなって思っても、いつかはその職場を離れなあかんってことがある。自分がその組織の中でずっと、未来永劫やれるわけではないし。歳重ねてきたらその組織をやめていく時が来るんで、それまでに、後に続く人をちゃんと育てとかなないとあかんとか。そういうのがあるから、どうしてもそうならざるを得ない。そういう時に、本当にこの仕事嫌やなって思っ。もう辞めたいなって思うことは何回もありますし。何でこんなこと徹夜してやらなあかんねんって思いながら、でも間に合わなかつたらそれはそれで問題やし、仕方ないなって思いながらやってきたことはいくらでもありますけど。ここ最近ですよ。I先生とお付き合いさせていただくような職場に来てから。この仕事って結構面白いやんとか。今の仕事でもそうなんですけど、面白いやんって。自分がそこでやってることが、何かの役に立ってるなってはっきり見えてくると面白いと思うんですけど、この仕事って、目に見えない部分が結構ある。今やってるのがどう生きてるんやろうっていう部分も結構あるんですよ。歯車の中なんやけど、全体の中で歯車の位置がわからへんから、とにかく何かやらされてるっていう感じしか残らない」

川畑「工場と一緒やね」

Hさん「そうなんです、まさにその通りで。そんな感覚の 때가、若い頃によくありました。これって何のためにこの作業、集計やってるんやろうな、これ何の意味があんのやろうなっていうのはよくありました。それを徹夜してやらないといけなくって。こんな辛いことはない」

塾長「その時はやっぱり、我慢をしてはるんですか？」

Hさん「そうです。これ終わったら飲みに行ける、とかね。これ終わったらちょっと休み取って遊びに行ける、とかね。そんな感じですよ。何か先に、自分がやり終えたことに対する小さなご褒美を持っておかないと…」

川畑「こういうある程度まとまった仕事が出来て、いきなり国から、こうしろって言ってきたりするわけでしょ。それで嫌やなとかって思うんやけど、それで言ったら負けじゃないですか。それは面白くないから、そういうことを急に厚生労働省が言ってくれたから、実はこういう仕事に発展できた、という風ですね。出来るだけ持っていこう、という風には言ってましたね、職場では。出先の兎相やったから、いろんなことが自由やったからね。自分の思ってることとしてることが出来るだけ一致するように頑張ろう、みたいなことはしてましたね」

Hさん「だから、意識が変わってきたのは30歳になる前くらいからですかね。仕事って、辛いことばかりやったら面白くないやん、何か面白いことを仕事の中で見つけようか、っていう風が変わってくると変わってきました。例えば、私は東京で勤務していたんですけど、いろんな方と会う。この人たちとお話したら楽しいやんな、とか。こんなこと知らなかったわっていうような。そういうところで、

面白いと思えたら仕事が面白くなっていく」

「組織をどう考えるのか？」あるいは「組織の中における自己実現とは何なのか？」、「そんな大人たちの葛藤を彼らはどう乗り切ってきたのか？」。まさにそんな話に、若者たちが耳を傾けています。

川畑「はい。いろいろ話が出てるわけですけど。ちょっと、それぞれの人ね。年齢もいろいろ、立場もいろいろやし。自分に引き寄せたところで、こういうことを思う、みたいなことがあれば、皆さんしゃべってみませんか？どうですか、Jさん」

Jさん「そうですね。最初の5人の皆さんの話を聞いてた時に、私も自分だったらこんな風に話せるかなって考えながら聞いてたんですけど。私は、大学進学まではずっとストレートに来たんですけど、その間につまずきって呼べることはあったんです。大けがをして運動が出来なくなったりとか、親とすごいもめたりとかはあったんですけど、無理矢理に、普通の方に、大部分の方の道に戻された感じがして。それが嫌だったはずなのに、何でここまで行けたのかなってというのは聞いてて思っていました。親が教師っていうのが大きかなって思ってた、そのせいだって思って大学入ってから爆発したんですけど。それまでに、自分が考えて行動するだとか、親に逆らってみるだとか。そういったことが出来ていたら、そんなに大きな爆発にはならなかったかもしれないし。あんな痛手を負わなかったかもしれないしっていうのを考えてました。あんまり上手くまとまってないんですけど、そんなことを思っていました」

川畑「いやいや。Kさん何か思ってることは？自

分の年齢なりに、自分の生活に引き寄せてとか」

Kさん「私も結構回り道して、この夏に高校の単位が取れたっていう状況で。高校が今の高校で3校目なんですけど。皆さんの話聞いてて、いろいろ考えさせられました」

川畑「どんな感じがする？今、出てる話聞きながら」

Kさん「うーん、話すの苦手で、知誠館に来た時は、高校2校も辞めてるんで。高校卒業するためっていうので来させてもらったんですけど、塾長には、その後の進学どうする？大学行く？とか。そういう進路を出していただいて。高校卒業するっていうのがあれやったので、そこまで考えられなくて。何て言うか、いろんな道を教えてもらったっていう感じですよ」

川畑「それはいい感じ？」

Kさん「はい」

川畑「ああ。ありがとう。Cさんどうですか？何かあれば」

Cさん「そうですね、私はまだ目標っていうのが見つかなかっただけ。地に足が着いたとか、その瞬間はやっぱり嬉しいですよ」

Dさん「その瞬間はあった？地に足が着いたっていう」

Cさん「私ですか？私はまだまだ着いてないと思います。まだここで目標に向かって勉強させてもらってますけど、まだまだ着かない」

Dさん「ああ。ちょっと聞いたかったんですけど、看護師とか助産師っていうのが、ふっと出てきたの？」

Cさん「ああ…私、親が看護師なんですよ」

Dさん「ああ、そうなん」

Cさん「なので、その影響もすごく大きいです」

Dさん「あんまり理由も無くって人を見たこ

となかったから。そういうことか」

Cさん「そうですね。日々親の話を聞くので。まあ看護助手として働きたいなって思って、範囲を広げて面接行ったんですけど、やっぱり中卒っていうだけで、面接さえしてもらえないところもありますし。看護師の仕事ではないですけど、私は今の施設で働けてよかったなって思ってます」

大人の援助者に交じって、知誠館の生徒たちが自分の考えをコトバにしていきます。それは決して理路整然としているわけでも、流暢なわけでもありません。しかし、その一言一言にはしっかりした質量感があるのです。

川畑「なるほど。小林さん、何かどうですか。思っていることがあれば」

小林「ちょっと脈絡がずれるかもしれないんですが、子どもの育ちを考えるっていうテーマに沿って、一応私なりに考えてたんですが…。今学校で働かせてもらってるっていうこともあって、学校での教師の意識とか立場をすごく考えて。今ちょうど、休みがちというか、もう不登校になるのかなっていう子も学校にいたりするわけです。でもその子に対しての学校の対応っていうか、目指すところ、OKとするところは、学校に来ることとか、進級することとかが、その子に対しての対応の中心課題なんです。でもやっぱり、不登校という形で表れてるのは、その本人にとってはレジリエンスを身につけることへ繋がるような大事なつまずきというか…、敷かれたレールに対して、それをよしとしない自分の意志とか、その背景にあるその時、その時の家庭環境とか、あるいは人間関係とかの悩み

や自分の深い葛藤が表に出たことなんで、そのせいかくのつまずきを、学校の表面的な対応だと、それをないがしろにしてしまうのかなって、本人の悩みをやり過ぎさせてしまうことになるのかなって思うんです。じゃあ、どうしたらいいのかなって考えてたんですけど、やっぱり学校の対応とか指針とか、学校っていう枠の存在は必要やと思うんですけど。例えば学校の中で、生徒指導で決まりを守ることを指導する教師側は、決まりを守るっていうことは伝えるべきでしょう。だけでも、教師の価値観まで押し付けるのはどうかなって…。掘り下げると、教師の価値観って私が思ったのは、教師になる人は、ひかれたレールに乗っかっていける人、ストレーターっていうマジョリティの人が多いと思うんです。何の疑問もなくレールに乗っかっていくことを自分たちができて、それをベストとする感覚を暗に押し付けてしまってるところがあるのかなと。価値観とか驕りとかも入ってしまってるって思うと、Dさんの塾長さんに対する感じみたいに、やっぱり教師って、Dさんにとっての塾長さんみたいな存在で、キーパーソンであるべき存在やと思うんです。だけど、やっぱり価値観を押し付けとつか、枠にはめようとするので、それが出来ないのであれば、どうなんですかね。でも一番はっきり思ったのは、教師の社会人枠を半分以上に出来たら、もっと多様な対応ができるように変わってたのかなって、現状はだいぶ違ったのかなって思ったりしました」

塾長「今聞いててね。私の中にも、つまずくことって大事やっていう思いがあるのね。でも、つまずいた人にとっては、つまずきたくなかったというのが、正直やと思うし、さっきH

さんが言っていたみたいに、やりたくなくてもやらないといけないことがあるというのも事実なんでしょう。多分、誰もつまずくことを最初から望んではいないし、あるいは、どうしようもない現実っていうのを認めないといけないことってあるわけですよ。私の上の子の場合は、いろいろハンディがあるのでね。ある意味どうしようもないわけですよ。何をどうしようが、現実はやっぱ覆っていかないっていうことがあるし、どうしようもないことを引き受けないといけない。でもどうしようもないことに、片一方で人は潰れるんですよ。でもどうしようもないことに、人は何か希望を見出したりとか、そういうことがあるような感じがするんですよ。その違いがめちゃくちゃ大きい。今日はここ知誠館で実際に学んできたりとか、今学んでたりとかする生徒たちが結構いるのでね。例えば、私たちは体験活動って行ってどっか行ったりするんですよ。車でね。結構皆、盛り上がるんですよ、無邪気に。ここには普通の塾の子も来てるので、どっちかって言うとそっちの子は、冷めてるんですよ。盛り上がらない。でも、知誠館の子は、結構皆盛り上がる。この違いはいったい何なんやろうと思ってるね。終わった後も帰らずにKちゃんとMちゃんてマンガをいっぱい描いたり。何や訳のわからんことをやってるんやけど、キャッキヤ言って盛り上がってる。でも一方で、皆どうしようもない現実っていうのを背負ってるわけですよ。そこにね、どう表現したらいいのかな。改めて何か思わされるんですよ。それが何とも言えないんですよ

問題や挫折といったネガティブなものをポジティブな機会へと変換して未来を拓く

のか、あるいはそのネガティブなものの中で潰れてしまうのか。その違いは大変大きいように思います。先の「セカンドキャリア」ということと「機会開発」、この二つの概念はとても密接につながっていくのです。

川畑「それ、コトバで表現してほしいな」

塾長「いや、コトバも足らんのかなと思います。私いつもCちゃんにコトバ足りてないで、って言うてるんやけど、私もそれをコトバで表現しきれないんやけど、そうしたい。それで、そういうことを表現できる場っていうのをやっぱ作っていきたいっていう思いもあるし。ものすごく微妙なことで、こっちに転ぶとそこで潰れていくんですよ。でもこっちに行くと、そこから希望が生まれるんですよ。これって何やろう？自分の中でそういう感覚がある。だから、それを豊かさとか、つまりきの価値とかっていう風に…それをコトバで表現すると、すごい陳腐な気がします。コトバが足りない気がする。そんなことを、小林さんの話を聞いてて思う」

Hさん「こっちに転ぶか、そっちに転ぶかってあったけど、私が振り返ってみると、そういう時って諦めなあかん。まあ仕方ないやん、みたいな。スパッと、仕方ないやんってその時は考えちゃうことが多くって。これやりたいんやけど、仕方ないやん。だから、こっちやらないと仕方ないやん、みたいな。そんな感覚で今まで生きてきた。それってすごくいい加減なところで動いてる部分があって。どうしようかって真剣に悩んで悩んで、ってあんまりしてないよな、いい加減に生きてきてるよなって…」

川畑「さっきのね、車の中での話。あんまり盛り上がりへん場合は、他のこともいろいろ考え

るから。だから分散して、どれにもめり込めない、みたいな感じがあって。でも盛り上がると、そこだけに集中して盛り上がれる、みたいなね。いや、さっきの学校の先生の話であったけど、先生が生徒の話聞いてね。君の気持ちはよくわかるけど、それじゃあ生きていけないのよね、みたいなことを言われたってどうしていいかわからへんし、みたいなね。そういうこととどっかで重なるんですよ。そういう風に言えば、一つのことには一生懸命になれるのは幸せですよ、やっぱり。でも、遊んでる時間にもっと勉強してたらかと思ってたら、そりゃ社会的にはそつなくいけるかもしれんけど、どれが一番好きやねんって聞かれたら、どれも好きじゃない。みたいと言わざるを得ない、みたいにしたらあんまり幸せじゃないですよね」

Hさん「それって、わかるような気がする」

川畑「うん…幸せじゃないんだけど、それを幸せと思われて生きてる、みたいな部分が…無いのかなあ」

Hさん「わかる部分もある」

川畑「いや、最近本が出て…まだ読んでないんですけど。大阪で子どもらをほったらかして餓死させた事件がありましたでしょ。あのお母さんが、週刊誌レベルやけどいろいろ見ていったら、小さい頃からいろんなことに気を遣う子やったらしいんですよ。家庭の中もいろいろあってね、難しくて。子どもやけど、ずっと大人みたいな感じで生きてきた子でね。結婚しても、いい奥さんなんです。子どもが出来ても、いいお母さんなんです。ところがある日ブツンしてね、入り浸ったところがホストクラブなんです。それ見てるとね、何かいろんなことに配慮してっていうのは持たへんのやろうなってね。入り浸った先の

ホストクラブなんて、そこでは子供でいられる、みたいな場所ですよんか。世の中に配慮しなくていい。みたいなこと考えるとね…これが好きやからそれに浸ってられる、っていうのはすごく大事やし、能力やし、力やし。みたいなね。そういうのが許されへんところがあるのかなって。(Mさんに向かって)あの私が中3の頃に、大人の人がいろんなことしゃべってる中で聞いたような経験は全然なかったなと思うんやけど、あなたとしてはどんな感じがする？いろいろな話をここで聞いて」

Mさん「何て言ったらいいのか…」

川畑「聞いてた話の中で、ここが面白かった、ここがピンときた、みたいなところある？」

Mさん「私はまだ、だんだん進んでいってるところなんで…、いろんな、人生っていうか。自分の中で、20歳とか、どんな風にそうなっていったらいいかっていうのを、いろいろ聞かせてもらった気がする…」

川畑「はい」

塾長「実は彼らは、月に一回やけれども、皆が自分自身のライフストーリーを語るっていう場を開いてるんですよ。その中学生のトップバッターがMちゃんでした。彼女は、初めてみんなの場の中で語るんやけど。その時に小林さんは初めて来たんやね。で、小林さん、もう感極まってしゃべれへん、みたいなことあって。でもMちゃんはよくしゃべってくれたし、みんな感動した、その時は、ちょっとどうかなって思ってたんやけど、彼女はとてもよくしゃべったんですよ。本当にいろんなものを抱えて来てるので、今まで語れなかったことが、いっぱいあるわけ。いろんなことが実はぐるぐるぐるぐる回ってるけど、やっぱりコトバに出来ない。言っても聞いて

もらえなくて傷ついたりとかっていうことがあったんやろうと思うんやけど、ようやく彼女が語り始める。今日も実は、彼女が来るってことを私自身は全然知らなかった。でも彼女は実はこういう場に興味があったんや。そうやんな？」

Mさん「はい」

塾長「そうやんな。だから彼女はやって来る。だからこのMちゃんが、こういう場で、全然知らん人達の中で、緊張もするし、たどたどしく語るわけやけど。でもそこに、いっぱい何か思いがあるわけなんです。これがねえ、何とも言えないわけですよ。私からすると、そういうものをキャッチしてしまうんやけどね、何かね。私自身の中にある何かを呼び起こされるんですよ。そういうものに、自分自身が支えられてるのかなって思ったり。今日はAちゃんがトップバッターでいっぱいしゃべってくれたので…、やっぱりこう、すごくコトバが出てきたのにびっくりしています。前はそんなイメージは全然なかったので。コトバがこう、乗るんやね。コトバは不自由なんやけど、すごい大事なんですよ。だから川畑先生に言われたことじゃないけど、コトバで表現したいなって私も思うんやけど…」

川畑「コトバにならないって言ったら、家庭内暴力ですよ。家庭内暴力っていうのは、そこにコトバにならないコトバがいっぱい詰まってるわけやからね。それがコトバになれば、殴らなくても済む、というね。しゃべってるのが、コトバがあるからわかるわけで、コトバにならへんところっていうのもあるわね。はい。あと 30 分くらいの時間になりました。テーマに縛られなくても、何でもいいのでしゃべってみましょう」

Bさん「コトバの話と被るかもしれないんですけど、僕の中でキャリアを考えるにあたって、不安と、コトバっていうのが結構重要なものとしてある。元々しゃべるのがあんまり得意ではない方なので、僕の中ではしゃべるコトバよりも書くコトバの方がウェイトが大きいですって思います。考えてみれば、引きこもりからの脱却というのが、ここに来て、定時制の高校に行くんですけど、そこで、毎年年末に作文を書かされるんですね。一年間を振り返るっていう。それが冊子になって毎年残っていくんですけど、それが積み重なっていく中で、自分が抱えてることと、社会的なこととかを考えるようになったり。自分の過去とこれからどうしようかっていうのを考えるようになったり。で、いざ受験になって大学に進むんですけど、その時に何をしたいかっていうのが、自分の中で、マスメディアに関係したいっていうのがあって、そういう方向に進むんですけど。自分の中のことをコトバで表現するっていうより、周りのコトバに振り回されてたっていうか…それをかなり気にしてきたっていうことが大きいと思って。そういう中で大学に入るんですけど。大学でも、その頃から本を読みだして。その感想を書いてサークルのフリーペーパーに載せるっていうことをしてたんですけど。そうする中で、自分の中の考えを文章にして出すっていうのが徐々に好きになってきて。それが一番大きかったのが卒業論文なんですけど。卒論がなかったら大学院に行っていないでしょうし、ここにもいないでしょうし。そういう意味で、コトバっていうのはキャリアとほぼ同義のコトバっていうか。そういう風になりつつありますね」

塾長「今は、自分のコトバを作ろうとしてるんや

ね」

Bさん「多分そうやと思うんですけど」

塾長「そんな感じするわ」

Bさん「実際、その不安っていうのについても、見通しは立ってはいらるんですけど。ただその、ちゃんと専門用語で〇〇的不安っていうのがあるんですね。ただ、それを自分の不安とイコールで結びつけるのはちょっとまだ抵抗があるんですね。この不安は概念的なものというよりは、個人的な蓄積によってできたものですし。それをわかりやすいコトバにしたっていうのが今のところの目標」

塾長「なるほど。私なんか、すごい執念やなあって思う。中学の時にここにやって来て、結局それをテーマにして大学院まで行くんやから。執念やなあ」

Bさん「前からその不安っていうのはあったと思うんですね。小学校、幼稚園の頃から。それが不登校、引きこもりっていう形で現れただけやという風に何となく思っはいるんですけどね」

川畑「手垢のついていない自分のコトバ、っていう感じ…」

Hさん「今の話を聞いてて、自分のキャリアっていうものは、実は自ら獲得していくものじゃないですか。コトバも自ら獲得していくもの。そこは共通点があるからそういう風に感じてはるのかなあっていう風に、今の話を聞いてて。だって、キャリアって、人から与えられるものではないと私は思ってるので。自ら獲得していくものだから。一般的に使われているキャリアって、職業的な意味での、職業能力、経験を含めたものを言ってるけど、人生の中で考えたら、一つ一つの経験がキャリアなんじゃないかなあと。それはいろんな形があるんじゃないかなって。それは一つではな

いよなあって」

川畑「皆さんの話を聞いてね、真面目やなっていうのをすごく思うんですよ。一般的に言われる「真面目」って、真面目な人ってちょっとな…っていう風に言われる「真面目」なんやけど、例えばEさんの言う、自分はすぐ辞めちゃうんやから、そこで雇ってもらうの申し訳ないって思うこと。自分の中での整合性に対して、めっちゃ真面目やん。でもそれは、世間に対しての真面目さじゃなくて、自分がそうしたい。それが、自分が獲得するキャリアっていうのと重なったなあって。子どもが出来たからっていうのも」

Hさん「そのところは、自分に向き合ってる所が非常に真面目やっていう風に感じてて。私は自分に向き合っていないのかな…、ふらふらしながら。結果的に、世間的に見れば真面目って言われる部分なのかもしれないけど、自分自身の中では、果たして真面目なのかなっていうのは常にあります。ある意味、川畑先生がおっしゃってたのは、自分自身にしっかり向き合っ、そのところで、しんどい思いをしたり大変な思いをしたりとか。そんなところにぶち当たってしまったっていうところを含めてね。そういう風な感じを、今の話を聞いてて…」

川畑「そういう意味で、自分は真面目なんやろうか、っていう疑いをちゃんと持ちながら自分を見ていくのも「真面目」っていうことになるのと違うやろうか」

塾長「私、今のB君の話を聞いてて、ヘレンケラーが日本に来た時に、アンラーニング unlearning って言っていたことを思い出しました。アンラーニングって、ラーニングの否定形なんです。だから直訳したら「脱学習」とかって意味になるんです。これを、そ

の時の通訳したのは、鶴見俊輔さんなんですよ。鶴見さんは、これを「学びほぐし」って訳した。セーターの糸をほぐすみたいな感じかなあ。だから私たちは、コトバの世界の中で生まれてるので、生まれた時からコトバの意味を背負って生きてるわけでしょ。それを一回ほどくわけですよ。ヘレンケラーは、高熱でいろんなものを失うわけやけど、それはサリバン先生っていう人と出会う中で意味を獲得していく作業があつて。それを彼女はアンラーニングってコトバで呼ぶわけです。B君の場合、コトバはいろんな意味をもつてしまっているので、そこに自分のコトバを編み込んでいこうとすると、一旦ほどかないといけないのかもしれない。そういう作業があるのかもしれない。まあいろんな、当たり前の中に生きてる部分がいっぱいあるんやけど、当たり前って何なんやろなあ、っていうのをどっかでほどいていく。そんなことは、いっぱいあるような気がするんやけど」

Hさん「当たり前って言われると、そこで思考停止してしまう。考えなくなってしまうよね。「それが当たり前やん」って言われると。それがずっと、世間では多くあつて。私が思ってるのは、だから自分自身何も考えてないのかなあつて。世間の常識って言われるものに対して。そんな感覚はあります」

塾長「でもその「当たり前」からちょっと道を外れていくと、すごいストレスがかかっていたり、すごいしんどかったりとか。それが子どもとか、多感な時期とかやったら、もう恐ろしい世界がやって来るんやろなって思うんです。ものすごく孤独やし。新しい生徒がやって来ると、ここにいる生徒達は、その子にどうしていったらいいんやろ、とか

ていうのを私に投げかけてくるんです。いろんなことを。それは私にとってはものすごい救いなんですね。私たちが何かを考えるっていうんじゃなくて、同じ位置にある子どもたちが一生懸命考えてくれる。何とも言えない世界が展開するんですよ。感動しますよ。それがまた、さりげなくて。コミュニティの温かさっていうのは何なんやろって思うんですよ。そういうのがものすごくあるんですよ。そこにすごく救われていたりっていうのがあつたり。そういうところに何かコトバがあつたら、新しいものを何か提示できるのかもわからないし。自分のコトバを得ると、強くなる。それはやっぱりそう思う。だって人に伝えられるからね。コトバってすごい大事やと思う。Kちゃんも、随分支えになってあげたよね。それが大きい。彼女は卒業式の時に、送辞を語るんですよ。そうしたらうちのスタッフなんかは、「私とか小中高と卒業式で一回も泣いたことないのに、大泣きました」とかって言っていましたね。何がこう感動させるのか。Kちゃんは、私、絶対読むの嫌やって言っていたんやけど、そのコトバの力っていうか。そんなきぎなコトバや難しいコトバが並んでるわけでもないんやけど、質量感が全然違うんやね。そこで編み出されるこの子のコトバの力が…」

「機会開発」にしても「セカンドキャリア形成」にしても、その過程にコトバはとても大事な働きをします。従って当事者である若者たちが、それ以前に自分のコトバをしっかりと身につけているかどうかは、とても大事なポイントになるのです。借り物のコトバではなく、自分自身のコトバ。それを身につけていくためには、何度も自

分自身を振り返る省察的な思考が必要となるのでしょ。

川畑 「はい。そしたら時間があと 20 分くらいあるんで、最後に一巡、今日の感想などがあれば」

D さん 「えっと、初めて参加させていただいて、この存在を知ったのは、塾長が本を書かれて。その中にあったから知ったんですよ。そんなことしたはったんやと。読んで思ったんですけど、崇高なレベルの話をしたはるんやろうしっていうのもあって、あんまり参加出来ないんじゃないかなって思ってたんです。僕の仕事は、人間味に触れることがすごくあって。それがやり甲斐であったりするんですけど。そこら辺の部分で、いろんな人の気質に触れておくって、すごい勉強になるんですよ。おっしゃってたように、ずっと我慢出来る人もいるし、出来ない人もいるしって話があるので。すごい勉強になりました。もうちょっと自分の時間も作ろうかなと。こういうことを考える時間を作らないとなってしまう。本当に、ありがとうございました」

B さん 「この夏休み、高校生が書いた作文の添削をしてるんですね。そのテーマがちょうどキャリアなんです。だいたい 80 本くらい読んだんですけど、高校生のキャリア像っていうのがすごい偏ってるっていうか。仕事オンリーというか。そういうのばかりだったんで、この場で話されてるようなことに変えてくれたらいいなという風に感じました」

塾長 「キャリアは、ビジネスキャリアっていうのと、ライフキャリアっていうのがあって。ライフキャリアになるとより大きい概念になるね」

B さん 「そういう感じで書いてる子も中にはいたんですけど、どうしても仕事に直結してしま

う子がとても多い」

L さん 「仕事のキャリアっていうのに限定されたら、私なんてキャリアないよねっていうのが答えやと思うんですね。だって資格もないし、経験もないし。でも、今まで自分がいろんなことをやってきたのもあるし、やらされてきたこともある。それで得てきたことをちよつとずつ組み合わせて積んでいって、今の自分があるし。これがキャリアだ、って言いたいねって。内向きに向かなかっただけなんです。挫折することもあったし。それも、自分が出来なくて挫折したんじゃなくて、周りの力で挫折したっていうのがあるんですね。その時は、その相手にコトバの暴力はかなり向きましたよね。そんなこともやってきたなあ、でもそれを乗り越えてきたんやなあって。乗り越えられたのは、何でかはわからないですよ。乗り越えられたとも思わないし、乗り越えてる途中かなっていう気もするし。すごい複雑なんですけど。どこにゴールがあるんやろうか。…まだ途中なんです。とりあえず仕事のことだけがキャリアやって思われてるんだしたら、なんか寂しいなあっていう感じがします。いろんな意味でキャリアっていうコトバを使っていきたいなってすごく思います」

小林 「最後、塾長さんが言ったはったことをすごく私も思ったんですけど、A さんの話の中で、A さんが A さんのコトバで語ったはるのがわかりやすかったというか、響いたというか、聞き入ってしまった。なので自分も、自分のコトバで人に自分のことだったり伝えたいことを伝えられるようなコトバを、上手く扱いこなせるようになりたいなと思いました」

E さん 「ありがとうございました。今回二回目参加させてもらったんですが、前回最後に、どんどん楽しくなりそうだって言って帰った

と思うんですけど、今回も楽しかったです。キャリアは失敗も大事だろうなっていう話で、僕ちょうど2~3週間前、他の研究者の人と話して、「僕、失敗待ちしてるんです」って話してたところだったので、ちょっとびっくりした。僕、お調子者で生きてるので、どこかしらガツンと失敗をしないと新しい自分に気付けないし。何でも調子よく行ってしまうと、本当に孤独になってしまう。マイナスじゃない方の孤独感っていうのが、多分お調子者にはあって。失敗っていう体験をしないことには、自分が成長することもなし、新しい道っていうのは開けないなとつくづく今回思いました。失敗しましたが、乗り越えましたっていう話を次回できるように、目の前にあることを必死にやっていたらいいかなって思いました。ありがとうございました」

Cさん「初めて参加させてもらいましたが、正直私は聞き取るという能力があまりないので、難しい話をしたはる時は、「？」って感じだった。しゃべるのも苦手なんですけど…。塾長が言ったはった、この瞬間が今幸せやっというその気持ちは、すごくわかるんですよ。そういう話を聞いて、自分の中に入れたりとかして、自分で上手に表現出来たらなと思います。以上です」

田中「スタッフの田中です。今回お話を拝聴していて、私はわりと、Hさんとかがおっしゃったように、ストレーターであることにコンプレックスがあると言いますか。そういう気持ちを、知識館にいてることで感じてたのを思い出し始めたということがあったんですけど。Iさんが、ストレーターじゃない人達は、今はそうでも、その渦中にいる時は本当にしんどいとおっしゃったように、私には心の底か

らは分からないんですけど、きっとその通りなんだろうなと思って。社会全体を見回した時に、キャリアはビジネスキャリアのみ、とか、社会は簡単なフレーズとか簡単なコトバとか、発しやすいコトバとかにどうしても感わされたり、それが正解であるかのように思ってしまうんですけど。本当のことは、コトバにするのに手間が掛かったりとか、難しかったり。自分が今持ってる語彙では、表現出来ないような気持ちとか感情とかっていうのが、もっと世の中で肯定されていったらいいのになって。マジョリティでもマイノリティでもなく、ストレーターでもいいよね、ストレーターじゃなくてもいいよね、どっちでもいいんじゃないっていうのがもっとみんなと共有し合えたらいいのにな、っていうのはすごく思いました」

Hさん「ここに来ると、感じるいろいろなあって。皆さんのお話の中にいっぱいいい話もあるしヒントもあるし、いつも感じて帰ります。キャリアの話であるのは、私自身、広い概念で捉えてる。いわば、ビジネスキャリアの部分と、ライフキャリアの部分全体でキャリアやと思ってるので。それって、塾長さんがおっしゃる「物語」。キャリアってそれじゃないの、って実は思ってる部分があります。そんな風に今日も感じさせていただいた時間でした。ありがとうございました」

Jさん「今日初めて参加させていただいたんですけど、皆さんがいろんな話題を提供されるので圧倒されて終わってしまったなという感じなんです。最後考えてたのが、当たり前って何だろうなって。自分にとっての当たり前もそうだし、世間にとっての当り前の基準とか。そういうのもそうだし。そういうのを一回ほどこいて考えて、そこからもう一回見てみたいな

って。当たり前なんてことなくでもいいんだけどな、っていうことを考えてました。ありがとうございました」

Kさん「えっと…自分は、頭で考えてることとかを口に出した話すのが苦手なんですけど、今日いろんな方の話を聞いて、いろいろ考えることが多くて、それを自分のコトバで伝えていけるような、そういう風になれたらいいなって思いました」

Iさん「楽しかったですね、今日は。若い人がねえ。いつになく多かった。初めてです、この感じ。それが今までで、一番よかったです。皆さん経験がね、話下手っていうのは、まだ慣れておられないのは当たり前で、そんなことは全然問題じゃなくって。でもこれからいろいろ感じたり刺激を受けながら、悪戦苦闘っていうか。当事者である時は本当に辛いと思うんですよ。でも、本当のところ、あるがままにっていうところが行き着くところやなど。いろんな偶然もあったり、それが必然やったり。やっぱりでも、育ってきた環境も影響もある。ああはなりたくないって思ってた親をどこかで和解しながら受け止めていたりとか。そのことが自分のいい経験なのかは知りませんが、親と同じ道を選んでいくっていうのを意識できてなかったかもしれない。あるいはしてたかもしれないけど。だから悪戦苦闘するし、答えが見つからないまま苦勞する。苦しいけど、生き続けるっていうことですね。放棄しないで生き続けて行かざるを得ない。生きることを諦めないっていうことだけ、持ってたらいかなあって。行き着くところは、誰の形でもなく、自分のあるがままを受け入れられるようになるっていうのが死に近づいてる人間の目標かもしれないなって。落ち着いていくようにね。

思春期は悪戦苦闘の年やし、私くらいの年を過ぎたらね、自分をまとめていく時期に差し掛かっていく、ただ寿命が延びていってるから、まとめていくのにどんな悪戦苦闘が始まるかなあとか。もうわからない。わからないまま、年取っても悪戦苦闘はいろいろ起こりますし。でもだんだん受け入れられるようになっていく。生きることを諦めないことが大事かなと思います。楽しかったです」

Mさん「いろいろ話をいろんな人から聞いて、自分は頭悪いのであんまり難しいことはよくわからないんですけど、こうやって話を聞いて、自分はやっとな顔を上げられるように、前に向けられるように、だいた先に行けるようになってきたので、先のことも考えさせられました。ありがとうございました」

Aさん「今日話を伺いながら何度か、感極まってしまう時があつて。それを落ち着いて聞いていられる時に、瞬間にぐっと気持ちが高ぶったのかなっていうことを思うと、やっぱり…。だいた今は仕事もしていますし、いろんなことを考えていけるようになった。なので、ここまでしんどかった時期のことに引っ張られて、引きずられてその時間が止まってしまうようなことも今は少ないんですけど、今日聞いてても、感極まってしまう時の話っていうのは、自分が一番しんどかった時の感じがそのまま……（涙）……思い返されるといふか。その時の感じが蘇ってくる。でもそれは、ちょうど2回くらい前のラウンドテーブルの最後にも、やっぱり生まれ変わって同じ人生を歩みたいとは思わないし……。でも、今日また月日が経って、こうやって来ている自分はまたその時とは違って、自分の人生でよかったと思えるような感じがすごくして。今もすごく苦しいけれど、その自分の

今の人生を、次生まれてくる時はもっと幸せに
っていうのではなく、もう少し自然に自分の
の人生を引き受けられているし、これからも
また積み重ねていく毎日っていうものに自
分自身も向き合いたいと思えるようになって
いるんだなってというのは、今回のすごい変
化として自分が捉えられているので、そのこ
とも聞きながら確かめられたことがよかつ
たなと思いますし…すみません、泣いちゃつ
た…」

塾長「よかった。よかった、よかった」

川畑「子どもの虐待防止のことをよく考えてたん
ですけど。地域のいろんな役の人に協力して
いただいているんなことをしてるんだけど、
どうしても専門家に任せる、みたいな感じに
なってくることがあるわけですよ。地域の民
生委員さんも、役所の皆さんも、他のことや
ってきているのにいきなり虐待のことしな
いとあかんってというのはあるんやけどね。児
童相談所が専門やからってなったりする。ど
うなんやろうね…。例えば電子工学のことな
んかは、その専門家しか知らへんし、他の人
にはわからへんのやけど、人の気持ちとかっ
ていうことには、心理の専門家もいろいろお
るわけやけどね。心理の専門家よりも他の人
の方が心理に敏感やって思う人もたくさん
いる。ただそういう意味で言えば、人生経験
と、それに基づく常識の力ってというのはすご
い大事なんで、そこを専門家じゃないからっ
て言わず、皆で磨いていこうよと。専門家っ
て言われる人も、訳のわかったようなわから
んようなことを言うんじゃないで、自分の人
生経験に基づいたところで考えていく。その
ところも大きく持って、みたいなね。という
ところがキャリアのことと重なってきて。ど
う自分が考えて進んでいくかっていうこと

が大事になってくるんやなっていうことを
すごく思いますね。というのが今日の感想で
す」

塾長「川畑先生、ありがとうございました。Aさ
んの話、何とも言えないくらいに感動的だっ
たんですけど。彼女の言ったように、2回前、
「私はこんな人生は歩みたくない」って確か
に言ってました。その時と、今回の違いつて
いうのが、彼女が生きてきた証なんやろうな
って思うんですよ。ものすごくそのことって
大事なことやと思うんですよ。生きてる感
覚。彼女は地に足を着けるっていうコトバで
表現するんやけど、いつも感じられることじ
ゃないのかもしれない。ふとした瞬間に、私
は生きてるんやと。地に足を着けて立って
るんやっていうのを感じられる瞬間ってやっぱ
り感動するんよね。またこういうものを皆で
共有できるのは幸せやなって思うし。それは
彼女の話だけではなくて、皆の話でもあると
思うんですよ。で、D君が、何で俺は呼んで
くれへんのやって言ってたけど、ラウンドテ
ーブルは、元々は指導者のための学びの場や
った。指導者は指導するんじゃないで、学ば
ないといけないっていう前提があつて。そう
いう形でスタートした。今回は初めてのパタ
ーンやったんや。でもね、私いつかはそうし
たいなと思ってた。私はいつもラウンドテ
ーブルの冒頭で知誠館の生徒のエピソードを紹
介してた。それが大体考えるきっかけ、お題
やったわけや。でも今回は、卒業生も現役の
子も出て来てくれた。それこそ、リアルな「生」
なんですよ。コトバなんて足らなくていい
んですよ。コトバはコトバ。それこそキャリ
アだって、キャリアはキャリア。運んでるん
ですよ。その時の思い、考えであるとか。そ
れは入れ物にしか過ぎない。でも大事なんや

けどな。そのコトバを介して伝わるもの、感じ取れるもの。そういうのがやっぱりすごい大事やと思う。Mちゃんが言った、私は前に向けるようになってきた、と。彼女は前に向けなかったんですから。ずっと下向いてしか生きてこれなかったんです。私が彼女と会った時に、この子を何とか前を向かせたいって思った。それには、何年もかかる。そんなすぐじゃない。この子が前に向けるようになるまで、何年もかかるわけ。それは、この子にずっと私たち寄り添いながら…。彼女にとっての経験でもあるけど、それは私たちにとっての経験でもある。大人も子どももひたむきさは一緒かもしれません。いろんな葛藤がありながら生きてるやと思うんですけどね。指導する側とされる側、そんな関係じゃなくて、そんなことを出し合える場になっていったら、こんな場、他にないんじゃないかなって思うくらい素敵なお場になるように思うんですけど。実は、私たちは裏庭に小さい森を創ろうと思ってんです。こういうことを屋外でしゃべりたいなと思ってんです。真ん中に大きな木を置いたテーブルを囲んで。こういう場は、いろんなところに出来た方がいいかもしれない。こだわりを抱えた若者たちと、こだわりを持って生きてきた大人たちが出会える場。そういうことに発展していくと思うので、いろんなことで力になってもらいながら見守ってもらえたらと思います。ありがとうございました」

ストレーターではない若者たちのキャリアを見つめてみたいと考えた理由。それは前回、大学生たちの就活の実態に触れ、その渦中で生じる様々な葛藤を知った時に、私たちが普段関わる不登校やひきこもりを

経験した若者たちのそれとは、どこか大きく違っているような気がしたからです。それがいったい何なのか。そこを見極めてみたいというのが、今回のラウンドテーブルの目的だったのかもしれませんが。

ストレーターと、そうでない若者たちのキャリア形成の違い。その一つが、「物語性」ということでした。ストレーターでない若者たちのキャリア形成は、どこか挫折を前提としています。そういう意味では、「セカンドキャリア形成」としての傾向を色濃く持っているのかもしれませんが。挫折体験からの再出発。そこには自分と向き合い、他者と関わることを通して癒され、自己反省に立ち、自分のこれまでの枠組みを更新し、より大きな枠組みを構築していく、といった変容過程が見られます。だから、その変容を貫く文脈は個人の人生に重なり、彼らのライフストーリーを描くのです。彼らのキャリア形成を「豊かな世界」と表現した参加者がいました。その豊かさとは、経済的なものを指しているわけではありません。社会的なものでもないでしょう。それは、ひたむきに生きようとしている彼らの生き方に対して投げかけられたコトバのように感じられました。



支援と被支援、援助と被援助の壁がなく
なる時、そこにはキャリアという共通の話
題に対して向き合う人たちが集っていま
した。若者たちは自分たちのこれまでの経験
を振り返り、そこを足掛かりとしてこれら
の未来を描き、援助者たちは、若者のキャ
リア形成に携わりながら、自らのキャリア
を問い、新たなキャリア観をそこに付加し
ていこうとする。そんな更新性を備えた学
び合いの場に発展していくことを期待しつ
つ今回のラウンドテーブルの幕を下ろしま
した。

『幼稚園の現場から』

36・満3歳児保育について

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

幼稚園の持つ機能の変化をざっと見てみると、ここ20年の間にずいぶん変化し、多機能になってきたなあ、と感じます。

原町幼稚園の記録を見ても、1998（H10）年には、延長保育や居残り保育と言われていた教育時間後の「預かり保育」をなんとなく始めたとあり、2002（H14）年には「満3歳児」クラスを開始して12名ほどの入園児があったと記録されています。

国が満3歳児受け入れ制度を打ち出して保護者への補助を開始したのは2000（H12）年からですし、預かり保育は都心部ではとっくに実施されていました。今では当たり前になっている「保育時間の延長」「受け入れ年齢の拡大」の始まりです。このように**幼稚園に育児支援や就労支援という機能が付加されていきました。**

大きな波は2015年（平成17）から本格的に始まった「子ども・子育て支援新制度」です。1）本格施行の前から、自民党政権→民主党→自民党という国の舵取りの移ろいにゆさぶられながらも、**幼稚園と保育園の機能を併せ持った「幼保連携型認定こども園」**に代表される新制度の施設が生まれました。幼保連携型認定こども園は7年間で10倍ほどにも増えています。2）

施設のタイプが変わるという内的変化だけではなく、**外的環境も大きく変化**しています。たとえば「小規模保育施設」や、一定基準を満たせば国から補助が出る「企業主導型保育園」（従来の企業所内保育所・託児所）も乱立し、**子どもを預ける施設の種類も多様化**しました。

さらに！今年2019年10月からは**幼児教育の無償化が始まります**。まだ概要しか情報は出てきていませんが、自治体向け説明会では、立ちくらみしそうな複雑な事務処理資料が提出されています。3）

まさに幼稚園経営者にとっては変化の20年でしたし、あと半年ほどでまた大きな渦に巻き込まれるかと思うと、まだまだ過渡期のまっただ中にいるのだと思わずにいられません。逆に言うと戦後50年以上も同じように運営してきた幼児教育界もいよいよ新しい時代に合わせて変化を求められているということなのでしょう。

《参考HP》

- 1) こども園の詳細▶内閣府/子ども子育て支援新制度
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html>
- 2) こども園の状況▶内閣府/認定こども園に関する状況について（平成30年4月1日現在）
https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen_jokyo.pdf
- 3) 幼児教育の無償化・都道府県説明会▶内閣府/子ども・子育て支援新制度/自治体向け情報
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h310218/index.html>

さて、そんな変化の中で実施から20年も経過し、幼稚園でも定着した感のある「**満3歳児保育**」に注目します。一応整理しておきましょう。4)

幼稚園の学級編制は、学校スタイルの「学年」という考え方を取っているため、年少組からの3歳保育から幼稚園に入園するのがスタンダードでした。幼稚園を所轄する県も、いわゆる「**未満児**」を入園させることはまかりならない！という厳しい行政指導がありました。そのため独自に未満児を受け入れている園は、育児支援やプレ保育という形態を取ってあくまでも園児数には入らない形態を取って運営していました。

ところが2000（H14）年から、少子化のため幼稚園児数減少を補うことと、育児支援・就労支援を促進するために、2歳児のうち年度内に3歳になる子どもたちを「**満3歳の誕生日の翌日から随時入園して良い**」と規制緩和し、入園を促進させるために就園奨励費（幼稚園保育料等の減免を目的とした補助金）を保護者に出しましょう、という政策が打ち出されました。なので、満3歳児クラスとは、保育園や幼保連携型認定こども園でいう2歳児クラスであり、**幼稚園や幼稚園型認定こども園でしか設置しないクラス**と言えます。実施形態は受け入れ人数や園の規模によってまちまちで、年少クラスに合流させて一緒に保育を行っている合流型、満3だけの独立したクラスとして設ける独立型に分かれます。

余談ですが、幼児教育の無償化案では、保育園の2歳児クラスは対象外。幼稚園の満3歳児クラスは無償化の対象という制度の狭間で起こったおかしな現象も見られています。

4) 学校教育の対象年齢について▶文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/___icsFiles/afiedfile/2011/03/23/1303354_5.pdf

『幼稚園年少組入園では遅すぎる！』

ざっと概要を説明しましたが、20年間満3歳児クラスをやってきて最近思うことがあるので、そのことについて書いていこうと思います。

原町幼稚園の満3歳児クラスは「うさぎ組」という独立タイプです。最初の頃は「**パートなどの仕事を持つお母さん方が、3歳未満の我が子を後ろめたく思いつつ預ける・・・**」というイメージで、就労支援としての存在意義が高かったように思います。今思うと申し訳ないのですが、満3歳の誕生日後に随時入園してくるので幼稚園児の晴れ舞台とも言える年間の行事にも積極的に参加させることもなく、**オマケにやってる程度の認識**でした。人数も年少組の3分の1程度、小さな子どもたちのクラスを、経験の浅い保育者や、非常勤の保育者が担当し、一日危険の無いように遊ばせておけば事足りる程度の認識でした。

転機は4年前でした。その年は経験9年目の保育者がうさぎ組を担当しました。その年のうさぎ組の子どもたちはイキイキと成長していくし、しょっちゅう年長さんがお手伝いに入り浸っているし、園内じゅうの子どもたちから可愛がられ、誰も

いなくなった園庭を我が物顔で毎日毎日遊び回り、**大きな存在感**を示してくれたのです。園の中でも先輩クラスの力を持っている保育者が受け持つことで、うさぎ組の子どもたちのポテンシャルがグーンと引き出され、園の誰もがそのことに気づきました。「うさぎ組って、いろんなことができるじゃん！」って。

なので、**うさぎ組は力を持った中堅以上の保育者が担当すること**にしました。その実践例については次号以下に持ち越しますが、僕がいま、いちばん感じていることは・・・ソニーの伝説社長が書かれた古い育児書（1971年初版・2008年新装版）」をパクった訳ではありませんが『幼稚園（年少組入園）では遅すぎる！』と強く感じています。

なぜなら、
幼稚園に入園してくる子どもの**発達の遅れが顕著**になってきたからなのです。

◆例1：トイレでできない。

トイレトレーニングができておらず、おしめが取れないまま入園式を迎える年少児が一定数居るのは珍しいことでは無くなりました。保護者へのプレッシャーを必要以上にかけないために、入園式までにはパンツにしましょう！という強制力も発揮していません。紙オムツの性能が上がって数回おしっこをしてもお肌サラサラなことも関係あるのかもしれませんが、おしっこは出来るけどウンチはオムツを履かないと出ない、などの新たな悩みも生まれています。年少組で半年から一年かけてやっとトイレでおしっこができるようになった、というケースが毎年1～2件ほど発生しており、もっと早い段階でアプローチする必要性を感じています。

◆例2：外遊びの経験が圧倒的に少ない。

入園してきた子ども達を見ていると、足もとがおぼつかないためにちょっとした坂道で転んだり、園の遊具で十分に遊べなかったり、両足で跳ねることができなかったり、今まで見られなかった未発達が目立ってきました。まず身体が発達しないと頭も指先も発達していきません。うさぎ組に入園した子どもたちや、プレ保育で園に半日預けてもらった子どもたちを見ていると、遊びに慣れることで目覚ましい発達を見せ、本人もイキイキしている例を見ると、早い時期から身体を発達させる良い環境でのびのび遊ぶ必要性を感じるのです。

◆例3：ことばの発達が未熟。

近所に同年代の子どもが居ないことも多く、群れて遊ぶ機会を持たないまま入園する子どもも目立ちます。子ども同士の会話に慣れていないだけでなく、家庭での会話が少ないのか、言葉のキャッチボールが当初出来ない子どもも見受けられて、一見発達障害かと思うのですが、うさぎ組に入園してしばらく経つと、そうではなかった・・・というケースが何人かありました。保護者へのヒアリングでは、家庭でスマホやタブレットの視聴時間が2時間以上と長く、とくにYouTubeの動画を次々と見ているという話も聞きました。影響も大きいのでは、と考えます。

◆例4：育ちの環境の変化・その一つ「親」

人間の子どもは野生動物ではありませんよ、訓練しなければできるようにならないですよ！と言いたいケースに出会うことが多くなりました。「そのうちできるようになる」と漠然と思っているのでしょうか、何を育ててきたんだらう？と思うくらい生活訓練ができていないのです。「ひらがなや英語もタブレットで結構覚えているんですよ！」と喜ぶお母さんですが、子どもはおしめも取れておらず、自分のことはほとんどできない状態であることになんの違和感も感じていないケースや、服の着脱、靴の脱ぎ着、食事の世話など全てやってあげて「甘えんぼで・・・」と言われても、そういう状況を作っていることに気づいていないなど、親へもきちんと子どものできることや可能性を伝えていかねばと思うのです。

※親の変化は社会の変化、環境の変化が影響しています。話が広がるので今回は親に絞ってみました。

★子育て中の夫婦共働き世帯も増加し普通になってきました。20年前にあった「3歳未満の我が子を後ろめたく預ける」という意識はもうありません。

例に挙げたような懸念を解決するために、働いているいないに関わらず、子どものバランスの良い発達のために、満3歳（または2歳）から必要な保育・教育を行っていくことが必要！しかも保育園のように長時間ではなく幼稚園の教育時間以内の母子分離が有効だと考えています。もうすでに取り組んでいる園も多く、遅まきながらという感はありますが、**改めて満3歳児クラスの可能性に期待し『来年度からは4年保育をめざしていこう』**と方針を掲げたところではあります。

年中のお兄ちゃんに見守られて… ぼくだつてのぼつてみせる！



原町幼稚園 園長 鶴谷圭一 (58)

HP : <http://www.haramachi-ki.jp/>

MAIL : office@haramachi-ki.jp

Twitter : @haramachikinder

Instagram : haramachi.k

▶記事の内容でご感想・ご意見ご質問等ありましたら気軽に連絡ください。

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- 第1号 エピソード (2010.06)
- 第2号 園児募集の時期 (2010.10)
- 第3号 幼保一体化第 (2010.12)
- 第4号 障害児の入園について (2011.03)
- 第5号 幼稚園の求活 (2011.06)
- 第6号 幼稚園の夏休み (2011.09)
- 第7号 怪我の対応 (2011.12)
- 第8号 どうする保護者会？ (2012.03)
- 第9号 おやこんぼ (2012.06)
- 第10号 これは、いじめ？ (2012.09)
- 第11号 イブニング保育 (2012.12)
- 第12号 ことばのカリキュラム (2013.03)
- 第13号 日除けの作り方 (2013.06)
- 第14号 避難訓練 (2013.09)
- 第15号 子ども子育て支援新制度を考える
- 第16号 教育実習について (2014.03)
- 第17号 自由参観 (2014.06)
- 第18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)
- 第19号 こんな誕生会はいかが？ (2014.12)
- 第20号 ITと幼児教育 (2015.03)
- 第21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)
- 第22号 〔休載〕
- 第23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12)
- 第24号 お話あそび会その1 (発表会の意味)
- 第25号 お話あそび会その2 (取り組み実践)
- 第26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える)
- 第27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)
- 第28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03)
- 第29号 石ころギャラリー (2017.06)
- 第30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会)
- 第31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた)
- 第32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法)
- 第33号 〔休載〕
- 第34号 働き方改革・一つの指針
- 第35号 働き方改革って難しい

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁶

西川 友理

AさんとBさんの「支援」

「これなら私も出来るかも！」と思
い立ち、自宅を開放して「子ども食堂」
を始めたAさんという女性がいました。
月1回開催、ポスターをつくって、部屋
に専用スペースを確保して、ご飯もたく
さん作って…しかし当日集まったのは、
普段の茶飲み友達、そして自分の娘と孫
2人。

「ま、最初だしね。」
などと言っていましたが、翌月も、また
その翌月もなかなか地域の子どもはや
って来ず…。

「なんか…つまらないな。」

Aさんはこの月一回の子ども食堂を
半年もたたずにやめてしまったとの事
です。

ある市民講座で、福祉の地域活動に
関する講師をさせていただいた時のこ
とでした。講義後、受講されていた方の
1人であるBさんが私に質問に来てく
ださいました。

「あの、私、貧困の子たちを助けたいん
ですけど、そういう団体ってどうやっ
たら始められますか？」

と勢い込んで私に問うBさん。

「貧困の子たち…って、例えばどんな？」

「子どもの貧困って話題になってるじゃないですか。私、そういう子たちを助けたらいいって思って。」

と、畳み込むようにおっしゃいます。

「そうなんですね。今、子どもの貧困についての活動は何かしていらっしゃるんですか？」

「いえ、今はまだやっていないんですけど、そういう団体を自分でやりたいって思ってます…」

イメージに対する支援

2人とも、困っている子どもに支援したい、という熱い気持ちをお持ちでした。しかし2人とも、なんだかその気持ちが空回りしているような印象を受けました。

そもそも、彼女たちは、だれを見て、「支援をしたい！」と思ったのでしょうか。私は何となく、この2人の身の回りに、具体的な“困っている子ども”は、いなかったのではないかと思うのです。テレビや新聞で「子どもの貧困が問題になっている」という事を見聞きして、感情が動かされ、思わず動いてしまった、あるいは動こうとしたのだらうなと思います。

いわば彼女たちが支援しようとしたのは、「イメージの中の子ども」あるいは「メディアに編集され、“貧困状態にある”と名付けられた子どもイメージ」なのではないでしょうか。あるいは、子どもを支援したい、というより、“支援

活動をする私”になりたいという思いだったのかもしれませんが。地域にはどのような子どもがいるのか、確認をせずに動いてしまうと、実態がともなわず、まともな活動につながりません。

CさんとDさんの「支援」

とある大きな社会福祉法人の生活施設にお勤めの相談員であるCさんとは、社会福祉士の相談援助実習をお願いした先の実習指導担当者として出会いました。

「Cさんは大変有能な相談援助をする人だ」と、所属組織の中でも評判の高い方の方でした。なるほど確かに、実習の手続きについても、何から何まで話が早く、プログラムも日本社会福祉士会作成のテキストにあるモデルプログラムに基づいて、綿密に練られています。穏やかな雰囲気、すばらしく効率的に段取りを進めてくださいます。

しかし私には、何か違和感がありました。Cさんとの会話が、なんとなく成り立たないのです。

「様々なことが、スムーズに進んでいる。今の所、大きな問題もない。でも…これでいいのかな？ どうして私、こんなふうを感じるんだろう…？」

実習巡回訪問時、Bさん自らが利用者家族様との相談場面で気を付けていらっしゃるということについて、私と学生に話をしてくださったことがありました。Bさんはおっしゃいました。

「…家族面接の前に、当然、ケースの概要は把握しておきます。まず、落としど

ころを決めて、家族面接に挑むんです。そしてその事前に決めた落としどころに持っていけるように、面接を進めるんです。サービス提供のためには、そういう段取りや順序を想定しておくことが大事だと思います。」

そう言われて、今まで感じていた違和感の正体に気付きました。

「あ、そうか。この人、私の話を聞いてないんだ。」と。

「利用者さん家族に対して、あらかじめ“支援の段取り”を考え“落としどころ”を設定し、その支援を実施するための面接をしていらっしゃるように、自分の立てた“実習の段取り”や“実習の落としどころ”に基づいて、私や実習生に対して動いてらっしゃるんだ。」

「…いや、悪い事じゃないんだよな。いわゆる“支援の見通しを立てる”ってことなんだろうな。」

「実際に、実習契約上の利害は一致しているし、指導の方向性も養成校と同じだし、システムは滞りなくすすんでいるし、実習プログラムもきめ細かく順調だし…。」

「…だけど、なんだか、なんというか…。」

何とも言えない気持ちになりました。そしてどうやら、実習生も同じような印象を持っていたようです。

「Cさんって、色々とお話をさせていただけるし、いいこと教えてください、実習も順調やけど…なんか、私の知りたい、学びたい事っていうより、法人の教えたい事を聞かされているって感じかなあ…。いや、それらは学ばなきゃいけない事だっていうことは、解っているんです

けど…。」

保育士養成校の学生達は、実習に行く前に、子どもの発達過程について学びます。つまり、「大体〇歳ならこれくらいが出来る」「〇歳児にはまだこれは難しい」といったことを覚えます。

それらを覚え、実習に出、そして帰ってきた学生達。

「私の行った実習先の園の子ら、まだ2歳なのにクラス全員××が出来ててんよ」

「すごいなあ、私が行った△△保育園の子たちなんか、4歳になっても◇◇が出来てなかったよ」

などと、わあわあ話しています。

基準になっているのは、教科書で覚えた“子どもの発達過程”の一覧です。その発言が気になって、私は口を挟みません。

「その、何歳でこれが出来る、あれが出来る、ってあるでしょ？それってどの子と比較してるの？」

「え、どの子って…？。」

「その“発達過程”の表に載っている子ってさ、まぼろしやん。その子、どこにもおらへん子やん。」

曇みかける私の発言に、不満そうな学生Dさんが、意見をくれます

「…比較しても意味ないってことですか？でも、だって先生ら、この教科書、教えてたやん。これ覚えろって言うてたやん。」

「うん、確かに言うた。言うたけどさ、そういう事やないねん。」

モデルに基づいた支援

Cさんは、「実習プログラムのモデル」を遂行しようとしてしました。Dさんをはじめとした保育学生たちは「〇歳児のモデル」を参考にしました。これらのモデルはイメージではなく、きちんとした根拠があるモデルです。しかし、その「モデル」もまた、「標準的なマニュアル」「平均的な値」を表したものであり、架空の“標準的な”実習生に向けたもの、架空の“平均的な”子どもの姿なのです。そのようなモデルをもとに支援を組み立てると、その場にいる多くの人に無難に使える支援計画になるかもしれませんが、決してその人のための支援計画にはなりません。

知るべき相手は目の前の人

あらゆる支援は、こちらが具体的に相手に働きかける前に、まず「相手をよく見る」ことから始まるように思います。さらには、支援は、なんらかの支援を単に目の前の相手に渡す事ではなく、相手と私の関係性の中で構築される関係性の中で行われるやり取りに基づくものだと思うのです。そのためにも、まずは目の前の相手をよく見る、という事から外れてはいけないと思っています。

「よく見ることから外れる」とはどういうことでしょうか。

それは、実際に、目の前にいる〇〇さんよりも、「これはこういうもの」「これが正しいとされている」「セオリーではこれ」「平均値はここ」というイメー

ジ、モデル、多数派、有力説、データの平均を基準に、目の前のケースを見てしまう事です。頭でっかちになりすぎて、相手に対する視野が小さくなってしまいうという事です。

イメージやモデルは不要、 というわけではない。

ただし、イメージやモデルなどに、意味がないということではありません。

ある状況にいる人に対するイメージは、ステレオタイプなモノの見方だからと切り捨ててしまうことも出来ますが、世間の一般的な目から見た「普通感覚」に近いものです。目の前の利用者とその人の関係する様々な人(支援者も含めて)の状況に、世間一般にあるイメージは大変大きな影響を与えます。対人援助について学び、理解を深め、経験を重ねるほど、対象に対する理解、特に世間からマイノリティとされている人に対する理解は、世間一般に浸透しているイメージから乖離してしまいます。むしろ世間一般ではどのようなものと受け止められるのか、「普通感覚」としての偏ったイメージを意識する必要があります。

支援のモデルはさらに重要です。子どもの発達過程のモデルや、ある支援システムのモデルプログラムは、単なるマニュアルであるとも言えますが、その背景には大量のデータによって算出され、膨大な経験によって導き出された「理論」があり、「集合知」があります。モデルに基づく支援システムの運用は、根

拠が明確で、多くのケースにおいて大変有効なものです。

そもそも福祉サービスは、国のシステムや制度に基づいて運営されているものが多いですから、目の前の利用者がどういう状況であっても、「モデル」に基づいて作られた一定のルールや、基準などに基づいて支援は展開されます。対人援助職が、これらのルールや基準を知らなかったり、意味を理解していなかったりという事では、支援も何もあったものではありません。

この社会において福祉サービスを実施していくためには、イメージやモデル、つまり“普通はこうだろう”という感覚と知識を持っておくことがやはり必要だと思います。

知識や経験を大切にしつつ、 目の前の人に対峙する

それらの普通の感覚と知識を頭に入れた上で、それでもなお、実際に“ある人”を目の前にした時に、思考に枠組みを設けず、ただただ素直にその人の思いや考えを尊重し、注意深くその人を知ろうとすること、知っている事や理解している枠組みと今までの経験をいったん横に置き、その人自身と向き合うこと。

そして、いざ具体的な支援を考える時には、中心にその人の思いや考えを据えた上で、既存の枠組みである「普通の感覚」や制度、知識の枠組み、経験則とどう組み合わせしていくのかを考える。

これを私は、「システムは明確に、運用は柔軟に」とよく表現します。そん

なバランス感覚を持って、利用者とのやりとりの中で支援が展開していく事が大切だと思うのです。

そしてこのような個別のケースへの積み重ねから、また新たな支援のモデルが生まれていきます。

養成校にできる事

となると、福祉系対人援助職養成校が学生に出来ることはなんでしょう。

「イメージ」は世の中にあふれていますから、まずは感情的にそれらに振り回され過ぎないように、法制度、システム、理念、データといった、いわゆる福祉の「モデル」を学生に伝えます。

これと同時に、実際に様々な場所に出向き、人に出会い、「よく見る」体験を積み重ねることで、その場で自分がどう考え、どう動くのかを問われるような経験をする機会を学生に提供します。

そしてそれらすべてについて、振り返ることが出来る時間的余裕や機会、経験を語り合える場などが必要だと思います。

多分、それらを展開する場が授業であり、実習であるのだと思います。

…色々考えてみましたが、結論はけっこう普通です。普通というか、王道です。

でも、「何を大事にしているから、こんなことしているのだっけ」という事から、軸足を外さないことが大事だと思っています。普通の事を普通に行う中で、「システムの明確さ、モデルの大切さ、

ただ目の前の人に向き合い、よく見る事」をうっかり忘れてしまわないようにする、といったことに気を付けたいのです。

もうすぐやってくる新入生


「保育園の先生になりたいんです。子どものボランティアとか、したことないけど…でも、子どもって可愛いから。」

保育者のイメージや子どものイメージに惹かれて、4月にはまた、学生達が入学してきます。

授業の中で様々な制度、システム、モデルに出会い、また実際に現場でよく見て、向き合う経験をし、それらについてじっくり考える中で、彼らはどんな支援を作り上げていくのでしょうか。

明確なモデルとなる支援システムが存在しているからこそ、それを運用する際に、その人らしい支援が生まれるのだなあとと思います。

ある程度実習を経験した学生に、支援計画を立てる宿題を出すと、同じモデルを教えているのに、それぞれが違うカラーの支援を作り上げてきます。それを基に授業中に話し合う中で、学生同士はもちろん、私も新たな視点を得ます。様々な視点の存在を知ると、ケースを多面的に理解出来るようになり、チーム支援をする大切さ、連携や協働の意味も自然に身につきます。面白いなあとと思います。



境界あれこれ

11

～ 恋心と恋人DV・コントロールの境界 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

はじめに

最近、中高生の恋人関係が心配になってきた。

まず、知り合うのがネットというケースが増えていること。面談で「彼氏できた！」と嬉しそうに報告してくれる子に、「良かったねえ。同じ学校の子？」と聞くと、「いや、こっちの子じゃない」という。「どこの子？」と聞くと「〇〇県〇〇市」とはるか遠い地名を言う。

そしてしばらくして、「彼氏どうしている？」と聞くと「えっ？どの彼？」「〇〇県の。」「もう別れた！今××県の子と付き合っている。」と。付き合っているのかどうかも定かではないが、時々、彼氏が逢いに来るとか、逢いに行くとかという話も聞く。「危ないんじゃない？」と言っても聞く耳持たずで、そういう時は学校の先生に伝え、保護者に連絡を取ってもらおう。

ある時、自殺願望の中学生の女の子が、同じ方

法で、成人男性と知り合い、一緒に死のうという話になったこともあった。幸い事なきを得たが、危険極まりない時代である。

そんな中で、恋人によるDVの話があった。そこで今回は、恋人同士の恋心とDVによるコントロールの境界について考えてみようと思う。

<あばたもえくぼの恋心>

人を好きになると、その相手の何もかもが愛おしくなるだろう。彼氏に好かれようと、彼氏の望むとおりにしようとする。長い髪が好きだと聞けば、髪を伸ばし、短い髪が良いと言えは髪を切る。

ひらひらの服は嫌いだと言えは、ボーイッシュな服装にし、赤が好きだと言えは赤い服ばかりを着るようになる。食べものの好みも、彼氏の望むようにしようとする。

大黒摩季作詞作曲の歌に「あなただけみつめてる」というのがある。その歌詞が正に恋心で縛られる女の子の姿である。「あなたがそう 喜ぶから 化粧をまず止めたわ 何処にいても捕まるようにポケベル持ったわ・・・あなたさえそばにいれば 他に何もいらぬ・・・あなたがそう 望むから まっすぐ帰るようになった ザツだった言葉使い丁寧になった・・・あなただけみつめてる 昔みたいに笑わなくなった・・・そしてほかに誰もいなくなった 地味に生きていくの あなた好みの女・・・あなたの微笑はバラ色の鎖 行け 夢見る夢無し女！！・・・」という歌詞である。

恋は盲目、恋の病、恋患い、等々恋に関わる言葉は沢山ある。相手がどのような人でも、好きになってしまったら、誰の忠告も入らない。反対されればされるほど、相手を思う気持ちが強くなる。ロミオとジュリエットではないが、無理心中になってしまうことさえある。

恋心ゆえに、相手に合わせ、相手の言うとおりにしようというのは、マインドコントロールとどう違うのかと思うときがある。

<マインドコントロールと洗脳>

マインドコントロールと似た言葉に洗脳と言うのがある。

洗脳とは・・・個人の思想や価値観を、物理的、社会的圧力を加えるなどの操作によって必ずしも本人の欲しない方向へ急速かつ大幅に改変させること。共産主義国家などで行われた強制的な思想改造が知られる。感覚遮断や賞罰の操作などの反復による学習の一つといえるが、その効果は永続的でない場合が多いといわれる。(ブリタニカ国際大百科事典)

マインドコントロールとは・・・他人の心理状態や態度を支配すること(大辞林)。暴力的な手段は一切使わず、あたかも操られている本人の意思

で言動が左右されているかのように見せることができる。そのため、洗脳に比べて、マインドコントロールされている本人、そして周囲がその事実気が付きにくいといった特徴がある。従って、その状態から抜け出させることも中々難しい。マインドコントロールという言葉が一般に知られるようになったのは、新興宗教やカルト集団などの信者の問題からであった。

<恋人DVのコントロール>

さて、DVを考えてみよう。DV被害者は、暴力を振るわれることで恐怖を感じる。痛い思いもする。もしかしたら殺されるのではという思いになる。然しDVでは、加害者は、暴力をふるった後、とても優しくなる事が多い。心から詫びたり、涙を流して詫びたりする。そんな姿に、被害者は、「きっと自分が悪かったからだ、この人は悪くない」と思ってしまう。「自分が気をつけて、彼を怒らせないようにすれば、ずっと優しいままでいてくれる」と思ってしまう。

暴力というのは、虐待でも同じだが、一度振るってしまうと二度目、三度目と繰り返され、その度に、力加減も増加し、悪化していくものである。

一度目は、頬をはたいたぐらいだったのが、段々パーからグーになり、首を絞めたり、物で殴ったり蹴ったりと、エスカレートしていく。DV被害者に何人か面談をしたことがあるが、例えば女性援助センターなどに苦勞して逃げたとしても、再び加害者のもとに戻ってしまったりする。加害者の良いところだけに目が行き、謝ってやり直そうと言ってくれているからと戻る。しかし、あっという間に元通りになるのが殆どである。

ある高校生の恋人DVケースでは、お互いに好きで、二人の世界を大事にしていた。暴力を何度振るわれても、被害者の方は加害者から離れたいとは思っていなかった。DVが発覚し、周りが

二人を引き離しても、被害者は、加害者との再会を夢見ていた。一方加害者側は、なぜ被害者を殴るのかについて、二人の間で揉めて雰囲気が悪くなった時に、リセットしたいからと言っていた。「リセット」というのは、まるでゲームが上手いからリセットボタンを押すようなものである。その場を自分の思い通りにしようとしているのだ。

もしかすると、最近の DV 加害者にはこういう感覚があるのかもしれない。ゲーム依存も多いのだから、リセット感覚があってもおかしくない。こうしてみると、恋人 DV のコントロールは、暴力が介在することから、マインドコントロールと洗脳の間のようなイメージである。暴力だけであれば、洗脳であるが、恋人 DV のコントロールでは暴力だけではなく、本人の意志で行動していると思われるケースがあるから、「間」と考えられる。

普通に恋心をもって、自らの意志で、相手好みが変わっていくことは、特にコントロールともいえないのかもしれない。しかし、一度暴力が介在し、暴力と謝罪・やさしさが交互に与えられるとすれば、それはもう DV のコントロールに入ってしまう。となると、境界は、暴力があるかどうかと考えられなくもない。

恋心で夢中になっている時期が一番危険と言えそうである。最近では女性だけが被害者になるわけではなく、逆に男性が被害者になる場合もある。子どもの頃から、CAP など、暴力防止プログラムを受けさせて行くことで、どんなに好かれていても、暴力はだめという教育をしていかねばならない。それだけではなく、人を愛すること、愛されることがどんなことなのかということも伝えて行かねばならない。

相手を愛するという事は支配することではなく、相手を思いやり、大切に思うことである。そして、愛されるということは、相手の思い通りになることではなく、自分自身を大切にしながらも、相手を大切にしていけることである。

人と人との生の関係性が薄くなってきている今、人のぬくもりをシッカリと経験してやることも、こうした恋人同士の関係性に少なからず影響を与えるのではと思う。小さい時から、人のぬくもりを感じ、愛されて育つことは大事だ。そして、人が人の中で生きていくということは、恋人をもつことであろうが、自分の子どもを育てることであろうが、我慢することが多くあり、全てが自分の思い通りになることは無い。万能感を持ちたい、全てを思い通りにしたい、征服したいという願望は、もしかしたら誰にでもあるのかもしれない。それをそのまま実行に移さないのは、我々人間がその感情をコントロールする前頭葉を持っているからだろう。恋人たちが、暴力支配に苦しむことの無いよう、小さいうちから自らの無謀な欲望を抑制する力をつけられるようお願いしたい。

参考：

恋人 DV(デート DV)・・・交際相手から受ける暴力のこと。殴る蹴る、性行為を強要と言った身体的な暴力だけでなく、交友関係を制限したり、通話やメールのチェックをしたりなど、精神的な暴力や経済的な締め付け、搾取などがある。2016 年の NPO 法人などが実施したアンケート調査では、10 代から 20 代の女性回答者の約 45%、同年代の男性回答者の約 27%が被害を受けたと回答した。(智恵蔵 mini)

生殖医療と家族援助

～LGBT:トランスジェンダー編～

荒木晃子

卵子と子宮を誰かの役に立てたい

前号に、自分の卵子と子宮を誰かの役に立てたいと望むトランス男性の語りを紹介した。

女性の体で生まれ、男性として自分の人生を送る彼にとっては、“乳房も卵子も子宮も必要ない”ものだという。ごみ箱に捨てられるくらいなら、誰かの役に立った方がいいに決まっています、とも断言している。この発言は、卵子ドナーになりたい、子宮を提供したい、と希望する提供ドナーの動機や意志とは少々異なるニュアンスが含まれているように思う。卵子の提供ドナーは、持って生まれた自己卵子の全ては使わないので誰かに分けてあげたい、また、子宮の提供ドナーは、これ以上自ら子どもを産むことはないので必要とする人に子宮を使って欲しいなど、利他的精神で提供することを望んでいることは、先の調査ですでに明らかである。しかし、このトランス男性は、「自分の卵子はいらない」。でも「それを必要とする人」がいて、「誰かの役に立つなら使って欲しい」と段階的に利他的精神に移行していると考えることができる。これまで実際に卵子を提供した/提供したいヘテロセクシュアル女性の動機と、セクシュアルマイノリティであるトランス男性は共に、自分には必要ないと判断していること、誰かの役に立ちたいなどの利他的精神があるという点では共通していることが理解できる。ただし、ヘ

テロ女性は、自分にある卵子や子宮を“いらない”のではなく、それがなくて子どもを産むことができない女性のために役立てて欲しいと願っている。一方、トランス男性は、卵子や子宮がいらないだけではなく、それがあることが苦痛の一因となっていた。本来女性のからだに備わっている生殖機能を持つことが、彼にとっての苦悩に繋がっていたのである。善し悪しは別として、この点がヘテロ女性とトランス男性との異なる提供動機であろう。

トランス男性の「ごみ箱に捨てられるくらいなら」という一言には正直、筆者も驚きを隠せなかったが、後に、実際に性別変更手術に携わる医師に「ごみ箱に捨てるのか」を確認すると、ごみ箱という言葉には語弊があるものの、認識としては決して間違っていないとの回答を得た。

利他的精神のリスク

2015 年、国内の年間出生数の内、5.07%の児が体外受精で生まれる(厚生労働省 HP)現状のなか、体外受精に必須となる採卵(卵子の採取)と呼ばれる生殖医療は、それが必要な不妊カップルにとって不可欠な医療技術となってきた。当然ではあるが、あらゆる医療技術には多かれ少なかれリスクが伴う。卵子提供ドナーの場合、自己卵子を取り出す際に実施する採卵という手技は、骨髄採取と比較すればリスクが低く、輸

血の際の採血と比較すればリスクは高いといえるかもしれない。では、子宮の提供ドナーの場合はどうであろう。子宮がん等の要因で子宮摘出のみを目的とした手術と、子宮を別の第三者女性に移植する目的で摘出する手術とは、所要時間、費用、医療技術の他にも、移植医療の専門性を持つ幾つかの領域の専門医の協力によるチーム医療が不可欠となる。ある医師からは、提供を希望するドナーの身体的負荷も大きく、子宮移植を目的とした摘出手術には、ドナーのからだに相当なリスクが伴うというコメントを得た。一例を挙げると、子宮摘出を目的とした手術の際の所要時間は数十分、子宮移植を目的とした摘出手術の場合は 11 時間を超えるといった具合である。

単に、「自分には必要ない」といった理由で子宮を摘出することと、「それを誰かの役に立てたい」と安易に利他的精神に移行するのでは、提供ドナーの身体的リスクに加え、生命に関わる事態が生じる可能性があることを、当事者は事前に知るべきであろう。例え、利他的精神という動機は同じでも、卵子を提供することと、子宮を提供することで生じる身体的リスクの大きな違いを前提に、提供ドナーになることへの意志決定には、医学的側面、心理的側面の双方を改めて検討、支援する必要があるのではないだろうか。

では、提供ドナーになるリスクは誰が、どこで説明し、ドナーの意志決定への支援は誰がどのようにすればよいのだろうか。当然ではあるが、医学的リスクは、医師による説明がなされなければならない。その際、卵子を提供したいのか、それとも、子宮を提供したいのかで、それを説明する医師の専門性も異なるだろう。同じ産科領域の医師であって

も、出産を扱う周産期の専門医、不妊患者を対象とした医療を行う生殖医療専門医の他にも、各々の専門性を持つ産科・婦人科医師が存在する。ましてや、子宮の提供には、摘出した子宮を別の患者に移植する医療技術が必要となるため、移植医療の専門性と技術は必須であろう。残念ながら、臓器移植の対象となっていない子宮移植に関しては、その専門性を持つ国内の医師が希有であるため、容易に相談や説明を求めることができない実情がある。このような現状のなか、国内で子宮移植が実現する日が訪れるまでには、乗り越えなければならないハードルは高く、その道のりは長いかもしれない。

精子・卵子・子宮はいぼこ？

最高裁の統計によると、国内では 2016 年末までに 6,906 名が性別を変更済みであるという。最新の情報では、特例法の施行から 14 年余りを経て、これまでに 7,000 名を超えるトランスジェンダーの方々が性別を変更したとの情報も入手した。「子どもとの家族形成を望む多様な当事者の家族援助」の研鑽を積む筆者には、この情報が、「7,000 名を超える人々の精子・卵子・子宮が特例法により廃棄された」と聞こえてならず、恐怖さえ覚えている。実際に当事者は特例法をどのように捉えているのだろうか。

現状、日本では、女性の体で生まれたトランス男性が、戸籍の性別を女性から男性へ変更し、本来の自分に戻るためには性別変更のための手術要件が必須となる。生まれながらに備わっている卵子を有する卵巣、ひとつしかない子宮を手術によって摘出し、女性の形状の生殖器から変更後の性別に類似した生殖器を成形する必要もあるという、

性別変更の手術要件「生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること」を求める性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律上の規定故にである。女性の体で生まれたトランス男性の場合は、卵巣（卵子）と子宮、さらに、男性の体で生まれたトランス女性の場合は、精巣をそれぞれ摘出し、永続的に子どもができないからだにすることが条件とされている。法律、もしくは社会のルールとして認識される、痛みを伴う性別変更の手術要件には、トランスジェンダー当事者、医師、研究者などから賛否両論の意見があり、2019年2月には、性別変更手術をせずに戸籍の性別変更を求めたトランス男性が最高裁に上告し、棄却する判決がくだったことは記憶に新しい。

一般に、女性は生まれながらに卵巣の中に数億という卵子を所有しているという。しかし、子宮は、ひとりの女性にひとつ（例外もある）あるのが通常である。数億ある卵子とひとつしかない子宮を、同様に「提供」という括りで扱うにはあまりにも乱暴な気がしてならない。だが、「提供」に係る諸問題や、その賛否を問う以上に、危惧することがある。一歩間違えば、まるで強制不妊手術のように聞こえかねない「性別変更のための手術要件」には、じくちたる思いを抱いている。

条件は不妊？

社会には、本来の自認する性別のからだに戻りたい当事者が存在する。一方で、自認する性別とは異なっても、生まれたままの健康なからだにメスをいれたくない、傷つけない当事者の存在も確認した。そこには自認する性別で人生を送るため、医療に自らのからだを委ねるという選択を、自らの意

志で決定できないという当事者の苦悩があった。果たして、その苦悩は社会制度が新たに生み出したものではないのか疑問に思う。何も隠すことなく自分らしく生きるため、人生の伴侶となることを誓い合ったパートナーと法的婚姻関係を結ぶため、社会のルールに従って自身の健康な体にメスを入れ、新たに体感する痛みと苦悩を抱えたまま、後悔の日々を送る当事者の語りを、私は忘れることができない。現行法下で、永続的に生殖機能を失った当事者カップル間で子どもが生まれることは、まずあり得ない。日本では、トランスジェンダー当事者が自認する性別で自分らしく生きるためには、「子どもを生めないからだ（身体）」になることが定められている。この事実を、どうすれば受け入れることができるのだろうか—これが、筆者の苦悩になりつつある。

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(24)

万歳三唱令 文書流言か文化創造か？

サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

熊本にて万歳三唱令の制作者に会い、万歳三唱実演を見る

2018年1月23日、私は熊本市中央区の「びふれす熊日会館」内取材スペースで、3人の男と会っていた。私の隣には『熊本日日新聞』編集三部長兼論説委員の宮下和也氏、対面には、元公務員にして「万歳三唱令」を作成したと称するA,B,Cの3名が座っている。世紀の会談（感想には個人差があります）が始まった。

万歳三唱令とは、正式の万歳の仕方を定義したと称する文書であり、今では根拠のない文書としても知られている存在である。学問的には文書流言と呼べる。さてこの文書は、万歳のやり方を規定しているものであるから、その手順が記されている。その詳細は実際の万歳三唱令（資料）を読んで欲しいが、それは「一歩右足を踏み出し、万歳を行う。そのとき手の平は内向きにする」というものである。

流言（うわさ）研究者には人知れぬ野望がある。それは流言の根源を知ることである。今回、文書流言たる「万歳三唱令」の起源に肉薄できたのは、私の研究者人生にとっても至福の時であった。筆者がお会いした「万歳三唱令」の制作者たち（A,B,Cの3名）とお話して感じたのは、まず、目の前で演じられた万歳がダイナミックで面白い！ということであり、次に、その面白いことを広げてやろうとしていた3人の熱意と良い意味でのチャレンジ精神（諧謔味）であり、最後に三人のチームワークの良さであった。この3人が「他人が作った文書を自分たちが作った」と偽っている可能性については、文書作成過程の話などを総合すると殆どありないと考えている。

なぜ、特定の万歳のやり方が生まれたのか。首謀者格のA氏によれば、「昭和60(1985)か61年に職場のゴルフの定例コンペの宴会の席で、誰かがふらふら立ちあがるような変な格好の万歳を行った」のがきっかけとのことである。そしてそれをマネしつつ「最初は右足を出していなかったが、右足を出すようになったら盛り上がるようになったので、宴会等の終わりは必ずやるようになった」とのことである。この万歳にはなぜか不思議な楽しさがあり、ゴルフをやりに来ないのに、宴会で万歳をやるため・見るために宴会だけ来る人もいようになったということある。この万歳のやり方についてのこうした過度の

魅力について、文章で読んでもよくわからないだろうが、私が3人の実演を見た時にも、文章で読んだ時とは異なる面白さを感じることができた。あるいは発声の仕方なども大きく関係しているのかもしれないが、とにかく目の前で実演を見たものにしかわからない面白さがあり、その魅力に囚われる人がいたのも無理はないと感じたものである。



図1 「万歳三唱令」に則った万歳をする前後の3人の男性

万歳三唱令の文書化過程

その後、A氏はゴルフコンペを行っていた時の職場から転勤となった。彼が編み出した面白い万歳のやり方も披露することがなくなっていった。ところが、平成元(1989)年か2年のある研修に出席していた時、「あまりに暇だったので、万歳三唱令というものを作ってみよう」と思い立ったとのことである。ここがA氏のすごいところであろう。実は、最初は天皇(明治天皇)云々ということを入れていたらしいのだが、そのようなことをしたら不敬罪になるかもしれないと忠告する人がいたため、太政官布告という行政文書として(正確には行政文書のパロディとして)作成することにしたという。

さらに、A氏は廃刀令、断髪令が太政官布告として出ていたことを知っており、その2つにこの万歳三唱令を加えて「明治三大布告」だということにしようと思って、太政官布告としての万歳三唱令を作ろうとしたのだという。A氏の構想力の豊かさには驚かされる。発令日についてなぜこの年だったのかということ、明治10年の西南戦争の後ということを意識したという(A氏は西南戦争を明治11年とっており、布告は明治12年になっているが、実際の西南戦争は明治10年の出来事である)。

そしてこの頃、A氏はB氏C氏と知り合いになりつるむようになった。なお、3人のチームワークは絶妙で、正しい萬歳三唱を普及する国民会議(正萬会議)を立ち上げ、A氏が初代事務局長となった(二代目事務局長はB氏)。AB両氏は東京出張の際に国会図書館を尋ねて実際の太政官布告を見に行ったという。実物を見た効果は絶大で、布告は条ではなく條という漢字が使われていることが分かったため、万歳三唱令には條という漢字が使われている。後に触れるように万歳三唱令には明治12年のものと明治22年のものがあるのだ

が（後述；図2）、後者は條ではなく条という漢字が使われており、この3名以外の人が作ったということが分かるのである。

そして、この3氏は、その後、請われるままに万歳三唱を実演したり、文書化された万歳三唱令を配布していたという。ただし、あくまで「酒席のことである」と釘を刺していたそうである。だが、そのようにしていたにもかかわらず、平成11（1999）年頃までには全国から国立国会図書館に万歳三唱令の真偽を問う質問が数多く寄せられるようになっていた。そして共同通信社がこうした状況取材・発信したことから『日本経済新聞』や『南日本新聞』などが報じることになった。どちらかという迷惑文書の扱いであった。このことについて振り返ったA氏は「国会図書館その他関係諸機関にご迷惑をお掛けしたことを少なからず反省」と述べる一方で、「全く悪気はなく、酒席の最後を盛り上げる一発芸と位置付けていた」と弁明した。ただ、この記事以降、正萬会議は活動を停止し、文書を配布することは控えるようになったという。人を楽しませるために始めたものが人に迷惑をかけているという文脈で捉えられるようになったことには、内心忸怩たるものがあったと推察されるし、彼ら自身も万歳三唱令の文書が「不幸の手紙」に擬せられていたことにはショックを受けたという。そして、その後、文書の配布は行わなくなった。

文書流言としての万歳三唱令

社会心理学の考え方からすれば「万歳三唱令」は、立派な文書流言である。流言とは、人の口によって伝わるもので、必ずしも真実ではないものの、確認することなく、伝達され、変容していくものである。そして、流言の場合には人の口にのぼるとはいえ、揮発性のものであるため、後に残ることはない。だが、文書流言は、文書の形で流れるため文書が残ることになり、どのような形で情報変容がおきたのかを可視化できる。実際、「万歳三唱令」には明治12年版と同22年版があり（後述；図2）、後者には「憲法発布に伴い」という文言が挿入されているなど変容の過程を目の当たりにできる。日本における文書流言としては「当たり屋チラシ」がありその研究もなされたことがある（佐藤、1996）。

さて、この「万歳三唱令」が伝わっていった第一の理由は万歳の仕儀が面白いからであろう。既に述べたことだが、今回、オリジナルの流儀を見ることができて筆者も実感できた。ゴルフコンペ後の宴席で意図せずに行われた万歳のやり方を文書化したものだが、文書の元になった万歳のやり方が愉快であり、見て楽しく、やってみると楽しい。この万歳が面白くて（ゴルフは参加せずとも）宴席にだけ参加する人さえ出てきたというのであるから、中毒性も高い。その面白い動作を文書化するだけならまだしも、それを万歳三唱令という名称の文章にしようとしたこともすごいし、その際に明治初期に出された「断髮令」「廃刀令」と並ぶ三大布告に並列に位置づけたというユーモアセンスと知性にも驚かされる。さらに、本物の太政官布告を国会図書館で調べて様式を整えたという緻密さにも脱帽せざるを得ない。

一般に流言は細かい表現が必要とされる。「地震が**に**日**時に起きる」という

流言が典型であり、何時何分のレベルまで特定されるからこそ伝わっていく。一方で、現代の科学では分単位の地震予知が不可能であることも周知の事実であるから、この情報を見聞きした「分別のある」人は、それを聞いた瞬間に偽情報だと判断することができる。A氏が制作した熊本に端を発する「万歳三唱令」は太政官布告第168号であること、そして施行日が明確に書いてある。この情報こそ、文書流言をもっともらしくしているカギ部分である。まず、細かい表現こそが文書流言の命であるという「基本」に忠実である。そして、この詳細情報を確かめれば真偽も明らかになる（当該布告は存在しないと判明する）。詳しく調べなくても本物だと思いい人に伝えてしまうというという情動性の情報が流言の根本であるが、一方で理性的確認ができる（真偽が明らかになる）ということも、情動性を演出するのに一役買っている（確かめれば本当だと分かることが書いてあるのだから、本当なのだろうと思うということ）。

この文書が偽文書でありフェイクニュースに近いのではないかと考える人がいるかもしれない。愉快犯は許さないと憤る人もいるかもしれない。しかし、それは野暮なことではないだろうか。『熊本日日新聞』（2018年2月28日付）の記事によれば、2017年10月の衆院選の万歳ポーズの約半数が両手を内側に向けて万歳しているという意味で「万歳三唱令」に則ったものだったという。このままいくと、万歳三唱令に記載されたやり方がデファクトスタンダード（de facto standard；事実上の標準）になるかもしれない。そうなれば「嘘から出た真」を地で行く話であり、このポーズが最初に行われた昭和60年（1985）頃から30年を経て新しい文化を創造した、と言うことも可能になる。全く痛快なことではないだろうか？

この全く新しい万歳のやり方が、熊本から始まったのは快事であり、「万歳三唱令」発祥の地という記念碑を立てたらどうだろうか。「手のひら内向きバンザイ発祥の地」でもいいかもしれない。そのくらいのユーモアセンスがあって初めて、「万歳三唱令」創案者たちの創意工夫と諧謔味もさらに近づくことができ、この新しい文化も輝きを増すのではないだろうか。

文書流言（文書化された流言）の可視化のために

なぜ多くの人がこの文書を「真偽を疑いもせず真実として受け止めるのか」の説明は難しいが、万歳に作法があっても不思議ではないという人々の考えにフィットするからだろう。現在、万歳はどちらかというと厳粛な場面で行われることが多い、その厳粛さを支える万歳のやり方に正式なやり方があっても不思議ではない、いや、正式なものがあるにほしい、という人々の願望に寄り添っているからこそ、多くの人が複製をつくって（時に違うバージョンを作りながら）、広まっていったのであろう。制定された時期は古ければ古いほど権威があると考えられるし、江戸時代に侍たちが万歳をしていたとは想像できないから、明治に制定されたという設定も絶妙である。お手上げの意味のバンザイと万歳三唱のバンザイを区別したいという気持ちにも寄り添ったものだったかもしれない。

さて、前述のように流布している「万歳三唱令」は少なくとも2種類ある(図2)。オリジナル版は明治12年施行だが、「明治22年施行」となっているものも発見されている。年月日のような重大情報の変容したということは、この情報が「重大」なのではなく「重大にみせかけるため」に重要だということを示しており、これも文書流言の作法にそっているといえる(佐藤、1996 三唱)。さらに面白いことに「明治22年」版では「憲法発布に伴い」という文言が挿入されている。重大に見える情報の変容されたことにもないその変容にふさわしい物語性が付与されるのも文書流言の特徴であるが、誰がそれを発案して加筆したのだろうか? きょうみはつきない。なお、明治12年版が「條」という漢字を用いているのに対し、明治22年版は「条」である。この「條」という文字へのこだわりがないということは、明治22年版はA氏たち3人とは異なる人が作ったことを強く示唆するものである。この2つの版の違いには興味深いことも多いのであるがその分析は他日を記すことにする。

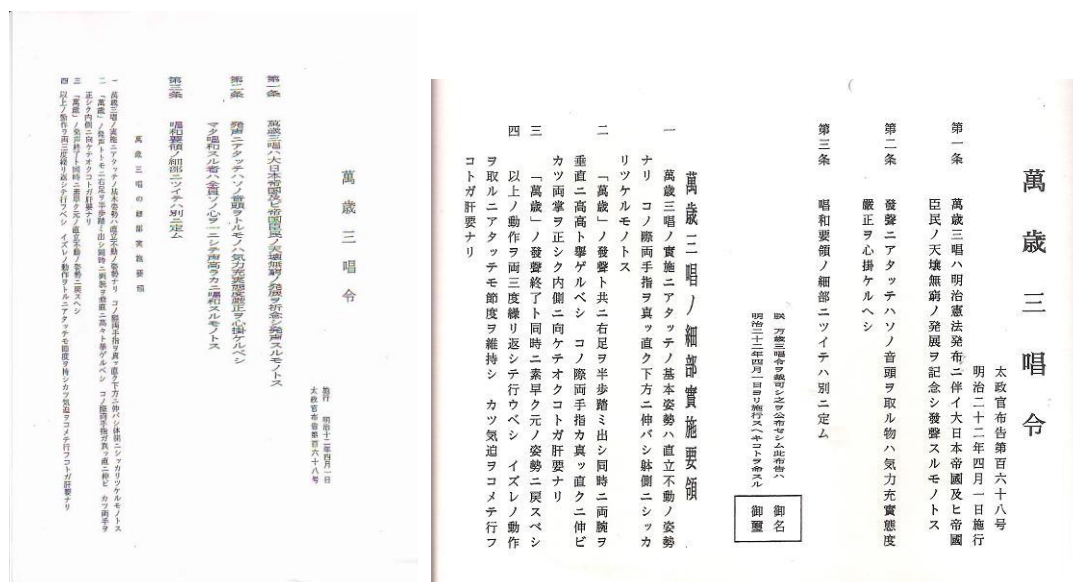


図2 筆者の手元にある施行年月日の異なる2つの文書(明治12年と明治22年)

ちなみに、昔話は「むかしむかしあるところに」で始まる時空不特定な物語であるが、「万歳三唱令」はそれとは異なり真偽性を確かめる情報を文書内にさらけ出しているのであるから、この文書をホントのものだとして信じるか信じないかは実は受け手のリテラシーにかかっていると言えるのかもしれない。

A氏らが行った万歳の形式は、それ自体が面白かったから流通していったのであるが、それが文書化されてしまったがゆえに、今度は万歳の面白さではなくルール化が起きてしまった。万歳の不謹慎さ、太政官布告のパロディの不謹慎さ、その2つが掛合わさったが故に不謹慎さが無くなって謹厳実直な万歳が強制されるようになってしまったのだとすれば、

A氏らにとっても皮肉なことであったかもしれない（まだうまく言えないが、マイナスとマイナスのかけ算の答えがプラスになるように符号の方向が変わってしまうようなものかもしれない）。

最後の最後に。この文書流言についてはより精緻な分析が必要ではあるが、2019年にも統一地方選挙等の様々な選挙が行われるという状況があり、とりあえず状況や経緯をまとめておこうと思った次第である。資料として手元にある2つの文書画像を掲載するので、興味ある方はその異同について考えをめぐらせてほしい。

文献

佐藤達哉 1996 1996年春・福島での当たり屋情報 福島大学地域研究, 8, 59-71.

付記1

本稿は『熊本日日新聞』の求めに応じて執筆した原稿（文書流言か 文化創造か? 「万歳三唱令」を考える）をもとに加筆修正したものであり、学術論文化のプロセスの一部である。なお、同紙における関連コラム・記事の日付とタイトルは以下のようなものである。

2017年12月19日付 コラム「新生面」

同年12月27日付 【ニセ「万歳令」は酒席の一発芸?】

2018年2月27日付 【万歳三唱令は「熊本発」】

同年2月27日付 【万歳三唱令のヒミツ】(上) めざせ! 「明治三大布告」 ニセ文書、真面目に模倣

同年2月28日付 【万歳三唱令のヒミツ】(下) 一見それらしい“作法” 型にはまる心地よさも

同年3月10日付 【文書流言か 文化創造か? 「万歳三唱令」を考える】 サトウタツヤ (署名寄稿)

付記2

この文章はで万歳と萬歳は同じ意味で使われている。

付記3 万歳の仕方については下記の書がある。

「即位礼に稱ふる萬歳の稱へ方に就きて」(大正4年6月15日和田信二郎著)

付記4 万歳の仕方には公式のやり方はないという政府の閣議決定に関する毎日新聞の記事もある。

<万歳三唱>「公式の所作なし」の答弁書、政府が閣議決定(毎日新聞; 2010年2月13日)

謝辞

このような機会を与えてくれた『熊本日日新聞』編集三部長兼論説委員の宮下和也氏に深く感謝したい。

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

7. “ 再会 ”

今回は飛び入りテーマとして北海道胆振東部地震後のドラマによる支援について記述したが、今号からは、また高齢者施設で実施しているドラマワークについての連載に戻る。

「新しい」参加者

ある日のセッション開始前のことだ。利用者の方々が集まっている広間に行くと、人懐こい微笑みを浮かべた一人の女性とバッタリ出くわした。その瞬間、私の身体が（頭で認識するより早く）「よく知っている人」だと感知、反応して思わず「こんにちは！」と彼女に声をかけた。そして文字通り次の瞬間に、その人が誰であるかがわかり、「あ、Aさんだ！」と心の中に小さな衝撃が走った。Aさんは、施設内での当然の挨拶のように「こんにちは！」と笑顔を返して通りすぎて行った。

Aさんとは以前、数年間にわたってお付き合いがあり、私があることでお世話になっていた女性だった。数年ぶりに会った彼女は身体が少し小さくなった気もするが、あの懐かしい微笑みは健在だった。私がかつての知り合いとは気づいていない様子なので、この施設の職員だと思ったかもしれない。デイサービスに参加されているということからも、生活にサポートが必要な状態になったのではないかと思われた。

その後、広間で全員参加のドラマワークが始まった。このセッションは、試行錯誤を経て、身体や頭の体操・ことわざ当てドラマ・おとぎ話の鑑賞、というメニューに落ち着いていた。おとぎ話は、毎回、世界各国や日本のお話を選び、能動的に鑑賞してもらえるように観客を巻き込みながら私たちセラピストが演じる。Aさんは、すべて楽しそうに見て下さっていた。

希望を叶える

全体ワークが終わると、希望者が小部屋に移り、1時間のグループセッションをするのだが、Aさんも参加することにしたようだ。新しい利用者が来ると、職員はドラマを薦めることが多いので、Aさんもおそらく誘われたのだろう。トレーニーと私が、パントマイムやお芝居をリードして皆さんが和気あいあいとしている場をAさんは珍しそうに眺め、そして素直に受け入れて楽しんでる様子だった。

このグループセッションでも、毎回、物語を演じるワークをするが、ここではセラピストではなく参加者に演じてもらう。ただ、この日はその年の最後のセッションだったこともあり、参加者個人の希望や夢を叶えるドラマをすることになった。この日の参加者は6人。1人ずつ希望を伺って、ドラマを創っていく。

最初に手を挙げて下さったのはBさんだった。彼女は女性唯一の皆勤賞で、何年も継続参加しており、どんな「希望」を言っても良いことを知っている。彼女は「天国に行きたい」という。実は、この希望は今回が初めてではなく、以前にも同じ発言があったが、その理由は亡くなったご家族に「会いたい」ためであって、「天国に行く＝死にたい」という意味ではないことを私たちセラピストは理解していた。

Bさんに「天国には誰がいますか？」と尋ねたところ「お兄さんとお姉さん」という返事だった。「では、会いに行きましょう。お兄さん、お姉さんはどんなことをおっしゃっていますか」と聞くと、「見守っているから長生きしてね。幸せになってね」とのことだったので、セラピストたちが兄姉の役になって、それをお伝えした。Bさんは、満足されたようだった。

ともにいる

Bさんのドラマが終わらないうちに、Aさんが泣き始めたことに気づいたので、私は静かにAさんの隣に移動した。明らかに、Bさんの天国の家族とのやりとりに心を動かされたのだ。私は優しく丁寧にAさんの背中に手をあて、心身ともにAさんと一緒にいることを無言で伝えようとした。プロセスの流れから考えると、私の動きはセラピストとしても、人としても自然な発露であったと思うが、1時間前の突然の再会からの展開に私は内心、驚いてもいた。Aさんは私のことを認識していなくても、「初対面」のセラピストである私は、彼女の人となりや人生背景をすでに知っているという状況なのである。今自分がこのような形で、お世話になった彼女を支える役になっている、この巡り合わせを不思議に思った。

「同じ天国の場面をやってみますか？」と私がそっと聞くとAさんは同意した。自分の両親に会いたいそうだ。ただし、Bさんのように天国に行くのではなく、天国から会いに来てくれるのが良いと言う。そして「よく頑張っているね。あなたの思うように生きなさい」と言って欲しいと伝えて下さった。私の知っていた、そしてのちに職員からも聞いた彼女の状況を考えると、天国の両親からのこのような励ましとアドバイスのことばは、大きな意味があるものだった。初めての参加で自然なプロセスが起き、まさに今の彼女にぴったりで必要なセリフが本人から即座に出てきたこと、それをすぐに「両親」が言ってあげることができたことに感慨を覚える。母親役をした金光さんは、「あなたの思うように生きなさい」がAさんの大事なテーマだと感じ、2回繰り返した。Aさんは、涙を拭いながら頷いた。彼女の背中にあてた私の手を通して、また彼女の安堵した表情から、このことばがAさんの心にしっかり届いた感覚が私に伝わった。

セッション最後に1人ずつ感想を言う時間がある。Aさんは、「昔の夢がよみがえってきました。健康でいたいので、これからは運動を頑張ってみようと思いました。」と述べた。実施したゲームやドラマの感想ではなく、セッションの結果として、元気なころの夢がよみがえったことと、前向きに今後を生きていくという発言につながったのだとすると、やはり「両親」に励まされたことが力になり、彼女の心に小さな変化が起きたのだと考える。そして、たとえ私のことを忘れていても、以前交流があった私が「ともにいた」ことが、どこか無意識のレベルで働いた気がする。

呼応するふたり

高齢者のデイサービスという場でのドラマ活動は、楽しい時間をすごしてもらおう・仲

間を作る・心身のリハビリ等の目標を立てて実施しているので、Aさんのような深いプロセスが、しかも初参加で起きたことはなかったし、またどちらかと言えば起こさないようにしていた。(もちろん、起きるのが悪いという意味ではない。結果としてこのようなプロセスが発生するのはご本人にとって良いことであるが、それを目的としたプログラムにはしていない、という意味である。)

この日、他の参加者も希望を叶えるドラマをしたが、以前、家族と行ったハワイでイルカショーを見る場面など、昔の思い出を楽しむようなものが多かった。また、今後の希望を演じた人も、手編みの作品をお孫さんにプレゼントする場面など、皆さんがニコニコ笑顔になるドラマであった。

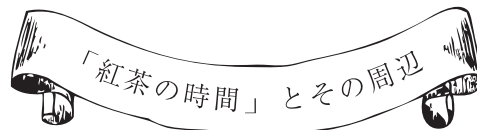
ここではもともと、パントマイムなどで想像力・創造力を高め、物語を演じて表現を楽しんでもらうということに主眼を置いており、個人の感情は、当然その中で比喩的、象徴的に表現されるものの、誰かが直接的に自分の思いを言明して涙を流すことは、今までほとんどなかった。(以前紹介したY男さんが、家族を思い出して涙ぐんだことはあった。)このときは、苦境に立つ個人が自分の真の感情を表出し、重要な他者から励ましをもらって癒しを得るという、通常は時間のかかるセラピープロセスが短時間で起きたと思われる。いわば初回にして、完結回になったような印象を受けたのだ。Aさんとの思いがけない巡り合わせとタイミングで、私のAさんへの思いが深くなったこともいくらか作用したのかもしれない。このような「出会い」は、二度と起こらないというふうにも感じられた。しばらく前から、主にトレーニーがセッションを実施しており、私は滅多に行かない状況になっていたという物理的な事情もあり、やはり「一期一会」だったという思いが、私の中に浸み込んできた。

別な見方をすればどんなグループも、どんなプロセスも、いわば「一期一会」であると言える。しかし、このときは特別な思いが胸に迫ってきた。その後、少なくとも現在まではAさんに会う機会はないが、ときどきドラマに参加して、生き生きと表現を楽しんでいるという報告を聞き、陰ながらエールを送っている。

(次号に続く)

- * 本文では、本質を損なわない範囲で情報の変更・省略をしている。
- * セッション内容の記述は、金光真理さんのジャーナルを元としている。

きもちは、 言葉を さがしている



第 35 話

水野 スウ

Why けんぼうBOOK again?

昨年（2018年）9月、2冊目の憲法の本、『たいわけんぼうBOOK+（ぷらす）』を出しました。憲法にしろとの私が、『わたしとあなたのけんぼうBOOK』（2015年）に続いて、なんでまたもや憲法の本を書くことになったのか、私自身も不思議なので、今号でそのわけを探ってみようと思います。

最初に、つくろう！と思い立ったのは、庭にまだ大雪の残る昨年2月のこと。その前の年にいきなり、安倍さんが憲法9条に自衛隊を書き込もうと言い出して、9条をかえるための国民投票がぐっと現実味をまして近づいてきているのを感じたからです。

その時は、本じゃなくて、ミニリーフレットをイメージしていました。安倍さんの提案する改憲案とそのため国民投票についてだけ、ポイントをしばってA4かB4一枚にまとめ、それを折りたたんで、『けんぼうBOOK』の最後のページにのりで貼って付録にしよう、なんてことを考えていたのです。

ところがほどなく、春の国会は大波乱。モリカケ公文書改ざんイラク日報隠しなどなど。正直あの時、この政権はおそらくもう保たない、と思った。だけど（自民）党大会で相当もめはしたものの、安倍さんの99条案や緊急事態条項などを憲法に書き込む案が、自民党の憲法改正たたき台素案、として生き残ったのでした。

やっぱりこの案でいくのか。それにしても国会がこんなじゃ、ただちに改憲まっしぐらってわけにもいかなさそう。ならば時間はまだしばしあるってこと。じゃあ、ミニリーフレットよりもうちょっとページ数の多い、ミニパンフレットくらいのもをつくらう、と思い直し。ところが、いざ書きはじめてみると、私の伝えたいことは、どう詰め込んでもそのサイズにおさまりきらない、ってことに気づいたんです。そうか、私が本当につくりたいのは、箇条書きの改憲早わかりといった「ミニ解説」や「情報」じゃなかったんだ、とわかりました。

伝えたいことは

安保法国会と追っかけっこしながら駆け足でつくった『けんぼう BOOK』から3年。その間に200回近く、けんぼうのおはなし出前によんでもらって全国にでかけました。語れば語るほど、憲法に書かれているのは、むずかしい政治の言葉じゃなくて、実は、わたしのこと、あなたのことだよ、と思えるようになりました。だけどそう感じる人はまだわずか、ということもわかってきたのです。

憲法なんて知らないよ、遠くにあって近寄りがないもの、自分には関係ないもの。多くの人がそう思っているうちに、気づいたらもう憲法がかわってた、なんてことになるとしたら悲しすぎるし、あまりにもつらい。私の中に、そんな方たちにこそ伝えたい、大切なことが3年の間にいっぱいたまっていました。

話を聴いてくださった方たちから教えてもらったこともたくさんあれば、前作ではまだ気づけていなかった憲法の深い意味や、あらたに学んだこと、とりわけ改憲が現実味を増した9条のこと。憲法のどこが、どうかえられようとしているのか、かわるとどうなるのか。国民投票ってどういうものか。そういうことを一つ一ついねいに手渡していくための、あたらしいけんぼう BOOKをつくらう、と心に決めたのが、ちょうど一年前の桜のころです。

ワインディングロード、はたまた9条とボクシング

けども、そこからがワインディングロードの連続でした。伝えたいことも想いもあふれるほどあるのに、いざそれを、憲法の本をはじめて手にする人にも最後まで読んでもらえるような、とりわけ9条を、平らな言葉にして届けることのむずかしさは、私の予想をはるかに超えていました。

前作の『けんぼう BOOK』は、憲法って9条だけじゃないよ、を伝えたくて書いた本。その分、9条にはあまり踏み込んでいなかったけれど、今度の『BOOK+』ではそういうわけにいきません。9条のおいたちから、自衛隊の誕生から、9条を巡る政治の動きから、改憲の意味するところ、などなど、書きすすめていく中で、私の知らないことのあまり

の多さにはじめは打ちひしがれてばかり。まるでそれは、巨大な象にアリがジャンプしてボクシング挑んでいるような、むちゃくちゃ無謀な冒険でした。

一つ峠をこえるとまた次の峠があらわれ、また勉強し直して書いて、やれやれと思うまもなく、次はもっと険しい山で、そこを行きつ戻りつ、書き直しに書き直しを重ねていきました。

でもね、不思議と、ああ、もう無理だ、あきらめよう、って途中で一度も思わなかった。私なりに9条と9条改憲案のことを知ったなら、それを伝えることが知ったものの責任、そんな思いが強かったせいもあるでしょう。でもそれだけじゃなく、おはなしの出前先で会った人たちが伝えてくれた大事な気づきを、もう一度、私の言葉に編み直してきつとお返しなくちゃ、というきもちも大きかったのだと思います。「憲法って、9条だけ、じゃなかったんですね」「憲法を守らなきゃいけないのは誰か、ずっと勘違いしてた」「私は私で生きていい、って13条が言ってくれてたんだ」「黙ってちゃだめでした、私の12条をはじめます」といった、いくつもの実感こもる言葉たちが、くじけそうになる私の背中を、常に押してくれていたのです。

はたから見れば身の程知らずのアリのジャンプを繰り返しながらだんだんわかってきたこと。法の専門家でない私にそもそも、明確な答えなんて出せるわけがないのだ。でもそれこそが逆に、しろうとゆえの私の強みかもしれない。途中から、そう思えてきたのです。

そうだよ、答えを提供しなくていいんだ。もやもやを隠さなくていいんだ。憲法学者さんになかなかそれはしにくいことだろうけど、一般ピープルの私になら、きっとそれは許される。

はっきりした答えが見つからなくても、私はこれだけは大切にしたいよ、これだけはいやだよって、堂々と言おう。そうしないと、昔みたいに政治が頭のいい一部の人たちのものってことになっちゃうもんね。もやもやしながら言葉にする私をみて、あ、100%の答えが出なくても、自分のきもちを言葉にしているんだ、って感じる人もいるかもしれない。

そこに思い至った時、ようやく開き直すことができました。これは憲法の解説本じゃない、9条と憲法といのちの未来について、一市民が必死に学んで、もがいて、考えつづけた過程を、正直に綴った本だ、と私の立ち位置が定まったんです。本を手にした方が、そのくねくね道の過程をたどって、私と一緒に考えてくださるとしたら、それが一番ありがたくて、うれしいこと。そう思えるようになってから、きもちが楽になって、先に書き進むことができました。

対をなすもの

9条と対をなす、と私が思っている13条も、前作よりもっと深く見つめています。

ほかの誰ともとりかえのきかない、唯一無二のわたしであり、あなたであること。誰もが、個のひととして尊重される。13条は、それをわたしに許しているだけでなく、わたしにそう生きることを求めている。でないと、かつてのように国が暴走しだした時、それを止められない。それでは平和がなりたたない、ということ。

一人一人のいのちが、国にとって都合よく取り替えのきくパーツだった時代を繰り返させないためにこそ、憲法に13条があるのだと。それもこの本で再び伝えたいことのひとつでした。

個人の尊厳の13条と、戦争を強く否定している9条とは対をなすもの。この考えに立てば、13条が粗末にされる時は9条があやうい時で、9条が壊されそうな時は13条がないがしろにされる時、とわかります。そんなふうには13条と9条を対で見だしたら、政府の意図がいつそうクリアに見えてくる。現に今の政府は、一人一人の価値をあからさまに、生産性のある／なし、役に立つ／立たない、で測りたがっているから、なおさら9条だってあぶない時なのです。

子育てだって12条すること

ふだんの努力の12条のとらえ方も、前作より広がりました。国のするおかしなこと―憲法違反の法律をつくったり、沖縄の地方自治をまったく無視して力づくの政治をすることに対して、しっかり声をあげることに、これはこれでももちろん私たちがしな

ければならない、12条の大事な実践です。

でもだからって、「12条する」を、権力に抵抗すること、といった狭い意味あいだけでとらえなくてもいいんじゃないか、と気づきました。

わが子を一人の人として尊重し、愛し、人を差別しない、平和を愛する子に育ててほしいと願って、日々、子どもに接すること。その願いを持って絵本を読むのも、その子の想像力を豊かにさせてくれること。そういう日常のなにげない営みだっておそらく、息の長い「12条すること」でしょう。

自分が普段からpeaceのpieceになろうと行動することもだし、自分と違う意見を持つ他者と13条的に平らに話しあおうとすることも、13条と12条を同時に実践することだと思います。

そんな風に想像の翼を広げるヒントをくれたのは、これまで70年余りも軍隊を持たずに他国との対話をかさねて自国の安全保障を保ってきたコスタリカの人々の存在。この国の人々のふだんの努力についても、映画「コスタリカの奇跡」の紹介とあわせて、かなり詳しくふれました。

協働作業の本づくり

前作とおなじく今回も、編集、デザイン、イラスト、校閲を担当した娘と、二人三脚の本づくりでした。前と違い、今回は調べものが山のようにあったので、むずかしい項目はそれぞれに分担して勉強してきたことを持ち寄って発表しあい、それを私が文章に起こし、娘が読んでまた手をいれ、返ってきたものをさらに直してまた返し、というキャッチボールを何回も繰り返しました。

「戦争と暴力の反対は、対話」。暉峻淑子さんのこの言葉を本文に書いたこともあって、最初のページからおしまいまで、読んでいる人に平らに話しかけるように、むずかしい内容をやさしくわかりやすく書くことを、せいっぱい心がけました。

原稿がほぼ出揃ったのは8月初め。安倍さんが3選を目指す自民党総裁選前になんとしても本を仕上げたい。そこから逆算すると締め切りはぎりぎり9月初め。そこで酷暑のひと月間、私は文章の見直しと整え、娘は編集と校閲の作業に毎日追われました。

入稿前の一週間はさらに、私も娘も頭の中、怒涛のごとし。毎晩何時間もスカイプで、あーだこーだの編集会議。おたがいあきらめないねえ、よく粘るねえ、と呆れながらもリスペクトしつつ、対話に對話を重ねて、新たな気づきがあればまた書き直して書き足して削って。

本をつくりながらこんなにも知らなかったことを学び、たくさん発見したことはなかった。私一人の作業では、どうがんばっても、ゴールといえる着地点にたどり着くことはできなかったと思います。

原稿を書いている間中、本のタイトルはまったく思いつきませんでした。入稿の前夜にあとがきを書いて、それを読み返した時、あ、これって対話からできている憲法の本だ、2冊目だからBOOK+だ、と瞬時に、『たいわけんぼう Book+』と決まりました。

この名前、今思うと、これしかないほど自然なことでした。出前前で、話を聴いてくださった方たちと毎回対話したし、本を書いている間も、想定する読者さんと対話していた。9条の歴史とも、過去とも、岸内閣憲法調査会の委員の一人だった亡き父とも遺された資料を手がかりに、対話した。そしてもちろん誰より娘と、対話した。対話と、平話（平らに話す）と、平和はひとつながり、そのことをいつも頭におきながら書いていた本でもありました。

サプライズのごほうび

この本が完成してから2ヶ月後の11月のある日、びっくりする電話をもらいました。なんと『たいわけんぼう BOOK+』と『わたしとあなたのけんぼう BOOK』の2冊が、第24回平和・協同ジャーナリスト基金（PCJF：Peace and Cooperative Journalist Fund of Japan）の「荒井なみ子賞」を受賞することになったというのです。

1995年に市民がお金をだしあってはじまったこの賞は、平和・反核・人権・協同の分野ですぐれた作品を発表したジャーナリストを毎年何人か市民が選び、市民が表彰する、日本版ピューリッツァー賞と呼ばれているもの。賞の存在は以前から知っていたものの、まさかまさか、私が？ ジャーナリストじゃないのに？ と信じられなくて、お知らせをもら

った時は思わずほっぺたつねりました。

びっくりのわけは、信州佐久で有機農業を営む、織座農園の窪川典子さんと、同じく信州のフォトジャーナリスト、山本宗補さんが、私に内緒でPCJFに推薦してくださっていたからだとなりました。

窪川さんは、私の出している「いのみら通信」の30年近い読者さん。農のお仕事のあと三晩徹夜で新刊の『たいわけんぼう BOOK+』を読み、それから必死に推薦文を書いたそうです。「紅茶の時間」のこと、自費出版で出してきた原発や紅茶の本のこと、個人通信のこと、おはなしの出前にあちこち行くこと、いわば私のこれまでしてきたこと全部を推薦文におさめて、2冊のBOOKにいのみら通信まで添えて、PCJF選考委員会に送ってくださったのでした。

贈呈式にて

12月8日、東京の日本記者クラブでPCJFの贈呈式がありました。映像と活字、あわせて92の応募作品から、大賞に選ばれたのは、琉球新報編集局政治部による「沖縄県知事選に関する報道のファクトチェック報道」でした。たしかに、デニー候補に対するデマ報道はあまりにひどかった。この状況を放っておけないと、政治部の記者さんたちがシリーズで検証したのです。日本のメディアでこの手法はまだ画期的なことらしく、他社からもファクトチェックのやり方を逆に訊かれたりしたそうです。

6点の奨励賞の一つは、三上智恵さん大矢英代さん監督のドキュメンタリー映画、「沖縄スパイ戦史」。この映画は、沖縄戦でゲリラやスパイ兵に仕立てられた元少年兵たちのことと、沖縄の現在を描いたもの。それが、決して過去の話ではなく今後起きうるかもしれない、すぐれた今日性こんにちを持った作品として認められたのです。また、朝日新聞記者・青木美希さんの『地図から消される街 3.11後の「言っていない真実」』（講談社現代新書）という本も、福島原発事故後の被災地の現状を7年に渡って取材した克明なルポとして奨励賞に選ばれました。

私がいただいたのは、「荒井なみ子賞」。荒井さん（故人）は、戦後すぐから生活協同組合の活動を熱心

にされて、日本のサッチャーとも呼ばれた方。このPCJFの理念におおいに共感、賛同して多額の寄付をなされたことを記念して、お名前を冠したこの特別賞が創設されたとのこと。平和と協同、の言葉のはいった、しかも女性を対象として贈られるこの賞を頂戴するって、なんて光栄でありがたいことかと胸がいっぱいになりました。

ごほうびの理由

選考委員の方が、それぞれの作品の受賞理由を説明されました。2冊の『けんぼう BOOK』のそれは、「今の憲法を生かそうとやさしい言葉で解説。安倍政権は改憲にしゃかりきだが、それに引き換え、国民の側の憲法論議はそう熱心ではない。だとしたら、今こそ水野さんのような活動が効果的ではないか」というもの。

委員さんの言葉の端々から伝わってきたこと。自宅をひらいて35年もいろんな人が話し合える場を続けているって？ 自費出版で本をつくって、しかも自分で販売もして、ましてや専門家でないのに呼ばれば全国どこへでも憲法の話の出前にいくって？ 実にユニーク！と驚きをもって、この2冊のBOOKが選考委員さんたちに受けとめられたんだとわかり、なんだかとてもくすぐったいきもちでした。

あとで個人的にお聞きしたら、いのみら通信を見た委員さんたちが、こんな手書きの通信、いいね、とか、『けんぼう BOOK』のどのページにも登場するコトリのイラストを指して、このハトがいいねえ、と感心されていたとか（式に参列していた娘いわく、イラストのコトリはハトのつもりじゃなかったけど、平和のトリといえばハトって連想する人もいるんだね！と）。



ジャーナリズムの世界で長年厳しいお仕事をされてきたろう委員の方々が、頭の中にいくつも「！」や「？」を立てながら、何の肩書きも持たず、どこ

にも所属していない一市民の、こんなにもささやかな手づくりっぽい作品に、よくぞ、光をあててくださった。このことに私は本当に感動して、心からのお礼の言葉をのべさせていただきました。この光は、平和を願って、不断の努力を日々普段から続けている全国の多くの市民にとっても、勇気と希望をくれるものだ、と思ったのです。

この贈呈式には私の家族も、織座農園の窪川さんやクッキングハウスの松浦さんも、そして古くからの親しい友人たちも駆けつけ参加してくれて、この貴重なごほうびにだけたことをともによろこびありました。

おめでとう・ありがとうの会

金沢に戻ると、ピースウォーク金沢などのピースアクションを一緒にしてきた仲間たち企画のお祝い会がありました。ピース仲間と紅茶仲間が合流しての、名づけて「おめでとう・ありがとうの会」。

2冊の本の中には、紅茶の時間も、出前けんぼうかふえも、ピースウォークも、国会答弁書き起こしを読みあう「コッカイオンドク！」も、毎週の紅茶のなかで社会のことを語りあう「草かふえ」も、すべて含まれているので、これは because of you all——出逢ってくれたみんなのおかげ、協同でいただいた賞だとしみじみ思いました。本に登場している仲間たちが、まるで自分が受賞したかのように喜んでくれたのもまたうれしく。

おめでとうとありがとうが行ったり来たりする中で、ああ、私はこういう仲間たちと出逢えて、この人たちと一緒にだったからずっと歩き続けてこられたんだな、心ひらいて平和を語りあえたし、様々なアクションをともにしてこられたんだなあ、と確信したのです。

4つのキーワード

新刊『たいわけんぼう BOOK +』をお読みいただけたら何よりうれしいけれど、このマガジンをお読みの方にだけ、今号の原稿の最後で、本のエッセンスを少々おすそわけしますね。

9条に自衛隊を明記する案のこと。以前からある

ものを、憲法にただ書くことの、何が問題？ 戦争しない、武力は持たない、の9条はそのまま、自衛隊の任務もこれまでと何もかわらない、そのまま、って安倍さんは言ってるよ。災害救助でがんばってくれている隊員さんたちの名誉のためというのなら、別にいいんじゃないの——そう思いたい人たちの感情が、巧みに利用されていること。本には、その勘違いをほどくための、4つのキーワードを記しました。

安倍さんは「9条1項2項の解釈をかえて、集団的自衛権を一部行使できるようにした。そのままです」と国会答弁しています（2017年11月）。安倍さんのいう「そのまま」は、2014年7月の閣議決定以降すでに変容してしまった9条と自衛隊の中味をさしているのだけど、そうとははっきり国民に説明しないものだから、これじゃ多くの人が、「そのままマジック」にかかるのも当たり前です。

後から書き加える「自衛隊」が、前からある1項2項を乗っ取る「後ろ前」の法原則。まるで上書き保存された文章のように、前に書かれていた文言、9条1項2項がこれで消されてしまいます。

警察も消防も海上保安庁もいっさい出てこない、憲法という最高法規の中に、国民投票の結果次第で、自衛隊だけが書き込まれる。このことが自衛隊という組織にどれほど強い国民の「お墨付き」、強い正当性と公共性を与えることになるのか、ということ。

安保法制によってかわってしまった自衛隊は、今や、災害救助だけでなく、海外の戦場に派遣されて、他国の人を殺すかもしれない、殺されるかもしれない、そういう任務を負わされている存在です。それがわかっているからこそ、私は、隊員さんの名誉のためとか、災害時に助けてくれることへの感謝として、自衛隊を憲法に書き込む案に○と書くことができません。「ありがとうと引き換えに」彼らを戦地に送り出すことに私は加担したくないのです。隊員さんたち一人一人もまた、私と同じ、尊重されるべき個のひとなのだから。

キンキュウジタイジョウコウのこと

この舌を噛みそうな条項は、憲法に国家緊急権を書き込もう、とする案のこと。簡単にいうと、大災

害を理由に、内閣総理大臣に権力を極端に集中させ、内閣だけで法律と同じ力をもつ政令をつくったり改正したりできるようになる、ということです。そもそも法律って、この国に住む人たちの自由や権利を制限する大きな力をもつものだから、本来は国民の代表である国会議員が時間をかけて話し合って作ることになっているはず。それが、話し合いをすっ飛ばして、一部の人たちだけで決めてしまえるようになるってことなんです。

日本は災害が多いから憲法にこれが必要なんだ、といわれれば、それもそうかとうなづきたくありませんよ。けれども災害支援に長くかかわってきた弁護士さんは、いくつかの理由をあげて、緊急事態条項は必要ないといっています。たとえば……

- ・災害対策基本法や武力攻撃事態法など、今の日本にはかなりの強制力をもった法律がすでにあるので、災害のためにこれを憲法にわざわざ書く必要はないこと。
- ・この条項をいれたがっている人たちがよくあげる例として、瓦礫撤去のために、というのがありますが、これも今の法律で対処できること。
- ・災害時に何が必要か判断できるのは現場の市町村、内閣に権力を集中させるとかえって現場は動きにくくなる。また、どれだけ法整備が進もうと憲法に書こうと、そもそも事前に準備していないことは、現実の災害時には役立たない。
- ・ここでいう災害が、自然災害に限定されず、人的災害もふくまれていることに要注意。どう拡大解釈されて、市民の権利が制限されるかわからない。現に、日本弁護士連合会は、憲法にこの緊急権を入れることは「人権侵害と立憲主義を損なう恐れあり」として反対の意見書をだしている、などなど。

災害に備えての法律はすでに十分あるにもかかわらず、どうしてもこれを憲法に入れたい理由は何？ それは先に書いた、憲法に明記することで自衛隊に強いお墨付きを与えるのと同じ理由じゃないだろうか。

緊急権が憲法に書き込まれたら、真っ先に影響を受けるのはおそらく報道の自由でしょう。政府がい

ま何をしているのか、懸命に知らせようと努力している記者に対して、今が今もあからさまな圧力がかけられています。この政府が「緊急権」を本当に手にした時、一体どんな力をふるうことになるのか、私たちの知る権利は守られるのか。そのことをリアルに想像してみしてほしいのです。

実は、2012年に自民党がつくった改憲草案の中にも、「緊急事態条項」がありました。それに比べて、今出されている素案は、サイズだけ見れば4分の1弱、内容もはるかにマイルドっぽい。法のしろうとの私がさっと一読したときは、前よりも危険じゃなくなったのかな、と思ったほどです。

けれども、災害にくわしい弁護士さんたちは、マイルドに見える分、前の案以上に歯止めがなくなり、危険性はましている、というのです。にもかかわらず、9条改憲と違ってまるで話題になっていない。これは余計にあぶない！と、『BOOK+』に「9条、だけじゃない、かいけん案」の項目を設けて、この緊急事態条項素案をとりあげたのでした。

まずは、災害支援に長くかかわってきた弁護士さんたちの現実的な言葉に耳を傾けてみて。そして、災害にかこつけて、時の権力者が自分のしたいことを好きにできる権限を手にいれようとしていることかもしれないぞと、慎重に考えるきっかけにしたいだけだったらうれしい。そうやってはじめて、いろいろ調べて書いた甲斐がある、というものです。

テレビCMの大洪水

改憲案が議員の3分の2の賛成を得て、国会で正式に発議されると、それから60日~180日で国民投票の本番の日。憲法をかえるにしろかえないにしろ、最終的に選ぶのは国民の皆さまですよ、と政府はたびたび言います。だけど発議から投票までのほとんどの日々、私たちははたして改憲について冷静に公平に判断できる環境にいらっしゃいますか。

普段の選挙と違って、国民投票では商業の規制がほとんどありません。憲法をかえたい派の人たちは、圧倒的な資金力を持っていて、国民投票のスケジュールも事前に予測できます。そんな人たちが周到に準備して流す国民投票のテレビCMの洪

水に、何の影響も受けないと言いきれる人、一体どれほどいるだろう。発議されたらされたで、その時ちゃんと考えよう、っていうんじゃないかと思わないか、って思うんです。

憲法をかえるのに必要なのは、18歳以上の国民の有効投票の過半数です、有権者の過半数、ではなくてね。なので、どんなに投票率が低かろうとその数をもって、憲法は本当に書きかえられます。その憲法は、今を生きる人だけでなく、これから先を生きていく人たちの未来におおいに関わること。だからこそ、憲法のどこをどうかえるかよくわからないまま投票に行くのも、わからないから投票に行かないのも、民主主義の未来にとってそれは不幸なことなんじゃないか、って私は思ったんです。

そうなる前に憲法と改憲について知るほんの少しのヒントになれば、と願って書いた『たいわけんぼう BOOK+』。読んでみたいな、と思われたらどうか私までご連絡くださいね。



(表紙の紙色の名前から、通称メロン本とサクラ本です)

メールアドレス：sue-miz@nifty.com

または娘のwebshopまで。

mai works WEB SHOP

<http://maiworks.cart.fc2.com>

『わたしとあなたのけんぼう BOOK』は600円、新刊『たいわけんぼう BOOK+』は900円。送料は一冊180円、各一冊ずつなら同じく180円、それ以上は送料がかわります。

盆踊り漫遊

竹中尚文

第5回

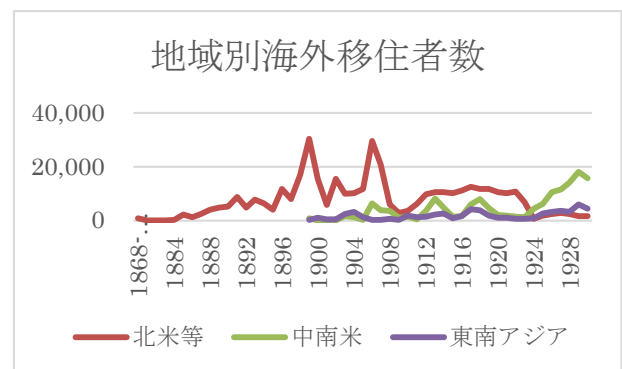
4. 排日のはじまり

前回は、「サンフランシスコ日本人学童差別事件」をきっかけとして「日米紳士協定」がむすばれて、「写真花嫁」の時代に入りました。「写真花嫁」は、当時のアメリカでの日本人の社会が、出稼ぎの一時的滞在の意識から家族を持って定住するという意識への変化を意味していました。日本人が腰を据えてここで暮らしていこうと思った頃、アメリカの社会は出て行けといい始めます。今回は、アメリカにおける排日についてお話したいと思います。アメリカにおいて、排日の歴史は前半と後半に分けられると思います。前半は1924年の排日移民法までで、後半は第2次世界大戦終結までと思います。

1885年に日本政府が移民を解禁してから1906年に「サンフランシスコ日本人学童差別事件」が起きるまでの約20年間、アメリカ本土やハワイに渡る日本人は増

え続けました。一方で、1880年代はアメリカ社会が中国人移民を閉め出し始めた頃です。中国人はそれ以前からアメリカに渡り、大陸横断鉄道建設に大きな役割を果たした労働者です。大陸横断鉄道が完成して(1869年)、労働力に余剰ができると不要な存在となりました。1870年に成立した帰化移民法によってアジア人を「帰化不能外国人」とするようになりました。

とくに1900年頃には、日本人が急増した印象があったようです。それはグラフでも明らかですが、日本国内の



日清戦争(1894-95)と日露戦争(1904-05)の影響も大きかったと思います。くわ

えて、1899年にアメリカ合衆国によるハワイ併合がありました。当時、日本からハワイに移り住んだ人はとても多く、またその労働環境は過酷を極めたといえます。ハワイで最も過酷に扱われた日本人労働者は、ハワイ併合によってアメリカ本土に渡る人が多かったようです。

1900年代に入り、中国人の流入も一段落する一方で中国外交官の努力もあって中国人排斥運動が止まりました。その頃に日本人が増加して、アメリカの人たちの矛先は日本人に向き始めました。日本人排斥の始まりの象徴的な出来事が「サンフランシスコ日本人学童差別事件」(1906年)でした。この事件については、前回にお話をしましたが、アメリカにおいての排日運動の始まりともいわれる出来事でした。

その前年にあったサンフランシスコ大地震に対して日本政府が拠出した義援金の額は、他の国々の支援額の合計を上回るものでした。サンフランシスコ市は、地震の最も被害の大きかった地域の学校に日本人児童を集めようとしたのでした。地震の被害が大きかったので、治安の悪いところでした。このサンフランシスコ市の決定に、当地の日系人のみならず日本の国内でも一斉に反発の声があがりました。そして

それは日米両国の外交問題となり、「日米紳士協定」という決着にいたるのです。

排日の次の段階は、1913年にカリフォルニア州が外国人土地法を成立させます。これは外国人の土地賃借及び所有を禁ずる法律でした。法律提案者のウェブは提案理由を「日本人をカリフォルニアから追い払うことを目的としている」と述べました。先に中国人を対象に成立した帰化移民法(1870年)で、アジア人は「帰化不能外国人」と扱われていました。したがって日本人はこの土地法によって、農地を所有できなくなりました。一方で、この頃になると多くの日本人は結婚をして家庭を持つようになっていました。ここで生まれた子供たちは、アメリカ生まれだからアメリカ国籍を有することになります。土地を二世名義にすることで、この法律に対抗したのでした。

こうした日系人の動きに対して、1920年に外国人土地法修正法を成立させて、外国人及び未成年者の土地所有を禁じました。この立法によって、日系人の土地は急速に減少していきます。

1922年には、小沢孝雄氏にアメリカ連邦最高裁判決が下ります。小沢孝雄氏というのは、アメリカの帰化移民法に挑戦した

代表的な人でした。カリフォルニア大学バークレー校を卒業し、敬虔なキリスト教徒である彼は、自分こそが帰化にふさわしい人物であるとして、帰化を訴えました。小沢氏の帰化申請に対して、1870年の帰化移民法が適用されるべきであるとして帰化申請を却下しています。この帰化移民法は、アメリカの国籍を有する権利は建国の白人にあって、アフリカ系の民族とアメリカ先住民族にも付随して認められるだけでした。アジア人はどんな人物であれ、帰化は認められなかったのです。

さらに、1924年には排日移民法が成立しました。これ以後、日本人はアメリカに移り住むことはできなくなりました。この法案の成立については、当時の日本の駐米大使が法案の成立に対して「重大なる結果」を招くと述べました。このことが、アメリカ連邦議会は脅しと捕らえて、法案の可決を早めたともいわれているようです。脅しであったかどうかに関わらず、巧みな外交とはいえません。一方で、アメリカの排日運動の根底には、人種差別の意識があったと受け止められるものでした。政治学者の簗原俊洋氏は「排日運動と排日移民法はアメリカの道徳的影響力を大いに失墜させ、白人本位の世界システムでは日本の存亡

が脅かされるといった危機感を当時の多くの日本人に抱かせたという事実である。そうした潜在的意識が、その後の日本を国際協調主義体制から徐々に離脱する方向へ導いた」（『朝日選書 アメリカの排日運動と日米関係』2016年）と指摘されています。

1906年から1924年までの排日運動は、アメリカ人の人種差別意識が強く表現された運動でした。一方で、日本では大正時代にあたり、国内にも民主主義を求める人々が登場してきます。この人たちにとって目標とするのがアメリカでした。ところが、排日というアメリカ人の否定的感情によって、日本人の嫌米意識が強くなりました。双方の否定的な感情が外交に影響し、冷静な展望を持つことができずに太平洋戦争の一因にもなったようです。この歴史を現代の韓国と日本の相互の政治家と国民は学ぶ必要があるように思います。また、二国間の国際関係の悪化を最も恐れるのは、その間で暮らす人々です。

ところで、なぜアメリカ人が1900年頃から日系人に対してこのような悪感情を表現する行為を繰り返すようになったのでしょうか。

私は、数年前にカリフォルニアから我が

家を訪れた人にイチゴを勧めたことがあります。その人は、イチゴを口にしたいくはなかったようですが無理に勧めました。予想外の美味しさだったようです。イチゴだけではありません。今、日本で栽培される柑橘類、トマト、リンゴなどはアメリカの人を驚かせるものです。かつて、アメリカからオレンジを輸入することが決まったとき、日本のミカン農家は消滅するだろうといわれた時代がありました。日本の農家は美味しい野菜や果物を作ることに卓越した能力があると思います。

19世紀のカリフォルニアの農業は、牧場が中心であったそうです。20世紀に入る頃から野菜や果樹が栽培されるようになり、今では全米の野菜や果樹の供給地の一つとなっています。19世紀末からアメリカに渡った日本人は、英語が得意なので渡った人ではありません。多くが農家の出身者でした。毛布一枚を持って移動する農業労働者として働き始めました。働いてお金を少しずつ貯めて、わずかな土地を取得するところから始めたのです。わずかな土地で牧場をすることはできません。自分たちの得意な農業をしたのです。小さな土地に手をたくさん入れる、労働集約型の農業です。そこで作られる作物は野菜や果物が

多かったのです。こうした農業は気候条件にも適したのでしょう、日系人の農場は増え続けました。

20世紀初頭の約20年間の日本人排斥運動の中心になったのは、白人の労働者と農民です。サンフランシスコ日本人学童差別事件の時、サンフランシスコ市を動かしたのは労働組合でした。日本人がやって来て、低賃金で働く多くの日本人が故郷に送金していることに対しての憤りがありました。排日運動は白人農民に広がりました。少しずつ農地が日本人のものになっていくことへの危機感があったのでしょうか。牧場のような農業から果樹野菜のような労働集約農業への変化でした。今日のカリフォルニアの農業を考えれば、転換期であったのでしょうか。しかし、農業の変化を受け入れて共に繁栄していく道を探らなかったのは残念なことです。それは、現代のアメリカでも壁を作って変化を望まない社会を守ることが、新たなる未来を開くとは思えません。

この時代背景の中で、仏教はどうしていたのでしょうか。日系キリスト教会と日系仏教寺院が存在していました。キリスト教と仏教の比較をここで論ずることはできませんが、社会との関わり方には相違があり

ます。キリスト教はいかに現世を生きるのか、神の御心に従って生きるのか、ということが大切です。従って、現実の社会への関わりは積極的といえるでしょう。フィリピンのマルコス政権から民主政府への移行や南アフリカのアパルトヘイト撤廃でキリスト教会の役割は絶大なものでした。これに対して、仏教は成仏が中心となるので死をいかに認識し、そこから生を捉えるという性質から政治社会への関与が比較的少ないのかも知れません。いずれにしても、宗教がいかに人々の心に寄り添えるかということが、その宗教の社会的存在であるといえるでしょう。そう考えれば、第2次世界大戦後に日系仏教が残っているのは、この排日の時代にその一因が潜んでいるように思います。

日本仏教がアメリカ合衆国本土に渡ったのはおよそこの排日の時代でありました。(ハワイに渡ったのはもう少し前になりますが、私は詳しく調べられませんでした。)

浄土真宗本願寺派(お西)	1899年
真宗大谷派(お東)	1904年
真言宗	1911年
日蓮宗	1914年
曹洞宗	1922年

浄土宗 1928年
各宗派ともそれほど大きく差はないようにみえますが、浄土真宗本願寺派だけが突出した展開を見せます。

前々回に述べましたように、本願寺は二人の僧侶をサンフランシスコに派遣して、アメリカでの浄土真宗本願寺派の組織づくりを始めたのが1899年でした。1899年にはフレズノに法話会を組織してお寺が作られ始めます。同じく1899年にサクラメントで仏教青年会が組織されました。1900年にはやはりフレズノに仏教青年会が作られました。1901年にはシアトルで、1902年にはサンノゼで、1903年にはオークランドで仏教青年会が作られました。1909年には西海岸の20カ所でお寺が既に存在したというのです。浄土真宗のお寺がとてつもないスピードで増えていったのです。どれも日本人が暮らす地域でした。

寺院建立というイメージではありません。宗教組織なり、宗教者の思いで寺院を作るのではなく、そこに暮らす人々が自分たちの集まれる家なり小屋なりを建てたのがお寺になったと思います。こうした寺院建立は、浄土真宗の本来の姿です。浄土真宗のほとんどのお寺は、有力者の一念発

起で寄進を受けて建ったものではありません。普通に暮らす人々が力を合わせて粗末な建物を建てたところが始まりでした。

当時の様子を伝え聞くところによれば、日系人の半数が日系キリスト教会のメンバーであり、半数が浄土真宗のお寺のメンバーだったそうです。異国の地で就職の機会を考えてもキリスト教徒が有利です。現地の日本政府の出先機関も「郷に入っては郷に従え」という感じだったそうです。前回に申し上げた「写真花嫁」のアメリカ入国の時も、領事館はキリスト教宗教者だけを準備したことに不満がでて、浄土真宗の僧侶を呼んできました。また、当時の日本政府は日本語学校を勧めませんでした。アメリカで暮らすのですから日本語よりも英語を教えるように勧めました。日本語学校というと浄土真宗のお寺というイメージですが、当時は日系キリスト教会でも日本語学校がありました。

当時の一世代日本人は英語が不得意な人がたくさんいました。二世はアメリカで生まれて、アメリカで学校に行きます。二世にとっては英語が普通の言語になります。そうすると、一世は子供を日本語学校に入れて、日本語を話せるようにしたのです。

今ではほとんど亡くなってしまった二世の人たちが、家に帰ると英語禁止の家庭がほとんどだったと話してくれました。

第2回のところでも申しましたが、当時の浄土真宗のお寺は日本語を教える必要性を認識し、積極的に日本語学校を運営していました。こうした行為は、反日運動の中で「ミカドの精神」を教えていると批判されました。お寺は、日本のナショナリズムの拠点のように受け止められていました。一方、日本では浄土真宗は他の宗派に比べてナショナリズムから遠い立場でした。

日本の政府からもアメリカ社会からも決して勧められはしないけれど、日系の人たちには浄土真宗のお寺は必要な存在がありました。守屋友江氏の指摘によれば、1930年代に相当数の日系二世の若者を日本に留学させて開教使を養成したそうです。（開教使：浄土真宗本願寺派では、海外で布教を中心とした活動をする僧侶をこのように呼びます。）このことは、当時の日系人社会が浄土真宗を不可欠なものとしていた証左といえるでしょう。

日系移民の歴史年表

アメリカでの出来事	西暦	和暦	日本での出来事
	1868	明治元年	
帰化移民法	1870	明 2	
	1877	明 10	西南戦争
	1885	明 18	移民解禁
	1894-95	明 27-28	日清戦争
ハワイ併合 本願寺による北米開教の開始	1899	明 32	
	1904-05	明 37-38	日露戦争
サンフランシスコ日本人学童差別事件	1906	明 39	
日米紳士協定	1907-8	明 40-41	
写真花嫁			
カリフォルニア州外国人土地法	1913	大 2	
	1914-18	大 3-6	第1次世界大戦
外国人土地法修正法	1920	大 9	
	1923	大 12	関東大震災
排日移民法	1924	大 13	
北米で初めての盆踊り(サンフランシスコ)	1931	昭 6	



男は 痛い !

國友万裕

第30回

『七つの会議』

1. 人生は自転車の車輪のように

1月の下旬。その日は学生たちと昼飯を食べる約束をしていた。彼らと行くことになっていた食堂は、もう20年近く前に、あるその大学の卒業生の人から聞いたことがあった食堂である。その人は俺より少し年下なのだが、学生の頃そこでよく食べていたと話していた。俺は、一度行ってみたいと思いつつながら、なかなか行く機会がなかった。店の名称が「〇〇食堂」なので、ネズミでも走っているような汚い大衆食堂みたいなイメージもあったし、今はもっとオシャレな店がいっぱいあるから、そんなお店、今の学生が行くのかと思っていた。それにもうその人も今50代のはずだから、彼が学生の時と言ったら30年も前だ。とっくに閉店しているだろうと思っていた。ところが、最近、ある男子学生と休み時間に話をしていると、その食堂の名前が出たのだった。彼は体育系の子なのだが、彼のクラブの子たちはしばしば行くらしい。彼は俺によく懐いて来る子で、「唐揚げ定食がなんとも言えず美味しいですよ。今度、行きましょう」ということになったのだった。

行ってみると、思っていた通り、古いレトロなお店。汚くはないが、年季の入った椅子と店内である。おそらく満員になっても全部で20人くらいしか入りそうもない、小さなお店。やっているおじさんとおばさんはおそらくご夫婦なのだろうが、もう70歳は確実にやっている。俺はカロリーのことを考えて、唐揚げではなく、焼肉定食を注文したのだが、「僕の一切れ食べていいですよ」と唐揚げ定食の唐揚げを、その男の子が一切れくれた。確かに美味しい。独特の味だ。

この人たちは唐揚げをずっとあげていたのか。半世紀にもわたって…。映画『スモーク』で、ハーヴェイ・カイテルが演じるタバコ屋の男が、毎日同じ街角を同じ時間に写真に撮っているエピソードはあまりにも有名だ。同じことを繰り返しても、一度として全く同じ日は存在しない、毎日、1日1日は微妙に違ってくる。そんなことをしみじみ考えた。

FBを始めて、はや7年経っている。FBには「過去の思い出」というページがあって、過去の同じ日のことを振り返ることができる。最近、わかったことなのだが、行きつけの食堂で週替わりランチをやっている店があるのだが、毎年同じメニューを同じ時期に出している。老舗だから粗方1年の週替わりメニューはあらかじめ決まっているのだろう。かくいう俺も、毎年、大体同じところで食事をし、同じところで映画を見て、同じジムに通い、同じ病院に通う。そういう、同じところをぐるぐる回っていく生活がずっと続いているのだ。

しかし、着々と時間は経っているのだ。自転車の車輪が同じように回りながらも、前へ前へと進んでいくように、同じようなところを回っているように見えても、どこかへと向かって、人生は動いているのだ。

FBで昔の教え子や若い友人たちとつながっているのだが、彼らは、突然、「結婚しました」「子供ができました」という記事を投稿する。20代から30代にかけては、結婚したり、子供を作ったりする人が多いのは、当たり前と言えば、当たり前のことだ。驚くようなことではないのだが、俺は何やら胸が痛いような複雑な思いになる。

俺は元々、結婚したいとも子供作りたいと

も思っていないので、別に結婚や出産自体が羨ましいとは思わない。羨ましいのは自分のジェンダーを素直に受け入れられる彼らの思いなのである。結婚したら、相手と姓が同じになる。子供ができたら、男は扶養者の役目を果たさざるを得なくなる。俺だったら絶対にしたくないことを彼らは喜んで受け入れようとする。

おそらく彼らは、「幸せの絵」みたいなものを持っている。パートナーや子供のいる家庭が幸せなのだというイメージを持っている。家族の幸せをプライオリティにして人生を生きていこうと思っている。そういう家族幻想を若い彼らは内面化している。結果的にうまくいなくなる人はたくさんいるのだけど、若気の至りで、後先のことは考えない。だからこそ、結婚や子育てのような一大事に飛び込んでいけるのだ。俺は、そういう幻想を最初から持つことすらできなかった。いや、正確に言えば、小学校くらいまではそういう幻想も抱いていた。しかし、中学から本格的にジェンダー強迫症となり、潮流とはかけ離れた人生を歩むことになった俺は、人生の早い時期にそういう幻想を抱くこともなくなってしまっていた。そこに俺は自分の孤独を感じるのであった。

2. 衰えていく体

去年の秋のある日、その日は仕事だったが、ずっと朝からお腹が痛くて、どうしようもなかった。俺はしばらく便秘気味で便秘薬を飲み過ぎたのが原因なのだろうが、それにしても痛い。水分をたくさん補給しながら、どうにか仕事をこなした後、夜はついに近所

の診療所に行った。そこでレントゲンを何枚かとった。「お腹にたくさん、ガスと便が溜まっています。それで痛いんだと思いますし、これが出れば大丈夫です」と先生に言われ、浣腸を3本ほどもらった。そして、家に帰った後、トイレで頑張ってみた。すると痛みがさらにひどくなり、もう居ても立っても居られない痛みとなった。仕方がないから救急車を呼んだ。前に救急車を呼んだのは30歳の時。もう四半世紀近く前だ。あの時は深夜に鼻の呼吸が苦しくなり、近くの総合病院に運んでもらったのだが、その時の医者というのがヤクザさんかと思うような人で、「このくらいのことじゃ、死なんから。眠れないんだったら、起きときゃええんや」という暴言を吐かれた。看護師さんたちも、「今、人の命を救っているところなんだから忙しいんです」と迷惑そうな様子だった。「所詮、病院なんて」と思ったものだ。しかも、病院に運ばれる救急車がうちの近所にやってきたとき、周りに近所の人たちが集まってきて、笑ってみていた。25年前はそんなものだったのだ。あれこれ社会全体が礼儀正しく、親切になっていったのはその後である。

今回は、救急隊の人がやってくると「ご主人ですか。どういう状況ですか」と一人の人に聞かれ、救急車の中に横たわるともう一人の人から「お兄さん、痛みはどのようなものですか」と訊かれた。俺は激しい痛みにもがきながら、「ご主人」とか「お兄さん」と言われることにおかしくなってしまうていた。俺は「ご主人」じゃないし、「お兄さん」という年でもない。とりわけ、「ご主人」という言い方は、ジェンダーの世界では禁句だから、普段ほとんど使ったこともない言葉だ。やはり、

俺は普通の人とは違っているのか。

その後、病院に運ばれたのだが、痛みがひどいのに相当の時間待たされる。やっと処置室に入って、鼠径ヘルニアだということはすぐにわかり、下半身を脱がされ、若い男の先生二人が一生懸命、脱腸を押し込もうとしていた。しかし、なかなかうまく入らない。

「痛い、痛い、痛い」と俺はあられもない姿で、もがいていた。女性の先生もヘルプに来たが、うまくいかない。しばらく経って、ベテランの男の先生がやってきて、さすが年の功で、一瞬にして押し込んでくれた。

「とりあえず、今日1日は入院してください」と言われ、俺は着の身着のままのままと泊まることになった。それにしても、女性も含めた人たちの前で睾丸をむき出しにさせられ、その近くを触られるというのは普通では考えられないことである。しかし、病院の人たちはそれが日常だから、事務的にやってのける。医者は収入も多いし、憧れる人が多いのだろうけど、あまり気持ちのいい職業じゃないだろうなあ。「俺は医者にならなくてよかった」とどうでもいいことを思うのだった。

とりあえず、一泊することになり、久々の入院だった。朝起きるとまずは大学に電話をかけて休講を伝えた。Facebookにも写真をアップしたので、色々な人から「大丈夫ですか」というメッセージが入った。大丈夫だった。一応、はみ出した腸が元におさまったので、痛みは一気に引いた。しかし、病院の先生の話では早くに手術したほうがいいとのこと。なんとなく気が重かった。俺は前に一度全身麻酔を経験しているが、あれは一瞬にして意識がなくなるので、やはり怖い。他の人たち

に尋ねたところ、ヘルニアぐらいは部分麻酔でできるらしい。歳を取ってくると腸のところが緩んできて、また同じことが起きる可能性があるから、すぐにしなくてはならないということはないけど、時間のある時にでも手術しておいたらと言われた。やはり、俺はもう歳なのだった。

思えば、五十肩はずっと治っていない。10年前までは得意だったバタフライが今はできないのだ。腕が痛くて上がらないのである。一時治りかけたのだが、また調子が悪くなった。鍼を打ちに鍼灸院に通うようになったが、まだ今のところ完治はしていない。

さらに、今年の1月の終わり、仕事が終わって、6時半過ぎに雨の中をバス停に急ごうとして、俺は滑って転んでしまった。右に傘を持っていたため、傘は大破、メガネにはヒビがはいって、フレームが曲がってしまった。俺はその足で眼鏡屋に行き、新しいものを注文したが、遠近両用眼鏡なので1週間くらいかかる。間に合わせに、安物をスペアとして買うことになった。気がつくやうに、羽織っていたコートも破れている。これも早速買い替え。さらにその後、ズボンも穴が空いてしまったため、買い換えることになった。左の顔と手と膝を打撲したようだった。頭を強く打ったため、起き上がった後も一瞬目眩がした。

翌朝、起きてみると左頬にコブができていた。さらにその翌日になると、こぶが充血に変わっていた。歳をとると、2日くらい経ってから後遺症が出てくるのだ。俺は、せっかちで仕事場にも早くに到着する。おかげで遅刻したことは一度もないが、家を出る時間が早いので、待ち時間が長い、時間を無駄にしているのかもしれないと思っていた。もっと電

車やバスの到着時間に合わせて生活した方が合理的かと思っていた。しかし、このことがあったことで、やはり元のスローライフで生きていったほうがいいのだと考えを戻した。遅刻するからと、バスや電車にダッシュしたりする歳ではないのだ。

3. 死んでいく命・生まれてくる命

今、俺の周りは生と死が渦巻いている。先日、俺と同年で突然亡くなった先生がいることがわかった。また、ある外国人の先生が70歳過ぎで亡くなったことを聞いた。つい先日まで仕事をなさっていて、顔も見ていたので、突然だった。40代くらいまでは、まだ死ぬ人は少ない。しかし、50代になると徐々に死ぬ人が増えていく。俺もヘルニアの時、転んで怪我をした時、あまりの痛みで一瞬死を意識したりもした。これくらいのことで死ぬことはないだろうとはわかっていても、歳をとって痛みを抵抗するエネルギーが弱ってきていることを感じずにはいられなかった。

その一方で、去年の暮れ、かつての教え子から女の子が生まれたという連絡が入った。「良かったね。12月の末に生まれると親孝行だという話聞いたことあるよ。ほとんど来年なわけだけど、今年の税金を安くしてくれるからね。今もそうなのかはわからないけど…12月31日生まれの娘のいる先生がそう言っていたよ」と俺は彼にメッセージした。俺のところに毎週やってくるマッサージの人にも6月子供が生まれる予定で、男の子だということはわかったみたいだ。「良かったよねー。ちょうど年号が変わる頃に生まれるし、年齢の計算もしやすいしね笑」。俺は彼らがお父さん

になっていくのを祝福しつつも、子供を育てるなんて大変だろうという気持ちが湧いてきて、羨ましいという気持ちにはならないのだった。

これから先の 10 年間はおそらく俺の周りで死が渦巻く 10 年間となるだろう。母ももう 80 だし、まだまだ元気だから 90 過ぎるまで生きるとは思うが、おじさんやおばさんたち、そして、かつて親しかった年上の先生たちなどが次々に死んでいくことになるに違いない。その一方で、かつての教え子たちは、結婚し、子供ができ、家庭を作っていく。生と死のドラマが巡り巡っていく。そのことに対する覚悟を決めなくてはならない。

知っている人が一人、また一人と死んでいき、新たな命がその穴を埋めるように誕生していく。これからの俺の人生は、そういうドラマの渦に身を置きながら、自らの余生と死を考えることになるのだろう。

俺は子供がないから、俺の遺伝子は淘汰される。男が女よりも浮気するのは、自分の遺伝子をばら撒きたいからだという話を聞いたことがある。女は、(双子や三つ子の場合もあるが) 普通は 1 回に 1 人しか自分の子を産めないから、何人もの男と関係を持っても、自分の遺伝子が増えるわけじゃない、だから、男ほど浮気をしない。だけど、男は一変に何人もの女に孕ませることができる。男も女も自分の遺伝子を残したいという原初的な欲求があり、それがセックスをする一因なのである。

しかし、俺はその原初的な欲求を果たすことはできないし、果たしたいとも思わなかった。俺の遺伝子なんて残したくない。こんな悲しい思いをする子を世の中に生み出したく

ない。こんな考えしかできない俺は、なんと不幸！ 悲しい男なのだろう。

4. なぜ、男は女を追うの？

とはいうものの、ここまで徹底して女性と付き合わないで生きて来たことは、ある意味で勲章だろう。世の中はまだまだ恋愛至上主義である。俺みたいなやつは不幸、惨めである、と決めつけてかかっている。恋愛なんてしないならしないでも生きていける。前にある本で読んだことがある。男性は自分の感情のはけ口を女性に代替させることで解消しているのだと…。

もう 10 年近く前のことになるのだが、当時同じグループにいた男性から、食事でもしませんかと誘われた。仕事で嫌な部署に配属されることになって、落ち込んでいるから誰かと話したいと言うのだ。俺は、彼が俺に悩みを聞いてほしいと思っているのだと思い、食事に行ってみると、そうではなかった。彼は自分の悩みは話そうとはせず、俺の話の聞こうとするのだ。俺はぐちぐちボヤクタイプなので、俺の排泄行為を見て、自分も排泄した気分になる。そのカタルシスが心地いいらしいのだ。男子校だと女性的な男の子はモテると聞いたことがあるが、その心理にも繋がるのかもしれない。恋人や妻のいる男性は、女性たちの愚痴や悪口を聞いて、自分も排泄した気分になるのだろう。だから、みんな結婚しようとするのか。いや、男が結婚するのはセックスをしたいからだと言う人もいる、しかし、それは違っているだろう。昔みたいに結婚するまでは純潔を守るという世の中ではない。セックスが目的なのであれば、独身の

方がいくらでも色々な女性と自由に付き合うことができるのだ。

潮流から外れている俺はあれこれ思いを巡らすのだが、普通の人とはそこまでは考えていない。まあ、そろそろ周りも結婚するから俺も結婚するか。子供ができちゃったし、結婚するか。そういうノリなのである。結婚や恋愛に対して懐疑的になったことがないため、深く考えもせずに女と関係を結ぶ。性欲で理性を失ってしまう。そんなものなのだろう。

だけど、俺はそれができないのだ。何人も女性からトラウマを負わされるにつれて、俺はいつの間にか女性を生身の存在としてではなく、厄介な存在として見るようになってしまっている。その気持ちを解消するために俺は色々な人たちにそのトラウマをぶつけてきた。しかし、理解してくれる人は極めて少ない。カウンセリング、男性運動、NPO、どこに行っても、俺の気持ちを理解してくれる人はほとんどいない。理解してもらいたいと思うから、余計に怒りは募っていく。理解してくれなくて構わないと割り切るのが俺にとっての一番の得策なのだ。人間なんて所詮は孤独なんだ。他人に理解してもらおうとする俺が悪いんだ。聖職者の中にはずっと純潔を貫く人もいる。キリストだって、パウロだって、生涯独身だったのだ。俺は、女性と付き合えない自分を、付き合わなくても大丈夫だと思って、誇りにしていいかもしれないのである。

5. 俺は男なのか？

これと関連して言えることなのだが、俺は本当に男なのかと時々不思議に思うのだ。俺

は自分が男か女かわからないのだ。俺は女性よりも男性の方が楽しく付き合えるし、俺はゲイなのかもしれない。しかし、俺は、男の人の厚い胸板や腹筋を見て憧れることはあるのだが、ペニスを見たいと思うことはないのである。仲のいい男の人と男同士で風呂に入るのは好きだが、アナルセックスは怖くてできないし、したいとも思わない。思春期の男の子はペニスのサイズで悩んでいる子が多いと聞くが、俺はペニスのサイズなんて気にしたこともない。そんなので男の値打ちが決まると思っているというのがそもそも理解できない。

俺が大学の頃、クラスメートの男子2人が下宿に遊びに来た。彼らが俺の部屋を見てもらった言葉は、「男の匂いがする」ということだった。俺はその時、散らかしていたわけではなく、彼らが来ることは前もって分かっていたので、きちっと掃除をしていた。俺の部屋はヌードポスターやスポーツ用具などのような男性的なものは置かれていない。部屋の色使いも女性的だと思う。だから、彼らの反応は意外だった。2人とも自宅生で、お母さんや妹と暮らしているため、男しか住んでいない、女性の匂いを全く感じない部屋に対して新鮮な驚きを感じているようだった。2人とも異口同音に同じ感想を漏らした。やはり俺は男なのだ。しかし、大手を振って、「俺は男だ！」と言える確証がないのだ。俺は子供の頃からジェンダーに悩んでいるから、常に自分の性のアイデンティティを受け入れられずにきているため、普通の人なら考えもしないようなことで、自分は男じゃないという意識を持ってしまっている。

おそらく、ジェンダーやセクシュアリティ

のことはできる限り考えないのが一番いいの
だろう。事実、普通の人はいくらまで考えない
から性のアイデンティティを受け入れている。
もちろん、ジェンダーは俺の研究分野だけ
けれど、俺の場合は映画や文学で描かれるジェ
ンダー表象の研究だから、ある程度距離を置
いて考えればいいのだ。そうしなければ、いつ
までもジェンダーパニック人間のままなので
ある。

普段親しくしている牧師さんがおっしゃっ
ていた。キリスト教でも上からかぶせようと
する人と下から押し上げようとする人がいる
と。原理主義者で聖書のルールを字義どおり
守らせようとする人と解釈を敷衍させて多く
の人を信者に押し上げていこうとする人。そ
の牧師さんはリベラル派なので、当然後者と
なる。おそらくジェンダーもこれと同じだ。
俺は男らしさの解釈を広げる、そのことで多
くの男たちに自己肯定感を与え、男のルール
にはまらないところがあっても、男として承
認することがこれからは求められているはず
なのである。

俺の人生、これからどうなるのか。占星術
によると人間の人生は生まれた時から円を描
いていき、72歳がその人生のライフサイクル
の円が完結するらしい。そういえば、その中
間地点となる、すなわち、半円形を描いた36
歳くらいの時は、波乱万丈だった。しかし、
そこで、サイクルの半分が終わったのだ。そ
の後の36年間では最初の36年間で学んだも
のから収穫を得て、ライフサイクルは完成す
るのである。72歳まで、後17年。その時ま
でに全ての事柄を経験し、人生を完成させよ
う。自分の中の混乱を鎮めよう。そしてあと
は余生として安らかに生きていこう。

先日、元教え子の女子二人と食事した。た
らふく料理を食べた後、喫茶店でしばらく話
をするようになった。二人ともアクティブな
タイプの子で、食べるのもよく食べる。女の
子だからというジェンダーには囚われていな
い。何よりも感心したのは、彼女たちは仕事
をずっと続けたいと思っているということだ
った。若い女の子だとまだまだ「早くに結婚
したい、家庭に入りたい」と言っている子
の方がマジョリティである。それは彼女たちも
認めている。「でも、家にいたんじゃ退屈だろ
うし、男の人に養ってもらっていて、お給料
が少ないとか文句を言うってことはできな
いのですもの」。「旦那がリストラになった時に、
働いてなかったら大変なことになっちゃう
し」など、彼女たちの考え方は極めてしっか
りしていて、男に経済的に頼ろうなんていう
気持ちは全くないみたいだった。こういう子
たちもいるんだから、女性に対する偏見は消
さなくてはならない。まだ彼女たちのような
子は少数派であるにしても…。

6. 『七つの会議』(福澤克雄監督)

池井戸潤原作の企業の腐敗を描く映画であ
る。それなりに楽しめる映画だが、男性ジェ
ンダー研究の俺には不快な面もあった。

野村萬斎主演で、最初が一番悪っぽく見え
る彼が実際にはヒーローだったという話だ。
悪く見える男がいい奴だったという筋立ては、
本当によくあるパターン。男はある程度は悪
の要素がないと魅力的には映らないのである。
なかなかこの常套的なステレオタイプは崩そ
うにも崩せない。

また、何よりも、大企業で働く男というの

は、相手の腹を探り合って、本音と建前を使い分けて、好きでもない仕事の世界で上昇していくしか人生の選択肢がないのかと悲しくなるのだった。オールスターキャストで、様々な有名俳優たちが企業戦士として生きる男を演じていて、「男は敷居を跨げば七人の敵あり」という言葉を思い出した。

少なくとも俺は、こういう世界には生きていないから、その点は幸せだと思った。そして、55歳になった今、おそらく、これから先、今更そういう世界に入ることもないだろうと安堵もした。これから先、仮に第三次世界大戦が起きたとしても、俺はもう徴兵されるということはない。もう、この年なのだから。

そう思いながらも、男性ジェンダーを背負って生きている他の男性たちが不憫で、悲しくなっていくのだった。男は悲しい。また澁澤龍彦の本を思い出した。『幸せは永遠に女だけのものだ』…。

★★周旋家日記 27★★

「シティズンシップについて考える

④一高校生の探究学習

乾明紀

1. はじめに

最近、高校に関連する仕事が増えました（写真）。その中でも多いのが「探究学習」に関するもので、今回はそれについて書いてみようと思います。



高校における探究学習指導の様子

2. 探究学習

文科省（2018）¹が示す探究学習（探究的な学習）とは、図1に示された「①課題設定」「②情報の収集」「③整理分析」「④まとめ・表現」という探究の過程を経る学習やその過程を繰り返す学習のことを指す。

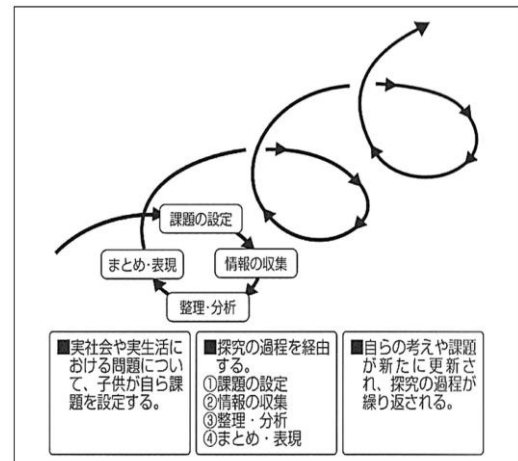


図1 探究的な学習における生徒の学習の姿（文部科学省,2018）

この探究学習を文科省が推進する背景には、わが国の将来が「厳しい挑戦の時代」とあるとの未来予想がある。少子高齢化や生産労働人口の減少、グローバル化や人工知能（AI）の進化などにより社会は大きく変化しようとしている。様々な事象が複雑に絡み合いながら急速に変化する社会の先行きは非常に不透明である。このような「厳しい挑戦の時代」を生きるためには、社会の課題に向き合い、自らの力でそれを切り開いていくことが生涯に渡って求められる。その能力・資質を育成するのがこの探究学習なのである。

2018年、高校の学習指導要領が改訂（2022年実施）され、それまでの「総合的な学習の時間」（以下「総学」）は、「総合的な探究の時間」に改められた。これは、小中学校に比べ高校の探究学習が低調だったため、必修化することでその充実を目指してものである。

なお、「総合的な探究の時間」の目標は以下であるが、「総学」での探究が自己の生き方を考えていくためのきっかけであったのに対し、「総合的な探究の時間」は自己の在り方・生き方と一体的で不

¹ 文部科学省（2018）「高等学校学習指導

要領解説 総合的な探究の時間編」

可分な課題を探究することが目標になっている。

【総合的な探究の時間の目標】

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。

(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

2. 探究学習の課題

蒲生（2017）²は、「探究学習」は官制の枠組みであり、確立された学習理論でない点が大きな課題だと指摘する。文科省が推進する探究学習の依拠する学習理論が不明確であるため現場を混乱させているという。

現場の混乱については、筆者にも経験がある。それは、理系と文系で探究学習に抱くイメージが違うのである。SSH（スーパーサイエンスハイスクール）などで行われている理系の探究学習は、仮説検証型であり、単純化すれば「①課題設定」「②仮説生成」「③仮説検証（調査・実験）」「④まとめ・表現」がプロセスとなる。また、理系の探究学

習は、理科教育から発展したという経緯もあり、教科教育と連携しながらその応用的学習ととして実践しやすい性質がある。

一方、SGH（スーパーグローバルハイスクール）などの文系の探究学習は、定まった方法はなく手探り状態であるといえる。その理由のひとつとして、社会問題を探究テーマ（課題）に設定することが上げられる。生徒にとって身近な社会問題を課題にすることは、自己の在り方・生き方を考える機会にもなり好ましいことであるが、テーマが大きくなりすぎてしまい単なる「調べ学習」で終わる場合もある。また、不十分な知識を基に安易な課題解決案を提案・発表して終わる場合も少なくない。これは、高校生にとって、設定するテーマ（課題）に対する前提知識の収集が容易ではないことを示している。なぜならば、様々な事象が複雑に絡み合った社会課題を探究テーマにする際には、教科科目での学びが前提知識として活かしにくいからである。ここが理系の探究学習と異なる点である。つまり、文系の探究学習は、前提知識の収集に時間がかかり、そこで時間切れになるのである。

また、グループで探究活動が行われていることも探究を難しくさせていると言える。グループは、生徒の興味関心に基づき最大公約数的に結成される。他者との協働探究は異なる視点や価値に触れるという利点がある一方で、問題意識が拡散しすぎて問いが収斂していかないという問題を生じさせる。

3. 「総合的な探究の時間」の充実に向けて

これらを踏まえ、「総合的な探究の時間」を実質化するためには、学校内で探究学習のイメージをすり合わせるところから始める必要があろう。筆者はそのためにある高校の教員研修会で、図2を提

² 蒲生 諒太（2017）「探究的な学習」をめぐる諸課題：一理論・実践双方からの検討一、日本

教育学会大会研究発表要項 76(0) 292-293

示した。これは川喜多二郎（1967）³が示した異なる3つの研究アプローチである。

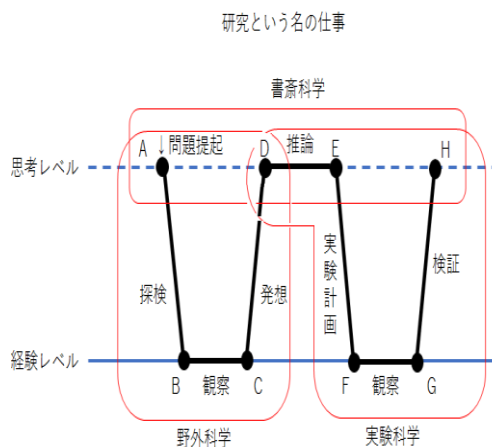


図2 W型問題解決モデル（川喜多,1967）

3つの研究アプローチとは、文献を中心に研究する「書齋科学」、フィールドワークで得た情報をKJ法などで考察する「野外科学」、実験により仮説を検証する「実験科学」ある。

生徒にどこまでさせるのか、どのように探究させるのかは十分な事前のすり合わせが必要であろう。筆者がアドバイスをおこなったある高校では、図2で示す「野外科学」のみを探究学習の対象とし、仮説生成までとした。ここまででも文科省が提示する探究過程（図1）を経ており、「総合的な探究の時間」の教育目標に到達することができる。

また、問題が収斂しにくいという課題に対しては、教員側が枠組みを設定するのもよいだろう。後藤ら（2014）⁴が紹介する中央大学杉並高校の探究学習（「探究マップ」）では、生徒が課題を設定する際には、YES・NOで回答することができ

ることを仮説にするという“縛り”を設けている。このようにすれば、過度の拡散を防ぐことができ、YESかNOの根拠となる情報を収集しながら結論に至ることが可能となる。筆者が実践しているシテイズンシップ教育（乾,2017）⁵はこれと同様の発想だ。

「総合的な探究の時間」は、様々な可能性を秘めた科目である。しかしそれ故に混乱の可能性もあることは既に指摘したとおりである。この科目での学びが「這い回る経験主義」と批判されないためにも高校現場には万全な準備をもって2022年を迎えてもらいたい。もっとも、そのためには教員の過度な負担を減らしたり、探究環境を整えたりするための国や教育委員会の支援が不可欠であることも付記しておこう。

日記は続く

³ 川喜多二郎（1967）『発想法』中公新書

⁴ 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子（2014）『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版部

⁵ 乾明紀・高野拓樹（2018）論争的問題を

導入した主権者教育の試み－2016年度 京都光華女子大学初年次必修科目「シテイズンシップ」の取り組み－ 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要（55）11-20

役場の対人援助論

(2 8)

岡崎 正明

(広島市)

はるかなる“連携”を目指して その2

第1章 連携の悩み

とある会議の冒頭。役付きが来賓への丁寧な態度を示しながら、こんな挨拶をする。

「えーというわけで、今後もみなさんと連携を密にしていきたいと思っておりますので、これからも何卒よろしく願いいたします…」

対人援助を生業とする者なら、こんな場面に出くわしたことがあるだろう。いや、むしろ似たような挨拶をしたことがあるという人もいるかもしれない（私もそうである）。

関係機関との連携が大事。

そんなことは言われなくても誰もが知っている。だから様々な組織で、「〇〇会議」とか「〇〇協議会」などという名前の、連携を深めるための集いが設けられている。年に数回程のもの、月1定例であるもの、持ち回りで幹事が交替するものなど、様々な形がある。

ただ中には何年も続けるうちに形骸化・形式化してしまったものや、目的や効果がボヤけ、いわゆる「会議のための会議」のようになってしまっている…。そんなものも少なからず存在するのではないだろうか。

参加者の日程調整から会場確保、案内送付に資料作成、名簿や名札・お茶の用意に会場設営などなど。準備の負担に比べて会議の成果が乏しいようでは、職員のストレスもたまりやすい。そしてそんな会議に呼ばれる側にも、負のオーラは伝わってしまう。それこそ良い連携など、はるか遠くのものになってしまいかねない。

例えば年1回の比較的規模の大きな会議。関係機関の責任者や有識者が集まり、連携を確認し年間の活動報告や方針決定がなされる。場合によっては、法律や規則で開催が取り決められていたりするものもある。

しかし、いくらがんばってもそこは年に1回の会議。当然だができることは限られる。次

の年には異動で出席者が変わり、名前も覚えられないということだってある。

もちろんそれでも大切な機会であり、やらないよりはやった方がいいに決まっている。少なくとも組織として互いに相手の存在を意識し、関係を維持する機会にはなる。

ただ実際に現場で仕事をする担当者レベルでは、その会議に来ている機関だから、「もう意思疎通はバッチリ！」ということには正直ならない。役付きは欠かさず会議に参加してくれ、丁寧な挨拶はするし、制度上は連携することになっていても、「どうもあそこの担当者と噛み合わなくて・・・」「そうは言うけど、担当者にはこう言って断られてしまった・・・」などということは、現場ではありがちなことである。

そのあたりを打開する方策として、よく用いられるのが会議の後に催される「懇親会」や「親睦会」と呼ばれる、いわゆる飲み会だ。会議の場では話せない本音や、趣味などの雑談を通して互いの人間性を知り合う。関係性を深める上では1つの有効な方法といえる。

だが厳密には業務外ということもあり、参加者が一部の人になったり、仕事に関する話はばかられたりという雰囲気もあったりする。

そういう意味では欧米の「ランチを一緒にどう？」というスタイルは、なかなか良いのではないだろうか。オフィシャルな会議とプライベートのディナー（飲み会）の中間的なランチという存在を活かし、ビジネスタイムの合間に会議ほど肩肘張らず、でもくだけ過ぎず仕事への価値観や想いを語り合う。

ハリウッド映画などでよく見かける光景だが、そういえば日本ではあまり聞かない。内と外、表と裏を分けたがる日本と、そうでもない欧米との違いかどうかは分からないが、悪くない商習慣だと思うので、今後広がればいいと思う。

対人援助職が本当につながりを深めたいのは、組織のエライ方でも、その看板でもなく、担当者個人。個人同士の交流が深められる機会は、ぜひとも増やしていきたいものだ。

第2章 良い連携とは

「れんけい」を漢字で書くと、「連なり（つらなり）」を「携える（たずさえる）」となる。

これはすなわち、「おのれから連なり、つながっていく近接領域や関係職種の人。そういう人々と関わりを持ち、携えている」という意味であろう。

対人援助職として、それをどれだけ持てているか。その多寡は、その後の支援の豊かさや奥行きの高さにつながっていく。

次々とできる新しい専門機関を網羅的に知っている。関係機関の名簿や資料を隅から隅まで読み込んでいる。それもまた、支援の中では役に立つことがあるだろう。

しかし私はそれよりも、相談者からの困りごとを聴く際に、

「あー、このことについては△△センターのAさんに頼めるかもしれないなあ」

「これについては詳しいBさんに聞いてみたらいいかも」

と、いくつもの顔が浮かぶ。そのほうが大事だと思っている。

ときどき若いケースワーカーや福祉の仕事の経験が浅い職員から、

「〇〇の相談があったので『それなら〇〇相談センターへ行かれたらいいですよ』と紹介したのに、行かないんですよ」

などというボヤキを聞くことがある。

言っていることは間違っていない。ただしそれが「支援」であるならば、もう少し工夫が必要だろう。

いくら正しいことを言っても、相手にそれがどのように伝わり、どんな効果を発揮するのかが吟味されていなければ、支援としては未熟といわざるを得ないのだから。

今の役所の若手は優秀な人が多い。私などより仕事の覚えも早く、事務処理能力も高くとても頼りになる。

ただ残念なのが、現場のナマの情報にあまり興味がない点。若いのだから現場の情報を知らないのはしょうがないし、そんなものは経験を重ねていけば徐々に深まることなので、あまり問題ではない。

心配なのは、知らないことに対しての問題意識や、興味自体があまりないことのほうだ。

紹介する「〇〇相談センター」という組織が、実際にはどんなビルに入っていて、どんな間取りで、どんな雰囲気のところなのか。どんな職員がいて、どんなルールで相談を受けるのか。現実が、常にチラシやパンフレットに書いてある通りとは限らない。「実際の現場は、今こんな事情でこうしてます」なんてことは、よくあることだ。その辺を知らないことの及ぼす影響に気づけていない。それは仕事への想像力不足である。

例えばあなたが自分の友人に異性を紹介するとして。書類でプロフィールを読んだだけの人を紹介するのと、実際に会って話した人を紹介するのでは、どちらがより魅力を伝えられ、説得力が増すか。おのずと答えは出るだろう。

良い連携とは相手のことをどれだけきちんと理解できているか。そして相手にどれだけきちんと自分のこと（＝所属する機関のこと）を理解してもらっているか。そのあたりにもポイントがあるような気がしている。

第3章 理想の連携を目指して

先日なんとなくテレビを見ていたら、有田焼のことが取り上げられていた。

「酒井田柿右衛門」といえば、有田焼を代表する有名な陶芸家の名前であり、焼物に詳しくなくても名前ぐらいは聞いたことがあるという人も多いだろう。

酒井田柿右衛門の作品は江戸時代には日本の貴重な輸出品で、当時のヨーロッパの貴族や富豪がこぞって買い求めた。有名なドイツのマイセン窯が、模倣品を作るほどの人気があったという。

その柿右衛門も現在は15代目。今も17世紀からの伝統を受け継ぎながら、新たな挑戦を続け、国内外から高い評価を受けている。

陶芸家というと、気難しそうな白髪のじいさんが、弟子の制止もきかずに「ちがうっ！」などと出来上がった高そうな皿を投げ割る…。そんな2時間ドラマのワンシーンのようなイメージしか浮かばない私だが、実際の柿右衛門は、1人ですべての作業を行う天才的芸術家などではないらしい。

実は柿右衛門窯は、江戸時代から完全分業制だという。

柿右衛門自身はデザインや全体の統括をする監督兼プロデューサーのような立場。ほかの

作業は、成形・焼成・下絵・塗りなどの細かい工程に分けられ、それぞれその道何十年という専門の職人が担当するのだ。なるほど。これなら1人の天才の出現を待たずとも、1つの工程に絞って技を磨く達人を育てれば、永続的に高い水準の作品を出し続けられるというわけだ。実に効率的である。「酒井田柿右衛門」という世界に誇れるブランドは、こうして「チーム柿右衛門」というスーパー名工集団の匠の技で成り立っているのだ。

しかし、陶芸の道に入るからには、自分でデザインし、ろくろ回しから焼く作業に絵付けまで、全て自分でやってみたいと思ったりしないのか。そんな素人的な疑問も浮かぶが、柿右衛門窯で働くプロフェッショナルたちはそうではないらしい。

それぞれが世界の柿右衛門ブランドを担っている自負を持ち、自分の持ち場で出来得る限りの最高の仕事をしようと、日夜努力を重ねている。そのため、自分の仕事だけを考えるのではなく、各々がその後の工程や作品全体のことを視野に入れて作業している。だからこそ多くの人の手を経た作品が、全体としてひとつの調和を生み、優れた芸術品の域に達しているのである。

私は理想の連携の姿を、このチーム柿右衛門に見た気がした。

全員がその工程のことなら他の追随を許さない専門家であると同時に、作品全体のことも意識する総合的な視野も持ち合わせている。この「専門性」と「総合性」という両方があるからこそ、素晴らしい作品が生み出される。天才的なカリスマがいなくとも、真面目な職人が全体のことを考えて仕事をすれば、それに負けないものができるのだ。

私たちの「対人援助」の世界も、福祉・医療・教育・心理・介護・司法など、様々なジャンルがある。また、福祉1つをとっても「高齢者福祉」「障害者福祉」「児童福祉」と細分化されている。言うなれば私たちは、それぞれその中のひとつの工程を担う、職人と言えよう。

「対象者の人生全体を見すえた対人援助」という、壮大な作品の完成を目指し、各職人がおのれの専門性を高め、より良い仕事（支援）を追求する。さらに担当業務のその先や、周辺にも視野を広げた、作品全体への視点を忘れない。そんな仕事ができれば…。

他機関との連携や組織内の役割分担でぎくしゃくしたら、柿右衛門のことを思い出したいと思う。

臨床のきれはし Sheet4

浅田 英輔

自分は本当はどう思われているの？

ある友人女性から「浅田さんかっこいい」と言われたとします。当然うれしいのはうれしいですが、心からの言葉なのか、うわべの言葉なのか、もしかしたら「こいつにはこうっておけばおとなしい」と思っているだけなのか、「お世辞で言っただけなのに喜んでるキモい」と思っているのか、「おだてて何か要求があるのか」かもしれませんし、わからないです。問い詰めていけばわかるのかもしれないですが、「お世辞だったのか」とわかったところで、がっかりするだけで、プラスにならないように思います。むしろ「この人は本当は陰で悪口を言っているかもしれない」なんて思うかもしれません。そう考えると、「かっこいいって言われたうれしい」にしておけば、みんなハッピーなのではないでしょうか。もちろん、「オレのことかっこいいと思ってんだろ？ だったらつきあえよ」となるとまた別の問題が起きてくるわけですが、「かっこいいって言ってくれてありがとう」としておけば、その人との関係も OK、自分の気分も OK といことづくめではないでしょうか。もしかしたら、女性陣のなかで「浅田はかっこいいって言っておけば喜んでるから楽だ」という噂が流れたりすると、たくさんの人に「かっこいいね」と言われるかもしれないですね。みんなハッピー。

「かっこいい」がわかりやすいかと思って例にあげましたが、自分がうれしい褒め言葉であれば、なんでもいいのです。「頭いいね」「できるオトコ（オンナ）だね」「素敵だね」「しっかりしてるね」「細かいところに気がつくね」「気がまわるね」「よくみてるね」「おしゃれだね」「きれいにしてるよね」などなど、自分がしっくりくるのであれば、なんでもいいです。

※いままであまり意識していませんでしたが、身体、見た目に関する褒め言葉はかなり気をつけたほうがよいですね。いわゆる美人に対して「美人ですね」「きれいですね」「かわいい」というのは、相手にとってみたら不快であることもあります。「褒めてるからいいじゃないか」と思う人もいるかもしれないけれど、相手がどうとるかが問題です。一般的に、男女とも身長は大きいほうがよしとされる傾向がありますが、「ちび」は悪口で「のっぽ」は褒め言葉でしょうか。「美人だね」といってもいいなら「不細工だね」と言ってもいいのではないのでしょうか。「でぶ」と同様に「やせてるね」も必ずしも喜ばしいこととは限らないですね。そう考えると、「一般的によしとされている価値観」だからといって、いきなり身体のこと言及するのは、相手への気遣いがなされていないことになります（ただし、「ほめてるからいいだろう」という人の価値観を崩すのはだいぶ難しそうである）。私の価値観では「髪型をほめるのは OK」と考えますが、そうであってもさわやかクンが「素敵な髪型だね」というのと、清潔感のないおじさんが

「か、か、かみ、きれいだねぐふう」というのは違うし、仲のいい友達にいうのと、道端で会った人にいきなりいうのとは違うように、普段の関係性による部分は大きいといえます。

全てのほめ言葉に対して「やったぜほめられた」で済めば、それはもうハッピーハッピーなことですが、さすがにそういう境地に至るのは難しいです。言ってくる相手も、純粋にほめたいと思ったならいいのですが、明らかなイヤミであったり、いろいろな思惑をもって使うほめ言葉もあるだろうと思います。

そういったいろいろな場合があるにしろ、ほめ言葉はことさらに「そんなことない」なんて否定せずに、素直に受け取っておけばよいのかなと思います。ほめたほうからすると、「素敵だね」→「そんなことない」などと返されると、自分の意見を否定された気になりますよね。

「主観的な思い込み」はあたかも悪者であるように扱われている気がしますが、実はこれは大事なことです。何事も適量が大事ですが、上手に思い込んでおけばいいのです。「自分はできるオトコだ」と思い込んだほうが、「自分はまるでダメなやつだ」と思うより、おそらく仕事はうまくいくはずです。

もちろん、それにあわせて、客観性も大事です。客観性というのも難しく、「自分は客観的に自分を観察している」と考えるのは危ないですね。自分の視点だけでなく、身近な友人などに「あなたはこうしてくれたけど、なんでそう思ったの」などと聞いてみればいいですよ。身近であるほど、「あの時は冗談でいっただけだ」とか「こういう仕事ぶりをみて、すごいなと思った」などきちんと教えてくれることでしょう。そうやって、自分の中のいいところを具体的にし、アップデートしていくことで、自尊心やら自信やらが育っていくのではないのでしょうか。

子どもへのかかわりとしてもいいですが、大人になった自分にこそ試してみるといいのではないかと思います。

とは言っても、慣れないうちは、ほめられてもすぐに「そんなことないよ」とか「でもこっちにダメなところがあるの」など否定してしまうかもしれません。

自分にじっくりくる返し方を考えてみるといいですね。

「かっこいいね！」→「ありがとう」

「頭いいね！」→「でしょ！」

「そのネクタイいいね」→「選ぶときだいぶ迷ったんだよね」

「そのスカートかわいいね」→「そうなの！高かったけど買っちゃった！」

「仕事はやいね。」→「うん。がんばったの。」

「やさしいね」→「ほっとけなくてね。」

必ずしも自分を肯定する意味の言葉だけではありませんが、「そんなことない」などという言い方をせずに相手の言葉を否定しないだけでも、相手からするといい印象を持つかもしれません。

「周りの言葉を気にしすぎるな」というようなことがよく語られますが、どうやって気にしないでおけるのか、細かく考えることも大事だと思います。まずはほめ言葉に「ありがとう！」「うれしいよ！」ということから始めてみましょう。

基本的に検査を実施するのに困ることはありません。しかし、空きスペースがそもそもない時には、応接の一角を使わせてもらったり、資料室や倉庫などに机を運び込んで、臨時の検査室にしたりする場合があります。こうなると、上記の基準を十分に満たしているといえるかどうか、ちょっと怪しく感じることもあります。

しかしながらその一方で、標準化などの研究のために検査を実施している場面においては、これらの検査環境の差異がそれほど気にならないとも感じています。保育園などでの調査では、壁一枚隔てた園庭からは子どもたちの声が響いてきたりしますが、それで子どもが検査者の教示を聞けなくなるとか、園庭に気をとられて離席してしまうとかいったことは皆無でした。私たちは、注意 (Attention) の働きによって、雑多な情報の中から必要な情報に意識を向けることができます。これを選択的注意 (Selective Attention) と言います。子どもたちの様子を見てみると、この選択的注意の働きによって、多少の余分な刺激はとくに問題になっていないように思えます。一方で、相談場面で出会う子どもの中には、人数として多数を占めるわけではありませんが、人の声や雑音、人が通る気配などに敏感に反応する子どももいます。単に検査場面に意欲が持ちにくく (これは、検査者側の要因である場合もあります)、それゆえに検査以外の刺激に敏感に反応している場合もありますが、この「注意」の働きがうまくいっていないように感じることもあります。余分な刺激が子どもの反応に与える影響に個人差があるということは気に留めておく必要がありますし、また普段使用する検査環境にどのよ

うな刺激があるのか、ということは今一度考えてみることも意義があるように思います。例えば、学校では定期的に大音量でチャイムが鳴る場合もありますし、鳴っている間は課題を停止せざるを得ないこともあるでしょう。私自身の経験では、検査室のすぐ近くを電車が走っているため、10分毎に電車が通る度、離席して窓の方に電車を見に行ってしまう、ということもありました。

■ 座卓と机

昔、保健センターで乳幼児健診の仕事をしていた時、発達相談のために用意された部屋は畳敷きの和室で、相談や検査は座卓を用いて行っていました。乳幼児健診の場合、対象となる子どもの年齢も1~3歳くらいなので、机の面が低い座卓は比較的使いやすいと思われました。これが机と椅子であったとしたら、子どもに応じて座面を調節する必要があったかもしれません。実際、机で検査を行う場面では、座布団などで座面の高さを調節することもありますし、保護者のひざの上に座ってもらう形をとったこともあります。

一方で、畳敷きに座卓があるだけの検査環境は、子どもにとっては「自分の居場所」がわかりにくいという面もあります。椅子は、周辺の床から独立した場所 (座面) を子どもに提供しますが、座卓の場合、子どもの座っている場所は周りの床と地続きです。そのため、机と椅子を使う場合より、何気なく席を離れてしまうリスクは高くなるかもしれません。

反対に、検査に対する拒否など、意図的に席を離れてしまったケースの場合では、再び椅子に座ってもらうには「もう一度やっ

てみよう」という子どもの意思が必要となりますが、地続きの座卓に戻ってもらうのであれば、何となく新奇性のあるもの(検査用具)に意識が向いて、ふらっと触りに来てくれる、ということも期待できるかもしれません。

また、離席の有無以外でも、座卓と机&椅子の違いを感じることがあります。それは、子どもの姿勢や体動です。座卓にべたべたとたれかかりながら、課題に取り組む子どもと出会ったことがあります。



一見、やる気がないようにも見えますが、課題への取り組みは粘り強く、課題への関心や達成の手ごたえを感じていないわけではないことが、子どもの様子からうかがえました。あえて言うならば、「課題に集中するために」、「姿勢を維持することへの意識や力をできるだけ軽減するために」、なるべく机や床への接地面を拡げて、最小の労力で姿勢を維持しようとしていた、ということが出来るかもしれません。筋緊張が低い子どもの場合、机と椅子で検査を実施すると、姿勢が崩れて次第に椅子からずり落ちていってしまうことがあります。全身で密着して接地面を拡げることができるのは、「座卓」という検査環境ならではかもしれません。

一方、椅子に座っている時の子どもの体の動き(体動)も注目してみると個人差があ

り、面白いです。なんとなく椅子の上でもぞもぞ動く子もいますし、椅子の背もたれに体重をかけて椅子を前後にガタガタとゆする子、机の下で足をしきりにぶらぶらとさせている子もいたりします。椅子を揺る場合は、着席状態で足が床に着いていることが前提になりますし、足をブラブラさせている場合は、足が床に着かない状態であることがほとんどのように思います。椅子の座面の高さによって、子どもの動きも変わります。また、机の下で足をブラブラさせているからこそ、離席まではせずに席に留まっていられるように見える子どももいます。これが座卓であると、その場に留まりながら動かせる体の部位はより限定されますので、かえって場に留まりにくくなるかもしれません。



このような体動が、課題の内容によって大きくなったり、小さくなったりする場合があります。積木など、具体物が提示されている時は、手元の操作に注意が向き、体の動きがまとまるけれど、言葉だけでやり取りする課題になると、急にもぞもぞ、そわそわするしたり…。

考えたことを言葉にする（アウトプットする）ために、体を動かしている感じの子どももいます（筆者はどちらかというところの傾向があります）。また、言葉だけでやり取りする課題になると、検査者と子どもの間

に検査用具（介在物）がある場合よりも、対人的場面であることが意識され、落ち着かなくなる子どももいるように思います。また課題の難易度によって、体の落ち着き具合が変わってくる場合もありますし、単純に時間とともにそわそわしてくるということも考えられます。検査時間を通して、体動がどのように生じてくるかを観察しておくことは、意外と重要な情報になり得ます。その体動の現れ方が、検査を行う環境によって変化することも留意しておいた方がよいかもしれません。

講演会 & ライブ な日々⑱

古川 秀明

回想法ライブ I

回想法というのは、過去を語ることで精神が安定し、認知機能の改善も期待できる心理療法。

1960年代にアメリカの精神科医、ロバート・バトラー氏が提唱。過去の懐かしい思い出を語り合ったり、誰かに話したりすることで脳が刺激され、精神状態を安定させる効果が期待できる。

当初は高齢者のうつ病治療に使われていたが、長く続けることで認知機能が改善することも明らかになり、日本でも認知症患者のリハビリテーションに利用されるようになった。

認知症は、記憶障害が進んでいても古い記憶は比較的最後まで残っていることが多く、この認知症の記憶の特徴を上手に生かした方法と言える。

過去の懐かしい記憶の要因は「物品」「思い出」「エピソード」「歌」そのほか何でも良い。

例えば、みなさん、これは何だと思われませんか？



若い人に先に言うておきますが、楽器ではありません。
これは洗濯する時に使用した「洗濯板」という道具です。
洗濯機がなかった時代はタライに水を入れて、これでゴシゴシと洗濯したので
す。
老人ホームなどの施設でこの洗濯板の使い道を尋ねると、女性の高齢者の方が
反応される。

認知症があり、記憶障害があっても手を挙げて、答えて下さる方が多い。

おばあちゃん：「井戸から水を汲み上げて、それをタライに入れて洗濯したもん
じゃ」

私：「なるほど、なるほど。それではこの洗濯板をどうやって使ったのですか？」

おばあちゃん：「こうやるんじゃ」

そう言うておばあちゃんはゴシゴシと洗濯をする真似をして下さった。



おばあちゃん：「なんか懐かしいのお」

私：「何が懐かしいんですか？」

おばあちゃん：「子供が3人おるがの、一番下の子がまだ赤ん坊での、その子を背中におぶりながら洗濯してたのを思い出した。冬は水が冷とうて、手えなんかあかぎれだらけじゃったよ」

私：「うわ～、それに背中に赤ちゃんおぶりながらは大変ですね。腰も痛いでしょうね」

おばあちゃん：「腰は大丈夫じゃ。そやけど、あの頃は姑にいびられて辛かったの。よう泣きながら洗濯しとったわ」

私：「そうなんです。その時の事を今振り返ってどうですか？」

おばあちゃん：「そうじゃのお、わしゃようがんばっとったわ」

私：「ほんまです。ようがんばらはりましたよね」

おばあちゃん：「そういえば最近一番下の子に会うとらんの」

→おばあちゃん現実に戻る。

すかさず私の回想法を手伝って下さっているその施設の介護職員さんがおばあ

ちゃんに話しかける。

介護職員：「おばあちゃん、先月も来てくれはりましたよ。毎月ちゃんと来てくれてはりますよ。今月も〇〇日に来てくれはる予定ですから安心して」

おばあちゃん：「ああ、そうやったの」

→おばあちゃん現状認識。

私：「おばあちゃん、毎月来てくれはるのは凄いですね。お母さんの背中で洗濯するお母さんの苦労をちゃんと感じててくれはったんかもしれませんね」

おばあちゃん：「そうかもしれんの。わしゃがんばったからの。誰も褒めてくれなんだが、がんばったわ」

私：「ほんまにそうですよね。ところでおばあちゃん、その当時洗濯しながら歌ってた鼻歌とかありますか？

おばあちゃん：「そうじゃのお、あの歌をよう歌ったわ。なんやったかの、題名が浮かばんわ」

私：「ちょっとだけでも覚えてるところありませんか？」

おばあちゃん：「わ〜かくあつかるいうたごえに〜」

私：「はいわかりました」

→すぐにピアノ伴奏者に合図を送る。1分後にはイントロスタート。



→私が歌い、介護職員さんには洗濯板で洗濯している当時のおばあちゃんを演じてもらい、それをおばあちゃんに見てもらう。

回想法と造形法をミックスさせているのだが、どこの施設でもなかなか好評で反響や変化が報告される。

回想法が終わると、スタッフミーティングを開く。

介護職員：「おばあちゃんの3番目の子どもさん（子どもと言っても50代）が来たら、今日の様子をお話しして、おばあちゃんを褒めてもらうようにお願いしてみようかとおもいます」

母子関係は悪くなさそうなので、全員が賛成。

後日談だが、3番目の子どもさんがその話しを聞いて泣かれたらしく、その子がおばあちゃんを褒めてあげたら、おばあちゃんは青い山脈を歌い出したそう。

おばあちゃんにはどんな景色が回想されていたのだろう・・・。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

24

坂口 伊都

はじめに

里子は我が家に来てから途切れることなく、いろいろな行動問題を仕掛けてきます。そこには、本人にもわからない何らかの「意味」があるように感じています。

暫くは、家のいろいろなモノを取って、明らかに隠しているという事が続きました。そのモノとは、隠す必要のない食べ終えたお菓子の包み紙から、それは取ってはいけなんでしょうという父のウォークマン等、多岐に渡ります。隠しているモノを見つけても、またすぐに新たなモノが見つかり、間が開かずに次から次へとモノが隠されることが続き、これはアディクションなのか？医療にかかるべきなのか？と真剣に考えもしました。モノを取って隠しても隠した場所を忘れることも多く、収集よりも「隠れて」

することに何らかの意味があるように映ります。何にしても、里子にどう対応していけばいいのか見えずに途方に暮れていました。

そんな時、前号でも書きましたが、CRCのニューズレターの工藤晋平先生のアタッチメントコラムの連載が目にとまりました。

危険や危険のサインに直面すると、子どもは（大人も）くっついて安心したいという「ニード」が高まります。「危険」は大きく3つに分類できます。（1）疲れや病気などの本人の状態、（2）暗がりや見知らぬ人がいるなどの環境の状態、（3）くっつく相手（アタッチメント対象）が物理的・心理的に近づけない状態。この時、人は（1）自分から近づこうとする、あるいは（2）相手を近づけようとする、アタッチメント行動を取ります。これは、危険とニードの高まりを知らせる「シグナル」であるといえます。

もしうまく対応してもらえないことが続くと、行動問題が発達するかもしれません。

という文章が私の目に留まり、腑に落ちてきました。里子のアタッチメント行動が見えにくいのですが、出していないわけではないのです。物心ついた頃から、(3)のアタッチメント対象が物理的・心理的に近づけない状態が続いているのだと仮定したら、家の中でモノを取って隠す、あるいは隠れてする行為には、里子自身を安心させる材料があるのだと解釈できます。それは、大人を頼ろうとしない、あるいは頼る術を知らない、自分を自身で慰めてきた、自分を慰める術として「モノ」や「隠れて」という事がキーワードになっているのかも知れません。

今回は里子の不安と安心について、いろいろ考えていきたいと思います。今回も、どうぞ最後までおつきあい下さい。

家でよく出る行動

家では、モノに関する事の行動問題が続いていました。特別支援学校の担任に相談すると、環境を整えていくことを提案してくれました。家庭だけでなく、学校も放課後等デイサービスでも里子に起こっていることを共通認識し、同じように環境を整えていくことを土台に言い訳をしてうやむやにすることを無くし、本人がそのことについて考えていけるような体制を作ることの大切さを訴えてくれました。放課後等デイサービスにお菓子等何かを持ち帰る時は、連絡帳に書いてもらうようお願いした前例があることも教えていただきました。それを受け、父から放課後等デイサービスに電話をし、この子のいる前で事情を説明し、何か持って帰る場合は連絡帳に記入するようにお願いしました。

同時期に、この子の「安心」は、どこにある

のだろう、どのようなことで安心を得てきたのだろうかと考えるようになりました。それまで、行動の問題にばかり目が向いていましたが、私の視点がそれていき、父がした電話の後も、「自分でも、したらダメとわかっているのだよね。それでも止められないのなら、一人で何とかしようとしても無理でしょう。一緒に考えていけばいいよ」と話しをしました。すると、里子がじっと聞いてから、ほっとしたような顔を見せました。何か里子の肩の力が抜けたように感じました。

その辺りから、里子のモノを取って隠す、リスやハムスターのような行動が驚くほど減少しました。何かを隠すと里子の行動が不審になるので、いつも何かしたかなという直感が働くのですが、今はそれが起きません。モノが動いている様子も見当たりません。そして、児童相談所の心理士の方が家庭訪問の際、モノを隠すことについて質問すると、「最近はしていない」と答え、どうして？と聞かれると「する必要がないから」と答えたそうです。その返答を聞いて、理由はわかりませんが、きっとそうなのだろうと納得する私がありました。

里子は、生活の場所が細切れになっているように思っているような所があり、学校や放課後等デイサービスで起きたことは、家には関係ないと言い張りました。その場、その場で凌いでいて、そのそれぞれの場所が連動していないような印象を受けます。そして、家の中で起こったトラブルについては、「他の人には言わないで」と言うことが多く、隠して何事もなかったかのように過ごそうとする感じです。その場所ごとで完結させて終わらせることが安全で安心に過ごす方法だったのでしょう。学校と家庭は、小学校時代から先生とかなり密にやりとりをして、その様子も見せていたので、観念しているところがあつたようですが、放課後等デイサービスと家庭では、余程のことがない限りバレない、

自分が上手く言ってごまかせると感じていたように思います。

年末にこの子のケース会議が開かれました。共通理解を図っていくことを目的に開催され、里親、学校、放課後等デイサービス、児童相談所が参加して行われました。このケース会議についても里子に誰が参加するのかを伝え、「あなたの困っている行動について大人が皆で大人になった時に困らないようにどうしていいのかを考えるのだよ」「皆が、あなたのことを大切に思っているのだよ」と伝えました。里子は何も答えませんでした。真剣に聞いている感じは伝わってきました。

この子の中で点が線としてつながって生活する事自体に落ち着きを持ち、日々の生活を必死にその場その場で過ごさなくても大丈夫だと感じて欲しいと思います。

年明けに母方の祖母も交えて家族旅行に行きました。楽しい旅行ですが、里父の後を付いて回っていた里子が、私に対して「何で来るの」と言ったので、「その言い方はないよね」と叱りました。前までだったら、里子がボソッと腹が立つことを言い返して、もっと状況が悪くなって、暫くお互いに口を聞かなくなっていたと思います。今回は、それ以上言い合いにならず、お互いに距離を置いて過ごし、約1時間後の朝食時に里子が電気ポットの出し方がわからずに困っていたので、私が給湯ボタンを教える助け船を出すと、そこからはいつも通りの関係に戻りました。この間合いは、親子っぽいなと感じました。こういう関係回復の仕方は、今までになかったものです。関係が勝ち負けではなく、休戦後の回復という過程を共有し始めているのでしょうか。

外でよく出る行動

家では、モノにまつわる行動問題が起こっていましたが、学校や放課後等デイサービスでは全く見られないそうです。それより気になるのは、コミュニケーションの仕方だと口をそろえて言われます。この子にいい所があると知っている友達は、ちょっとした悪態をついても仕方がないなあとわかってくれるそうですが、里子をよく知らない子は、嫌な事をされたり言われるから、遠ざけたい存在になっているそうです。

この上手いこと、受け答えができない感じは想像がつきます。家でも、一緒に住みだす当初から今もなお続いている部分です。家では、何か言われても返事をしない、しても「はいはい」「あっ、そう」「ふーん」「そだねー」と人を馬鹿にしたような言い方になり、相手に対していいことを言わないで、欠点と思われるような揚げ足をとるようなことを言う。モノを置くときに投げつけるようにする。人からひったくるようにモノを取るといった感じです。これらの行動が良くないとわかっているにもかかわらず、他のやり方を取り入れるには気恥ずかしい。いつ



ものやり方が落ち着くという印象を受けます。本当は、皆と仲良くしたい、嫌われたくないという気持ちを持っていると痛い程伝わってきます。優しくされると嬉しくなって、近づいてきて、「これ〇〇するで」と偉そうな言い方になりますが、甘えているのだなと感じます。

よく人は、例えそれが上手くいかない方法でも、慣れ親しんだ行動を取ることで安心しようとするといいます。里子を見ていると、まさにその感じで、いつまで経っても悪態を変えられないもどかしさがあります。いい子でいてはいけない、自分は悪い子なのだから、悪い事をし続けないとでも思っているかのようです。他者がしたことでも、悪い事は取り入れるが、いいことは取り入れない。大人に止めなさいと言われてもやり続けるのは、何かへの抵抗でしょうか。言われれば言われるほど、止められなくなります。

母の言うことは聞かないけど父の言うことは聞いていると主張する里子ですが、父が言ってもその行動を止められるわけではありません。それを言われると私はイラっとします。そして、里子は自分を落ち着かせるために、何かをいじりだします。それは、現状を直視しないための手段のように見えます。その里子に諭していくと、投げやりに「べつに」「どうもしない」「鬱陶しい」「変わらなくていい」となります。自分からは、何も言い出せない。止めなさいと言われてたことをひたすらし続け、自分は何をしたらいいかわからなくなる、そして自分はどうしたいのか全く見えていないという様子に見えます。里子は、目の前の出来事に対応する事だけで終わる、そんな感じです。

真剣に大人から怒りをぶつけられた方が、降参する形で謝れるのかも知れません。やはり、ベースはヒエラルキーでしょうか。どちらが勝つか負けるかで受け答えも変わっているようです。勝つか負けるかでしていることは、受け入

れではなく反応なのでしょう。そこでの降参は、パワーゲームの学習にしかありません。毅然とした大人の態度に出会った時、それを受け入れる体験がいるのではないかと思います。どのようなやり方があるのか、思いつきません。この子の生きてきた術だとしたら、根は深いと考えられます。この辺りが、誰かを頼ろうとしない部分につながっているのではないのでしょうか。

この子のためにと思っている大人が、里子にこの反応をされ続けたら、辛くなります。大人側が破綻しないために里子とのほどよい距離感、気持ち面のドライさを保つように心がけた方が長続きすると思います。しんどい生き立ちをしてきた子だからこそ、愛情を注がないといけないと必死になってしまいがちですが、だからこそ冷静に対処するしかないと感じます。乳幼児ならギュッと抱きしめることもできますが、思春期の異性の子は、抱きしめてというわけにいきません。単純な話でなくなっている子どもに対してどう向き合えばいいのか、向き合い続けられるのか。どのような言葉をかけ続けていけばいいのか、何を流し、何に気をつけ、何を受け入れ、何を毅然と対応すればいいのか迷路に入っている気分です。

終わりに

里子との暮らしは、禅問答のようです。里子の状態は透けて見えるようになってきたような気がしていますが、どう手を打てばいいのかわかりません。一般的に子どもは不安になると信頼できる大人に本能的にくっつきに行きますが、里子は、自分に近寄ろうとされること自体が不安でたまらなくなるのではないかと感じます。里子は、関係が深まっていくと壊すような行動を取ることを繰り返してました。刺激が入ると行動がいい所で止まらずにエスカレートをし

て問題化していく。どこまで制限をし、どこまで自主に任せるべきか。この子が能力的に何を理解し、何が理解できないのか、育ちの中で何を学び、何を手掛かりに生きてきているのか、何を恐れているのか、ほっとする時があるのかなのか、里子の中に何が起きているのか、そして私達大人はあなたに何をすればいいのか、そしてできるのか。この迷路の出口が見つかるというのですが、ただ今模索中です。

里子の周りには大人たちは、皆で首を傾げている状態です。いろいろと試みても里子が変わっていかない姿を見ていると手ごたえを感じられない。その背後に何があるのかを皆で考えていこうとする姿勢が求められるのでしょうか。大人側の苦しみを簡単に解決する方法は、里子を手放すことですが、里子に取っていい事が起きないだろうと誰もが思うので、そうではない方法で頑張ろうとしています。でも何をしたらいいかわからない、誰も正解がわからない息苦しさがそこにあり、楽になりたいと思ってしまう心の動きが出てきます。そこを責めるのではなく、認めていく必要があるように感じます。

障害児サービスのコーディネーターから、放課後等デイサービスの事業所を変えた方がいいのではないかという話が出たので、「今の事業所ではもう無理だと言っているのですか？」と尋ねましたが、「そんな話はありません」と言われました。デイサービスで暴れてしまったこともあり、利用を断られても仕方ありませんが、一緒に踏ん張ろうとしてくれています。その中で、ほんの少しの一点の光が見えると、大人たちは文句なしに頑張れるのでしょうか。

そして、もう一つしていかなければならない作業は、大人側の自己覚知です。里子の行動の何に自分がざわつくのかを知っていくことが必要だと思います。それは、自分が馬鹿にされたように感じる事なのか、懐いてもらえない敗北感か、この子の特別な存在になれていないこ

とへの無力感か、里親だけでなくこの子の周りには大人は問うことが要るのだと思います。それをしないと、里子の存在自体がトリガーになってしまいます。大人一人ひとりもそれぞれの生き様があり、嬉しいことも悲しいことも、目を背けたいことも経験しています。誰にでも弱点があります。そこを上手く突かれています。里子は、本能的に相手の弱点を突くことに長け、その一瞬は勝利したように感じられるのかも知れません。その後で嫌と言う状況に陥るのですけどね。勝ち負けではない人間関係を教えていくのは、骨が折れます。いい方法があったら、是非教えてください。



周辺からの記憶 22

未来のための思い出 ココロかさなるプロジェクト

村本邦子（立命館大学）

2019年2月24日（日）、年度末のシンポジウムを開催した。8年目の活動を終え、残すはあと2年、最終年をどのように着地させたらよいのか悩んでいる。十年と言って始めたものだから、十年でひと区切りつけるべきだろう。かと言って、11年目からは無関係ですということにもならないと思う。このまま続けるつもりはないが、どんなふうにも最終回を迎え、その後、何をどんなふうにつないでいくのが良いのか。

それで、今回は、阪神淡路大震災から二十年、語り部グループでアクションリサーチをやってこられた京大防災研の矢守克也さんをお招きして、話を聞くことにした。語り部グループでは、時間経過とともに、「そういうことではなくて、防災のノウハウを聴きたいのです」と言われた衝撃をきっかけに、新しい語り継ぎの形を模索するようになったという。震災当日に生まれた語り部が、震災で家族を失った先生の教室でその時の年齢と同じ子どもたちに語るなど、一次的な体験継承だけでなく、その営みそのものを反復・連鎖させる仕組みづくりを考えた。震災後15年を前向きなものとして、何かが失われる時間でなく、何かが生まれ成長する時間として位置づけるものだという。

矢守さんの話は興味深く共感することが多かった。院生たちの発表も、頑張って準備しただけあって、充実していた。でも、参加者は少なく、外部参加者数は過去最小だった。これも、時間経過と風化の表れなのだろうか。被災と復興の「証人」として、私たちは何を見て何を聴き、誰に伝えていくのか。考えなければならないことは山積みである。



漫画展を「心の防災」とみる

少し時間を巻き戻すことになるが、2015年度、「東日本・家族応援プロジェクト」スピンオフ企画として7月に実施した「未来のための思い出・ココロかさなるプロジェクト」についても記録しておくべきだろう。

そもそもの発想はこうだった。東北以外の地で漫画展を開催するようになって認識したことであるが、団士郎家族漫画展の開催にあたって、「東日本・家族応援プロジェクト」の看板を掲げるかどうかは、漫画展の位置取りを変える。大震災より4年目となり、被災地以外ではいわゆる「風化」も感じられるようになった。そんな時に「東日本」という看板を眼にして、小さな説明版を見ると、これが東日本大震災と関係していることが伝わる。「これがどんなふうに関わっているのだろう」と思いながら家族漫画を読む。結局のところ、その関係性は不明確なままであったとしても、少なくとも読者の頭に東日本大震災のことを思い起こさせる作用がある。このこと自体が良いことなのではないかと思っていた。

あれだけ日本中で大騒動した大震災も直接影響のなかった身には「喉元過ぎれば熱さ忘る」だが、再度、東北に気持ちを寄せ、災害への意識が再確認される。そんな文脈で見る家族漫画は、また違った効果をもたらすのではないかということである。

たまたま JR 京都駅 2 階のイベントス

ペースで別の漫画展をやっているのを見かけ、こんなところで家族漫画展をやれたらいいなと思った。そんな矢先、JR 西日本あんしん社会財団が「安全で安心できる社会」の実現に関する研究助成を募集していることを知り、これを「心の防災」と意味づけて応募してみることにした。その概要は次のようなものである。

「東日本・家族応援プロジェクト」は、東北各地での団士郎家族漫画展を中心に、同漫画冊子を拡げていく「ホンブロック」による「届ける！プロジェクト」と連動させながら展開してきた。

二十数年にわたるトラウマとレジリエンスの実践および研究と照らし合わせると、これは、被災地か非被災地かという境界を超えて、「小さな関係の結び直し」があちこちで網の目のようにネットワークしながら層を重ね、被災地の人々を励ましながら、その他の人々にも、来るべき災害への備え、すなわち「心の防災」として機能していると考えられる。

これを検証するものとして、実験的に、多くの人々の眼に留まる場所で1週間の家族漫画展を開催し、それを見た人々の声を集め、東日本の被災地や Web 上で社会に広く紹介するとともに、そのナラティブを分析し、漫画展が人々にどのような作用を及ぼしているか、どのような方向でコミュニケーションが促進され、関係性の結び直しや新たな関係性が生まれているかを質的に分析する。

JR 西日本あんしん社会財団助成

授賞式に参加

この企画は採択となり、3月下旬、グランヴィア大阪で授賞式があった。正直なところ、たぶんに儀式的な集まりだろうと思って行ったのだが、これがなかなか感動的な集まりだった。この財団は、2005年4月25日の福知山線事故の反省に基づき、「安全で安心できる社会づくり」の一端を担おうと設立され、被害者ケアや地域の安全構築に関わる活動の支援、安全への啓発活動等を行ってきたという。活動助成、研究助成合わせ、今年度は70件が採択され、それぞれの団体の決意表明があった。

被災地と交流する高校生のグループやスポーツ少年団、川遊びの安全マップづくり、グリーンケアや防災教育の試みなど、社会で活動するありとあらゆる世代のユニークな取り組みが紹介され、知らないところでこうして多くの人々が社会のためにあれこれ考え、試行錯誤しながら頑張っているのだなあとと思った。聞いているだけでも、社会への信頼や希望、安心が感じられるような気がした。

福知山線事故の被害者や遺族を中心にしたグループも複数あった。詳しいことはわからないが、おそらくは、こうして、遺族が応募し助成を受ける関係ができていくまでには双方の長い道のりがあったことだろう。どこかの電力会社や国にも見習って欲しいものだと思った。

「未来のための思い出・ココロかさ

なるプロジェクト」開催準備

たくさんの方々の協力と企画会議を経て、この取り組みは、「東日本・家族応援プロジェクト」スピンオフ企画「未来のための思い出・ココロかさなるプロジェクト」と名付けられ、2015年6月27日（土）～7月5日（日）、京都の京阪三条駅での漫画展開催とインタビューという形で実施することになった。

展示パネルは、「宿題」「暮れの七夕」「お客様控え」「戦の中で」「扉」の日本語版、「扉」の英語版タペストリーと「故郷」の巻物（日英併記）の6話7作品である。京阪三条駅は外国人の出入りも多いとのことから、英語版も用意した。





併せて、返送用のアンケート葉書を挟み込んだ漫画冊子 3000 冊を作成配布した。こちらには、「過去・現在」「小雨の行列」「その、チカラ」の 3 話を収録している。また、web 上には、「過去・現在」「身体記憶」「幸福な人生」「背中の太陽」「さあもういっぺん」の 5 話を英語版で、さらに「さあもういっぺん」はハングル版もあげ、アンケートの書き込みができるようにした。なお、web 版は 2015 年 6 月 27 日 (土) ~2016 年 5 月 30 日 (土) の期間とした。

漫画展会場におけるインタビューであるが、検討を重ねたうえで、自由参加であること、個人情報を探らないこと、侵襲性のリスクがないように考慮し、街頭インタビューの形を取ることにして、シンプルな 3 つの質問項目を決めた。①漫

画展の感想を聞かせてください ②あなたの人生に起こった思いもかけないことや困難を乗り越えたコツを教えてください ③現在、その渦中にある人へのメッセージやアドバイスをお願いします である。漫画展を見た後、人々の心にはどんなものが沸き上がってくるのかを尋ねた後のふたつは、苦難に対するレジリエンスを高めることを想定している。それまでの臨床経験から生まれたもので、トラウマを抱えた人がトラウマとなる出来事を語らずに、自分の力の源を同定し、そこからの学びを他者へのアドバイスとして語ることで、未来の自分に向けて意識化するものともなる。

インタビューに際しては、①無理にインタビューを行わないこと ②相手が答えられる範囲で回答してもらうこと ③3 分程度を目処に聴きすぎないことの 3 点を方針とした。相槌や若干の質問はしてもよいが(たとえば感想が出ない時に、印象に残ったものを聞くなど)、その場合はこちらの言葉を記録として残すこと、可能な限り、インタビュー時間や目測でもおおよその世代や性別、特徴などをメモに残すことにした。また、コツを聞くとき、「困難」の中身は原則聞かない方針を確認した。

あちこちに楽しい工夫を凝らした。趣旨を説明するボードとともに、この漫画展が被災地と共有されていることが感じられるように、会場では、東北で漫画展を開催した際の感想ノートのメッセージをスライドショーで流すようにした。また、街頭インタビューの形を強調するよ

うに、わざとマイクを用いること、インタビュー協力のお願いを漫画展のあちこちにわかりやすく張り出すこと（ゆらゆら揺れるポップアップサイン）、それから、漫画の作品ごとに「目」のマークとともにチェッカーを設置して、反響がわかるようにした。インタビュー協力のお礼として、プロジェクトに参加したことを記念する「木陰の物語」のシールを作成した。準備しながら、こちらがワクワクするプロジェクトだった。

趣旨説明と呼びかけボード

趣旨説明と呼びかけのボードには、次のような文面を掲載した。

2011年の東日本大震災を受け、立命館大学大学院応用人間科学研究科では、団士郎・家族漫画展を中心に、十年にわたって毎年、東北4県を巡回する「東日本・家族応援プロジェクト」を実施中です。

この漫画は直接、被災を扱ったものではありませんが、誰かの小さな物語が、あなたの中に眠っていた記憶を呼び覚まし、身近な人とのつながりを思い出させてくれるでしょう。同時に、出会ったことのない誰かの物語との重なりも感じさせてくれるかもしれません。

人生にはいろいろなことが起こります。あなたの知らないところで、人々は様々な災難に出会い、乗り越えてきました。あなたもまた、数々の困難を乗り越えてきたはずです。どんな災難に会っても人は助け合い、逞しくしなやかに生き

ていけることを忘れずにいられたら、いざという時にも、希望の灯を絶やさずすみませす。もし今、困難の最中にあるとしても、どこかにいる誰かとの未来の出会いを想像してみませんか。

本プロジェクトでは、そんなつながりに気づくことから始めて、困難を乗り越える力と知恵を集める機会を作りたいと考えています。ココロをかさね、未来のための思い出を交換するプロジェクトに、是非、あなたも参加してください。





プロジェクト開催とインタビュー

駅構内でのプロジェクトは、院生や修士生に呼びかけ、計 21 名がインタビュアーとして参加、9 日間でなんと計 250 名の市民の声を集めた。当番になったインタビュアーは、駅構内を通りゆく人々に声をかけ、ちらしを配り、漫画展をやっていることをアピールし、漫画をじっくり読んでいる人々には、インタビューに協力してもらえないか声かけを行った。臨床心理や対人援助を志すシャイな院生たちにとって、最初、このような声かけは難しいことのようにだった。

しかし、背中を押されて経験を積むうちに、見ず知らずの人々と交流する面白さに気づき、院生たちの姿勢は大きく変

化していった。インタビューに応える人々も、院生たちの初々しく真摯な態度に応援してやりたくなるような気持ちが芽生えていったのかもしれない。そんな姿を眼にしなが、インタビューする者/される者の相互作用が興味深いテーマとして浮上するとともに、フィールドが院生たちを育てることを実感した。中には、外国人と英語を使って一生懸命コミュニケーションしている姿もあった。こうして、院生たちはだんだんと自信に満ち、積極的になっていったのである。結果として、この試みは大成功を収め、非常に貴重なインタビューデータが集まった。



漫画展を見た人々に起きること

インタビュー項目の一番目である「感想を聞かせてください」にさまざまな声が集まり、これらの声は、齋藤清二先生が M-GTA を使って分析してくれることになった。結果の詳細は対人援助学会誌（2019年9巻掲載予定）を参照して欲しいが、構成されたストーリーラインは以下のようなものだった。

『木陰の物語』の鑑賞者の多くは、それぞれの体験において、「いろいろな人生のいろいろな物語」を読み取っていた。それらの多様な物語に触れる体験は、リピーターにとっても「読む度に新しい」と感じられる創造的な体験であった。鑑賞者は「あるある感」「重なり感」などを通じて、『木陰の物語』と自身の体験、あるいは想像上の体験を重ね合わせ、その体験の中で「身体感覚を伴った感情体験」「しっとりとした感情」「感動！」「共に苦しむ」と表現されるような多彩な感情を体験していた。一方では『木陰の物語』を読むことで、鑑賞者は自分自身の体験や自己を振り返ることを促されていた。これらの「省察」と「感情」の喚起は、独立に起こるのではなく、絡み合って生起し進展していく様子が見て取れた。それらのきっかけとなり推進するものとして、「重なり感」と「他者性の認識」が関与していると思われ、そこから「個人誌の語り」が誘発されていた。このようなプロセスの到着点として、鑑賞者はさまざまな「それぞれの着地点」を見いだしていた。それらは

「ほどよい着地」「教訓を得る」「しみ通る言葉」「大きなものに触れる」「人生の不条理」「解決策を与えない」などとして表現されていた。それらの体験のプロセスを通じて鑑賞者は、「個別性と一般性を往還する」プロセスを体験していた。これらのプロセス全体を支えるものとして、『木陰の物語』の形式がもつ「物語と絵の相乗効果」が機能していた。さらにそれらのプロセス全体を「見守る視点」の存在が、参加者が自由に感情や省察を体験し、共有し、個人としての自分を認識するとともに、再度それが時空を超えた多彩な物語と繋がることを体験できる場の形成に重要であると思われた。

漫画展を見た人は、視覚イメージによる漫画と物語のコンテンツによってあたかもスノードームを揺すったように刺激され、体の底の方に沈んでいた物語が浮上する。それは自分自身の物語だったり、身近な人の物語だったり、小説や映画などから記憶に残った物語などさまざまであるが、浮上した物語をじっくり内省したり俯瞰したりすることで、物語の持つ個別性ととともに、その普遍性を確認することになる。これらの作用は、目の前の問題を相対化させることで、「自分だけではない」と孤独や孤立感をなだめ、「人生にはいろいろなことが起きるが、それらは時間経過とともに変化していく」という大きな視野を与える。

人は共感してもらうことで孤独や孤立感を手放すことができるものだが、逆に、誰かに共感することによって孤独や孤立

感を手放すこともできると言えるかもしれない。同時に、他者の小さな物語に共感することで、自分の小さな物語を呼び起こし、そこに意味を見出すプロセスでもある。作者による強い示唆や教訓がないからこそ、それぞれで、その時の自分に必要な教訓なり着地点を見つけ出していく。被災地で漫画展を開催するにあたって、大災害によってすべてを失ったと思える時でも、自分の中にたくさんの物語や思い出が残っていることに気づくことができたなら、再び立ち上がって前に向かって進もうとする励ましになるのではないかといった期待がまんざらでもなかったと思われた。

漫画展会場でそんな作用が起こっている時、語ることに開かれた空間があり、人がいれば、語りが促進され、他者との交流によってさらなる着地点へと至ることも考えられる。実際のところ、短い時間のインタビューであったが、家族の悩みや生死を分かち病、生き抜いてきた戦争や苦難の歴史など、非常に個人的な物語が語られるということが起こった。

また、漫画展を見た人たちのなかに、見守る視点を感じる人たちがあった。漫画の物語の中にも、さらにはこのプロジェクト全体の構造においても、当事者の状況から少し離れて、見守ってくれたり、応援してくれたりする人がどこかに存在することへの気づきであり、本プロジェクトが目的に掲げる「証人」の存在の感受と言えるかもしれない。一人の20代女性は、この設定に、見ず知らずの誰かが

を力に ③乗り越えるのは自分だ ④視
点を変えてみる ⑤ジタバタしない
⑥セラヴィ、それが人生さ を置いた。

困難への対処として、まずは大きく二
方向に分けられる。ひとつは困難の解決
を模索する方向であり、もうひとつは問
題解決に囚われずにありのままを受け入
れるという方向である。人によって対処
の方向性が異なる場合もあるが、解決を
模索しても解決できない場合は受け入れ
ると、順を踏む場合もある。また、それ
ぞれに、「人は誰かと共にある」と他者
との関係を強調する方向性と、「自分の
人生」を引き受けるという主体性を強調
する方向性とに分けられた。

問題解決を模索する×関係性

問題解決を模索する方略として、関係
性を大事にするならば、①「誰かの助け
を借りる」となる。具体的には、「人に頼
る」（「まわりの人の支え」「人と話す、
人に相談する）、「専門家に相談する」と
いうのがある。

「やっぱりそのそういう事が起こった
時は1人で考えると、周りに助けを求め
ることがよかったんちゃうかなと思いま
すね。やっぱり1人で悩むと解決策も浮
かばないので、周りに相談したりして切り
開いて行って自分だけじゃないみたいな
感じですね」や、「いろんな方に愚痴じゃ
ないけど、聞いてもらうことも大事な
かなと。吐き出して、アドバイスをいた
だいて、その通りにはならないんやろう
とは思いますが、まあやってみて、
自分のやり方で、していくのがいいかな」

などの声があった。

ある70代女性は、他者に助けられて困
難を乗り越えてきた自分の体験を語って
くれた。「私ね、実は自分の父親が戦争で
亡くなっててね、母が若い時の子やったん
で、あちこちで預けまわされて生きてきた
んやけど、施設とかに入らんかったけど、
でもねえ、周りの人がすごく良かったの。
学校の先生とか。それで事情があって上の
学校も行かれんかったけど、ちゃんと真っ
当に生きなさいよということを全然知ら
ん他人さんが教えてくれた気がするの。そ
の親類とかじゃなくって。だから、大袈裟
に応援するとかせんでも、温かみって伝わ
ってくんのよ。で、頑張ったらなんか、頑
張りっていい成績取りなさいとかそんな
具体的なことじゃなくって、生きること
に頑張る。意欲的になる。だったら絶対道は
開けると思う。私も年を重ねてから定時制
の高校に行ったけれども、その時代は戦中
の子やし、貧しかったけれども、でも心は
平和やったしね、それは周りの大人が良か
ったからやと思う。だから今みたいなスイ
ッチオンで殺したりやっつけたりじゃな
くって、なんかこうクッションがあったよ
うな気がする。全然知らん人でも。近所
のおっちゃんでもおばちゃんでも、どうした
ん？って声かけてくれた。それがものすご
い私の役に立ってる。だから、今はこうで
も絶対乗り越えられるっていうアレがあ
ったから、私は乗り越えられたと思う。」

また、「一番大事なものは家族。家族の
関係が辛い時にはサポートになる」「家
族で話し合うことを何回も何回も重ねて
自分一人で抱え込まない」など、解決の

有無を問わず「やっぱり家族」という概念が強力な凝集性を持って立ち上がった。これは「木陰の物語」が家族をテーマにしたものだったからかもしれない。

問題解決を模索する×主体性

問題解決に主体性が重んじられるならば、③「乗り越えるのは自分だ」となり、「結局は自分」（「結局は自分」「自分を信じる」「我が道を行く」）、「挑戦してみる」（「がむしゃらに頑張る」「諦めない」「とにかく動いてみる」）、「できることを続ける」があった。

「やっぱり自分の人生、回り道でも自分で決めないといけないな」「何事も諦めないというか…どんなことにも一所懸命することが大切やと思いますね。何か起きたとしても常にいい方向に持って行けるように 一所懸命するということは何事にもつながっていく、ということをお忘れでないことかなあ」。

「こうなったらこうなってるの人生、思い切って。だから、なんで私が癌になるのってそう思ったらダメ。癌になったら、もうなってしまったんやし仕方ないから。切るなら切って、切らないなら切らないって 覚悟決めてどっちか



を選択して、それに向かって生きていくだけです」「8年前に主人が亡くなって54で、子どもが3人男ばかりで、成人してくれてもう働いて43年目なんです。看護師してるんですけど、保育園に迎えに行ったり送ってていったり大変でしてよね。よう頑張ったよなって。もうなんか働かなしょうがなかったですよ。食べていかなあかんし。私が頑張らなと思って。女は働くもんやと思ってましたしね、もう親がそうやったので。早くから、中学卒業して、定時制高校行って、看護学校行って、ずっとなんでね。60すぎたし働きたくないし、も一って思うけどね、まだ常勤でやっています」など体験を交えて語られた方もあった。

「毎日自分がこれがいいって信じて、正しい思ったことを続けて行ったら、その時は全然気が付かへんかったけど、何年か先、ほんま何年先になるかわからへん。一年先、十年か二十年先かわからへんけど、とりあえずなんか、うん、ええと思うことを続けて行ったら、答え出るかかわかんないんですけど、私の場合は、あーよかったと思うことがあったんで」。

自分で引き受けることと他者の助けを借りることは矛盾するようだが、他者の助けを借りたうえで最後は自分で背負うというものもあった。また、「越えるときは、自分だけがこんな辛いんじゃない、みんな口に出さへんけど、通り越えてきはった道やから、私に越えられへんわけはないと思って歯食いしばって越えてきました」など、他者とのつながりを思いつつ、腹を括って自分で引き受けて

いくというようなものもあった。

問題解決にこだわらない×関係性

問題解決にこだわらない対処として、関係性を大事にするならば、②「つながりを力に」（「大切な人の存在」「人とのつながりを思い起こす」「人とつながる」）がある。

「家族とか、兄妹とかのことをふと思いで出して、みんな頑張ってるんだから、自分も頑張ろうって。それで、立ち直れたような気がします」「自分を信じてくれる人はどこかに絶対にいる。っていうふうに思うことで、楽になれたのかな～とは思うかな～」のほか、「死んだ弟、ある歳になって行き詰まって、僕がちょっとあんまりな人間やったから、弟が今の状況を本当は見てた、天国で見てたとしたらどう思うかなと思ったときに、ちょっと、変えていかなあかんなと思って、そこが、ターニングポイントだったかな」「も～おじいちゃんはいないんですけど…思い出すことによって、まだ、きつとおじいちゃんも近くで見てくれてるやろうなって」というように亡くなった人の存在を感じるによって支えられるものもあった。

問題解決にこだわらない×主体性

問題解決にこだわらず、「ありのままを受け入れる」の方向で、主体性を強調するなら、⑤「ジタバタしない」となり、「立ち向かわない」（「諦める」「開き直る」）、「流れのままに」（「あるがままに受け入れる」「頑張りすぎない」「流れ

のままに」）、「必ず終わりがくる」（「時が解決するのを待つ」「辛抱あるのみ」）があった。

「まあ、よくもわるくもあきらめること。流れに身を任せるというのか、立ち向かわないです。闘わない」「開き直る」「乗り越えようと思ったわけではないけど、結局のところ、まあ受け入れるしかない、要するになんか自分に降りかかってくることを…抱えるって言うのかな？降りかかったことをジタバタせずに素直に受け入れるのがコツかな？」

「なるようにしかならへん。無理に逆流しても無理。気は長～く、心はまあある。ほんで美空ひばりの『川の流れのように』自然の流れのままに。逆ろうてもね、できないの、その、何かあるときは。だから自然のままに、私はどうかこうとか思っても、それはどうにもならへんから。それは自然のままに行ったら」。

「そんなに真剣に考えてなくて、ケセラセラで何とかなる」「あるがままです」「そういうときは、空見てましたね～。雲がふわ～って動いていってて、雲もなくなる。自分もなんか今、嫌～な感じやけど、どっかそのうち雲みたいに時間はちゃんと経って、その状況からは脱出できるみたいなことを思ってた」などと語られた。

視点を変えてみる

さらに、④「視点を変えてみる」というのがあり、解決に向かおうとするなら「プラス思考で」（「くよくよせず前向きに」「ポジティブに捉え直す」「楽観的

に構える」)、直接解決を求めないのなら「困難以外に目を向ける」(「日常を大事にする」「気分転換をする」「休養を取る」)、その間に「距離を置いて客観視する」があった。

「いろんなことを否定的に捉えずプラスに考えて」「ピンチをチャンスに」「あんまり気にせんことちゃう? 頭よくないんやろうなあ、そやから。はっは。もう楽道家やろ、どっちか言うたら。ほいでよっしゃこいよ、俺は」

「離れることは大事っすね しんどいこととか、ぶつかっている壁とか、いったん自分がひいてみるなんか、そればかり見ちゃうと他が見えなくなったりとかすると思います」「視点を変えるってことかしら。鳥瞰図で見ることを心がけてます」。

「日々の暮らしを精一杯生きる」「とにかく身体休めましたかね。私も事故で母が亡くなったりとか、そのあとお父さんが病気になったりとか、ちょっときょうだいも体調悪くしてとか、なんかいっぺんに色んなことが起こってしまって。でもなんか、ね、身体休め・・・無理してやっぱり動くと、どうしてもこう精神的にもまいってくるので、やっぱり思い切ってもって、部屋にこもって、落ち着くまでは身体休めましたかね」など語られた。

セラヴィ、それが人生さ

「ありのままを受け入れる」の関係性と主体性の中間に⑥「セラヴィ、それが人生さ」(「生かされていることに感謝

する」「先達に学ぶ」「現実是非情だ」「人生にコツなどない」「困難は糧になる」)があった。

「初めから思いがけない事ばかりだと
思って生きていく」「時々自分が何のために生まれてきたかっていうことを考えるってことですね」「まあ、でも過ぎてしまうとみんな楽しい思い出になるよね」などのように、これら全体を俯瞰的に捉えた人生観に支えられた方略と言える。

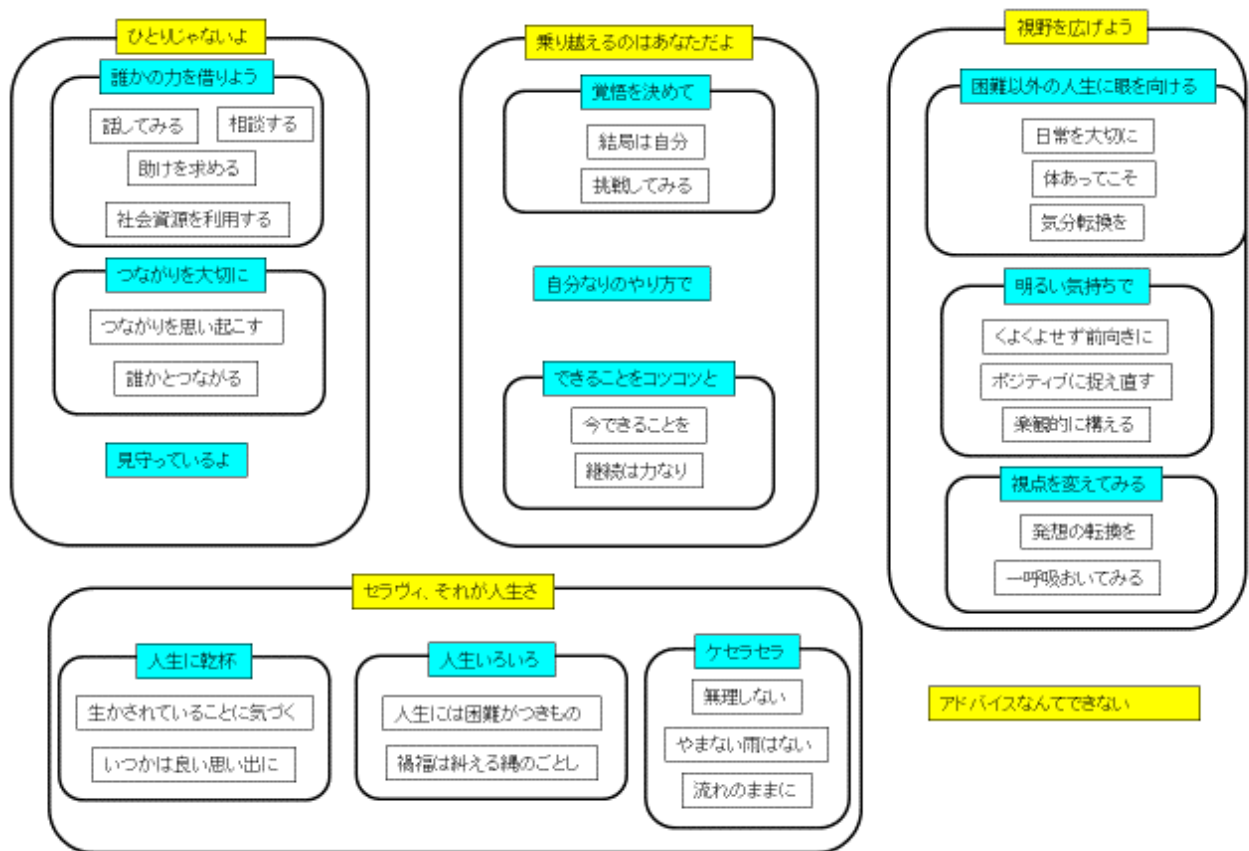
困難の渦中にある人への助言

困難の最中にある人へのアドバイスは、基本的には、困難を乗り越えるためのコツに対応するような形で、①ひとりじゃないよ ②乗り越えるのはあなただよ ③視野を広げよう ④セラヴィ、それが人生さ ⑤アドバイスなんてできないの5つのカテゴリーに分けられた。

ひとりじゃないよ

「ひとりじゃないよ」というアドバイスには、「誰かの力を借りよう」(「話してみる」「相談する」「助けを求める」「社会資源を利用する」)や、「つながりを大切に」(「つながりを思い起こす」「誰かとつながる」)に加え、「見守っているよ」という直接的な励ましのメッセージも含まれていた。

「聴いてくれる人は実はたくさんいる」「話せるだけでもだいぶ救われるよ」「誰かが必ず助けしてくれるって。周りの人に助けを求める。話してみるっていうのは、



ちょっと頭の片隅においておいて欲しいなって思います」「求めない限りはなかなか現れないので、最初の一步というか、最初の勇気というか、それが大事なかな」「そう思うためには周囲の人に助けってもらったことや言葉を思い返す。自分がどんなに多くの人と関わってきたか思い出すことかな」「誰も一人じゃ生きていけないし、絶対、誰か一緒にいてくれる人がいる」「どこかに自分のことを見てくれる人っていうのは、絶対にいると思ってて。絶対人のつながりって、絶対どこかにできると思うので、ずっと大事にしていてほしいなって思います」など、自分自身に言っているようでもあり、「ほんとに、

一人じゃないと。あの、必ず誰かいるのでっていうことを。私もそやったんですけど、何もないな～、絶望やな～と思っているところでも、どっか目に見えないところで一生懸命支えている人、存在がね、必ずあるんで、それを信じていただいて、頑張っていたきたいなと思います」と自分自身のことをのせて語る人もいた。誰を思いながら語っているのか、「張ってもらいたいです」と涙ぐむ人もあった。

乗り越えるのはあなただよ

「乗り越えるのはあなただよ」というアドバイスには、「覚悟を決めて」（「結局は自分」「挑戦してみる」）や、「自分なり

のやり方で、「できることをコツコツと」
（「今できることを」「継続は力なり」）が
あった。

「辛くても逃げないのが大事かなと。
一生懸命変えるでもいいし、切り開くた
めにもがくでもいいですけど、とりあえ
ず忘れてしまうとか、嘘ついたりしない
のがいいんじゃないかなと。一生懸命、
考えていくのが大事」「一歩踏んでみる。
うん、そういうのもいいんじゃないでし
ょうか。無理せずに。そこに誰かいると
思います。行くか行かないかで迷ったら
行ったほうがいい」「もうやれることをや
るしかない」「何か変化を、ですね、今ま
でと違う変化をですね、一歩踏み出して
やってみるといことが、大事だと思います」
「今、目の前にある課題をとにかく
そこに集中して、他のことを考えない。
考えないで、今、これしなあかんってこ
とに夢中になって、とにかく時間をこな
していく、っていうのは有効かなって思
う」や、「生きてれば、色々あるけれども、
一日一日を一生懸命生きたら。その積
み重ねやしね」などの声があった。

視野を広げよう

「視野を広げよう」というアドバイス
は、「困難以外の人生に眼を向ける」（「日
常を大切に」「体あってこそ」「気分転換
を」）、「明るい気持ちで」（「くよくよせず
前向きに」「ポジティブに捉え直す」「楽
観的に構える」）、「視点を変えてみる」
（「発想の転換を」「ひと呼吸置いてみる」）
があった。

「ちょっとだけ落ち着いて、視野を拡

げてみると、意外と答えとかそこらへん
にあるかもしれない」「頑張らなくてもも
いから、一日一日を、うーん、うん、食べ
て、寝て。これがいいんちがいますか？
あんまり悩まない方がいい。悩んでも、
どうにもなりません。私はそう思います」
「死なないで生きていたら、まあなんと
かなるわってことやね 死んじゃったら
だめだしね。なんとかこう死なないよう
に、細々と生きていたら、なんかあるか
もしれないねというくらいかなあ」「その
大変なことに、なんかこう、直面から立
ち向かわなくても、なんか、そういうこ
う嵐が過ぎ去るのを、こうなんか、他の
ことをして待つとか、そういう方法もあ
るかな、と思います」

「その人がちゃんと人生に意味づけいて
いく、いけること、いければいいなと思
います」「ピンチはチャンス！乗り越えて
から言えることですけど、そう思いま
す！」などが挙げられた。

セラヴィ、それが人生さ

「セラヴィ、それが人生さ」には、「人
生に乾杯」（「生かされていることに気づ
く」「いつかは良い思い出に」）、「人生い
ろいろ」（「人生には困難がつきもの」「禍
福は糾える縄のごとし」）、「ケセラセラ」
（「無理しない」「やまない雨はない」「流
れのままに」）があった。ここまで来ると、
含蓄の深い言葉が多い。

「人生に乾杯」には、「ここまで生きら
れたんは、何ちゅうか、世の人のために
生きられたんやと、自分は一人で生きて

るんちゃうから。できたら、人に恩返ししながら、自分はその、文句言わずに、まあ、あの、何ちゅうか、生きていくために考えてもらった方が、私はその、そういう考えですよ」「感謝の気持ちと笑顔ですね」「やっぱり、しんどい時こそ、やっぱり感謝して、ありがとうと思いつけること」など「生かされていることに気づく」や、「つらい時思うのは、10年たったなら笑い話になれるでしょ、そんなことが言えたらいいなと思います」などがあつた。

「このことで大変なんですけど、ザーっとこうやっていくと、宇宙から見ると些細なことの一つで、それはまた時間が経つとこんなこともあつたよねってなるので、今を味わうというか楽しむというか、その時にできることをすれば、後になった時には、どんな結果になっても、あんなことあつたよねって言えるかなって思って頑張らましよう」

「あとで振り返ったら、自分の糧になつていたりするみたいなのところもあるかと思うので」

「今の偶然は必ず未来の必然に繋がつてると思いますね。今のその自分の環境ってのは必ず未来の糧になるものがあると思うので」

「思いもよらないところに行きつくから、人生は楽しい。面白い」「結構大変な時って、自分も大変だと思うんですけど、それ過ぎた後に、ちょっとしたきっかけがあると、あの大変なのがここに繋がつた、みたいのがあつたかなっていうのはありますね」など、「いつかは良い思い



出に」があつた。

「人生いろいろ」には、「結局、悪いことばかりじゃないですよ。いつか良いこともありますよ。影もあれば明るいこともある。そういう希望を持ち続けたら何とかなりますわな」「いいこともあれば悪いこともある。悪いこともあればいいこともある」

「ことわざで、何でしたっけ。禍福は糾える縄の如しでしたっけ。あの、縄がこう捻じれてるような感じで、良いこともあれば悪いこともあるんだな、だからそれを信じて、悪いことがあつてもまた良いことがある、ということですね。乗り越えてしまうと、まあ、嫌なことだったりですけど、まあその渦中にいると、ほんとに悪いことばかりが、自分ばかりに来てるような、なんかそういう風に思い込んでしまう時期もあつたんですけど。なんかその、過ぎてしまうまでは仕方がないと思うんですけど。その、縄みたいなのを信じて、ですかね」などがあつた。

「ケセラセラ」は、「これは、その人でなかったらわからんことやし。まあ、僕

らから言うたら、ケセラセラやな。まあ、そういう気持ちを持つように。まあ、…その、風になびいていくような。んー、これでないとあかんってゆうて、そういう生き方はやっぱり、その人にはプラスにならんと思う。うん。やっぱり、何ちゆうか、…んー、ケセラセラセラやないけど。そういう生き方をお勧めするな」

「始まりがあれば必ず終わりは来る。この世で起こったことは、この世で終わる」「まあ、最終的には何とかなるから、あんまり必死にならなくてもいいんじゃない。まあ、死ぬほどのことはないです。ハハハ」

「なんかこう、道がどっかで開ける。自分が思っていない方向かもわからんけど、道が開けて、助かったって思える時がきっとあるんやろな、って今の自分もそう思ってるんですけどね」「じっと待っていたら解決していくことも多いと思います」

「それがなかったところと違う世界が開かれるって言うか……だから、トンネルを抜けたら、違う次元に行けるみたいな。なんかそのことを覚えておくっていうか」

「そのさなかでは、本当に真っ暗闇の中のように見えるかもしれないけど、でも、それを抜けたら、きっと、自分自身も、なんか、また次のステージに行けるかなって信じて受け入れるっていう」「いつまでもそれは続かない。止まない雨はない。明けない夜はない。信じてがんばってください」などだった。



アドバイスなんてできない

最後に「アドバイスなんてできない」という声が集まった。

「違うと思うのでね、アドバイスというのは難しいです。それぞれやりましようというところかな」「でも、やっぱりアドバイスとか、何かを言うってのはすごく難しいことやなって私は思ってます」

「ん〜、軽々しくアドバイスはできないですね〜、そんな経験をされている方には、それぞれの事情があると思うんでね」

自分が困難を乗り越えてきたコツを振り返り、あらためて他者へのアドバイスとしてそれを語ることで、それが誰かの耳に届くだけでなく、今後起こり得る困難への対処を自分自身で確認することになったらいいなと期待している。

インタビューアの反応

今回の企画で、もっとも印象に残ったのは、インタビューした院生たちの変化である。出会いがしらに見ず知らずの人

の人生についての語りを聴かせてもらったことは、貴重な体験になったようだ。協力してくれた院生・修了生たちの反応を紹介したい。

まずは、①「困難を生き抜いてきた他者への気づきと驚き」があった。「死に直面した体験を聞き、自分自身が心を震わされ『ココロかさなる』体験だった」

「通りすがりの見ず知らずの人がすごい体験を語ってくれた。外からは何も見えないが、人はすごい体験を生き抜いてきていることを知った」「2~3分の中で深い人生をたくさん聴かせて頂き、貴重な体験だった」「駅の中を歩いている人、すれ違う人それぞれに、いろんな人生があるんだなあとしみじみ感じた」などの感想があった。

次に、②「出会いのなかで揺さぶられた体験だった」。「泣きながら、怒りながら、語ってくれる人もいた。どう反応したらいいか困ったが、ただただ相槌を打って、話してくれたことに感謝する。最後は表情が和らいでいたように感じた」

「年輩の方の戦争や昔の話で、『あなたは知らないでしょうけど』『いまは贅沢だ』と言われ、責められているような気持ちになった」などの声があった。

それから、③「アドバイスを聞きながら感じたこと」である。「アドバイスを受けているうちに、こちらが励まされ、ものすごく落ち込んでいた日があったが、『またがんばろう』と思えた」「メッセージの中で多く語られたのは、人に助けを求めよう、話を聞いてもらおう、というものだった。自分が言われたわけでは

ないが、世界には私を助けてくれる人がいる、味方がどこかにいる、と何かあってもどうにかなりそうだなと思えた」という声があった。

また、④「二者関係から社会や歴史に開けていく視点」もあった。「戦中世代の話を聞かせてもらい、年配者の話を聴くのは重要だと思った」「インタビューを通じてたくさんの人と出会い、様々な世代の物語を聞く中で、自分が生きてこなかった時代背景を感じたり、その人らしさを感じたり、話してもらうことを通じて、その人を支えるものが話している今相手の中で賦活されているのを感じ取れたり、いろいろなことを感じさせてもらった」「一人で漫画を見て感じたことが他の人の中にもあり、自分だけのものでないと思えた。他の見方や感じ方を聞くことで、漫画から人や家族、社会のとの繋がりに幅をもつという大げさかもしれないが、その違いを知ることができたと思う。話し手のライフストーリーを垣間見たり、乗り越えてきた努力を支持的に聞くことで、相手の理解につながったり、話し手への感情が自然に生まれた」「一期一会のインタビュー。5分間で相手の人生に出会う体験」「尊敬の念や応援したい気持ちからエンパワメントにつながる視点を得た」「話し手の乗り越えた体験やコツを聞くことで、自分の体験も賦活され、再び触れて、意識的に自分のコーピングを振り返ったり、効果的なコーピングを捉えることができた」

⑤「スピリチュアルな視点」もあった。

「さまざまなコツを聞いて、他者をはじ

め、天(自分より大きなもの)や運(タイミング)など、自分が何かに開かれているということが大事だなと改めて思いました」。



高齢男性の反応

これまでの経験から言えば、一般的に、この漫画展を見て自分のことを語り出すのは女性、とくに中年女性に多い。家族についていろいろ悩み考えてきたからだろう。

しかし、今回は男性、とくに高齢男性が雄弁に反応してくれることが多かった印象がある。年齢については、本人が語る以外は尋ねないことになっていたの、インタビュアーによる推定でしかないし、統計的根拠はないが、印象として記しておきたい。

実際のところ、平日の日中、呼びとめられて話すという状況からは、目的地に向かって急いでいる若い人たちより、時間に余裕のある高齢者だったということ

は言えるだろう。

一般的に言って、男性の語りを聴くのは難しいとされるが、今回、若い学生たちが自分の話に一生懸命耳を傾けてくれるという状況は、日常生活では珍しいかもしれない。

男性の困難の乗り越え方は、「辛抱」というのが顕著だった。たとえば、ある80代男性は、「①私も戦前のね、86歳、この話を見てたらいろいろなことを思い出した。戦争も生き抜いてきたしね、最後のやつ(七夕)も面白かった。今はどうしてもね、お世話をした人がいわゆる損得抜きに幸せになれる世の中にして欲しいね。③やっぱり辛抱やな。辛抱、辛抱。おてんとさんが見てるんとちゃう。辛抱やね」と語り、別の80代男性は、「①世の中のね、…誰にでも色んな事があるちゅうことがね、ようわかりました。②我々、ちょうどこの戦中派でしてね。私も海軍にいましてね、海軍もそりやまあ色々ありますけども、結果は、死ぬのができる人間になったということで、…それ以後ね、こお、なんちゅうか、生かさしてもうて。何もかも辛抱していくという… ③結局、世間が悪いという考えは無しに、反対にね、結局そのまあ、戦後、仮に自分がこういう立場でも、ここまで生きられたんは、何ちゅうか、世の人のために生きられたんやと、自分は一人で生きてるんちゃうから。やはりね、できたら人に恩返ししながら、自分はその、文句言わずに、まああの、何ちゅうか、生きていくために考えてもらった方が。私はそういう考えですよ…」と語った。

ある 60 代男性は、「①絵と文字がうまく合っていてわかりやすいなど。②そうね、やっぱり耐えて、起きたことは必ず終わりますから。耐えて、じっとその時が来るのを待つ。③始まりがあれば必ず終わりは来る。この世で起こったことは、この世で終わる。部下にも言ってるけど、必ず終わりはあるから、その時やるべきことを一所懸命やって、あとは、平たく言えばなるようにしかならないから、あとはじっと耐える。少なくとも、今まで生きてきているんですから、最後は何とかなる」と語り、別の 60 代男性は、「①ほのぼのとしてよかったと思います。②コツ？ああ、コツねえ、う～ん、特別、コツというほどのことでもないですけど、まあ、よくもわるくもあきらめること。流れに身を任せるというのか、立ち向かわないです。闘わない。③ああ、まあ、最終的には何とかなるから、あんまり必死にならなくてもいいんじゃない。まあ、死ぬほどのことはないです。ハハハ」と笑った。長い人生を生き抜いてきた男性としての知恵があると感じられる。

一方で、高齢男性から世の中に対する怒りを感じたというインタビューアの感想があった。「漫画展の感想を聞いたのに、前日に起こった新幹線での焼身自殺のニュースについて『今の世の中は難しい』といった感じで話し出した。自分は漫画展を見た後、どの話でもあたたかい気持ちになっていたので、『どうしてそんなに暗い表情で、社会に対する怒りのようなものばかりを語るんだろう』と不思議に思った。漫画に対する感想は人それ

ぞれだし、いい気持ちを喚起するのか、よくない気持ちを喚起するのもそれぞれなんだ、と反応に戸惑いながら思った。感想というより、訴え感がある。暗い空気の会話だった」「漫画展に来る前日にお仕事をなくされたことを最後に話された方には、敵意のようなものを感じなかった。いろいろ強めの口調があつて圧倒されていたが、途中からは、うまく言えないけれど、相槌も自分にとって自然に合わせてできるようになっていた。失業については、反応には困って『そうなんですか』としか言えなかったけれど、なんとなく、おじいさんが怒っている理由に納得がいった」ということだった。

「戦中世代の話を聞かせてもらい、年配者の話を聴くのは重要だと思った」という感想があつたが、私たちはふだん年配者の言葉に耳を傾け学ぶ機会を失っているのかもしれないと思った。

まだまだたくさんの興味深い対話の記録があるし、葉書や web への反応もあるのだが、紙面の関係上、今回はここまでにしよう。

つづく



対人支援点描 (17)

「心理面接の枠組み個人的再考」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

精神科クリニックで心理面接を行うようになって、体調不良や金欠により具合が悪くなったり、デイケアの人間関係に中てられてクリニックに来れないという患者と向き合う割合が増えた。当日、キャンセルになったりすると時間に空きができてしまう。こうした状況で、時間で働く身としては大変肩身が狭くなる。決して裕福ではないクリニックの台所事情を思うと、自分が穀潰し(ごくつぶし)にでもなった気がしてつらくなる。

自分の面接構造の枠作りが甘いのかと反省するが、迷いが生じている。心理面接が有料であるならば、こういうキャンセルは少なくなるのだろうか? 他で働く心理士らは、キャンセルに対して、どのように対処・対策しているものか、知りたい気がする。

今回は、自分自身の自己点検を兼ねて、再度、面接のキャンセルを中心に課題を考察したい。

1. これまでの面接

現在のクリニックに外勤するようにな

ったのは、前職場を退職する前後に、以前からお付き合いのあったクリニックの事務長(看護師)からお誘いを受けたことによる。その誘われた理由としては、クリニックにトラウマを訴える患者が多くいて困っているため関わってほしい、ということであった。

折しも、テレビでトラウマ治療が話題になったことがあったためか、EMDRが注目されていた。そんなこともあり、筆者が一応EMDRのパート1、パート2トレーニングを受けていたことから声をかけられたと思われる。

2. トラウマ治療の取り組み

個人面接を受け持ち始めトラウマへの介入を行うようになったのだが、患者の期待効果もあり順調であったといえる。EMDRに加えTFTを併用して取り組んでいた。

けれども、医師やソーシャルワーカーに紹介された患者は、必ずしもトラウマによる苦勞を抱えた方ばかりではなかった。

これはある程度、仕方ないことであると

いえる。人は多かれ少なかれトラウマを抱えて生きている。トラウマのない人間はいないといえる。また、しみじみ思うことだが、病の苦勞からの回復を願っている。それゆえに病の原因を探し求める。原因論に人が傾くのは仕方がない。原因を退治できれば病から回復し、人生のリカバリーが可能になるのではないかという期待がある。切望といっても良い。それだけに、当人が自分の苦勞の原因をトラウマに見立てることだって起こる。こうした場合でも、ある程度まで対応してきた。

しかし、トラウマへの介入以前に、手前のところで躓いてしまうことが継続面接として残るようになってしまった。

介入前に行う「安全な場所」などが構築できず、不安が強く成立しないような方々である。

他に、トラウマの問題に愛着の課題があり、関係が安定しない方々もあった。

そして、愛着の問題ともいえるかもしれないが、絆（ボンド）に餓えている方々が増えたことがある。ふりかえれば、ある時期から変化が起こっていたのかもしれない。デイケアで筆者に個人面接を受ければトラウマ治療を受けられるという話が伝播した。そのことがあり、診察時にトラウマが語られ、リファアされてくるということが増えたのである。多くは、言葉ではトラウマを語り、つらさを語るが、深まることなく、個別の時間を求めてくる人たちである。悪気はないのだろうが、課題を乗り越えるための面接を求めるよりも、面接自体が目的になってしまう傾向にある。

そして、いつの間にか限られた自分の

面接の時間枠で終結できないケースが残るようになり、面接が断続的にキャンセルする機会が増えることになった。

EMDR の標準的な面接時間が 90 分とされていることもあり、そのつもりで時間枠を作らせていただいているので、標準の心理面接 2 回分の空白ができてしまうのである。急遽、他の方の面接できませんと言って、手当てがつかうわけではないだけに身の置き場がなくなることになるのである。

おわりに

クリニックの心理面接は、診察を経由して依頼が来る。職務として、医師からの指示もあれば、また患者を選び好みすべきことではない。

しかし、現状のままでは見通しの持てない面接を保持したまま、断続的に続くキャンセルや引きこもりや入院による中断と再開にあわせていくことになる。クリニックとしても、自分にかかる経費を負担させるといふ心苦しきもある。

解決のために、より入り口で自分のアセスメントの力を養って枠づける必要を覚える。また、技法の習熟や手数を増やすなど面接の力をつけて自らの対処能力の向上に励む、ということが言えるのだろう。

だが、自助で進まないこともある。どこことなく治療構造自体に問題を感じている。この課題については、他の同業諸氏の経験をたどりつつ、継続して考えていきたい課題となっている。

「あ！萌え」の構造（番外編その6）

物語としての夢（Dream as a Narrative）

総合心理学部 齋藤清二

1. 夢の中の浴槽

若いころ、頻繁に浴場の夢をみた。たいがいの場合、その浴場は地下にある。

私は夢の中での意識性が高い方なので、多くの場合は、自分が夢の中にいることが分かっており、建物の廊下などを歩いていると、下降する階段を見つける。そうすると「下りてみようか」と思う。

その階段を地下に下りて行くと、だんだんと灯りが暗くなっていく。そして、一番下の階までたどり着くと、そこに大きな浴場の入り口がある。「やはりここまで来たのだから、入浴するべきだろう」と考え、脱衣場で服を脱いで、風呂に入ろうとする。

浴場は大概の場合暗いのだが、湯煙が立ちこめていたりして、リアルである。湯に浸かっている肌の感触や湯の熱さなどは、現実の感覚に負けないくらい鮮明である。大概の場合、湯に浸かって、湯の感触を楽しんでいるうちに目が覚めてしまったり、あるいは、夢の場面が転換して別の夢になってしまったりする。

さて、このような夢が「何を意味しているのか？」というのも興味のあることではあるが、それは別の時に考えることにして、ここでの問題は、現実と同じくらい、あるいはそれ以上に現実的な、この入浴の体験とは、いったいなんなのだろうか？という疑問である。

そもそも、そこには、物理的な湯船は「存在しない」。これは全く確かなことである。つまり私が全身で感じている湯の熱さ、湯の感覚、そして浴場の情景、時にはそこで聞こえる音まで、そこにはその体験を生じせしめる「物理的対象」はない。しかも、私は布団の中で眠っているのであるから、私の眼球や三半規管や皮膚の感覚受容器は働いていないはずなのだ。

それにも関わらず、私は明らかに入浴を「体験」している。この「物理的には存在しない入浴の体験」とは、いったいどこから来るのか？しかも、目覚めていくと同時に、湯の感触、湯煙、浴場の情景、大げさに言えば私を取り巻いていた世界の全てが一瞬にして存在しなくなり、私は布団の中にいる自分を発見するのである。

・・と、まあ、どうしてもそういうことを考えてしまうわけで、私が体験している「入浴」とは、「それは単なる過去の記憶の残渣なのです」という説明も「単なる幻なのです」という説明も、私の全身の感覚を納得させることはできない。しかし「いや、それは実在する別の物理的世界なのだ」という説明も私は採用する気にはなれない。そう、それは「主観的現実」なのだ。そういう説明を私は採用する。最近だと「脳内現象」という人が多いのだろうか。

解深密教という教典によれば、「三昧中に現れる影像は、全てが『識の顕現』である」と釈迦は言ったとのことだ。そして驚くべき事に、私達が通常体験している現実も、それと全く同じく『識の顕現』であると釈迦は主張した。

つまり、夢の中で体験する入浴も、現実には黒部峡谷で体験する入浴も、ともに「識の顕現」である、と仏教は考えるということだ。

・・で、まあ、繰り返しになるが、上記に述べたような夢の中での入浴体験と、先週の露天風呂との体験には、本質的な差はないような感覚を、現在の私は持っているのである。たぶん、最近では現実の世界で入浴を楽しむことが多くなったので、夢の方での浴場はあまり必要が無くなったのかも知れない。

2. 切断の夢

もうずいぶん昔になるが、原因不明の腹痛のために不登校に陥ったA君が、以下のような夢を報告してくれたことがある。

夢：大きなカッターナイフを左手に持って歩いていると、特に切りつけた訳でもないのに、近くを通る人の腕が切れたりして傷つけてしまう。その後、学校へ行き、まわりを傷つけた犯人が自分であることがまわりに分かってしまうので、カッターナイフの刃を隠そうとするが、ノブが大きすぎて戻せない。そこで目が覚めた。

この夢には、「切断」のテーマがはっきりと現れている。おそらくこの夢には、どうしてA君が不登校に陥ったのかという理由が表現されているように思われる。

A君は左手に大きなカッターナイフを持って歩いている。もちろんカッターナイフは切断する機能を表す。「切断する」とは「切り分ける」ことであり、意識の持つ「区別する」「分節する」機能を表す。意識は区別をすることなしには、何も認識することはできない。従って「切る」ことは意識の持つ基本的な機能である。具体的には、善悪、正邪、好き嫌い、美醜などの差異を区別し、認識するという形で、意識の切断機能は発揮される。意識の「切断する」機能は、ロゴス（理性）の機能として表現される。ロゴスを司るのは「天なる父」である。

ところで、この意識の持つ切断の機能は、あまり強力に発揮されると、「切り捨てる」「切り殺す」作用として働く。「天なる父」は、羊の群の中に一匹でも悪い羊がいると、その群は良くないという理由でその群の羊を全て殺してしまったりする。悪徳と墮落の街であるソドムとゴモラが天罰により滅びたりするのもその例である。

これに対してエロス（愛）は、むしろ「つなぐ」「結びつける」機能である。前者は男性的機能とされ、後者は女性的機能とされるが、もちろん必ずしも現実の性役割と一致するとは限らない。

ところで、A君はナイフを左手に持っている。左は一般に無意識を表し、左手は意識が知らないうちに行動する。左手のすることを右手（意識）は知らないのである。この結果A君自身がそのつもりがないのに、とおりにすがりの人々を傷つけてしまうということが起こる。あまりに鋭い切断能力を発揮すること——例えば他人を評価すること、批判することなどはすべてこれにあたる——は、往々にして他人を傷つけてしまう。この問題は、ロゴスの機能をたまたま他人より発達させている子供にとって、学校という集団生活適応にしばしば問題をもたらす。

日本の文化的集合的意識は、物事を厳しく明確にして行く態度を、表面上は推奨するように見えて、実は排除しようとする傾向が極めて強い。「事を荒立てない配慮」や、「他人の欠点をあえて指摘しない配慮」などが集団の中では要求され、理屈っぽすぎる態度や他人に容赦のない態度をとる子供は集団から浮き上がってしまう。

ある時期にこの事に気が付いた子供は、自分の本来の性向である「区別する力」を無理に抑えるか隠すことによって集団に適応しようとする。これが、この夢の中でA君がしようとしていることである。カッターナイフの刃をひっこませることによって、すなわち自身の能力を隠すことによって、この問題は回避されるように見える。しかし、A君にはそれはできないのである。なぜなら、それでは自分自身の本性を殺すことになるからである。

おそらく、学校という場合は、A君にこの葛藤に直面することを迫る場なのである。それがあまりにも重い、解決不可能な葛藤なので、A君は学校へ行けないのであろう。A君は、この解決不能の葛藤の解決を、直接的対人関係の中ではなく、家に閉じこもることによって一人でやり抜こうとしていると考えられるのである。この葛藤はあまりにも深いので、A君自身はほとんど全くこの問題を意識化していなかったと考えられる。この時点になって初めて、ようやくA君はこの葛藤を夢に見ることができるようになったのである。しかし、結局この葛藤が直接言語化されることはなかった。A君の魂は、この問題を、身体化とイメージのレベルで解決する道を選択していたのである。

ところで、この意識の機能としての「切断」のテーマを追求する物語として、手塚治虫の「ブラックジャック」が挙げられる。

ブラックジャックの主人公「黒男」は、子供の時爆発事故に会い、五体バラバラとなり、瀕死の状態となるが、医師により五体を「つなぎ合わされる」ことにより、一命を取り留める。この生い立ちにすでに、身体切断と再生のテーマが見て取れる。これは、エジプト

神話におけるオシリスの殺害と再生に等価の物語である。

彼は後に天才的な外科医となるが、医師免許を取得せずに、アウトローの道を選ぶ。彼は天才的外科医として、ほとんど奇跡的あるいは魔術的とも言うべき「切断」の能力を発揮し、他の医者が見えない患者を次々と手術により救っていく。

彼の能力は実は「切断」とともに「つなぎ合わせる」能力なのである。なぜならば、外科医が患者を救うためには、「切り取る」だけではだめで、「縫合する」技術を要求されるからである。しかし、彼は常に葛藤状況におかれることを余儀なくされる。一つは彼をアウトローとして認めない社会がもたらす迫害であるが、彼自身はそのような社会から離脱した個（それは悪人として表現される）を確立することによってそれに対処する。

しかし、もう一つのさらに根元的な葛藤には、さすがの彼も抗し得ない。それは、如何に切断と縫合の能力を発揮しようとも、人間の生死の運命はそれを越えたところにあるという事実が彼にもたらすものである。この真理は、例えば彼がその奇跡的な手術の技術を駆使してようやく治癒せしめたと思った患者が、何らかの偶然によりその直後にあつてなく命を落としてしまうというようなエピソードが繰り返されるといって、彼の前に現れる。

その事実と直面したとき彼はこう叫ぶ。「それでも私は切るしかないのだ」。この叫びは、人知を越えた真理（それは人生における徹底的な非条理とも言えよう）に直面し、自身の限界を思い知らされた時に、なお誇りを失わない自我意識の悲痛な叫びであり、意識的に生きようとする全ての人々により共感される叫びでもあるのだ。

3. 双子の死

原因不明の腹痛のために不登校に陥った A 君が、治療の後期にとっても長い印象的な夢を見た。その夢の最後の場面で、A 君は以下のような体験をしつつ目覚めた。

夢：・・・なぜか僕は大きなコーヒの瓶のような容器に、白い固まりの入ったものを二つ渡され、どちらにしようか迷っているうちに目が覚めた。不思議な夢だった。

ここで、A 君は不思議な二つのものを示され、どちらかを選ばなければならない。その二つは、はっきりと見分けることが難しいほど良く似たものである。この、「ほとんど見分けがつかないほど良く似た二つのものから一つを選択する」というモチーフから、「双子の片割れの死」というテーマを連想することは、さほど唐突とは思われない。

双子のテーマは、神話、伝説に非常にしばしば認められる。双子座の神話のカストールとポルックスは、白鳥に姿を変えたゼウスと交わったレダの卵から生まれた双子の兄弟であるが、ゼウスを父とするポルックスは不死であるのに対して、カストールは人間を父と

しており、死すべき運命を持っている。二人は協力して色々な英雄的冒険をするが、最後にカストールは死に、不死のポルックスは双子の兄弟の死を嘆き悲しむ。これを哀れに思ったゼウスは、二人を一緒に天空の星座とすることにより、双子に永遠の命を与えるのである。

元型は、それ自体を体験する事も把握することもできないが、元型的なイメージが意識化される時、もともと元型が内包している二律背反性が、相いれない矛盾したものとして、意識には認識されるようになる。

例えば、永遠の少年の元型は、それ自体は本来良い物でも悪い物でもないが、それが意識化される過程で、分裂し、一方は全能で創造性に満ちた神的な少年イメージとなり、もう一方は幼児的で成長することなくいつまでも幼稚な無能な子供イメージに留まる。意識の成長の過程において、分裂した双子イメージの一方が死ぬことは、おそらく避けられないことなのであろう。このような例は、メソポタミア神話におけるギルガメシュとエンキドゥなど、枚挙にいとまがない。

萩尾望都の初期の作品の中で、この双子の少年の一方の死のテーマは、極めて魅力的に描かれている。短編である「11月のギムナジウム」では、別々に育ったエーリックとトーマの双子のうち、トーマがあっけなく死ぬことにより、エーリックは自身の出生の秘密を知ることになる。

ところが、このテーマを発展させた長編である「トーマの心臓」では、トーマは物語の最初にすでに高架橋から身を投げて自殺してしまっている。物語の主人公は、最終的にはトーマの死と、エーリックの愛によって救済される黒髪の少年ユリスモールである。しかし、ユリスモールは最終的には神学校へ進み、俗世間との関係を絶ってしまう。

萩尾望都の別の短編である「半神」では、このテーマがさらに深化された形で描かれている。この作品では、主人公はシャムの双子であり、一方は天真爛漫で、全てを与えられている美しい少女であり、もう一方は神経質で醜い少女である。しかし、肉体のつながりを切断される手術を受けた後、美しい少女は栄養摂取の道を絶たれ、やせ衰えて餓死してしまう。今は、栄養豊かな愛らしい少女となった、残された片割れは、自分の半身の犠牲的な死に深く涙し、失われた半身・半神を弔うのである。

あだちみつるの人気漫画作品である「タッチ」では、双子の兄弟、達也と和也が主人公である。弟の和也は、学業もスポーツも超一流で性格も一点の非もない優等生である。兄である達也はそれに比べると平凡な存在である。二人の幼なじみの南は、これも申し分のない美少女であるが、和也と達也の二人の好意の間で揺れる。しかし、和也は甲子園大会の決勝を目前にして、交通事故で急逝してしまう。ドラマの詳細は省略するが、この和也の死によって、達也と南は、それまでの優等生的な失感情的な生き方から自然な人間性を取り戻し、成長していくことが可能になるのである。

双子の片割れの死の物語は、必ずしも単純ではなく、色々なバリエーションが存在する。これは、普遍的な無意識層に属する元型的な心的内容が意識化される時に生じるドラマが

多様であることを意味する。失われた自らの半身の死を受け入れることができずに、天上の世界へ去って行ったポルックスの物語が、必ずしも我々人間の世界に生きるものにふさわしい物語であるとは思われない。それは無意識を人間的な意識に同化することの失敗のドラマであるかも知れない。

私達が人間界で生き続けるためには、自らの半身の死を、深い悲しみをもって受け入れることが必要なのかも知れない。

4. 追われる夢

原因不明の腹痛によって不登校に陥ったA君が、治療開始直後に語ってくれた夢である。

夢：暗い夜道を一人で走っている。後ろから何か追いかけて来るが、前しか見えず、ひたすら走っている。

これは印象的な夢である。何者かに追いかけられる夢というのは、印象夢としては頻度の高いものである。一般に、このような夢は恐怖を伴う悪夢であることが多い（だから印象に残る）。よくあるパターンの夢は以下のようなものである。

何か正体のわからない、恐ろしいものに追いかけている。何とか捕まらないように必死で逃げているのだが、足が重くていまにも追いつかれそうになる。しかし、何とか追いつかれる前に目が覚める。目が覚めると冷や汗をびっしょりとかいており、胸は動悸で高鳴っている。やれやれ、夢で良かった。追いつかれなくて良かったと思う。

元型心理学の論客であるギーゲリッヒは、このような夢の意味の解釈を、自我の立場からではなく、夢それ自身の立場から考えて見ることを勧めている。自我意識の立場からみれば、何か得体の知れない怪物のような存在が追いかけて来るのだから、逃げるのは当然だと感じる。逃げ仰せることができ、やれやれとほっとする。こんな嫌な夢は二度と見たく無いと思うし、もし見たとしたら、今度も逃げ延びなければと思う。

では、夢の立場から見たらどうなるだろうか。自我は追いかけられるから逃げるのだと主張する。しかし、夢の立場から言えば、自我が逃げるから追いかけるを得ないのである。自我が逃げれば逃げるほど、夢の追跡は激しくなる。しかし、もし自我が逃げることをやめて、振り向き、追いかけてくる者と対峙したら、何がおこるのであろうか。夢が望んでいるのはそういうことであるかも知れない。

はるか昔のことであるが、極めて多彩な身体症状に苦しめられている男子大学生B君から定期的に夢を聴取する機会があった。夢の中で、彼は常に何者かに追いかけていた。最初それは、正体不明の巨大な存在であり、彼は夢の中でありとあらゆる手段をとって逃走し、最後には空中に飛び上がることによってその追跡者から逃れるところで目が覚める

ということを繰り返していた。

継続的に夢を聴取するうちに、追跡と逃走のパターンは変わらないものの、しだいに追いかけるものが変化しはじめた。最初、それは正体不明の巨大な存在であったが、次には、刀を持った二人の僧侶となり、ついで、いつも彼が怖いと感じている大学教授になった。それでも彼は夢の中で常に逃げ、捕まる直前に目覚めてほっとするのであった。ついで、追跡者は、仲の良くない友人となり、その友人と夢の中で言い争いをするまでになった。そして、ついに、夢の中でB君を追いかけて来たやくざと彼は銃撃戦を展開し、B君は胸を銃弾で打ち抜かれて死んでしまう。

不思議なことに、夢の中でこの強烈な体験をした直後から、彼を悩ませていた多彩な身体症状はほぼ完全に消え失せてしまった。もちろん、これでB君の問題が全て解決したわけではなく、その後も展開があったのだがここではこれ以上述べない。

B君の例は、夢のなかで何者かに追いかけられるというテーマの一つの展開を示すものである。この例から、以下のような可能性が示唆される。夢の中での追跡者は、自我意識と何らかのコミュニケーションを求めて迫ってくる無意識の総体である。無意識の接近は通常自我に強い恐怖感を与えるので、自我意識はこれを避けて逃げようとする。すると無意識はさらに強い手段をもって自我に迫る必要が生じてくる。この接近の手段が、強烈な印象を持った夢であったり、通常の医学では説明不能の多彩な身体症状であったりするのではないだろうか。

B君の例では、自我が追跡する無意識につかまり、銃で撃ち殺されるという体験をする（これも一つの意識と無意識のコミュニケーションである）ことにより、身体症状はそれ以上必要がなくなり、消失したのであると解釈することが可能である。つまり、無意識がこちらを見ようとしないうちに自我意識にこちらを注目させるための信号の役割を、多彩な身体症状と悪夢が担っていたと考えられるのである。

5. UFOの夢

原因不明の腹痛によって不登校に陥ったA君が、治療開始後半年くらいたってから報告してくれた夢。

夢：家のベランダ（南側）にいと、空の三分の二位を占める大きなまぶしい光を放射状に放つ物体（本体は虹のように多色）が浮かんでいる。背景は真っ赤。UFOだと思い、怖くなって北側の窓の方へ行って空を見ると雨である。2階からではなく、高層ビルからの景色のようだった。怖くなり目が覚めた。

UFOの夢である。A君はこれに似た夢を、今までに数回以上見ているという。同じテーマ

を繰り返し夢に見るということは、そのテーマがA君の内界において重大な意味を持っており、かつそれに関する物語が完結していないことを表す。

さて、A君の夢に現れた UFO は、空の3分の2を占めるような巨大な虹色に変幻する円形の物体で、まばゆいばかりの光を放射状に放っている。この物体は夢の中でC君に強い畏怖の感情をいだかせている。ユングは、その著書のなかで、「UFO は現代人の心の中から自発的に出現する、全体性の象徴（自己）である」と述べている。このようなイメージは、人間の自我が偏った発達をして、無意識も含めた心全体のバランスが失われる危機が生じたとき、再び心の全体性を取り戻すために、その姿を現すとされている。

筆者はかつて、胃症状に強い固着を持ち、対人恐怖のために不登校に陥った大学生C君と5年にわたる心理療法の体験を持った。C君の心理療法が、長い経過ののちによりやく展開を迎え、元型的な夢が出現し、症状の劇的な軽快が起こった前後、彼は UFO を目撃した。彼は面接中に淡々とその体験を語り、筆者も淡々と聞いた。お互いにその話の真偽については興味がなかった。その体験の意味は言葉では表現されなくとも双方に理解されていたのである。

過食嘔吐を伴う神経性食思不振症の女子高校生Dさんが報告した夢に、以下のようなものがあつた。

夢：私の目の前に視野の3分の2以上を占める巨大な目が浮かんでいる。背景は真っ暗で、それ以外は何も見えない。その目は私をじっと見つめているようである。私はとても怖くなり、目が覚めたらびしょりと汗をかいていた。

Dさんはこの前後、体重減少の極期にあつた。この前後に彼女は以下のような体験を治療者に語ってくれた。Dさんは病棟のデイルームで、他の患者さんと1時間ほど話をし、自分のベッドにもどつた。すると同室の患者さんが、「さっきはいったいどうしたの？」と尋ねる。何のことか分からないので問い返すと、「さっき、あなたは突然部屋に入ってきて、自分のベッドの上で体操をして、まわりの人が話しかけても何も答えず、また出て行ってしまった。いつもの様子と違つたけれど、いったいどうしたの？」と言われた。Dさんはたいへんびっくりした。彼女にはそのような行動をとつた記憶が全く無いのだ。そこで、それまでデイルームで話していた別の患者を連れて来て尋ねると、その時間帯には彼女とまちががなく一緒にいたと証言する。結局何が何やら分からず、「それでは、さっきのは幽霊だったのではないか」ということになつた。とても怖く感じて、Eさんはその晩は一人では寝付けなかつた。

このエピソードは現実にはあり得ないことで、もし合理的に説明しようとするれば、誰かが嘘をついているか、勘違いしているかとはしか考えられない。しかし、これを彼女の心理的側面から考えると、この体験は一種の解離現象を表し、周囲がそれに巻き込まれている

可能性が考えられる。現象学的には、Dさんは「二重身」の体験をしたことになる。

このような体験が生じる時には、主体と客体の区別が曖昧になり、自と他の相互浸透が起こる。これは、意識水準の観点からみれば、あきらかな水準の低下状態と考えられ、比喩的には、自己の元型に支配されている状況と考えられる。実際の経過では、この頃より、突然の食欲増加が出現し、その後しばらく紆余曲折を経るが、結局約1年の経過で神経性食思不振症の状況は改善し、Eさんは大学へ進学した。ここで、Dさんが夢の中で直面した「暗闇の中の巨大な目」は、A君の夢の「虹色にきらめく巨大なUF0」と、共通性を有するイメージであると思われる。

さて、A君がUF0と出会うとき、彼は建物の上の階にいる。そこは2階であるはずなのだが、もっとはるかに高い高層ビルのようなものもある。建物は一般に心の構造を表し、高い場所ほど精神性が高いと考えられる。元来UF0は遥かなる宇宙すなわち上方から飛来するものであるから、どちらかという精神性、男性性、意識性の側面をより強調するものと思われる。あまりにも高すぎる精神性の飛来は、時に、自我にとって破壊的な作用をもたらす。統合失調症患者の妄想にしばしばUF0が登場するのも、この理由によると思われる。

南側の窓からUF0と対面したA君は、反対側の北の窓から、今度は降り注ぐ雨を見る。雨は天と地を結ぶ無意識のエネルギーの流れであり、地上に降り注ぐ雨で象徴されるエネルギーの流れは、自我がUF0によって、さらなる高みに連れ去られる危険性を補償しているように思われる。これらの夢は、以前から繰り返し見られていたものであることから、このような自己の象徴の付置は、A君の問題が顕在化する以前よりすでに存在していたのだろう。

精神科医の思うこと⑫

「予診票」

松村 奈奈子

病院を初めて受診するとき、受付で必ず記入させられる予診票。

困っている症状やこれまでの経過などを書く予診票、だれでも一度は記入したが事あると思います。精神科でも病院ごとにいろんな書式がありますが、症状以外に、家族の構成や精神科の受診歴などをたずねる項目などもあり、精神科は細かく聞くタイプも多いです。

私はできるだけ余白の多いタイプが好きです。フリースペースを設けることで、さらに患者さんの事がわかる気がするからです。

そして、できるだけ本人に記入してもらうよう受付に指示し、診察前に「熟読」します。予診票を見ただけである程度、職業やお人柄まで、会う前に想像できるからです。読みながら、どう診察をどう進めるかをイメージしたりします。

そう、そんな感じで「予診票」には思う事があるので、今回のテーマは予診票。

たとえば、予診票の余白いっぱい詳細に箇条書きの文章を書きこむ患者さん。元校長先生や税理士や経理の人に多かったです。きちんとした文章できちんと伝えなくては

いけないって使命をおびたお仕事なんですね。

そして「看護婦さんに見られたくないから書きませんっ」とほぼ白紙で出す人。これは、身近な人に裏切られたりして、人を信じるのが不器用な患者さんの特徴かな。私に対してもなんだか身構えて診察が始まります。

会社でもやり手のエリートサラリーマンは、予診票の記入も上手。こちらに理解しやすいようにコンパクトに記入して、診察の中で上手に詳細を補足されます。ああこんな感じで、仕事も上手にこなしてるんだなって思わせてくれます。

見るのは文章の書き方や内容ですが、筆圧や文字サイズ、バランスなども含めて、患者さんを表しているなあといつも思います。もちろん、うつ病の患者さんは、なんとなく元気のない予診票です。

でも、1番気を付けているのは、予診票の漢字の使い方や文章の構成具合から、ある程度の知的能力も推測する事です。もちろん診察での質問の理解や返答の内容でも再確認しますが、患者さんにどんな言葉を使って説明したら一番わかってもらえるかな？と考えつつ予診票を見ています。

それはむかしむかし、痛感させられるエピソードをいくつか聞いたからです。糖尿病専門内科の大学の先輩から「農家の奥さんなんだけど、なんと説明しても理解してくれない。いつも「ハイハイ」と笑顔で返事するけど・・・いったいなんでいつも血糖コントロールが悪いのか」「ほとんど困ってる」とお悩み相談。また、小児科の先生が「なんと説明しても夜間救急外来に頻回に子どもを連れて来る夫婦がいて困る。別に救急で受診しなくていいレベルなのに」とちょっと怒った口調で話しているのも時々聞きました。

いずれも「もしかしたら、軽い知的障害の患者さんじゃないかな」って話しました。「いやいや、農作業はしてるみたい」「子育てしているのに？」と逆に質問されちゃいましたが、療育手帳の交付基準である知的障害の判定は、皆さんご存知のとおり、12歳くらいの理解能力が困難な場合を基準としています。社会では障害の意識はなく生活している人もおられます。

逆の立場で、診察すると見えてくるものがあります。軽度知的障害の患者さんの診察中に「お薬の飲み忘れある？」と聞くと「はい、いつも薬は残っています」と笑って話し「内科の先生はその事を知ってる？」と聞くと、たいがい「言ってませーん」てな会話になる事もあります。それではお薬が十分効かないですよ。なかなか薬の飲み忘れの怖さを理解するのは難しいところもあるのかもしれない。

また、子育て中の頑張ってる知的障害のカップルには、小児科の救急に「よく行く？」「小児科の先生に怒られたりしてない？」と聞いてみることにしています。「だって不安なんで、つい病院に相談に行っちゃいます」「時々、先生に怒られたりしてます」と夫婦は笑って答えます。子どもの病気はよくわからないし、とりあえず病院に行っちゃいたくなりますよね。

もちろん、いずれもその後はヘルパーさんや支援センターに医療機関との間に入って助けてもらうと、安定するのですが、現場ではいまでもよく体験するエピソードです。

そして私自身も、外来診療の中で予診票で「はっ」とさせられる事はよくあります。中学卒業後に引きこもりになっている男の子。どの職場でも周囲に適応できず、職を転々としてうつ状態になった男性。いずれも予診票の文章はまとまりなく、文字は平仮名が中心で誤字もあります。「もしかしたら知的障害があるかも」と発達検査をして

もらって「おー、そうだったか」となりました。短時間の診察で話しているだけでは、軽度の知的障害は見逃してしまいますが、文章や文字使いで気づかされる事は多いです。彼らもまた、予診票が無ければ私も見逃していたかもしれません。

そんな私が大事に思う予診票ですが、数年前から内科の先生などから「予診票をタブレットにしたよ。電子カルテに転送出来て便利」「本当のペーパーレスだよ」と自慢げに話しているのを聞くようになりました。むむっ、心配。テキストにタブレットの回答ボタンを押して、受診してしまう患者さんがいるんじゃないかと。それでは患者さんにどんな言葉で説明したらよいか、わからないんじゃないかと思います。

IT化の進む世の中、その中で見えなくなってしまうものがあるのでは！と、杞憂するオバサンです。

「厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください」

ケアプランの価値 IV

馬渡 徳子

「厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください」

この言葉を遺して下さった 31 年のお付き合いの患者さんを、先日お看取りさせて戴いた。

実母と夫と本人の三人のケアマネジャーを担当させて戴いたことから、住宅改修も三回しており、コンセントの位置まで記憶している。

実母と夫を看取られた後、私にこんなことを言われた。「私が死んだら、お花は要らない。おそらく、友人たちが沢山持ってきてくれるから。あなたには、夫と私の大好きの一口珈琲羊羹

をお供えして欲しい。約束してね。」

患者さんとは、子どもから高齢者までの障がいのある人に列車での旅行を実現する「石川県にひまわり号を走らせる会」で、出逢った。私は、ソーシャルワーカーとして、医師や看護師、リハビリ職と医療班として、付き添っていた。当初は、県内、そのうちに北信越になり、列車は飛行機となり、ディズニーランドや沖縄、北海道、ハワイにも行った。

患者さんは、地域と職域での顔の広さを活かして、毎年沢山の支援金とボランティアを集め、新聞に投稿して、この活動への支援層を拡げていかれ

ることに尽力された。

納得のいかないことには、毅然として立ち向かい、患者仲間の行政不服審査請求の代理人の一人として、何件も闘い、「認容」を勝ち取っておられる。

当時の私の勤務先の病院で、今後更に、採算の合わなくなることが見込まれる「プールリハビリ」をどう存続するかで、病院管理部と患者会＋患者会担当職員が激しく対立した時期があった。全国的にも、プールリハビリは珍しく、県内の病院には2つしかなかった。学会でも医師を始めとする多職種が、その効果を様々な観点から実績報告をしてきたことから、何とか工夫して残せる方法はないかと、患者会役員と患者会担当職員で、県内外のリサーチを行い、結果として「短時間の通所リハビリでのプールリハビリ」という形をとり、介護保険制度事業とし、存続することに決まった。

経営者である病院管理部に向けて、患者さんが言われた言葉が、「皆さんの様に、トップに立つ方だからこそ、どうかこれからも、『厳しいことを言ってくれる人を、大切にしてください』それは、私たち患者さんです。」だった。

こんな言葉を言って下さる患者さんに出逢えたこと、そして、病院経営において、民主的な組織運営体制を継続してきた組織を、心より誇りに思う。

患者さんのケアプランには、サービス計画書には、ご要望通りに「みんなの財産であるプールリハビリに、90歳まで通い続けることができるように体調を整えたい。」と記載した。

あと、5年届かなかったが、きっと天国で、先に逝かれた患者会の方々と賑やかに談笑しながら、プールリハビリをしておられると思う。

合掌

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文：柳たかを

ヨッさんの思い出



僕には兄が2人、姉が1人いる、次兄・ヨッさん(芳道・ヨシミチ)は昭和16年生まれで僕の8歳年上だ。

ヨッさんは手先が器用で好奇心旺盛、遊びのアイデアが豊富、幼児の僕には遊びの天才に思えた。

我が家は大阪東成区内の某交差点近く木造長屋がひしめく幸運にも空襲で焼けなかった地域、あたりは雨が降ると水溜りだらけになるデコボコ未舗装の道、草伸び放題の空き地があちこちにあった。

自宅近くの古い街道に沿って流れていた小川、初夏の夕方には小川沿いの柳並木のシルエットを背景にポオーッと青白い光を発し蛍が飛び交っていたのを覚えている。

昭和の高度経済成長以前で、この小川や別の用水路で鮒やドジョウ・ザリガニ・水性昆虫を普通に見れた。

都会にも小さな自然がまだまだ残っており、好奇心の塊のヨッさんのような少年には、遊びのネタに不自由する事はなかったと思う。

ヨッさんの使う遊び道具はバリエーション豊富、弟の僕には何に使うのか想像出来ない物も珍しくなかった。その一つが「とりもち」、釣竿に似た先端の細い竹竿の先に餅状の粘着物を巻きつけた物が「とりもち竿」、小動物や昆虫を捕獲するためのツールだ。

「さわったらあかんぜ、ベタベタくっついて取れんようになる」先端が玄関壁に接触しないよう立て掛け、興味津々にじり寄る小さな弟に警告して去る。

我が幼い脳みそにも、不用意に触れると「あちこちベタベタくっつき」「取れんようになる」という修羅場が想像でき、両手を引っ込めたまま竹竿先端の餅状の異物を凝視した。

実際にとりもち竿での虫などの捕獲は見てないが、そのシーンを一人想像し興奮していた。

ヨッさんと2歳上の長男・タケやん(武彦・タケヒコ)は戦中生まれで、後年僕は母親から空襲の時に幼い2人の手を引き近くの公園に掘られた共同防空壕に命からがら転がり込んだ話を繰り返し聞かされた。

特にヨッさんは避難するよりも興味がある方に行ってしまうので、「握ったヨッさんの手は絶対離されへん」と母は思っていたそうだ。

小学校時代の毎夏、ヨッさんがはまっていたというトンボ釣り遊び「ホイラン」の話は、オスのオニヤンマがメスを求める神秘的な恋の話に魅了され強く印象に残っている。

マンガを描く僕が「昭和の思い出遊び」をHP連載していた時、話を思い出し、孫のいる次兄に改めて取材し直し、「東成区の昭和・ホイラン」として短編に描いた。

本誌に7回の短期連載で紹介をさせて頂いたものです。オトリのメス(オニヤンマのメス・ラー)の胴体に括りつける長い糸や両端にオモリを繋ぎ、空に放り上げる捕獲器で糸がヨレて絡まないように木綿の糸ではなく、魚釣りのテグスを使ったこと、両端の2つのオモリには小石ではなく古い引戸の戸車から回収したベアリング(鉄球)が小さくてオニヤンマを驚かさなから良いなど、遊んだ経験者の話に引き込まれたものだ。

歳を重ねても童心いっぱいであちこち歴史探訪などに出かけていたと聞く。

2018年の春、首にできた腫瘍で入院した時に「勧められても手術はせん痛みおさえる処置だけしてもらってる」と見舞いに行った弟に笑顔で明るく言い、その2ヶ月後の朝自宅で眠るように逝った、77歳。

ヨッさんの笑顔、わが記憶に刻み忘れないようにしたい。

記 2019年2月

やぶにらみ記

東成区の昭和(88)



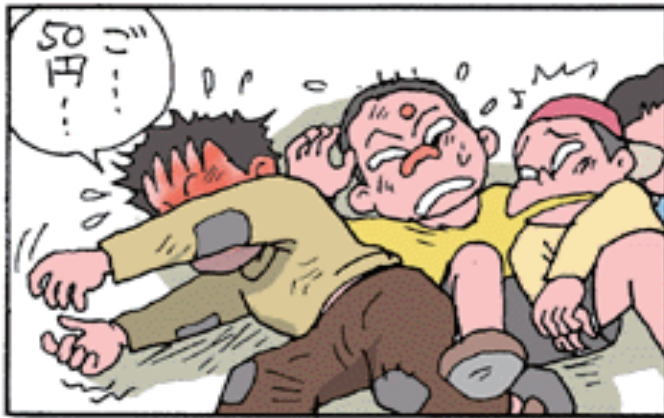
やぶにらみ記

東成区の昭和(89)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(90)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(91)



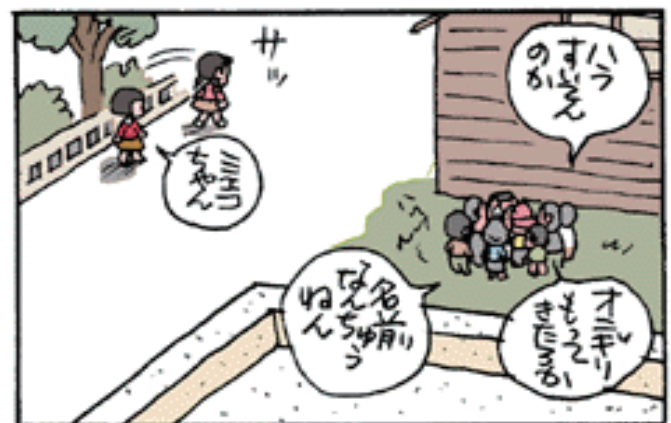
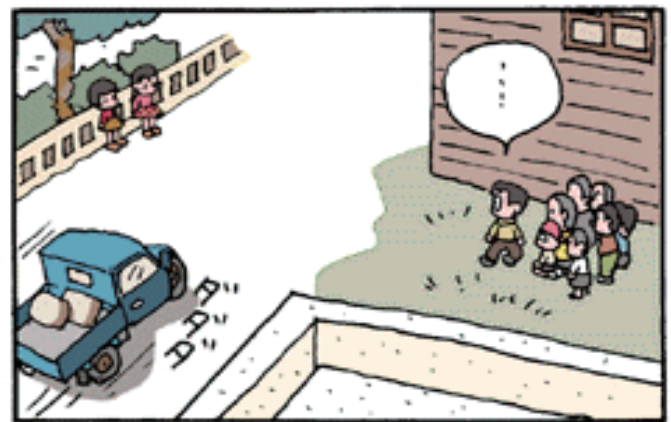
やぶにらみ日記

東成区の昭和(92)



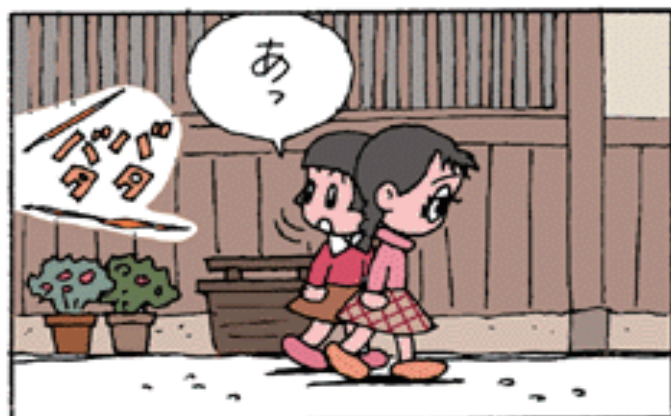
やぶにらみ日記

東成区の昭和(93)



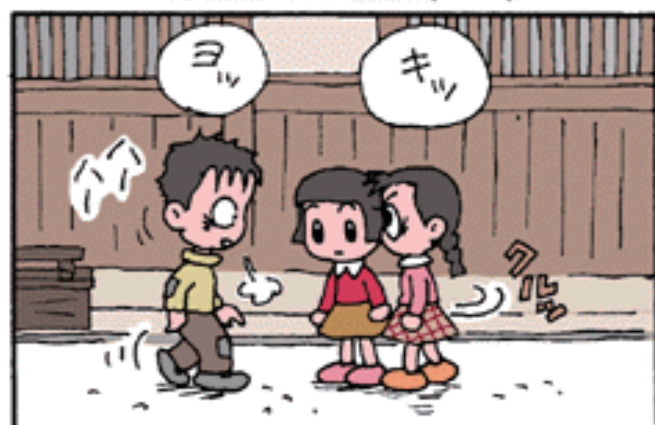
やぶにらみ日記

東成区の昭和(94)



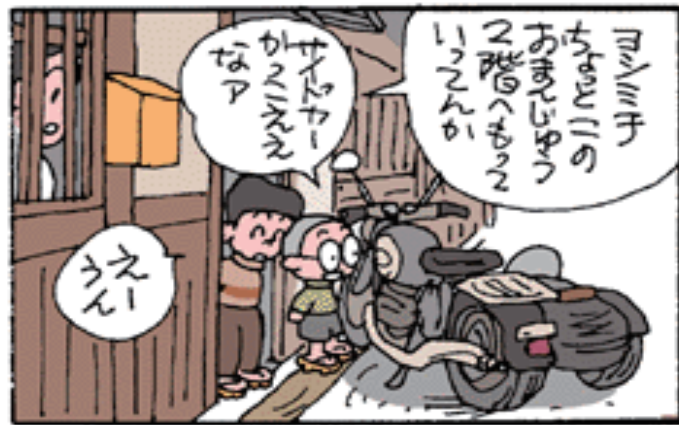
やぶにらみ日記

東成区の昭和(95)



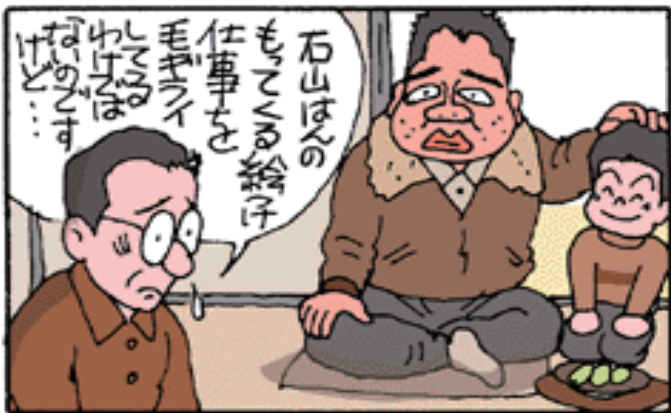
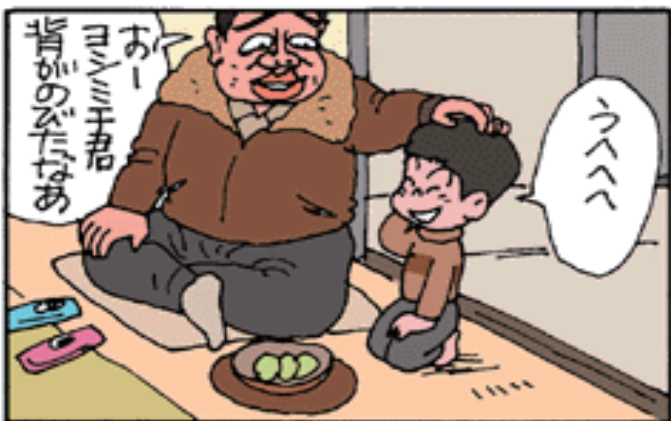
やぶにらみ日記

東成区の昭和(98)



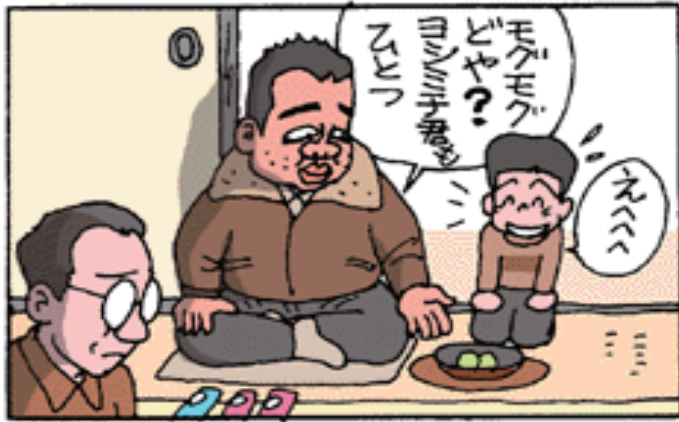
やぶにらみ日記

東成区の昭和(99)



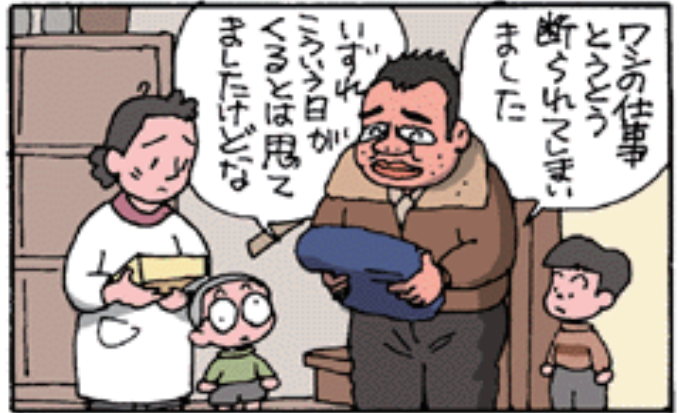
やぶにらみ日記

東成区の昭和(100)



やぶにらみ日記

東成区の昭和(101)





10 社会福祉と親密圏をめぐる

(若干の補足)

平成 31 年 1 月 30 日の午後、神奈川県立保健福祉大学での最終講義を行った。(実際には平成 31 年 4 月以降も幾つかの科目で講義をするのだが、身分的には 3 月末で定年退官となる。)すべての講義が終わったあとの、通常の授業とは異なる形の最終講義だった。

社会福祉との出会い、神奈川県立保健福祉大学創設時のこと、介護福祉を含む対人援助と親密圏の 3 点について、来てくれた多くの教職員や卒業生の皆さんに向けて話をした。また、この数年間、対人援助と親密圏について考えてきたことを、『ヒューマンサービス研究』の増刊号としてまとめ、来てくださった皆さんにお配りした。もともとは、本にすることを前提として整理してきたのだが、残念ながら出版するところまでは至らなかった。しかし、今の私に出来る範

囲のこととして、対人援助、ヒューマンサービスについて考えてきたことを、それなりの形にまとめられたことで、少し安堵しているところである。

特別に長いわけではないが新書版で一冊分程度の分量の『ヒューマンサービス研究』増刊号にすぐに目を通してくれた友人が何人かいて、それなりに面白かったと言ってくれた。しかし書いた者の真意は伝わり切っていないようである。かなり丁寧に親密圏を巡る様々な考察を述べ、慎重に議論を重ねたつもりなのだが、ややバツサリと切った感想をいただくことが多かった。書き手の力量のなさももちろん大きな問題なのだが、親密圏のことを理解しやすい形にしたうえで適切に伝えることの難しさを改めて認識させられた。

例えば、社会参加の形態としての仕事をするということについて、私自身はこれまであまり重きを置いて論じてきていない。むしろ働くことを積極的に評価する立場をとらな

いできた。お世話になった横田弘や、横塚晃一をはじめとする青い芝の会神奈川県連合会の関係者は、脳性マヒの人間が働くことについて、多くの課題を提起し相対化を図ってきた。横塚は、排泄の介助のためにお尻を持ち上げることも重度障害者にとっては労働だとまで主張した。それをそのまま肯定するものではないが、少なくとも重度の障害者に対し一般的な意味での労働を義務として課すような社会のあり方は課題があると、私は考えている。

労働には幾つかの意味がある。他者に対する自らの行為が一定の価値をもつことを確認するという意味、他者に対して自らの有用性を確認するという意味がある。この場合については、仕事という形態をとらなくても、人々の中に存在するということが自体が、社会の中で一定の意味を形成していると考えられることができる。

また、労働を通して生活を維持するための収入を得るといふことがある。人が生きていくために必要なもの、食ふこと、着ること、住むこと、他者と交流することなどは多くの場合、労働の対価としての収入がこれを確保するための原資となる。また、ある意味で肥大化した経済の仕組みが、多くの人に労働に参加することでこうした原資を多く確保することを求めるようになっている。確かに、労働の対価としての収入や資産は、多くの人にとって、ないよりもあった方が望ましい。しかし本当に収入や資産は、人々が人間らしく生きていくために本当に必要なことなのだろうか。もしそうだとしたら、生活保護の対象者は、そもそも生きていくために必要なものを得ることができないものということになる。高齢になって仕

事をリタイアした人も同じことである。そうした人の価値を否定し、社会の側が働いて収入を得ることのみ価値を位置づけるのは、どこかがゆがんでいる。

むしろ、人は人との関係性の中で喜びを得る存在であると考え、そうした喜びを得にくい状況の一つに貧困があり、介護の必要性があると考え得ることが適当であろう。

人としての喜びの本質が存在する空間を親密圏とし、親密圏内部や複数の親密圏の間で発生するコンフリクトをコントロールするために公共圏が存在するとすることが出来る。このように考えれば、人々が様々な形で親密圏に参加することへの支援は、対人援助の対象として位置付ける必要がある。一方で公共圏への参加は、実現することがその当事者にとって望ましいことは言うまでもない。公共圏への参加が実現するように支援することには意味がある。しかしその先の収入を得ることや、社会的成功に伴い集団の中で有用性を感じることは、全ての場合に保証されるものではないだろう。

もう二つだけ親密圏に関して付け加えておきたい。それは、親密圏における倫理と論理の必要性、公共圏と親密圏をつなぐ言説の必要性である。

親密圏における営みがゆがみ始めたのが、現代社会ではないだろうか。親密圏のなかに様々なコンフリクトが生じるようになってきた。このコンフリクトを解決するのは、基本的には公共圏の役割なのだが、全てを公共圏に委ねることが適当かどうか、公共圏の論理と倫理による親密圏への介入を一定のところまで歯止めするためには、親密圏の中での倫理と論理が必要なのではないだろうか。フェミニズムの限界がここにある。

親密な関係性のもとでの男女の社会的非対称な差異について、公共圏のサイドから介入していく方法での対応には限界があると思われる。親密圏の内部のことを、親密圏特有の倫理と論理で整理する取り組みが必要なのではないだろうか。

さらに、公共圏での議論は多くの場合に親密圏の内情を考慮しない。親密圏内部のコンフリクト、親密圏間のコンフリクトを制御することが目的であるにもかかわらず、公共圏での論理と倫理が親密圏に過剰な影響を与えてしまう。親密圏の内部に影響を与える公共圏における議論について、親密圏との関係性を想起する必要がある。この想起がない中での公共圏での議論は、時に目的と手段の逆転をもたらしかねないと考えられる。

介護福祉に関する議論をつきつめていくと、介護福祉が成立する空間としての親密圏に関する考察が求められる。元々は一組の男女の関係からスタートし、子どもを含めた家族としての親密圏が誕生する。さらにギデンズや齊藤純一などによって親密圏の概念が拡大していく。人と人の遊びを伴う関係性まで広がってきたのは、人が単純に古典的な親密圏だけでは生きづらくなってきたことによる。私たちは、自ら選択した複数の様々な親密圏に関わることができる環境にある。もともとの血縁や地縁をベースとした親密圏だけではなく、それぞれの人が主体的な選択のもとで親密な関係を形成できるようになってきた。

しかし、人として生きていくための基本的なニーズを自らの活動で賄うことができなくなったとき、他者の力を借りてこの基

本的なニーズを充足しつつ他者との親密な関係を結ぶことになる。そのサポートを担う専門職が1987年にスタートした「介護福祉士」なのである。

町家合宿 in 京都 Vol.10

～参加の理由と不安について～

山下桂永子

京都にホームステイ 2007 感想文

私は、今回のホームステイに参加するかすごく迷っていました。実は京都駅から当日 Y 先生に電話したとき、体調があまり良くなかったこともあり、断るつもりでした。

自分でもそのとき何で断らなかったのか不思議でしたが、去年、本当に楽しくて、去年会った人たちにもまた絶対会いたかったし、本当はどうしても行きたかったんだと思います。

行くとはじめものすごく緊張して、去年と同じくこんな 2泊3日も無理やって一と思ってましたが、知らん間に大丈夫でした。

初日の夜ごはんはあまり食べれなかったけど、I さんが持ってきてくれたおぜんざい(?) がすごくおいしかったです。

去年は泊まれたけど、今年は泊まれませんでした。泊まれんことをみんなに言ったとき R ちゃんが「えーっ恋バナできひんやん。」って言ってくれたのが、嬉しかったし、少し面白かったです。

来年は泊まりたいと思ってます。(出来るかは別問題ですよっ。) 良い話が出来ればと良いなと思います (笑)

この文章は当時、高校 1 年生の A さんが書いてくれた 2 度目の町家合宿 (当時は町家合宿のことを町家ホームステイと呼んでいた) の感想文の冒頭部分である。女の子らしい、少し丸文字の、それでいて丁寧で読みやすい文章が、A4 の感想文用紙の表裏に上から下まで 1500 文字を超える長文でみっちり書かれていた。



☆A さんについて

A さんと私は、ある中学校の校内別室で出会った。その時 A さんは中学校 3 年生。小学校低学年から不登校で、普段は市の適応指導教室に通っているという。少し小柄で細身。切れ長の目にボブの髪型で、おとなしい雰囲気だが、話をしてみると、とても知的でしっかりしていて芯の通った子だなという印象だった。A さんは、学校には週に 1 回来るかどうかであったし、私も週に 1 回その中学校に行く学生ボランティアの立場だったので、私と A さんは数回会っただけで、話をじっくりしたこともなかったのだが、町家合宿の案内を渡したところ、来てくれることになった。

☆A さんが町家合宿に来た理由

今になって思えば、知り合いと言え、学校で何度か会ってちょっと話をした私がいるぐらいで、他に関係性が深い人がいるわけでもないのによく参加しようと思ってくれたものだと思う。1 年目に聞いた参加理由はなかなかユニークである。「いろんな大学生のボランティアの人と話がしてみたかった」とのことだった。また、保護者から聞いたところによると、「知ってる人がたくさんいるよりはいいっていう感じ」とも言っていたそうである。当時の私はその理由を聞いて、「へー、そんな理由もあるんだなあ」というぐらいにしかなかったが、この 10 数年の町家合宿参加者の中で、この理由を挙げた参加者は他にいなかったように思うので、感想文を改めて読んでみた今、彼女のユニークさとともに、想像以上の不安を抱えながらも町家合宿に参加してくれた勇気に感心する次第である。

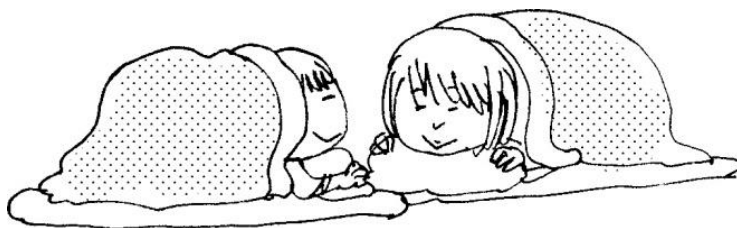
☆A さん 1 年目の町家合宿

そんな大学生のボランティアと話したいという理由で参加した 1 年目の町家合宿での A さんは、当初見るからに不安と緊張のかたまりだった。観光や大学見学のときに話をふれば、多少は笑顔で応えてくれるものの、全体的に表情も硬く、町家でぐったりしていることも多かった。目的だったはずのボランティアと話すどころの騒ぎではない。A さんは、じっと何かに耐えるように静かに私のそばにいるのがやっとなような状況だった。寝る部屋は私と同じがいいと A さんが希望したので、布団を並べて横になってはいたが、A さんは少なくとも初日はほぼ一睡もしていなかったと思う。夜中に何度かそっと A さんの様子を窺うと、時々 A さんと私は目があって「先生は寝ないの？」とささやくように A さんが聞いてきた。「私は寝なくても全然平気なんだよー」と強がりをする私。若かったから言えたと思えない、今の私なら絶対に嘘でも言えない台詞である。私自身にとっても初めての町家合宿であったので、余裕がなかったことや A さんが眠れていないのに自分が寝るのもなんだか申し訳ないなという思いにも駆られ、不安な 2 人はまんじりともせず朝を迎えたのである。

その後も A さんは不安からか、常に私のそばから離れることはなかったが、2 日目の午後ぐらいからは徐々に私以外の他のスタッフとも話ができるようになり、緊張はしながら

も笑顔が増えてきた。

古着交換では、普段はボーイッシュな姿の A さんが、白いワンピースと麦わら帽子を身につけて、見事なイメージチェンジを果たし、他の参加者や私も含めたスタッフを魅了していた。最終日の A さんは、ほとんど眠れていない疲れはありありと見てとれたが、緊張感はなく、別れのときにはさみしさも感じさせるなど、町家合宿自体は楽しんでいたようで、1 年目の感想文にも「まだいたい」「またみんなで行きたい」「もっといたい」という、そんな気持ちが書かれていた。



☆A さん 2 年目の町家合宿まで

そんな 1 回目の町家合宿後、A さんと私はほとんど顔を合わすことはなく、A さんは中学校を卒業し、高校に進学していった。そのため A さんの様子もわからぬまま、次の年に半ば期待せずに郵送で町家合宿の案内を送ったのだが、思いもかけず、返事があった。参加の気持ちがあるが、迷っているので返事ができないとのことだった。そこで私からは「行くかもしれない気持ちだけ教えてもらっとけば、あとは前日でも当日でも連絡くれたらいいよ」などと伝えた。A さんが連絡をくれただけでも、しかも町家合宿にまた参加したい気持ちがあると伝えてくれただけで、私にとっては嬉しい気持ちだった。そんなのんきな私に比べると、感想文にあるように A さんは 2 回目の町家合宿参加に際しても大きな不安を抱えていたようである。

☆A さんが 2 度目も町家合宿に来れた理由

断ろうと思って電話した A さんが、それでも町家合宿に参加してくれた理由はなんだったのだろうか。

感想文によると「去年本当に楽しかったし、去年会った人にまた会いたい」という気持ちに押されての参加だった。1 年目の参加理由は「ボランティアの人と話したい」とあったし、感想文でも「またみんなで行きたい」とあった。つまり、A さんにとっては、人と会って話をするということが動機付けになったということだと思ふ。それは親しい人である必要はなく、その人と会う、話すなど関わることに限らず、何か目的や期待があれば、それは A さんの町家合宿参加への、いろいろな不安を超えうる力になっていたのかもしれないと思ふ。

☆不安を抱えること

何かをしたかったり行きたかったりするけれど、実際にはしない、行かないということや、昨日は行ける気がしていたけど、今日は行けない気持ちになるということは、どんな人にでもあることだが、特に不登校やひきこもりの子にとっては、日常的に起きていることかもしれないと思う。毎日毎日学校に行かなきゃ、行きたい、行ける、と思っていても、実際には行けない、行かないことが積み重なって、そうこうしているうちに自信もなくなって「行く」とも「行かない」とも言えなくなっていく。普段、不登校の子と関わっていて、「行きたいとは思っているけど本当に行けるかどうか自信がない」という言葉を時折聞くことがある。そこには予定が立てられない、見通しの立たない不安に圧倒されている様子がうかがえる。

☆自己決定で不安を軽減する

町家合宿の宿はオーナーのご厚意で、ほぼ毎年一軒全てを貸し切っているのだから、泊まる人数が多少予定と違ってても特に問題にはならない。参加者が多少増減することで狂うような予定はないし、そもそも予定がないのが町家合宿である（活動費の赤字具合を気にするのは私の度量の小ささでしかない）。まずは予定が立っていないことを OK にして、そこをスタートラインにしているわけである。

一方、予定がないことは不安にもつながる。予定がないことは、自由ではあるが、目的や欲求がなければ何をしたいかわからない状態でもある。予定が立てにくいなら、立てやすくするためにどうすればよいのだろうか。

町家合宿においてはその都度、自己決定を迫るわけだが、まず予定が立っていないけれど、立てないといけないという不安と葛藤が最初に設定されており、参加者それぞれ自分の目的や欲求を意識してもらい、かつそれを不安と葛藤の解消のための具体的な選択肢に落とし込むという作業をする。

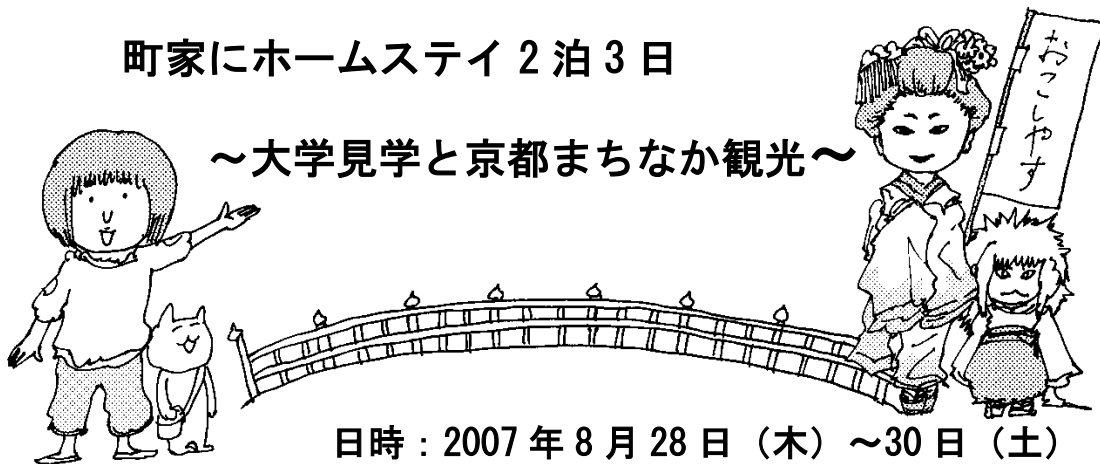
そんな中で、A さんの場合は、見通しの立たない不安に最初は圧倒されてしまっていたようだが、学生ボランティアと話をするという目的は、1 年目から徐々に実現し、そして 2 年目には、私とは別行動で他のスタッフと行動できるようになるまでに達成されることになるのである。





町家にホームステイ 2泊3日

～大学見学と京都まちなか観光～



日時：2007年8月28日（木）～30日（土）



京都市内に来たことはありますか？観光？買い物？京都にはたくさんの大学や専門学校があり、学生の町と言われています。とはいえ、学校の中を見る機会あまりはないですよね。他にも京都はお寺や神社だけでなく、カフェやアートギャラリーなどもたくさんあり、まだまだ見所がいっぱい。そんな「まちなか」を散策します。大学を見学したり、カフェや雑貨屋さん、市場をのぞいたり、いろんなモノを作ったり…。

まだ見たことのない京都を一緒に体験してみませんか？

例えばこんな組み合わせ…

「立命館大学と金閣寺や北野天満宮」

「同志社大学と京都御苑」

「京都大学と銀閣寺観光」などなど…。



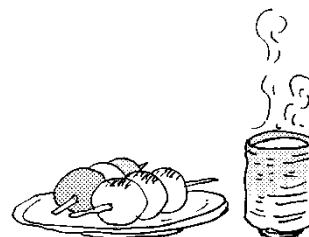
1日目の予定は事前に決めますが、2日目の予定は現地でみんなで話し合います。

やりたいこと、行ってみたい所など希望をどんどん出してください。

京都市内はバスが1日500円で乗り放題なのでいろんなところに短時間で移動出来ます。大学と観光地の間が歩いていける距離なのも京都ならではの。大学の食堂や近くのカフェでのんびりお昼ご飯なんていうのもいいですね。

詳細案内をご希望の方は下記までご連絡ください。

お問い合わせ先 ○○○○





ねこ開業する。社会的企業というものについて

私ごとですが、「猫専門のお手伝い屋さん」を開業しました（してました）。

① **ねこから目線。**
猫専門のお手伝い屋さん

2018年の3月で立命館を退職し、失業保険をもらってぬくぬくしながら、毎日保護猫活動をしたり、自分の興味関心があるところに出向いたりする充実した生活をしばらく送っていました。定職につかず猫のを中心に動いている生活を「ノラ猫生活」と呼んだりしていました。ただ、失業保険は7月であつという間に終わり、生活費をなんとかしなければいけなくなりました。でも、常勤になると週に2日くらいしか猫の活動ができないんです（当たり前ですが）。2日しか自由時間が無いと、10件相談がきても2件くらいしか受けられません。猫がいて、手伝ってほしい人がいて、手伝いたい自分があるのに、手伝う時間が無いというのは本当にもどかしいものでした。

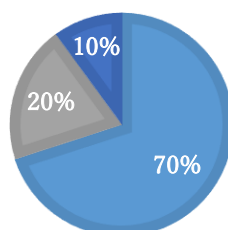
そこで、はじめはノラ猫生活中に、ある動物病院に寄せられる相談で、これまで動物病院としては断ってきた相談を「時給100円から好きに設定してください」という形で私が個人的に引き受けるということをやってみました。

依頼の内容は、「庭で餌付けしているノラ猫に不妊手術をしたいから捕獲して不妊手術を受けさせてから連れて帰ってきてほしい」とか「家から脱走してしまった猫を捕まえてほしい」とか「母親が亡くなり、飼っていた猫2匹を自分の家に連れて帰ろうと思ったが、母にしかなくついていないため捕まらない」など、様々でした。そうやって色んな相談に対応していく中で、見えてきたのが、動物病院に相談してくる方の7割ぐらいは、一度きり、自分がたまたま関わった猫（例えば自分のお庭に住み着いた猫、たまたま拾った子

猫、身内が残したペット)だけを、有料でいいから、今すぐちゃんとなんとかしてあげたいと思っている方だとわかりました。残りの2割はボランティアさん、残りの1割は生活保護と多頭飼育などの貧困ケースでした。

相談の割合

■一般の人 ■ボランティア ■要福祉支援ケース



※あくまで小池調べの感覚統計です

ということは、今まで1から10までボランティアさん頼みだった猫の相談のうち、サービスさえあれば、回る部分が7割もあるということなんだと理解しました。なので、1割の貧困ケースは従来通り人もねこも一緒に支援プロジェクトのNPOで完全無料で関わることにして、2割のボランティアさんとは助け合い(あるいはお互い頑張りましょうのスタンスで)、7割の層に対して有料のお手伝いサービスを作ることになりました。

そこで、できたのが、「猫専門のお手伝い屋さん」屋号は「猫から目線。」

料金形態は、大手便利屋さんをまるパクリしつつ、お仕事を受ける条件は「間接的にでも猫にメリットがあると考えられること」としました。2018年8月下旬に開業いたしました。当初は子どもの一時保護シェルターのバイトなどと平行してやっていたのですが、少しずつ軌道に乗って、現在はお手伝い屋さん一本で生きています。

人もねこも一緒に支援プロジェクトが所属するNPOの理事長でもあり、私の大学院生時代のクラスターの先生でもある村本先生に報告したところ、「それって社会的企業だね！いいね！」と言っただき、そんな言葉は初めて聞きましたが、ちょっと嬉しかったです。

※調べてみました。

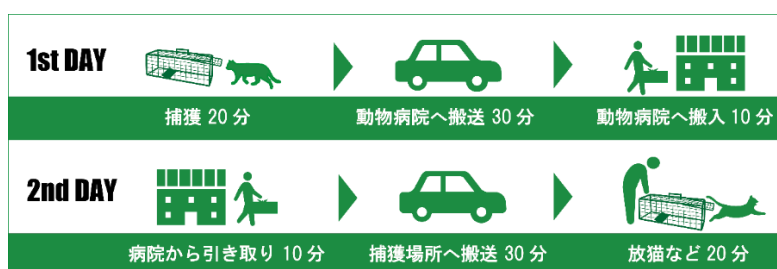
社会的企業(しゃかいてきぎょう、Social Enterprise, Social Entrepreneurship)とは、社会問題の解決を目的として収益事業に取り組む事業体の事である。ソーシャル・ビジネスも含まれる。(ウィキペディアより)

なるほど、この場合の社会問題は「猫の殺処分」。その原因としての「ノラ猫のご近所トラブル」です。普通の飼い主が依頼するようなペットシッター業務や、ペットホテル業務は、すでに既存のサービスが沢山あるので、受けていません。基本的に対象は可愛がられている飼い猫ではなく、ノラ猫や保護猫がメインです。

具体的な仕事内容

依頼で一番多いのは、ノラ猫への TNR（ノラ猫を捕まえて、不妊手術をし、元も場所に返すこと）のお手伝い依頼です。「ノラ猫が不憫でご飯をあげているが、これ以上繁殖して鳴き声や糞尿で近隣住民に迷惑をかけて猫が嫌われ者にならないように、不妊手術をしたい。でもノラ猫なので捕まえることができない、ノラ猫の不妊手術を受け入れてくれる動物病院を知らない。」といったケースです。そういう場合は、TNR の不妊手術をしてくれる動物病院の予約から、猫の捕獲、病院への送迎を実施します。不妊手術はどこの病院でもいいと言うわけではありません。飼い猫と違い、手術後に数日間お薬を飲ませるとか、2週間後に抜糸をするということはノラ猫にはできません。そこで、抜糸のいらぬ術式で手術をしてくれて、お薬も持続性の長い注射をしてくれるような病院である必要があります。

2018 年 8 月下旬の開業から 3 月 2 日現在で、猫の捕獲依頼は 65 件、166 頭の捕獲のお手伝いしました。うち、14 頭は保護のための捕獲でしたが、152 頭は TNR でした。



TNR を実施することによって、繁殖を防げるだけでなく苦情になりやすい鳴き声やマーキングの強いホルモン臭を抑えるだけでなく、猫の殺処分の 73%をしめる離乳前の子猫の殺処分を防ぐことができます。

次に多い依頼は、保護した猫に里親さんを探したい。という依頼です。開業から 18 匹の猫にお家を見つけることができました。その他にも、病院の駐車場で誤って飼い主さんが逃がしてしまった飼い猫さんの捜索と捕獲のお手伝いの依頼や、家の仏壇と壁の間に挟まって 3 日間も出てこれなくなった猫のレスキューなどなど…。

相談経路の違いから見えるボランティアさんの苦悩

私のところにかかってくる電話の経路は大きく分けて 2 つあります。1 つ目は動物病院からの紹介、2 つ目はボランティア団体からの紹介です。面白いくらいに違いがあることが分かりました。動物病院からの紹介で電話をかけてこられる方は、8 割 9 割そのまま仕事に依頼

になります。一方で、ボランティア団体からの紹介の場合は仕事の依頼に至るのは今の所50%以下です。乱暴に分けるなら、動物病院には具体的な手助けを求めてくる人が多く、動物愛護団体には“情報提供”のような人が多い印象です。「うちの庭でノラ猫が子どもを産んだ。うちの庭の子猫保護していいよ。」「〇〇公園にノラ猫が沢山いますよ。怪我している子もいるみたい。」保護も不妊手術をもお金と労力がかかります。でも、猫が好きならボランティアでやってくれるでしょ？という具合です。「うちの庭でノラ猫1匹にご飯あげてるんだけど、不妊手術してくれない？」という相談では、ボランティアさんがせめて不妊手術費用だけでも実費負担してもらえますか？と聞いても難色を示す方も多いようです。保護できないと言うとそれでもボランティアなのかと逆切れする人も。こんな相談ばかり受けていたらボランティアさんはすぐに金銭的にも精神的にもつぶれてしまいます。実際に猫を保護しすぎてボランティアが多頭飼育崩壊寸前になってしまうケースもあります。私としては、ボランティアさんからの紹介は依頼につながる可能性が低いから紹介しないでくださいというのではなく、困った人ほど一回降振ってください、とお伝えしています。そういう方が私の所に電話をしてきて、手術代の実費はもちろん、それ以外に捕獲から病院の送迎にかかる費用としてこれくらいかかりますよ、という見積もりをお伝えすると、手術費の実費だけで手伝わると言ってくれているボランティアさんのありがたみがやっと理解できるようで、「もう一度ボランティアさんに相談してみます。」と切られるかたも多いです。それで丸投げの相談者が手術代だけでも負担する相談者になったなら少しでもボランティアさんの役に立てたかな？と思います。

猫から目線。という社会的企業がこの社会の中でどのような役割を担っていけるのかはまだまだ分かりません。ひとまず、ボランティアさんたちがどれだけの労働力を提供してくださっているのか具体的に理解するための装置としての役割りや、自分が一度きり関わった猫にたいして、何かしてあげたいと思う人が気軽に利用できるサービスとして広い意味での保護猫活動の普及に役立っているような気がしています。

私の活動の根幹になっているのは、「猫が殺されなくていい社会をつくりたい」と中学生の頃強く思ったあの心臓がぎゅっとするような気持ちのまま。でも、この活動を通して、色々な人と、色々な猫と関わって楽しいと思える瞬間が多いです。だからこそ継続できている気がします。試行錯誤しながら、これからも頑張っていきたいと思います。

筆者



小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

仕事：ねこから目線。～猫専門のお手伝い屋さん～

先人の知恵から

23

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今年も又4回にわたって、先人の知恵を伝えていこうと思っている。

今回は「く」行からである。但し後の方で、「君子」で始まる諺が結構多い。「君子」は一般的ではないので、入れるかどうか迷ったが、二つばかり入れてみた。「君子」でさえもというところで受けてもらえればと思う。そして、「け」行からと合わせて次の七つをご紹介します。

- 君子は豹^{ひょうへん}変す
- 君子は和して同せず、
小人は同じて和せず
- 形影^{けいえい}相同じ
- 鶏口^{けいこう}となるも牛^{ぎゅうご}後^ごとなる勿^なれ
- 稽古^{けいこ}に神^{じん}変^{へん}あり
- 蛩^{せう}雪
- 兄弟^{けいてい}牆^{がき}に鬩^あげども、
外^{あそ}そのあなどりを禦^{まも}る

＜君子は豹変す＞

①君子は、過ちと知ったらすぐにさっぱりと改めるといふことのとえ。②自分に都合が悪くなると、それまでの考え方や態度を一変させることのとえ。出典 易経

この諺には二つのイメージを持っていると思う。①の方は、潔さ、②の方は潔いというより狡いイメージがある。人の上に立つものは、狡いよりは潔いのが良い事は言うまでもない。

上の者が、あまり態度をコロコロ変えられては、下につくものとしては大変困るが、態度をかえるとしても、責任を持って、その後の営みに臨むのであればそれはそれでよいかもしれない。最近テレビ等に出てきて、頭を下げている人たちは、①であってほしいと思うが、その様に見えない。むしろ、またやるのではという懸念を我々に残す。「あ～ばれちゃったの。すみませんでし

た。今後気をつけます。」という軽い感じに受け取れてしまう。これは筆者だけのうがった受け止め方なのだろうか？

日本人は、誠実で正直で、真面目なことが世界でも認められていたから、製品の信頼度なども高かった。しかし、最近、杜撰さが目立つようになり、信頼度も落ちてきているように感じる。

物事にこだわるのは、大事なことでもあるが、間違っているとわかったら、直ぐに修正できることは、勇気もいるし、日本人の特性でもある、真面目さ、誠実さにも通じる潔さだと思う。そういう心意気を、これからの子どもたちも持ってほしいとの願いと、未来の日本人が再び、世界から誠実で正直で真面目な人間であると思われるようになってほしいと思い、この諺をあげた。

英語では…

A wise man changes his mind, a fool never. (賢者は考えを変えるが、愚者は決して変えない。)

＜君子は和して同ぜず、

小人は同して和せず＞

君子は人と調和するが、主体性を失うこととはない。小人は付和雷同するが、人と調和することはないということ。略して「和して同ぜず」ともいう。 出典 論語

人と調和することと、同ずることは同じではない。「調和」とは、物事の間釣り合いが取れていること、互いに和合している

ことという意味(大辞林)である。一方「同ずる」は、同意する、賛成する、くみするというような意味である。調和するのは、互いに対等の立場で認め合うもので、自分の主体性はそのままであるが、同ずる方はどちらかという、自分の主体性はなく、周りに合わせるだけの意味合いになる。「付和雷同」は自分にしっかりした考えがなく、他人の意見にすぐ同調することである。

子どもも大人も、中々自分の主張をせず、周りに合わせることばかりしている。自己主張をすることにも、やりすぎはマイナスにしかならないが、間違っていたり、納得できないことに対して、「No」を言える力は育てたいものだ。上に立つものばかりではなく、日々の生活の中でも、例え目上の人や親に対してでも、間違いをただすためには、物が言える社会を構築していかねばならないのではと思う。

一方で、自閉症スペクトラム障害のお子さんには、正しいことを正しいと主張する力を持っているが、それ故に、周囲と和することが出来ないこともある。この矛盾をどう説明しても、中々理解できない。世の中というものは、程々の正しいことと、程々のいい加減さで出来ているからでもある。

子どもたちに、正しいことを伝え、正義や真実を伝えるには、自らの言動を見直して、お手本を示すことが大切だろう。そういう意味でも、長いものに巻かれることばかりではなく、時にはしっかりと主張する姿を見せることも必要になる。

<形影相同じ>

人の行動の善し悪しは、その人の心の善し悪しによるという例え。形と影とは同じで、形がゆがんでいれば影もゆがむということから。 出典 列子

心の状態は、様々なところに影響を及ぼす。心が落ち着いていれば、行動も落ち着く。慌てていると失敗が多くなるのがそのよい例だろう。心を正しく、しっかりと保つことで、自分の行動も正しく保てる。子どもたちや保護者に、この諺を伝える時には、子どもたちや保護者自身の言動の様子から、本当のことが見えてしまうという意味で伝えている。

<鶏口となるも牛後となる勿れ>

大きな集団で人の尻についているよりも、小さな集団でもその頭となるほうがよいということのたとえ。略して「鶏口牛後」ともいう。 出典 史記

この諺を最も多く使うのは、進路の話をする時である。保護者は、ちょっとでも高いレベルの学校に子どもを入れたがる。それはそれでわからない話ではない。良い学校にいれ、良い大学に進学し、良い会社に入って、良い人生を送る。そんなことを考えている。それも少し前までは、当たり前のことだったかもしれない。しかし、バブル崩壊後、大会社もつぶれるようになり、寄らば大樹の神話が崩れた。以来、もっと自分がやりたいこと、学びたいものへとシフトしてきた。それでも相変わらず、良い

学校に入りたい保護者は多い。

ギリギリでレベルの高い学校に入っても、伸びしろのある子どもであるなら問題ないが、小学校から勉強ばかり、中学校も勉強ばかり続けてきた子の場合は、伸びしろがあまりないことが多い。また、塾等で、試験対策を学び、本質理解がないまま受かった場合もあとがしんどくなるのではないか。結局レベルの高い学校に入ったは良いが、ついて行けず、挫折を味わい、希望も失って不登校になる子どもたちも見てきた。

能力の高い子と言うのは、余り勉強をガツガツしなくても、そこそこの成績を取ってしまうものである。そんな子たちと競争しても勝ち目はないと思うなら、一つランクを落としても、少しゆとりをもって学校生活を送れたほうがずっと学びが多い。自己評価を下げてしまうと、力を発揮できないだけでなく、鬱になったり、引きこもってしまったりという問題にもなりかねない。より良い学校生活をおくり、自信をもって次のステップに行ける方が、子どもたちのためになることもある。もちろんギリギリで頑張る方が力を出せる子もいるだろう。その見極めも大事である。それも含め、子どもたちや保護者にこの諺を伝えている。

英語では…

Better be first in a village than second at Rome. (ローマの二位より村の一位につく方が良い。)

<稽古に神変あり>

熱心に修練を続けていれば、自分の能力

以上の高いところに到達するものであるということ。神変は人知では測りえない変化。

昔、ピアノを習っていたが、練習は殊の外面倒で、継続性がなかった。結果趣味の域を出なかった。自分の子どもにも楽器を習わせていたが、練習を毎日させるのは中々大変だった。もし一生懸命頑張って、練習させていたら、もっと上手になっていたかもしれない。演奏家にするなら、子ども自身が楽しく練習できることと、保護者側の努力が必要である。

武道でも、スポーツでも、しっかりした成績を出している人たちは、それぞれ並々ならぬ努力を続けている。その結果としての良い成績だろう。

先日女子柔道の選手が引退のインタビューを受けていたが、その席で、「選手でいない事、練習をしなくてよいことがこんなに楽だとは思わなかった」と言っていた。厳しい練習を続けるには、強い意志も必要である。羽生結弦選手が、滑った後に氷の上で大の字になっているのを見たとき、精根尽き果てた状態なのだろうと皆が思っただろう。神の領域等、色々言われたが、偉業を成し遂げるには、やはりそれだけの努力が必要なのだ。

部活動や、お稽古事で躓いている子どもたちやその保護者たちの励みになればと、この諺を伝えることがある。

<蛍雪>

貧困に耐え、苦勞して學問に励むこと苦學すること。 出典 晋書・蒙求

「蛍の光窓の雪〜♪」誰もが知っているのではというほど有名な歌であるが、この諺から作られたと言われている。今時電気もない家で暮らしている人は殆どいないだろう。明るい電気のもとで、寒くもなく暑くもなく、適温で勉強などをしている子が殆どである。灯りがないのでろうそくの火を灯し、寒さで凍える手に息を吹きかけたり、手をこすり合わせたりしながら、ちびた鉛筆でミカン箱を机代わりに勉強を続ける姿。そんな姿を見ることはなくなった。世の中は豊かになった。それでも貧困にあえいでいる人はまだいる。豊かに守られている子どもたちよりも、貧困の中で必死に学んでいる子どもたちの方が、目的意識を以て勉強に励んでいるかもしれない。「蛍の光〜」を歌うとき、今の自分が恵まれていることに感謝する心も忘れずに歌えたら良いなと思い、この諺を取り上げてみた。

英語では…

It smells of the lamp. (ランプのにおいがする。)

蛍の光の歌の原曲は Auld lang syne というスコットランドの民謡。

<兄弟牆に闢げども、

外そのあなどりを禦ぐ>

兄弟は、普段は家の中で喧嘩ばかりしていても、外から侮辱を受ければ、力を合わせてそれを防ぐものであるということ。牆=垣根。家などの外側の仕切り。闢ぐ=争

い合う。

兄弟と言うのは面白いものだ。親がいると喧嘩ばかりするが、二人で留守番となると、心細いのか、肩を寄せ合って仲良くしている。まして、外部からの攻撃があれば、一致団結してこれに対抗する。普段仲が悪いように見えても、いざとなれば協力し合うという諺。兄弟喧嘩を嘆く保護者にこの諺を伝えている。喧嘩ばかりしているようでも、寝る時になるとくっついていたりとか、そんな話を引き出すことで、保護者もホッとするものだ。

また、兄弟喧嘩をすることで、喧嘩の仕方もある。口喧嘩、殴り合い、色々あるが、物を使わない、足は使わない等ルールのある喧嘩を経験することで、大きくなってからの喧嘩にも手加減が出来るようになるだろう。喧嘩も出来ないよりは、言いたいことを言って、もめるのも、そして仲直りすることも、良い経験になる。喧嘩も大事。

出典説明

易経・・・十二編

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文とその解説書の「十翼」を合わせて十二編よりなる。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王、周公、孔

子があげられるが、確かではない。

論語・・・二十編

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』と共に四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものとされる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

列子・・・

中国、戦国時代の思想家。名は欒きん冠こう。老子よりあと、荘子より前の時代の道家といわれ、虚の道を得た哲人と伝えられるが不詳。『列子』八巻の著者とされるが異説も多い。

史記・・・百三十巻

中国時代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

晋書・・・百三十巻

中国正史の一つ。唐の太宗の命により房玄齡らが編纂した。六四六年ごろに完成。西晋四代（二百六十五～三百十六年）と東晋十一代（三百十七～四百二十年）の歴史を、陸機など十八史家の晋史を参考に、「世説新語」などの説話集からも記事を引用して編集している。

蒙求・・・三巻

唐代の児童・初学者用の教科書。編者は李翰りかん。古代から南北朝までの有名な

人物の故事や言行五百六十九事項を、記憶しやすいように表題を四字句の韻語で表し、類似の事項二つを一組にしたもの。有名な故事が多く含まれており、中国古典を学ぶものの入門書として尊ばれている。日本には平安時代に伝えられ、愛読された。

世説新語・・・三卷

中国、六朝時代の逸話集。南朝宋の劉義慶の撰。後漢から東晋までの貴族や知識人の逸話を集め、徳行・言語・故事・文学など三十六門に分類して簡潔な文体で記したもの。六朝時代の貴族・知識人の風潮を知るのに便利であり、また、言語資料としても貴重である。現在伝わるものは、梁の劉孝標領叔書が注を加えたものである。

私の出会った人

(その九)

関谷啓子

数年前から高齢の方のお話相手をさせてもらっている。

お一人お一人に人生があるように、お聞きする話は実に多彩だ。

今回は多分80歳を超えておられる女性の方。

小ぎれいな身だしなみ、知的なイメージがする車椅子を使用しておられる。

初めてお目にかかったのだが、ピカピカのお肌が光っている。

「うわあ～白くてキメが細かくて綺麗なお肌ですね～」と声かけするとこわばっていた表情が和らいで「ずっと米ぬかで洗っているのですよ。母に教えられたとおりにね」との返事。そこからスルスルと言葉がほぐれて、妹さんやお母さんの話、若い頃洋裁や和裁を教えていた話・・・が続いた。しばらく話すと「若い頃は証券会社で男性と同じように働いていた。あの頃は生き生きとして楽しかった」と。思いなしか声までツヤが出て勢いがある。半時間ほどお話を聞いて退室した。

お聞きしてしばらくすると、彼女に初期の認知症の症状が出ているのに気づいたが、本来かなり知的に高い方であったのではないかと思われる。服装も色白白髪 of 彼女によく似合いインナーに黒を着ておられるのがかなりのセンスだと思った。話の最中、姿勢を崩されることもなく、ゆっくりと言葉を選んで話そうと勤めておられるのがわかった。

妹さんに認知症の症状が出ていることを気に病んでおられ続けて「私も・・・」と沈黙になられたのが心に残った。本人さんの不安をどのように受け止めて返したらいいのかわからず一緒にいることしかできなかった。

ご自身の「こうありたい。こう見られたい」というイメージを大切に持っておられ、生活の場所が変わってもそれを守ろうとしておられる姿勢を強く感じた。

お話が終わり、部屋のドアを閉めるときに視線があったので会釈したが、全

く反応が無かった。まるで私がそこにいないかのような視線だったのに驚いた。
視力が弱っておられるのか？そうでなければ最後の「人に来てもらうのは大好き、話をするのは大好き。いつでも毎日でも来てね」との言葉と釣り合わないのは何故か・・・と帰宅してもずっと気になっていたのだが、落ち着いてよく考えると、あれは彼女の自然なというか正直な気持ちの表れだったのだろう。話し相手になってもらっていたのは私だった！



うたとかたりの対人援助学

第9回 かたりの文化としての手話 その3

鵜野 祐介

前田浩さんへのインタビュー

昨年(2018)12月と今年1月、奈良県立ろう学校教諭の吉本努さんのご紹介により前田浩さんにお話を伺う機会を得た。前田さんは、長年ろう者の教員として大阪市立聾学校に勤務する傍ら、全国聴覚障害教職員協議会初代会長を務め、現在はNPO法人「大阪ろう難聴就労支援センター」理事長として働いておられる。本連載第7回で紹介したハーラン・レイン『手話の歴史』(築地書館 2018)に寄せた詳細な解説からも分かるように、日本および世界のろう教育や手話の歴史に精通しておられる方である。

インタビューは2回とも同就労支援センターにおいて行った。前田美智子さん(前田さんの奥様 大阪府立生野支援学校教諭)に手話通訳をお願いし、また1回目は上述の協議会第3代会長の堀谷留美さん(ろう者、大阪府立中央聴覚支援学校教諭)、2回目は堀谷さん、吉本さん、森井結美さん(奈良県立ろう学校教諭)にもご同席いただいた。

本稿は、2回のインタビューの内容に前田さんから戴いた情報等を加えて筆者が作成した草稿に、前田さんご自身に加筆修正をしていただいたものである(*前田さん以外の方の発言は末尾に氏名を付して斜字で記す)。

前田さんのプロフィール

前田浩さんは 1953 年、大阪市生まれ。ご両

親は聴者で、その教育方針は「口話法」だった。大阪市立聾学校で幼稚部から小学部6年まで学び、そこで手話を覚えた。もともと手話推進の歴史のある学校であったため、手話そのものは使われていたものの、口話法が一世を風靡していた中で手話使用制限の教室も多かったそう(*山本おさむ『わが指のオーケストラ』全4巻、秋田書店 1991-1993 参照)。

子どもの頃、「桃太郎」「わらしべ長者」「ぶんぶく茶釜」などの昔話は本で読んだ。小学4年生の時、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読み、また「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」等も読んで賢治に魅了された。活字文化にのめりこみ、岩波の『漱石全集』も読んだ。地域の中学・高校での疎外感の中で、「三四郎」のマドンナに憧れる主人公に自己投影し、「ストレイシープ(迷える子羊)」を実感したという。

同志社大学法学部卒業、大阪教育大学大学院(障害児発達学専攻)修了後、1983 年、母校である大阪市立聾学校に赴任した。

手話による語りの実践の歴史

大正終わり頃、大阪市立聾学校の高橋潔校長が絵本を使って手話で子どもたちに語り聞かせをしたという記録が残っている。「桃太郎」「安寿と厨子王」など。高橋の後継者の何人かが行っていた可能性はあるが、きちんとした記録はなく伝聞の域を出ないようだ。

これに対して、奈良県立ろう学校の吉本さんたちの取り組みは、相当の年月がたっているが、1980年代以降の「分かりやすい授業作り」の上で手話が必要との認識が高まる中で行われたもので、他の数校のろう学校も取り入れた意味でも先進的なものである。全国で初めて幼稚部にろう者の教諭を採用し、絵本の読み聞かせも含めて、手話による教育を積極的に取り入れ、継続して行っている奈良県立ろう学校の取り組みは、当時、全国的にも貴重な取り組みであった。

今日の主な実践例

手話による絵本読み聞かせの実践であるが、1980年代以降増えつつあるも、全てのろう学校・聴覚支援学校で取り組まれているわけではない。前田さんが把握している手話による絵本読み聞かせの主な実践例は次の通り。

<個人・福祉>

- ・大阪府吹田市 坂本久美(ろう者):「人の輪と心を育む ひまわり教室」主宰、乳幼児の親子コミュニケーション支援活動の中で行う。
- ・吹田市 藤岡扶美(難聴者):てのひら講師・手話うたパフォーマー。
- ・物井明子(元ろう学校教師、精神保健福祉士):大阪市乳幼児支援「こめっこ」、京都市乳幼児支援「にじっこ」の活動の中で行う。

<学校>

今日、ろう学校・聴覚支援学校での絵本の手話による読み聞かせ・手話での民話語りは広がりを見せている。以下、実践している学校を一部だけ紹介する。

- ・埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園および坂戸ろう学園
- ・東京 私立明晴学園(*2008年開設、日本語

と手話のバイリンガルろう教育を実践。同学園 HP「幼稚部」の項目に「絵本の読み聞かせ・製作活動」の様子が紹介されている。)

[<http://info.meiseigakuen.info/school/kingergarten/>]

- ・山梨県立ろう学校
- ・奈良県立ろう学校
- ・徳島県立聴覚支援学校

手話による絵本読み聞かせのポイント

手話による絵本読み聞かせの一番のポイントは語り手と聞き手の共通言語が手話であるということ。暗黙の前提として、聞き手の中に、自分たちの持っている言葉が手話であることへの安心感が生まれる。読み手との間のラポール(信頼関係)、共感が生み出す小さな宇宙がある。安心感があるから子どもたちも身体を動かしたり声を出したくなったりして「対話」が生まれる。吉本さんの場合、表情豊かで足も使う。だから子どもたちはより一層物語の世界に引き込まれるのだろう。

幼稚部配属となってから実践を行ってきたが、対話的な語りを心がけてきた。子どもたちとの対話を通して読みきかせている。(吉本)

民話を手話で語り聞くことの意味

リテラシー(文字の読み書き)教育は、聞こえる、聞こえないに関わらず力を入れていかなければならないことだが、ろう学校では特に重要だ。ただ普通のプリント学習だけでは日本語が嫌になり、アレルギーの子どもが出てしまう。絵本は日本語へといざなうツールとなる。

絵本の多くは話し言葉で成り立っているが、学校の教室では書き言葉で学ぶことが多く、ろう者の子どもは耳から入ってくる話し言葉が入りにくい。しかし、絵本を通して話し言葉の世界

に導くことができる。

また昔話の絵本にはしばしば非日常の世界が描かれており、こわいとかおもしろいとか感じながら、物語の魅力や魔力に引き込まれることができるという点にポイントがある。絵本の読み聞かせは、子どもたちを話し言葉の世界の入口に立たせる役割を担っている。

さらに、共通の昔話や絵本作品を読んでもらうことで、聴者の子どもとろう者の子どもが共通の物語体験、文化の継承をしていける点も重要だ。

ろうの子どもを持った母親の気持ち

私の母は聴者だが 50 歳を過ぎ”てから昔話の語り部の活動を始めた。昔のろう学校は手話を使わなかったし、先生も両親も手話ができなかった。母は、きこえない私にも自分の声で読み聞かせをしてみたかったにちがいない。今、母は失われた年月を取り戻そうとしているのかもしれない。(堀谷)

聴者の母親にすれば、ろうの子どもに自分の肉声を伝えることができないもどかしさがある。本当なら、早い時期に手話を学んで、子どもとコミュニケーションをとれるはずだったが、時代状況がそうさせなかった。

字幕をめぐる

若い頃、中之島の映画館で「アラビアのロレンス」や「風と共に去りぬ」等、名画3本立てでよく観にいった。当時 350 円だった。字幕を読んで、話し言葉を自然に学んだ。また、コミック『じゃりん子チエ』で大阪弁の世界をリアルに体験できた。

平成元年(1989 年)初めてアメリカに行ったとき、テレビでパンパースのコマーシャルを見た。赤ちゃんが泣く声、母親がパタパタと音を

立てて走る音、紙おむつの入った袋をバリッと破る音、すべてに字幕が付いており、衝撃を受けた。また、カルピスのコマーシャルも見たが、「カルピスは初恋の味」というナレーションがついていることを、アメリカのテレビの字幕を見て初めて知った。日本のテレビCMには字幕がなく、海を渡って異国で初めてそのCMの意味を知ったことに情けない思いと怒りを感じていた自分を思い出す。

アメリカの場合、多民族国家で多言語が用いられているため、英語を普及させるという言語政策上の要請もあり、英語字幕をつける必要があると聞いたことがある。字幕製作関係予算には政府からの補助も出る。

12 年ほど前、全日本ろうあ連盟と全日本難聴者・中途失聴者団体連合会との共催で「字幕シンポジウム」が大阪で開かれた。そこでは、テレビCMに字幕を付けないのは、企業側がろう者を消費者と見なしていないからではないかという辛辣な意見も出ていた。

15 年ほど前、読売放送局で民放労連のトップ役員と話し合う機会があり、放送局の側から言われたこととして、視聴者から「字幕を付ける」と目障りだ。野球中継で画面の右の下の所にある、得点やカウントの表示が、字幕で隠れてしまう」といった苦情がかなり来るのだそうだ。マイノリティ(社会的少数者)として、ろう者当事者サイドから字幕の必要性をもっと訴えてほしいと逆に言われた。

また、入力上の技術的な問題もあると言われた。英語の場合、26 文字をそのまま入力するので簡単だが、日本語の場合、漢字変換やカタカナ変換があり、句読点も必要であり、大変手間がかかる。英語入力と同じ風には考えないでほしいと。ただ、今では翻訳機械の技術も向上しているので、変換速度や正確度もよくなってきている。

その頃は「まんが日本昔ばなし」にも字幕はついていなかった。今だったら字幕をつけて放映してもらったら「やまんば」の話など、ろうの子どもも楽しめるだろう。

インクルーシブ教育とダイバーシティ

「インクルーシブ」は「包摂」「包括」と訳されるが、少数者が多数者に包摂されることにより、少数者の独自性が失われ、多様性を阻害する危険性がある。これに対して、手話による民話絵本の読み語りは、ろう者の文化と聴者の文化の差異性と共通性を知る絶好の機会となる。「インクルーシブ」を乗り越えた「ダイバーシティ(文化的多様性)」の理念を体現するものになるのではないか。(鵜野)

「インクルーシブ」に関しては 20 年ほど前に出された「サラマンカ宣言」があり、ここにはダイバーシティに配慮するよう明記されている。

(* サラマンカ宣言は、1994 年にユネスコとスペイン政府によりサラマンカで開催された「特別ニーズ教育世界会議」で採択されたもので、教育は障害児を含むすべての児童の基本的権利であると認め、教育制度をインクルーシブなものとし、すべての児童の多様性を考慮して策定することを求めている。)

但し、実際には「猫も杓子もインクルーシブ」という面があるのも事実で、ろう者の子どもを聴者の子どもと一緒に学ばせることに固執するあまり、ろうの子どもがわかる授業を受け、手話やろう文化の独自性を学び、自尊感情をもって育っていく環境が奪われている側面もある。ろう学校の存在意義を教育関係者はあらためて認識すべきではないか。

手話による昔話の語りの実践は、手話言語と音声言語というメディアの違いを越えて日本の昔話という共通の言語文化を共有すること

ができるはずだ。

言語文化として手話を学ぶ

関西学院大学には手話研究センターがあり、ろう者が講師として教えている。國學院大學、日本福祉大学、四国学院大学、梅花女子大学などでは第二外国語として手話を学ぶことができる。その一方で、手話の言語学上のアプローチはまだまだ発展途上にある。

手話は様々な場面でも表現できる。抽象的な概念を表現することも細やかな心理描写もできる。いわゆるジェスチャーとの違いはこの点にある。しかし、手話が言語として認知され、さまざまな生活場面で尊重されたり、諸法規に手話通訳が位置づけられたりするようになったのはごく最近であり、今日、日本各地で「手話言語条例」制定の動きが活発になっている。手話の市民権は、ろう者の市民権そのものであり、ろう者と共に生きる人たちの願いでもある。

(前田さんの語り、以上)

日本昔話学会シンポジウム

2019 年 7 月 6-7 日、日本昔話学会 2019 年度大会が大阪市立大学杉本キャンパスで行われるが、7 日午後 1 時 30 分からのシンポジウム「昔話伝承とダイバーシティ」において、前田さんに「手話による民話絵本の読み聞かせの歴史的背景と意義」(仮題)について話題提供をしていただき、また吉本さんに実演をしていただくことになっている。

本大会には会員以外の方も参加できるので、多くの方に手話という豊かな言語文化による語りの世界を体験していただくとともに、ダイバーシティを尊重しつつ、ろう者と聴者が共生していく上で大切なことは何かについて、一緒に考えていただく機会となることを願っている。ぜひご参加ください。

ああ、結婚！

—婚活日記—

第9回

黒田長宏

退会した2つは、マッチングしたのに既読でも返事が来ないというわけのわからない人達が4人もいて、最終通告で待っていても来ないし、他の人も新たにマッチングしないし、退会した。

それでも1つだけは残した。何もないよりは希望はある。と思いたい。結局、15名とか少ない人もいるが、競争率が15名分だし、100人なんて人はざらにいて、競争率100倍では他の人に向いてしまうだろう。ここに婚活にも問題があると思った。私が起業出来たら、この競争率を作らない。こちらで選んで1対1マッチングさせてしまう。だが、他人の仲人ばかりして、私自身が独身では変である。なんとかして私自身が結婚しなければとは思っている。

<12月13日>

結局、ネット婚活は8つから1つに絞ったが、結婚難者の結婚は難しいのを体験し、それなら結婚難者をターゲットにした婚活を起業しようじゃないかということで、起業コンサルタントの先生とこれまで8回くらいお会いして相談してきた。そこで、優先的に行うことは、なんらかのメディアでそれらを広告することだと思い、選定に入ろうと思う。ホームページ開設までにクリアすべき課題を3つ設定した。それには広告するのが効率的だと思う。

<12月25日>

私のテーマは、少子化や不倫報道や援助交際や婚外性交渉などの性の多様化に対する疑問であり、とにかく、結婚難の人への対人援助を真っ先に考えたいと夏から起業相談に行っているが、今日はブレインをしてくださっている2人と会議をして、来月にはホームページが出来る状態にしたいと思う。私自身がかなりのわけありのバツイチ独身ではあるが、この社会状態では、私自身がアピールしていかないと変わりようがな

<2018年11月19日>

8つでスタートしたネット婚活だが、とうとう3つになり、次の休みに動きが無ければ1つに絞ろうと思う。動きとお金が無い。結婚難を解決する起業について経営コンサルタントの先生に幾つもメールしている。次は10日後だが、気になることはメールしてしまっている。

<11月21日>

ネット婚活は1つだけ残そうとしたが、1つは終わらせられたが、もう1つも終わらせようと思っていたのが、けっこう見にくるだけは見に来ていたので、そこが一番お金がかかるが残そうと思った。しばらくネット婚活2つやっぺいようか。

<11月23日>

意気揚々と8社も登録したネット婚活だが、徐々に減らし、今日、とうとう残り1つにした。

い。アピールしても変わらないとしても、しないよりはましである。というより、変わらせたい。ただイメージが形にはなりそうだ。

<1月13日>

祖母が亡くなってちょうど1年ということで、祖母の弟、祖母の娘たち、亡き祖父の妹のうちの二人がきて、墓参りと昼食としゃべっていった。その間に、起業のための名刺をつくった。祖母のちょうど1年ののちに、自分の名刺が出来るとは。

<1月17日>

一昨日は古本を買いすぎで母親が怒り、喧嘩になっていたが、昨日職場から帰ると、近所のおじいさんが85歳で亡くなったと言ってきて喧嘩が終わっていた。しかし、22日に大事な起業相談の日と葬儀が重なったため、私は通夜にだけ出るために明日は同じ作業の人に、休日と出勤日の交換が出来るかきくことになった。祖母のことで一年が過ぎたら近所である。これがタイミングなのか。部落も15軒前後だが、近所づきあいのない私は緊張する出来事だ。母親は私と違い、社交は普通に出来る人である。ただ73歳になり、高齢化してしまった。私もそうだが、孤立死などが増えているのだろう時代である。それぞれ近所の人亡くなったのも、起業も関連していると思う。

<1月22日>

明日が大安なので、明日に起業しようと思う。今日はブレインになっていた2名の方に、最終調整をしていただいた。感謝、感謝。

<1月23日>

今日は、私が51歳の平成31年1月23日。数字を並べると「恋、妻、1、2、3！」と読める人は

読める気がする。そして、税務署に行ってきて、婚難救助隊をとうとう登録してきた。税務署では緊張していたが、隣のおじさんがスタッフに怒り出したので緊張の糸が切れて余裕が出てしまい、そのスタッフに書類を確認してもらい、「有名になりますから待っててくださいね……。待ってなくてもいいですけど」と、ふざけた捨て台詞を残して、その後10年来お世話になっている某お店屋さんに名刺を渡し、帰宅して昼寝した。この号が出るころは、きっと「婚難救助隊」で検索すれば、出てくるような気がする。もう陽が沈んでしまった。明日からまた勤務だ。

<2月6日>

連休で、昨日は昨夏から月2回、水戸市まで往復4時間、走行距離170キロも費やして、経営コンサルタントの先生のご指導を受け、婚活をしてさえ、結婚が難しい人達の援助をどうしたら良いかというサイトを形成した時点で、いったん、水戸市通いは年に数回の不定期になる状況となり、今日は経営コンサルタントの先生に経理面の幾つかを教わってきた。先生は終了だねと言ったが、私は仮免ですよと返した。しかし、この先生も同い年であるが、離婚裁判時の弁護士の先生も同い年で両者とも同じ地域の出身者であった。面識はないということだったが、不思議と言えば不思議な偶然である。そこは、日本一か次かを争うような農業地域である。私は、農家の長男として生まれたが、農業にいまいち興味がわかず、コンプレックスで、食品会社や種苗店などを転職してしまったのが30代までであった。最初が出版社だったが、そちらのほうが文学部出身者でもあるから私の方向性かと思ったが、30代までの数多い転職のうちで、広告の企画営業もしたが、その経験は、今後の不器用な男女を優先する婚活事業に役立つかも知れない。ただ、当時より精神的な要素が大きいのだろうかスタミナが落ちた感じがしている。テレビで作家

の北方健三氏が65歳から衰えを感じたと語ったが、個人差があるのだろう。ただ、女性サイトを中心とするので、Facebook 広告やツイッターの告知によって、体力面をカバーできる時代だと思っている。実際にこの事業が動くには、他力的であるが、参加して下さる女性会員となる方々が数人でも現れてくれた時点で、私などより運営力を発揮してくれる推移をたどると信じている。その時点から、私は不器用男性のほうをどう探すか、誠実な不器用男性なら応援したいが、悪質な男性の場合はどう対応すれば良いのか。まだまだ動く前から、課題は多いだろうと予想している。

<2月6日の2>

グーグル検索でも『婚難救助隊』で出るようになった。マイクロソフトの検索のほうでは、この文章を書いている時点で、水難救助隊が出てきてしまうだけなのだが、検索はグーグルの割合がどれくらいあるのだろう。Facebook 広告のおかげもあり、私のカウントも入ってしまうので目安としてみるべきものだが、カウンターも100を超えた。開設10日間くらいでカウンターが100を超えるというか、開設前に30くらいあったかも知れず(笑)、それでも70も増えたとしたら上出来な発進だと思いたい。午前中は銀行にいった、口座も作ってきた。あとは広告していったらどうなるかである。実際に会員が入ってくれたとしても人間関係が生じるので、大変だろう。それでも、結婚したい人が結婚できる社会のほうが良いと思うので、私はこれをライフワークにする。生きている限り続ける。まだビジネスとしては動いていないが、一段落は一段落だと思うので、まだ締め切りまでであるが、今回はここまで。

[PBLの風と土 第8回]

指導の不安と不満で学生を抑えぬように

山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構准教授)

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学で学外研究の機会を得ました。オールボー大学では1974年の開学当初から全学でPBL (Problem-Based Learning) に関するを導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは比較研究で得た知見を報告し、第5回は立命館大学での公開研究会で報告時の質疑応答の再録とアイルランドで刊行されたPBLの書籍の紹介、そして6回目からは同書で解説されているオールボー大学以外の問題解決学習の知見 (6回目：学習プロセス、7回目：問題設定) を紐解いています。

1. 学びの場での相互作用を求めて

PBL (Problem-Based Learning) をテーマとしたデンマークのオールボー大学 (AAU) での1年間の客員研究員を終えて、間もなく1年を迎える。同大学の文化心理学研究センター設置の立役者の一人であるヤーン・ヴァルシナー (Jaan Valsiner) 先生との共同研究を行っている立命館大学のサトウタツヤ先生とのご縁で滞在することになり、さらにこの対人援助学マガジンでの連載の道も拓いてくださった。2017年度の連載ではAAUが2007年より工学教育でのPBLを対象としたUNESCOチェアプログラム (UNITWIN) の受入大学となっていることから、現地で展開されている各種のプログラムを報告してきた。そして今年度は、2018年2月に米国カリフォルニア州のサンタクララ大学で開催された世界PBL会議の際に出会ったアイルランドのユニバーシティ・カレッジ・ダブリン (UCD) のテリー・バレット (Terry Barrett) 先生の新著『A New Model of Problem-based learning: Inspiring Concepts』 (2017年、AISHE) を手がかりに、特に人文社会系でのPBLの展開方法に着目してきた。

そうした中、2019年1月25日に、AAUのキアステン・イエーガー (Kirsten Jæger) 先生とベン・ドーフマン (Ben Dorfman) 先生が来日し、立命館アジア太平洋大学 (APU) のグローバル教職員開発インスティテュート (IPG, Institute for Professional Excellence in Global Learning) 主催によるワークショップ

が行われた。このワークショップは、2018年度にAAUにAPUのIPGの先生方が訪問されたこと (8月：平井達也先生・秦喜美恵先生ら、3月：カッティング美紀先生・秦喜美恵先生ら) が縁となっている。ワークショップでは、AAUにおけるPBL導入の歴史的・社会的・文化的背景の解説と実際の展開方法のレクチャーがなされた上で、授業でPBLを導入する際にどのような指導方針を取るかについてテーマ毎に小グループでのディスカッションが行われた。筆者は「能動的学修のための指導はどう標準化するか？」 (How standardized should supervision proactive be) のグループに参加し、学習者が中心となる教育の実現のためには学生と教員のあいだでルールづくりを行い、教員が介入するのはどういうタイミングかを合意しておく必要がある、という結論になった。

折しも、本連載の7回目でもPBLにおける問題とは何かに迫り、教員が「境界を越境するように学習者をけしかける」 (Provoke liminal space) 上で必要な手順と示したが、APUでのワークショップでも、小集団で取り組む問題を学問的にどう位置づけるか (problem formulation) が重要であると強調された。その一方で、1回目および7回目の連載でも記したとおり、日本ではPBLとさえ「Project-Based Learning」 (プロジェクト学習) を指す場合が多く、何をどのように学んだかという学びと成長の成果よりも、限られた期間における集団的な活動の成果物に関心が向く傾向にある。その結果、学生集団と教員とが一体と

なって学びのコミュニティを創出・維持・発展（そしてセメスター終了時には積極的に解消）する必要があるものの、教員と学生の立場と役割の違いから、教員と学生集団とのあいだである種の断絶を生みかねないことになる。実際、2012年8月28日の中央教育審議会の答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』において、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」（p.9）と確認されており、一定の相互作用が重要としつつ、構造的には古典的な「刺激-反応（S-R: stimulus-response）」モデルが根ざしていると捉えられる。

学習者中心の学びのコミュニティの創出・維持・発展・解消のために教員はどう振る舞えばいいのか、連載8回目では引き続きテリー・バレット先生の前掲書を手がかりとし、その第3章から学生どうしの対話を促進するPBLの指導者のあり方に迫っていく。結論を急ぐなら、学生らの対話的理解を促すためには、(1)民主的・社会的な関係構築、(2)知識の共同構築、(3)個々の権限と集団の管理の3つの側面に着目し、特に知識の共同構築では(a)学習環境の設定、(b)共同作業の精緻化への問いかけ、(c)指導者・学生への研修の3つの方法で接近できると整理された。そして、(1)では6つ、(2)の(a)では5つ、(2)の(b)では5つ、(2)の(c)では3つ、そして(3)では2つ、合計で21の具体的な方針が示されている。これらPBLの指導における3つの側面と21の方針について見ていく前に、そもそもPBLの指導にあたって、特にPBLの指導に際して教員と学生が理解しておくべき事柄について、プロセスと各々の役割について確認することにしよう。

2. 相互作用の学びの場づくりのために

ここで本稿でPBLの指導と表現しているものは、Barrett (2017) の原著では「tutorial」であることを確認しておきたい。これは直訳すれば家庭教師、個別指導、個人教授などを意味するが、その動詞形の「tutor」が抑制する、鍛え

る、訓練する、コーチするという意味であることから、それらの包括概念として指導の語を当てることにした。事実、原著の第3章の冒頭では「学生が自分の知識を構築し、チュートリアルで互いに学ぶことの可能性」（the possibilities for students constructing their own knowledge and learning from one another in tutorials）に迫ることが目的であると示されている。そして、「PBLは単に学生に問題を与え、取り組むことを期待しているだけではない」（p.74）ため「PBLプロセスガイド」と「指導者の役割」と「学生の役割」の「3つの要素を組み合わせることで学びのプロセスの重要な足場となるようにする」必要があると示しており、それが結果として相互作用のある学びの場づくりの側面に結びつくと思われる。

ちなみにPBLの指導にあたってのプロセスガイドとして、カナダのマクマスター大学で長らくPBLに携わってきたBarrows (1988) やオランダのマーストリヒト大学のSchmidt (1983) が整理した学習原理をもとにした図解が例示されている（図1）¹。図1では、Schmidt (1993) が整理した学習原理なども参考に、(1)示された課題をよく読む、(2)問題の核心が何か明らかにする、(3)ブレインストーミングでアイデアを練る、(4)議論して現在の知見を統合する、(5)何を論点として学びを深めるか定める、(6)主体的に批判的・創造的に調べる、(7)文献や事例をもとに専門的な議論を行う、の7つが示されているものの、こうしたプロセスガイドは確定的なものがあるのではなく、むしろ「対象学生の学問分野や授業目的に合わせて (adapted to the disci-

7 Step PBL Process Guide

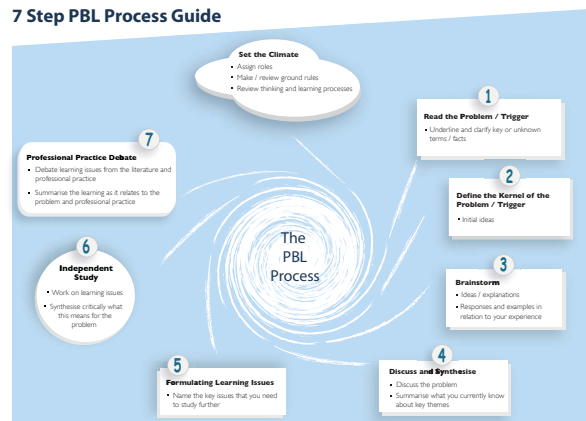


図1：プロセスガイドの例 (Barret, 2017, p.76)

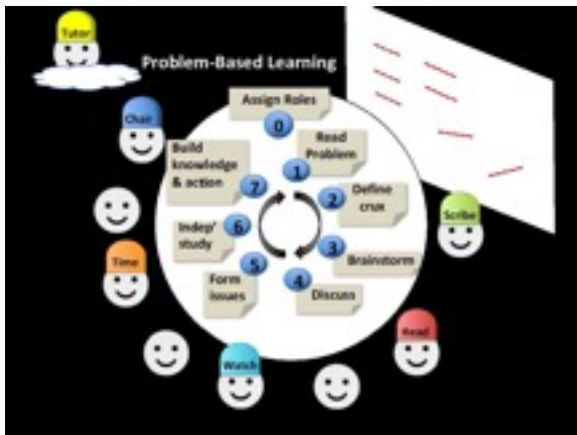


図2：学生の役割を盛り込んだプロセスガイドの例 (Barret, 2017, p.81)

pline and context of your students)」(p.75) 指導者が設計し提示するものとされている。事実、UCDでPBLを用いて生物学を教えているジョン・ヤースレー (Jon Yearsley) 先生によるプロセスガイドがこの後に紹介 (p.81) されており、図2のとおり、先の7つのステップに加えて、0として「役割の設定」が追加され、後述する学生の役割が図中に明記されている。なお、プロセスガイドの作成と提示にあたっては、「エビデンスに基づいた専門的実践を展開するプロセス (process for developing evidence-based professional practice)」(p.77) という点で、言わば教育と研究の相似形に注意が向けられており、プラグマティックに取り組むだけでなくアカデミックに関わる意義が強調されている。

PBLの指導者は、こうしてPBLのプロセスガイドを作成・提示して役目を終えるのではない。むしろ、ここからが始まりである。具体的には、「すべての学生が問題について話し合い、質の高い自立した学習に取り組み、各々の考えや議論が正当化され、新しい知識と一緒に生み出されるよう、プロセスの進行役となる (the PBL tutor works as a facilitator of the PBL process, encouraging all students to talk about the problem, engage in high quality independent study, justify their ideas and arguments and create new knowledge together) (p.77) 。実際、前掲書では、Barrett and Moore (2010, p.10-11) をもとに、プロセスの進行にあわせて、以下のような役割が必要になると例示されている。

- 心地よく、暖かく、やりがいのある学習環境を奨励する
- チームワークに資するような方法で物理的環境を整える
- 学生が様々なステップを踏むようにPBLプロセスを促進する
- 学習課題への命名は講師ではなく学生の役割と位置づける
- 学生らの発言に極めて積極的かつ注意深く耳を傾ける
- チームでの学びと挑戦、楽しみと不満を観察する
- 傾聴と観察に基づいて適時にプロセスへ介入する
- 学生が質の高い自立した学習を終えるように互いに責任を果たすことを期待する
- 批判的かつ創造的な思考を促す質問をする
- 発言の根拠を提供するように学生に投げかける
- 学生に自らが用いた資源の評価を求める
- 理論と実践を結びつけるよう学生に促す
- 主要な論点についての討論を奨励する
- 学生の学び、鍵となる能力の向上、チームの成果、それらの省察を促す
- 個人とチーム全体の両面で、特別な労力の提供、効果、資質、質の高い活動を確認する
- 高水準の成果を認め、機能向上に挑むよう、チームに働きかける
- 小講義をしたくなる衝動を抑える
- PBLプロセスの観点から、問題への取り組み、成果物と時間軸との関連づけを確認し、取り組みの過程への適切な介入により、チームの活動をメタレベルで観察する
- 指導の最後に取り組みの過程を振り返るよう促す

PBLプロセスでは、これらの役割を複数のチームを移動しながら適宜担っていく「流浪の指導者 (roving tutor)」(p.74) となる必要があるのに対し、学生は小集団において、1プロセスが終了するまで、進行係 (chairperson)、記録係 (scribe/recorder)、読み上げ係 (reader)、タイムキーパー (timekeeper)、オブザーバー (observer) などを固定的に担うことが奨励されている。それは、将来の専門的な働きにおいて、ここに挙げた個々の役割が重要であることを理解、実践し、互いに支え合い、その役割を果たす責任を習得する必要があるため、と示されて

いる。ちなみに進行役や記録係については感覚的に理解できるだろうが、ここで言う読み上げ係とは問題を声に出して読み上げることで問題が何かを確認する、一人一人が黙読して確認するように促す、重要な単語レベルにまで関心が向くよう語句を抽出して提示する役割、タイムキーパーは時間管理、残り時間への注意喚起、優先順位付けの提案をする役割、オブザーバーはチームの動きの観察、長所と改善点のフィードバック、観察に基づく提案をする役割、とある。こうして、PBLで指導者と学生に特定の役割が定められることにより、プロセス全体を通じて、「学びの当事者性 (the ownership of the learning) 」 (p.77) が喚起されると記されている。

3. PBL指導での3つの側面と21の方針

では、PBLの指導にあたってのプロセスに関する理解と、指導者と学生の役割を確認を終えたところで、冒頭で示したPBLの指導で重要な3つの側面と21の方針について、詳しく見ていくことにしよう。まず、1つめの側面は、民主的・社会的な関係構築を促進することであり、次の6つが具体的な方針として示されている。指導者の役割でも挙げられているように、通常は教えることに力点が置かれるためにミニレクチャーをしたくなる教員モードを抑制し、「コンテンツではなくプロセスへの介入 (process rather than content interventions) 」 (p.94) が促

されている。また、そもそも民主的とは学習の場に全員が貢献することであることであり、そのためには指導者がボディーランゲージやアイコンタクトなどの非言語的なコミュニケーション手段を効果的に使用することも重要で、結果として1～5の方針が貫かれれば、6にあるとおり、個々の学生が用いる言語が「私」 (Iやmy) から「私たち」 (weやour) など集団的なものへと変わると記されている (p.97) 。

民主的・社会的な関係構築に続く2つ目の側面が知識の共同構築であり、さらに(a)学習環境の設定、(b)精緻化への質問、(c)研修の3つに細分化される。(a)学習環境の設定では、情報リテラシーを高めて学習者の表現能力の向上を図ることで学習課題に名前を付けられるようにするといったアカデミックな接近に加え、学生らの動きを観察する中で他者が尊重されていないと判断した際にはグラウンドルールを尊重しつつも積極的に介入する (例として携帯電話をオフやサイレントにする、開始時に黙想を取り入れる、監視的と思われても終了時に授業時間内の細かな様子をコメントする) などして、学生らの意味づけや言語化を促すための方針が挙げられている。(b)精緻化への質問では、「認知的徒弟制」 (cognitive apprenticeship) などで位置づけられるアクティブ・ラーナーへの道を歩むには、学生の学びと成長のために無知や思い込みの状態から解き放つきっかけとして問いを投げかけることが促されており、文中で紹介さ

表1：PBL指導の3側面と21方針 (Barrett, 2017, pp.125-126から筆者作成・訳は筆者、記号・番号は便宜上付与)

側面		方針
(1) 民主的・社会的な 関係構築		1 物理的環境に着目する
		2 学生にグラウンドルール (基本方針) の作成・確認のための時間を割く
		3 指導者の発言は控えめにし学生の会話に言葉を重ねていく
		4 学習者全員が参加し各々の役割が効果的になるよう励ます
		5 学びを共有するためにホワイトボードの活用を学生に促す
		6 学生が用いている一連の言葉が民主的・社会的な関係構築につながるか耳を傾ける
(2) 知識の 共同構築	(a) 学習環境の 設定	7 高い水準の情報リテラシーを求めていく
		8 自習内容を学生どうしで分かち合うよう促す
		9 充実した議論のためにもオンラインストレージなどで自習内容の共有を勧める
	(b) 精緻化への 質問	10 互いを尊重しつつ積極的かつ注意深く相手の言葉を聴くよう手助けする
		11 新たに学んだことを自分の言葉で要約するように示す
		12 大局を問う
		13 深い理解の上での知識の共同構築をもたらす質問を投げかける
	(c) 研修	14 幅の広い知識の共同構築をもたらす質問を投げかける
		15 今後応用しうる知識の共同構築をもたらす質問を投げかける
		16 話題に関するチームの知識に見える化するように求める
		17 入門編・上級編の指導者研修を行う
(3) 個々の権限と 集団の管理		18 巡回指導の方策を用いる
		19 学生向けの研修を行う
		20 全体のチームワークにおける個々の貢献・権限・管理の有り様を学生らが振り返る
		21 PBLプロセスにおける指導者の権限と管理の問題を指導者から話題に取り上げる

れている質問例を表2にまとめた。そして(c)研修では、PBLを支える哲学を理解していなければ、各プロセスでどう振る舞うべきで、どう振る舞ってはならないのか実感が伴わないため、ロールプレイ²や「危機的事態 (critical incident) 」 (p. 119) の経験交流、さらには各国の事例検討を通じて、チームワークや情報リテラシーを高める水準を理解するなど、学び方を学ぶ意義に関心を向けることが奨励されている。

3つめの側面である個々の権限と集団の管理については、小集団による学びのシステムとスタ

イルゆえに、功利性や効率性が重視されることで協働性が低くならないようにするための方針が示されている。ちょうど、日本語でも「私的には」や「私の中では」といった語りは、個と集団を区別し、責任を回避し、貢献から縮退する際の常套句である。そのため、特にプロセスの終了時には、次の機会のために何を教訓とすべきかを語り合うことで、小さな失敗を大きな挫折にしないための指導者からの働きかけも重要である。また、指導者自身も自らの振る舞いが抑圧を生んでいると批判的に内省し、指導者

表2：知識の共同構築のための質問の例 (Barrett, 2017, pp.108-112をもとに筆者作成・訳は筆者)

大局を問う	そもそも何が目的なの？ 依頼者、顧客、聴衆はどんな人？ その提案になったのはなぜ？ どんな結果を目指しているの？ なんでそう思うの？ どうしたらいいの？
知識を深く理解する	問題の核は何？ 問題をどう定義する？それはなぜ？ 自分の学習課題をどう説明できる？ なぜxにこだわるの？ なぜその手順、手法、技法なの？ Xの学術的な根拠は何？ Xにはどんな反証がある？ それを良い議論だと思うのはなぜ？ なぜそれらから引用したの？ その研究論文では何が主張されているの？ その論文の核心は？ 問題に取り組む上でこれらには何の意味があるの？ Yだと都合のいい点と不都合な点は何？ 現時点で最も重要な論点は何？ あなた自身は何に賛成しているの？ 反対意見は？ それにどんな意味があるの？ あなたの主張はどうつながっているの？ この間の調査や指導で明らかになった重要な概念をどんな風に捉えているの？ Zのどこが新しいの？ どうやって学んだの？ その事についての文献ならどれを仲間たちに勧めるの？それはなぜ？ この問題に取り組んだことで問題解決の何を学べたの？
知識の幅を広げる	今の問題に関わる社会的、倫理的、文化的、政治的な論点は何？ そうした要因はそれぞれどう関連し合っているの？ 問題を位置づける上で誰の声を聞くの？どんな人の話には耳を傾けないの？ 追跡調査するなら、どんな専門家やその他の人脈が役に立ちそう？ 多分野の専門家に頼るとどんな見立てがもたらされる？ 他の国ではこの問題をどのように扱われている？ どんな分野の文献を探せばより広い視点が得られる？ その文献では何が主な論点になっている？ この分野に詳しい学者・研究者・有識者は誰？ 問題に対する理解は、これまでの指導での議論でどう広がった？ これまで一緒に学んできたことをホワイトボードに書き描いてもらえる？
知識を応用する	何が一番重要な？それはなぜ？ その知識を今後の人生でどう活かす？ 個人でもチームでも何か3つするなら、どうする？その理由は？ 現場の方々はどう感じているかしら？ この状況下ではどんな倫理観が求められる？ 今の状態に対してはどんな共感が得られそう？ もっとコスバがよくエコロジカルで社会包摂的な動き方は？ この問題に取り組んで専門的に介入する際のレパートリーをどう広げられた？ 別の機会、未来の職場、活動の現場で、今回の学びをどう活かす？ 同じような問題に取り組むときのためにどんな技能を高める必要がある？ あなたの専門性はどう磨かれている？

の信念、行動、態度がもとで、学生どうしの関係構築、また指導者と学生との関係構築に困難をもたらさなかったか検討する意義も、この側面から見出すことができる。

4. 自信を過信にしないために

第5回から4回にわたって、Barrett (2017) による心理学を基軸としたPBLの新しい理論の解題を行ってきた。実は本連載に並行して全文の日本語訳を進める予定だった。しかし、アイルランドとは教育・学習環境が異なることもあって、熟慮の只中にある。それでも、同書の全体像(第5回)を捉えた上で、4章(フロー：第6回)、2章(学習者の越境プロセス：第7回)、3章(指導プロセス：今回)の順番で読み解いたことは、改めてPBLに関する筆者の理解を深めることになった。

第3章の結論部分に、PBLは「荒れた天気」か「新建築の建設中」かを問う箇所がある(p.124)。チームワークでは常に好天に恵まれるわけではない。また、机の上で描かれた設計図を現実のものにするには現場で相当な危険を伴いながら作業をせざるをえず、多様な人々の職能が欠かせない。無論、その他に比喻でも玄妙な言い方ができるだろう。

筆者はサービス・ラーニングの教育実践では、予め固められたシナリオに基づく閉鎖系の学びで

はないことを「スノーグローブ」の比喻を用いて示したことがある(山口・河井, 2016)。指導者の信念、行動、態度によって、学びの環境は大きく左右されることを痛感した経験から示したものである。とりわけ、プロジェクトの進展に不安があるとき、また学習者の信念、行動、態度に不満があるときには、自らが良しとする哲学を学生らに押しつけてしまう可能性が高い。一方、指導者が自信に満ちあふれているときには、学生らからしてみれば根拠の不明な美学が押しつけられたと捉えられることもあろう。

本稿を脱稿する直前、2019年2月24日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されたシンポジウム「被災と復興の証人とこれから」に出席した。その第1部で本誌の団士郎編集長が「社会全体がアマチュア」になっている現代では「正しさに執着しない」意義について、漫画を通して聴衆に語りかけた。ふと、筆者には絵を描く力はないものの、図で解く力や写真で示す力はあるかもしれない、と感じた。今回をもってBarrett (2017)の解題から離れ、大学と地域の連携による学生の学びと成長の手法などについて、図や写真や比喻などを用いつつ、筆者の実践から謙虚に紐解いていくことにしたい。

(gucci@fc.ritsumeai.ac.jp)

【引用文献】

- Barrett, T. 2006. A problem as a provoker of a space betwixt and between old and new ways of knowing. In Poikela, E. & Nummenmaa, R. (Eds.), *Understanding problem-based learning* (pp. 37-39). Tampere: Tampere University Press.
- Barrett, T. 2017. *A New Model of Problem-based learning: Inspiring Concepts, Practice Strategies and Case Studies from Higher Education*. Maynooth: All Ireland Society for Higher Education (AISHE).
- Barrett, T. and Moore, S. 2010. An introduction to problem-based learning. In Barrett, T. and Moore, S. (Eds), *New Approaches to Problem-based Learning: Revitalising Your Practice in Higher Education*. (pp.3-17), New York: Routledge.
- Barrows, H. 1988. *The tutorial process*. Springfield, IL: Southern Illinois University School of Medicine.
- Schmidt, H, G. 1983. Problem-based learning: rationale and description. *Medical Education* 17, 11-16.
- Schmidt, H, G. 1993. Foundations of Problem-based learning: Some explanatory notes. *Medical Education* 27, 422-432.
- 山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. *京都大学高等教育研究* 22, 43-54.

【注】

¹図1の原典では、Barrowsによる1989年の著作をもとに作成されたとあるものの、Barrett(2006)の書誌情報を鑑みれば、1988年が初版のBarrows(1988)によるものと同定した。

²ロールプレイの例としては、学生のキャラ設定(好奇心旺盛で良心的、横柄で私語が多い、内気、社交的で人間関係を円滑にする、グループワークが苦手)を行い、グループワークが不全な状態にどう向き合うか、が紹介されている(p.117)。その他、PBLの受講経験がある学生から事例紹介してもらい、どんな指導者だと学習を高め、一方で阻害するかを議論する方法も示されている(p.118)。加えて、ロールプレイの映像分析も効果的であり、効果的と思われる点を自己評価、他者からのポジティブフィードバック、続いて改善点の自己分析、最後に他者からの改善点の提案の順で意見交換を行うと、自らの長所を確認し、他者の声に耳を傾けることに気が向き、発達のフィードバックに取り組むことができるとある(pp.118-119)。



接骨院に 心理学を入れてみた

〔7〕

寺田接骨院 寺田弘志

ギカイケツ

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の職場です。
体のどこかをいためた人たちが、ここを訪ねて来られます。

「今日はどうされましたか？」

「右に顔を向けると、右首と右肩が痛いんです」

「いつごろからですか？」

「数日前からです。様子を見ていたんですが、一向に良くならないので来ました」

「原因は何か思い当たりますか？」

「たぶん、寝違えかと思います」

「まだ、どこにもかかっているんじゃないのですか？」

「はい。こちらが初めてです」

「自分で何かされたことはありますか？」

「湿布を貼ってみましたが効かなくて……。あと、顔を右に向けるストレッチをしてました」

「はい。では、お体を拝見しますので、ベッドに仰向けに寝てください」

「はい。上を向いて寝たらいいんですね。あっ、いたた……」

「大丈夫ですか？」

「はい。寝てしまえば大丈夫です。寝るときに一瞬痛みます」

「痛いところはどのあたりですか？」

「首のこのあたりから、右肩のこのあたりまでです」

「首を触ると痛いですか？」

「はい。痛いです。肩は、あっ、そこが痛いです」

「右に顔を向けて触るとどうですか？」

「もっと痛いです」

「左に向けるとどうですか？」

「あれ、あんまり痛みませんね」

「ということは、筋肉が伸びすぎて痛みが出ているようですよ」

「そうなんですか」

「ですから、顔を右に向けるストレッチをすれば、余計に伸びすぎてしまうんです」

「じゃあ、私はかえって悪化させることをしていたんでしょうか？」

「そうですね。良かれと思ってしていることが、治りを悪くさせてしまうこともありますね」

「私はどうしたらいいんでしょう？」

「伸びすぎたところを縮めて元にもどす施術をしていきますから、普段は痛みの出る動作をしないようにしてください」

「わかりました」

この患者さんのように、体を良くしようと思ってやっていることが、かえって体を悪くさせているとケースは非常にたくさんあります。

- ・健康のためにやっている体操やスポーツ競技で、かえって体をいためてしまった。
- ・股関節が開くようにしようとストレッチして、脚を開きすぎて股関節をいためた。
- ・肩こりを治そうとして、もみすぎた。あるいは肩たたきをしすぎた。
- ・脚を丈夫にしようとして、スクワットしすぎて膝をいためた。
- ・こむらがりやを予防するために、ストレッチしすぎたら余計につるようになった。
- ・腰痛を治そうとして、腰を温めたらかえってうずいた。

このような努力を私は、心理療法の用語を転用して「偽解決（ギカイケツ）」と呼んでいます。

心理療法では、解決しようとしてやっていることが、かえって問題を悪化させたり、長引かせたりするときに、それを偽解決と呼びます。

元の言葉は英語で Attempted solution 「にせかいけつ」と読むこともあるようです。

たとえばこんな例も偽解決です。

- ・人前であがらないようにしようとして、余計にあがってしまう。
- ・眠ろう眠ろうと努力して、眠れなくなる。
- ・ストレス解消のために、酒やタバコ、やけ食いなどでごまかして、かえってストレスを増やしてしまう。
- ・強迫行動をやめさせようとすればするほど、強迫行動をする。
- ・勉強させようとすればするほど、勉強をしなくなる。

心理学では、このような偽解決の悪循環をいかに断ち切り、真の解決につなげていくかが考えられてきました。

身体分野では、あまりそういう研究がないのが現状です。

今後そういう考えがもっと広まってほしいものです。

- ・こういう運動をしたらいい
- ・こういうストレッチをしたらいい
- ・このツボを押すといい
- ・これを摂ったらいい
- ・これを塗ったらいい

テレビや雑誌などには、そういう安易なアドバイスがあふれています。

それを信じて実行して、かえって悪化したという話を、私はたくさんの患者さんからうかがっています。

試してみるのはいかまいませんが、効果が出なければ、偽解決という言葉思い出してください。テレビで言っていたから、お医者さんが言っていたから、大学の先生が言っていたからと信じて、やり続けるのはやめましょう。

権威と呼ばれるような人が言ったとしても、NHKの番組で言っていたとしても、妄信するのはやめましょう。

偽解決になってしまうことの中には、別の人には有効だったということがたくさんあります。それを本人が良いことだと信じていることもあるし、アドバイスする人が良かれと願って言っていることもあります。

悪意がなく、善意から出ていることがほとんどです。

偽解決は、真の解決と似ており、ちょっとした違いしかないということもよくあります。ですから、偽解決は真の解決ではないということがわかりにくく、やめにくいものなのです。

頭の体操

次の四角の中に解決と違うものはいくつあるでしょう？（答えは最後にあります）

解決	解決	解決	解決	違決	解決	解決	解決
解決	解次	解決	解決	解決	解決	解決	解決
解決	解決	解決	解決	解決	解決	解決	解伏
解決	解決	解決	鮮決	解決	解決	解決	解決
解決	解決	解決	解決	解決	解決	蟹決	解決
解訣	解決	解決	解決	解決	解決	解決	解決
解決	解決	解決	解決	解決	解沃	解決	解決
解決	解決	偉決	解決	解決	解決	解決	解決

私は施術中に、患者さんが偽解決に陥っていらっしやることに気づくことがあります。患者さんに偽解決という言葉は使いませんが、「それをやめたほうが早く治りますよ」とアドバイスしています。

私自身も、偽解決という言葉をお忘れないようにしています。自分の施術が患者さんにとって偽解決になってないかを、注意するように心がけています。体への施術は、偽解決がとても起こりやすい行為なのです。たとえば、Aという筋肉を伸ばす姿勢をとったときに痛みが軽くなったとします。Aが縮んでいて痛みが出ていると考えて、Aを伸ばす施術をすると痛みが消えることが多いのです。ところが、いくらAを伸ばす施術をしても痛みが消えないことも少なくないのです。そういうときは、初めの判断を見直す必要があります。もう一度調べてみると、初めと違う点に気がつくことがあります。たとえば、次のような点です。「Aという筋肉を伸ばす姿勢をとったときに、Bという筋肉も一緒に伸びていて、実はBが伸びたことで痛みが軽くなっていた」このとき、Aを伸ばす施術は偽解決であり、Bを伸ばす施術が真の解決なのです。

あやうく偽解決の施術をしそうになったときは、私は「偽解決、偽解決」と心の中でつぶやいて、
 気をつけなくては思います。

そして、どんなことで偽解決の施術をしそうになったのかを忘れないようにし、日々の施術に生
 かしています。

いろいろな漢字でギカイケツを表してみた



- | | | |
|-------------|--------------|----------------|
| 擬解決：見せかけの解決 | 疑解決：疑わしい解決 | 儀解決：名目だけの解決 |
| 戯解決：あそびの解決 | 義解決：本気と違う解決 | 犧解決：何かを犠牲にした解決 |
| 宜解決：都合のいい解決 | 議解決：言いくるめた解決 | 欺解決：あざむきの解決 |
| 蟻解決：ちいせえ解決 | 妓解決：色仕掛けの解決 | |

ギカイケツを、他のギと読む漢字で表してみると、胡散臭い解決がいろいろできました。
 ギと読む漢字には、パワーを感じるけれどもそのパワーが摩擦や齟齬を引き起こすようなものが
 多いように感じました。

ちょうど黒川伊保子さんの「怪獣の名はなぜガギグゲゴなのか」を買っていたので、ギという音はどのような印象をかもし出すのか知ろうと読んでみました。

ところが、読んでみると、タイトルの答えも、ガギグゲゴはどのような音なのかも書かれていないのです。男は濁音（B、D、G、Z）が好きで、女性は母音やS、H、M、Nなどが好きということはわかったのですが、肝心のG（ガギグゲゴ）の説明がないのです。

まさに、欺解決になりました。

男性なら「ギカイケツ」という読みを好み、女性なら「にせかいけつ」という読みが好みかもしれません。あなたはどちらの読みが好みですか？

頭の体操の答え 8つ

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑦ 対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について

～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

「関係性」をキーワードに現代社会について考察するこの連載ですが、今回は、対人援助の場面における「専門家」と当事者及びその家族との関係性について、特に「専門家からの情報伝達」と「当事者等（家族を含む）の状況のアセスメントと感情の取扱い」という2点を軸に私論を述べさせていただきたいと思えます。

なおこの連載では通常は対人援助職という用語を使うべきところ、今回の連載については、当事者等の視点から、数多くの情報や技術を持ち自分の抱えている課題の解決に力を発揮してくれる（であろう）「専門家」という用語を敢えて使用している部分があることを冒頭に申し添えます。

1 はじめに

あらゆる対人援助の場面において、コンプライアンスが重視されるようになってきました。保護観察処遇の現場でも、当事者である保護観察対象者等に対し、伝えるべき様々な事項（制度や手続に関すること）を確実に伝えることが必要であることは言うまでもありません。しかし、様々な制度や手続に関する説明を行う初回面接の場面では、保護観察対象者

等との信頼関係の構築（私自身は家族療法におけるジョイニングの考え方を重視しています）についてもまた重要であり、これをおろそかにしないように私は心がけています。

今回私が課題として提起したいのは、「確実に必要な情報を当事者等に伝達すること」と「当事者等（家族を含む）の状況のアセスメントとその感情の取扱い」のバランスの取り方についてです。これは実は対人援助の現場においては基本的な事項であると思われませんが、「当事者等（家族や環境含む）のアセスメント」「支援の展開過程」「ケアマネジメント」等の事項に比較して、当事者等に現場で向かい合う対人援助職個々の経験やその場の判断に委ねられがちな面もあるのではないのでしょうか。「対人援助職たるもの、そのようなことはできて当然だ。」と判断される向きもあるかもしれませんが、少なくとも私自身については、新人時代には、「説明すべき事項を漏らさず説明できたか。」「アセスメントに必要な項目を確実に聴取できたか。」ということに対して、どうしても注意が向きがちであり、十分に当事者等の思いをくみ取れたらどうかと振り返ることも少なくありませんでしたし、今でもこのバランスは重視しています。

対人援助の現場に立ち現れる当事者等の状況は様々です。特に保護観察対象者の場合は、多くの福祉分野のように、当事者自身の援助希求（申請など）によって処遇が開始されるのではなく、家庭裁判所による決定（処分）、裁判所での判決確定、あるいは少年院・刑事施設等からの仮釈放の際の遵守事項（約束事）など、いわば（本人の意向以外の）「外的な枠組み」が定められることによって保護観察処遇が開始します。当然、当事者自身に保護観察を受ける意思が希薄であったり、内心不満を抱えている場合もあり得ます。また、保護観察を受けることについては納得していても、能力的な制約があり、説明に際して相当配慮を必要とする場合もあります。ですから、特に初回面接においては、保護観察対象者や同行した家族等の様子をきめ細やかに観察し、不安や不満については十分に受け止めながら、制度や手続についての説明を行うように配慮しています。初回面接だけではなく、その後の処遇の過程においても、折々に理解を促す工夫もなされています。

2 「専門家」としての説明責任について

「専門家として当事者等に対する説明責任を果たさなければならない」ということは当然のことですが、実際に当事者等を前にした時、そうした「専門家としての責任感」やもっと平たく述べると「コンプライアンスに関する意識」が先行しすぎると、目の前にいる当事者等の状況のassessmentや思いをくみ取ることが十分になされないまま、時には専門用語も交えた膨大な情報が当事者等に伝達されることになり、当事者等の混乱を招くことになりかねないと感じることがあります。

当事者等が対人援助の現場にたどり着く経緯は様々であることについて、対人援助職は思いを致す必要があると私は考えています。

自ら公共機関のホームページなどにアクセスし精度の高い情報を入手した上で相談することを決意したのか、他機関からの紹介なのか（十分な説明を受けている場合もあれば、いわゆる「丸投げ」の場合もあり、特に後者の場合は「たらい回しをされた」という気持ちが生じていることも想定しておきたいところです）、「〇〇に行けば解決してくれるらしい」という不確実性の高い情報でとりあえず藁をも掴む気持ちで相談したのか、家族・親族などに半ば強制的に連れてこられたのか、本当に様々な状況が想定されます。つまり、当事者等が対人援助の現場に現れる経緯も、その過程で生じる当事者等の気持ちも一様ではないのです。例えば、「支援機関に関する情報にアクセスできる」ということも当事者等の状況をassessmentする一助になると思われます。児童虐待やDVなどで保護された場合は、緊急性もさることながら当事者等が非常に混乱している状況が多いと容易に想定されますし、医療機関への救急搬送等の場合も同様と思われます。

まずは制度説明を行ってそれから支援につながる手続に着手する場合もあれば、一刻を争う事態（医療機関への救急搬送等）には、まず命を救うことや安全を確保することが最優先となると思われます。ただ、いずれの場合にも、専門家として当事者等に制度や手続について説明したり、医療機関の場合は診断やそれに伴う治療方針等について、福祉サービス等を行う機関であれば、今後の支援の方向性について、当事者等に「伝える」場面は必ず生じます。

そうした際には、正確に伝達することはもちろん必要ですが、当事者の置かれた状況や心情への配慮は欠かせないと考えられます。その後の支援を展開していくためのassessmentを行う上でも無論ですが、当事者の個々

の状況に配慮したジョイニング(波長あわせ)を当初の段階できちんに行うことが、専門家と当事者等との間の信頼関係の構築には不可欠であると私は考えています。

現在ではインターネットで多様な情報が入手できるようになり、一見専門家顔負けの情報を携えて相談の窓口を訪れる当事者等もおられます。ただ、多くの場合、自分にはない情報や技術を持った「専門家」に対して、困っている課題や問題を解決して欲しいという期待が当事者等はあると考えられます。そうした当事者等にとってまず必要なのは、まずは「専門家に対して相談に来たこと」(対人援助の場に自分がやってきたこと)に対する安心感であり、安心して相談できる関係性を構築していくことではないでしょうか。

それは決して、専門家が「大丈夫です。任せてください。」と安請け合いをすることでもなく、支援方針を決定していく上で当事者等を排除することでも勿論なく、当事者等が対人支援の現場に立ち現れるまでの経過に十分に思いを致した上でなされる「ねぎらいやいたわりの言葉掛け」「安心して相談できる雰囲気作り」によって達成できるのではないかと考えられます。

漏らすことない詳細な説明や、正確無比な診断結果や処遇方針の伝達であっても、そうした配慮の上にそれらがなされなければ、当事者等に過剰な負荷がかかってしまい、混乱を招くこともあります。

3 看取りの場面での専門家と当事者等との関係性

私事ですが、私は平成30年12月末に義父の看取り・見送りをしました。平成16年に脳出血で倒れ入院、退院後は半身マヒは残りつつも私の配偶者が用意したバリアフリー住宅で穏やかな生活を送っていました。しかし

誤嚥性肺炎から肺水腫に陥り身体状況が急激に悪化、救急搬送後1週間で看取りを迎えることとなりました。

搬送先は高度な治療を行う医療機関であり、医師も看護スタッフも最大限の手を尽くしてくださったと思います。この段階に至るまで、我々家族は介護保険上のサービスや医療を実施するスタッフの方々、御近所や親戚の方々、「認知症の人と家族の会」のメンバーの方々に支えられ、猛暑が予想された平成30年夏にはロングショートステイの活用により在宅ケア上のリスクを回避するなど、出来る限りの手を尽くしてきました。ただ、年齢的なこともありましたが、救急搬送後は既に看取りの覚悟も決めていたつもりです。ただ、搬送後様々な検査を経て医師からいただいた「あらゆる状況を想定した詳細な説明」を義母は受け止めきれませんでした。専門用語を多用されたわけでもなく、言葉もとても柔らかでしたが、義母にとっては情報量自体が大きな負荷になっていました。覚悟を決めているとはいえ、専門家である医師に縋りたい気持ちも強く、「大丈夫です。」という言葉は無理であっても、最悪の状況を説明されることには耐えられなかったのです。ちなみに義母も後期高齢者で、心身の不具合を抱えている状況でした。

結果的には我々夫婦と医療機関で協議し、病院からの第一報は私が受け、そこから私の配偶者や義母に連絡を取って動くことになり、何とか看取り・見送りをすることができました。義父が亡くなる前日、看取りに駆けつけた我々家族、特に高齢の義母に対し、医療スタッフが様々な労いの言葉や控え室での暖かい寝具の用意などの配慮をしてくださったことにより、義母も少しずつ落ち着きを取り戻していきました。亡くなる前日の義父は、大量の酸素を送られながらも既に下顎呼吸が

始まっており意識もない状態でした。「お父さん、とても苦しそう。見てもらえない・・・。」と嘆く義母に対し、医療スタッフの方が「こうしたお姿をご覧になっている御家族もお辛いですね。ただ、御主人様は今は痛みや苦しみをお感じになっていることはないと思われまますよ。」と、説明の前にワンクッションおいた声かけをしてくださった時、義母の表情が少し緩んだのを感じました。義父が入院したのはHCU（ハイ・ケア・ユニット）という特別な病床であり、医療スタッフも看取りへの対応や家族へのケアについて習熟しておられることが推察され、そうした経験やスキルに基づく細やかな配慮が、家族にとっては何よりも有り難いことでした。

4 まとめ

実はこの原稿は義父の納骨を済ませた後に執筆しています。第7回目の連載は別のテーマにする予定でした。対人援助の場面におけるコンプライアンスに関することはずっと関心がありましたが、今回思わぬ形ではあります。私自身が当事者としての立場からもこれを考えさせられる経験をしたことで、考察なども十分に深まっていない段階ではありますが、敢えて書かせていただくことにしました。また機会があれば、更に検証や検討を加えたものを書かせていただくことができればと思っています。

当事者等が抱える課題を専門家が全て解決できるわけではありません。それは依存症を初めとする多様な分野での自助グループの活動が年々活発になっていることから理解できることと思われまます。私自も夫婦で参加している「認知症の人と家族の会」での例会における智恵と情報の分かち合い、何よりも同じ立場の者同士の情緒的な支え合いにどれだけ救われたかわかりません。

義父を見送った後、私の配偶者が初めて喪主を務め私は喪主の妻として葬儀を営みました。葬儀は宗派や地域性、親族間の関係性など様々な要素が反映されるものなのでマニュアル通りにはとても進められません。我々は数多くの分家の中でも一番の若輩者であり、近しい親族の方が支えて下さらなかったら父を送ることはできなかつたと思います。様々なしきたりに関しても多くのお教をいただきましたが、それも一度に全ての情報を伝達するのではなく、要所要所で声をかけてくださり、それでも漏れてしまう場面ではさりげなくサポートして下さる、という方法でした。もし一度に全ての情報を伝達されていれば、我々は到底その情報をきちんと処理して喪主夫婦としてなすべき行動に落とし込んでいくことはできなかつたと思います。対人援助場面での専門家としてのコンプライアンスの在り方を考えさせられていた折ですので、なおさらその有り難みが身に沁みました。確認させていただかなければならない事項があまりにも多く、恐縮する我々に対して一様に「こんな時はおだがいさまだっちゃ〜」と返してくださったことから、学ぶべきことは本当に多くありました。

人は誰しも自分以外の誰かの支えなしでは生活を営むことはできません。対人援助とひとくちにいても、それは必ずしも専門機関という場において対人援助職という専門家と当事者等との間になされるだけのものに限らず、当事者間の支え合いもあれば、地縁血縁における相互扶助もあるということ、今回のことで改めて体感しました。これらが社会において重層的に構築されていくことが、誰にとっても生きやすい社会の実現につながるのではないかと考えています。

「対人援助通訳の実践から」

第7回

飯田奈美子

1. はじめに

平成30年12月の臨時国会において「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、「新たな在留資格」と呼ばれる在留資格が創設され、今年の4月から施行が開始されます。今後日本では働く外国人が増加することになります。

それにより政府は増加する在留外国人に対処するための受け入れ支援策も作成しました。その中には、外国人対象の相談のワンストップサービスや医療などの通訳に対する施策に対する予算も計上されています。

このような突然の外国人受け入れ支援に対する予算処置に各自治体、地域国際化協会は慌てふためいています。

それを見据えていたわけではないのですが、ちょうど京都市国際交流協会で行行政通訳相談員採用試験マニュアルを作成していることもあり、3回にわたって、外国人住民に対する通訳相談支援システム構築に重要な点をのべていきたいと思います。

2. 「新たな在留資格」創設の背景

「新たな在留資格」の創設は、今までの日本政府の方針を180度変更させるものでし

た。従来、日本政府は表向き、単純労働の外国人の受け入れないというものでしたが、この新たな在留資格創設により、単純労働を行う外国人労働者を受け入れるという方針になりました。

従来、日本では単純労働の外国人を受け入れないというものでしたが、実質的には単純労働者をたくさん受入れてきました。一つは、技能実習生という名目で、もう一つは留学生という名目で、です。

技能実習生は、日本の技能、技術又は知識を開発途上国等出身者へ教え、身に付けるという「実習」を目的に来日するものです。しかし、実質は単純労働を行う労働者として受け入れ、最低賃金、もしくは最低賃金以下で労働させています。中には、残業代を安い時給に設定したり、もしくは払わないケース、パワハラ、セクハラがあるケース、パスポートや銀行通帳を管理して、逃げ出さないようにするケースなどがあります。技能実習生は日本に来日するために、ブローカーから多額の手数料を要求され、多くは借金をして来日をしています。ブローカーから日本で働けば借金は返すことができ、貯金もできて帰国したら家も建てられると言われ、それを信じて多額の借金をするの

です。そのため、配属された実習先（職場）が劣悪な環境であっても、借金があるため帰ることができず、我慢をして働き続けるしかない状況があります。

他方、留学という名目で来日させ、アルバイトとして単純労働を行うケースがあります。コンビニや弁当工場などでよく働く姿を目にします。彼らは、日本語学校に留学し、留学生等が得られる「資格外活動許可」を得てアルバイトをするのです。この許可を得られれば週 28 時間（夏休みなどは 1 日 8 時間）就労することができます。学業をおびやかさない程度の就労が認められているにもかかわらず、規定時間以上にアルバイトを行う（それが目的の）留学生もいます。このような留学生は、本国のブローカーから、留学の在留資格で就労できると聞き、就労目的で来日をするので、学業を行う時間も体力もなく（日中のバイトだけではなく夜勤も掛け持ちすることもあるため）、日本語学校では勉強を行わず寝てばかりというケースもあります。そのため日本語が習得できず、また、学費を払わないと日本語学校に在籍することができないため、低賃金の単純労働を行わなければならない状況にあります。

日本での労働条件や環境はいいものではなくてもたくさんの外国人が就労をしています。なぜならば、日本の産業が彼らを必要としているからです。少子高齢化が進み、人手不足の状況のなか、外国人労働者を使いたいという企業、雇い主が増え、彼らの声に押されて、外国人労働者受け入れ政策が誕生したのです。

3. 外国人労働者の問題

技能実習生や留学目的で就労をする外国人労働者には、共通の問題があります。それは、①労働条件・労働環境が日本人に比べて悪いこと ②基本的な人権を尊重された対応がされないこと ③日本語ができないために、誰にも相談できないこと

労働条件・労働環境が悪いことは、上記でも説明した通りです。給料の未払い、長時間労働、契約内容とは異なる仕事をさせられるなど、さまざまな労働に関わる問題があります。技能実習制度では、受け入れ機関があり、何か問題があればそこが支援や相談を行うのですが、受け入れ機関と配属先の職場が同じ組合であったりして、問題が表面化することも少なく、改善まではなかなかされないのが現状です。そして、労働条件だけではなく、パスポートを取り上げられたりして、管理をされている状態にあります（技能実習生）。また、技能実習生が妊娠をしたことで、中絶か強制帰国かを迫られるとの報道もありました（朝日新聞 2018 年 12 月 1 日）。強制帰国させられると、借金が残ってしまい本国で生活することができなくなるのです。生きるか死ぬかそのような状況に追い込まれてしまうのです。実質的に労働者であり、労働基準法も適用される存在であるにもかかわらず、労働者としての権利は行使できない状況にあります。技能実習生など外国人労働者を支援する労働組合は数が少ないですが、存在します。しかし、技能実習生は、受け入れ機関から労働組合に加入したり、接触することを禁じているケースもあり、労働組合に相談することができません。そもそも外部との連絡を取らないようにと携帯電話の保持を禁じているところもあるとのこと。そのよう

な状況の中、日本語もあまりできない技能実習生等が誰かに相談を行うということは、至極困難なことになるのです。

4. 外国人対象の相談支援ワンストップサービス

このような現状が国会でも取り上げられ、政府も対策を取らなければならないということで、全国 100 か所に外国人対象の相談支援のワンストップサービスを行うことになりました（それに関する予算がつくことになりました）。現状としては、急に降ってわいてきた話であり、どこの自治体も何をどうしたらいいかわからず右往左往しているという感じです。

しかしながら、全国に外国人対象のワンストップサービスができることはとてもよいことであると思います。問題は、それが有効に機能していけるかです。相談支援のワンストップサービスは、さまざまな専門領域が関わるもので、一朝一夕では構築できるシステムではないものです。さらに、外国人対象の場合は、外国語と日本語の通訳が必要となり、相談業務と通訳業務を両立させていかなければなりません。どちらも専門性が必要なもので、また、そのシステム構築にもノウハウが必要なものであると言えます。

5. 行政通訳相談事業

京都市国際交流協会では、相談と通訳を行う行政通訳相談事業を 2007 年から行っています。この新たな在留資格の創設によるワンストップサービス設立の話が出る前から、外国人等を対象としたワンストップサービスを行っています。

行政通訳相談事業は、電話で区役所など

行政機関に外国人等が来所し、言葉が通じない時に通訳を行います。また、外国人等が行政手続きや生活上の問題についての相談がある場合、関係窓口につなげ、通訳を行うということをしています。

行政通訳相談事業は、その名も通訳と相談業務を行っており、通訳相談員はどちらのスキルも身に付ける必要があります。スキルの高い通訳相談員がいればそれだけで事業が成立するのではなく、通訳相談員の育成と同じくらいに通訳相談事業のシステム構築が重要になり、両方がうまく機能しないと成立しない事業なのです。

しかし、通訳相談員の育成については重要であることは、大いにはないですが、理解を得られやすいのですが、システム構築が重要であるということは、行政（国レベルでも）なかなか理解はされません。

これは、相談業務を行っていない通訳システムにおいても同じであると言えます。医療通訳にしても、ただ通訳者があるレベルにまで育成さえすれば、医療通訳は問題なくできると捉えられているのではないかと思います。通訳を利用する医療者など専門家自身のユーザー教育も必要ですし、また、通訳依頼側と通訳者をつなげるコーディネート業務も重要となります。

行政通訳相談事業のシステムも通訳相談のコーディネート業務が重要であり、そして、京都市国際交流協会では、コーディネートについてのノウハウが蓄積しており、それを公開する予定でいます。

この連載でも行政通訳相談事業のノウハウを紹介していきます。今回は、行政通訳相談員が求められる能力、育成方法について述べたいと思います。以上

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 6

朴 希沙(Kisa Paku)

前回は、意識のスペクトラムという観点から露骨なヘイトスピーチと曖昧なマイクロ・アグレッションの関係について考察しました。今回は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要なことを、Sue(2010)の提案から考えてみたいと思います。

◎はじめに ～前回のふりかえり～

最近、いろいろなところでマイクロ・アグレッションに関するワークショップを開いています。「無意識的で曖昧な差別や偏見」という言葉だけを聞けば、なんとなくその

意味も分かるような気がするマイクロ・アグレッションですが、実際にその概念について説明したり議論したりしてみると、複雑で定義が難しい部分があるところに気づかされます。例えば始めのころは「単に攻撃的な言動とマイクロ・アグレッションとは何が違うのか」といった疑問を度々いただき、それに対してすっきりとした説明ができずにいました。またワークショップの目的や方向性についても迷いながら進めていたのですが、参加者の方々から率直な意見をもらい、色々な団体とコラボさせてもらう中で、その目的や意義について少しずつ明確になってきた気がします。現在は、コミュニティにおいてマイクロ・アグレッ

ションを取り扱うことから生まれる可能性に着目しています。この社会の全てのマイクロ・アグレッションをなくすことはほとんど不可能だと思いますが、少なくとも自らの属するコミュニティの中でマイクロ・アグレッションについて話しを深めていくことで、コミュニティそのものの質が変化する可能性があるのではないかと考えています。

前回は、露骨なヘイトスピーチと日常的で曖昧なマイクロ・アグレッションについて、気づきのスペクトラムという観点から考察しました。一方の極には、意図的に、悪意を持ってヘイトスピーチやヘイトクライムを行う人々がいますし、他方には無意識的なマイクロ・アグレッションが存在します。これらの言動にはもちろん程度や質の差異が存在します。しかしこの社会で暮らす私たちの誰もが偏見や差別から自由でないのだとすれば、それに対して私たちがどの程度意識的であるのか、という観点もまた必要になってくるでしょう。つまり差別か差別でないかということより、どの程度自らの立場から発せられる言動に意識的であるか、という視点です。

しかし、人は自らの社会的属性や立場に対してどの程度自覚的になれるのでしょうか。そこには際限がないような気がしますし、自らの無意識的な差別や偏見を全て意識化することは実質的にほぼ不可能だとも思います。そこで、今回は問題をやりとりの中で生じる具体的な場面に即して理解するのがよいのではないかとすることを述べました。情けないことかもしれませんが、私たちは立場が異なる具体的他者との出会いやぶつかりあいがあって初めて、生身の

気づきを得るのかもしれませんが。

そして、そのような出会いやぶつかり合いが生じるためには、少なくともマイクロ・アグレッションについて話せる環境が必要だと思います。別の言葉で言えば、これまでいくどとなく「敏感過ぎる」「どうしてなんでもかんでも人種やジェンダーに結びつけようとするの？」と簡単に無価値化(Invalid)され、殺されてきた言葉が息を吹き返すには、マイクロ・アグレッションが生じるのとは異なる環境を整える必要があるのではないかと思います。

そこで今回は、Sue が提案するマイクロ・アグレッションを乗り越えるための原則について紹介したいと思います。

◎マイクロ・アグレッションを乗り越えるために ~Sue の提案~

『Microaggressions in Everyday Life』の著者である Derald Wing Sue は、マイクロ・アグレッションを乗り越えるためには従来の多文化教育だけでは不十分であることを指摘しています。無意識的に生じるマイクロ・アグレッションを乗り越えるためには、知識を得るだけでなく体験的なリアリティから学ぶことが重要になるからです。Sue はマイクロ・アグレッションを乗り越えるために必要な以下の 5 つの原則を紹介しています。

原則 1.人種／民族が異なる人々、女性、LGBT に関して、その集団に属する人から学ぶべし

これは、自らが抱く無意識的な偏見や差別

に関して、その前提と理解を問うためには自分たち自身だけでなく、マイノリティグループに属する人々から学び、検討することが大切であることを意味しています。立場が異なる人々に出会い、学んでいく過程でこそ自らの前提や理解が変化していくからだと思います。

原則 2.マイノリティグループに属する、健康で強い人々から学ぶべし

これは、私たちが普段他のグループに関する情報をマスメディアや（主流文化の視点から書かれた）教科書、親戚や友達や近所の人たちが言っていることを通して得ていることと関係しています。しかし例えばマスメディアにおけるマイノリティグループに関する描写が正確であるとは限りません。Sue はテレビにおいて、黒人は犯罪者、女性は家にいるもの、LGBT は病的なものとして描かれがちだと述べています。逆に言えば、私たちは強く、健康的なマイノリティの人々と出会う機会に相対的に恵まれていません。そのため、強く健康なマイノリティの人々と出会うことを通して、私たちのバイアスがかかった見方を相殺する必要があります。

原則 3.経験的リアリティから学ぶべし

これは、自らと異なる社会的属性をもつ人々に関する理解は、私たちが理解したいと願う人々の経験から与えられなくてはならないことを示しています。その人々が日常的にどのような経験をし、どのようなリアリティの中で生きているかを具体的に知る必要があるということです。在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人

のためだとしても（してもの会）」では、特にこの経験的リアリティを共有し、エンパワーしていくことに重点をおいていました（詳しい話はまた次号で!）。

原則 4.バイアスと恐怖に対する継続的な警戒心から学ぶべし

Sue はおそらくこれが最も難しいことだといいます。私たちは、自らの無意識的な偏見や差別が表に出てくると、強烈な不安や罪悪感、防衛心を感じるからです。そのため、自らが抱く偏見に対して探求することが難しくなります。しかし、その即時的な反応を乗り越えて、自分は誰かに偏見を向けてしまったりそれに基づいた行動をしてしまったりする可能性のある存在であることを受け入れ、自分が傷つけてしまったかもしれない誰かとオープンなコミュニケーションを続けることができれば、私たちは自分自身に対して正直になってゆく旅を歩み始める事ができます。そしてそれは結果的に、私たち自身や私たちの友人にポジティブな変化を起こすというのです。

原則 5.レイシズム・セクシズム・ヘテロセクシズムに対抗する個人的行動に参加することから学ぶべし

これは、家庭や職場、コミュニティといった日々の生活の中にある差別と偏見に対して直接的な行動を行うことを意味しています。マイクロ・アグレッションは、個人の間で生じるもののように見えますが、実際には私たちの社会の不平等なシステムの現れだと言えます。だからこそ、私たちは個人的なレベルだけでなく、システムティックな行動を通してこの暴力について訴えて

いく必要があります。以前、マイクロ・アグレッションに関するワークショップを行った際、参加者の方から「私は本当に偏見など抱いていないのです。ですが『私は偏見など持っていないよ』と伝えたらマイクロ・アグレッションになる。だとすれば、どうやって自分が本当に偏見を持っていないことを伝えたらいいんですか？」と質問されました。その答えは、まさにここにあると思います。自らが偏見を持っていないことをマイノリティ集団に属する誰かに言葉で説明し納得してもらいよりも、この社会にあふれるレイシズム・セクシズム・ヘテロセクシズムに対して日常的な場面で対抗することの方が有効だからです。

以上、今回は Sue が提案するマイクロ・アグレッションを乗り越えるために重要になる実践について紹介しました。参考になったでしょうか？次回以降は、「してもの会」での活動とそこから得られたマイクロ・アグレッションを乗り換える対話に関して述べていきたいと思います。

【参考文献】

Sue, D.W.(2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑤『花もて語れ』

迫 共
(浜松学院大学)

「朗読の漫画がある」と聞いたとき、たいへん驚かされました。朗読は音声による言語表現。それを漫画という絵と文字の世界でどう表現するのだろうか。でも音楽を題材にした漫画もあるのだから、と手にとったのが片山ユキヲ『花もて語れ』でした。

主人公、佐倉ハナは内気で声が小さく、人間関係が苦手。大学卒業を機に上京して就職しますが、入社早々に周りとの関係につまづきます。そんなハナが出会ったのが朗読教室。小学生時代、唯一ほめられたのが劇のナレーターだったハナは、これならと始めた朗読を通して成長していきます。

この作品にはハナだけでなく、一般に「コミュ障」と言われそうな女性キャラが登場します。ハナの取引先の社長令嬢、佐左木満里子はハナとの出会いによって5年にわたる引きこもり生活を脱します。最終盤に登場する五十土（いかづち）園子は、数人しか声を聞いたことがないような極度の人見知りなのに圧倒的な朗読の天才です。五十土は朗読の舞台を離れていましたが、ハナへの興味から再び舞台に立ち、過去へのわだかまりを解決します。ハナ自身も朗読を通して、聞き手の心を勇気づけられる自信を身につけていきます。「悩みの答えは、頭で作るものじゃなく、人に出会って触れた心の中にある」「私が一人の表現者として朗読に今一番に込められる思い、それは私が私の人生そのものから感じたそのことだ」。第13集にある台詞はハナの成長を感じさせてくれます。

主人公が様々な経験を通して成長する物語は、漫画の王道ともいえる形式です。『花もて語れ』では主人公ハナの成長が「朗読を通して」であるところに大きなポイントがあります。文学作品を読むことは作品をイメージの世界で追体験することです。この追体験は、読者自身の今おかれている状況についての深い理解や、過去の経験の意味の捉えなおしに繋がっていきます。『花もて語れ』では文学作品それぞれのもつイメージの世界に加えて、それを朗読し味わいながら、登場人物が作中での経験の捉えなおしが描かれています。漫画を読む私たち読者は、二重の読書経験をすることになります。

第1集から第2集にかけて、ハナはひきこもっていた満里子の部屋で宮沢賢治の「やまなし」を朗読します。この場面では、賢治の世界に触れることで満里子が経験の捉えなおしをします。

大学4年生だった満里子は、周りが就職先を決めていくなかで自分のやりたいことが分からず、就職活動に疲れ、焦っていました。そんなとき、思い出されてしまうのは中学生の頃から小説家を目指して出版社の賞に応募していた妹が亡くなったことです。満里子は、明確な夢に向って努力していた妹が死に、やりたいことが分からない自分が生きていることが気がかりで耐えられなくなり、引きこもったのでした。

妹はなぜ死んだのか、自分はなぜ外に出る気になれないのか分からず、父親の前で泣き崩れていた満里子。ハナは彼女のために「やまなし」を朗読します。

川底に住む沢蟹のきょうだい。川には巨大な弾丸のようなかわせみが現れ、きょうだいの目の前で魚をさらっていきます。でも、やまなしの実もぼかぼかと流れてきます。蟹の父親は「ついて行って見よう、ああい匂いだな」ときょうだいを誘います。朗読を聞いた満里子は父と妹とともにすごした記憶を思い出します。この世には死や絶望も降りかかるが、生きる喜びや幸運も降ってきます。それを子どもに伝えようとする父親の願いを満里子は感じ取ります。

満里子は朗読から妹の記憶を引き出されます。「私は妹をおいて行けない」と涙ぐむ満里子に、妹は「行けばいいんだよ」「お父さんにそう習ったでしょ？」と微笑みかけます。満里子は記憶の中に閉じ込めていた妹のイメージと和解をはたし、感謝とともに別れます。「バイバイ、お姉ちゃん」と妹の声を聞いた気がしました。

満里子は大きな感情の開放とともに座り込んでしまいましたが、この経験がもとになって引きこもりを脱し、アルバイトをはじめて自身も朗読教室に参加することになります。

第7集では朗読イベントの舞台上で、満里子が宮沢賢治の「おきなぐさ」を朗読します。

おきなぐさのきょうだいが銀毛の房に姿を変えて、春の風に吹かれて今にも飛びたちそうな場面。ひばりが「どうです。飛んでいくのはいやですか」とにこやかに問いかけ、おきなぐさは「なんともありません。僕たちの仕事はもう済んだんです」と答えます。奇麗なすきとおった風が吹き、「さよならひばりさん」「お日さん、ありがとうございました」と叫んだきょうだいは、星が砕けて散るようにはらばらになって北へ飛び散ります。ひばりはまっすぐに空へ飛び上がり、銀毛に追いつけなくなったときに短い別れの歌を贈りました。

満里子の朗読のイメージでは、おきなぐさのきょうだいは自分と妹です。満里子は妹のイ

メージとの別れを、「やまなし」では朗読の聞き手として味わいました。「おきなぐさ」では語り手として再び味わっています。

私たちは身近な人との別れの傷を、満里子のように繰り返し味わいつくして消化するのかもしれない。文学作品の朗読による追体験は、ドラマワークやイメージワークのように語り手や聞き手に作用する一面がありそうです。聞き手よりも語り手としての方が、より大きなカタルシスがあるように感じられます。

文章を読むことは受動的な行為のように考えられがちですが、朗読の場合は語り手にとってはもちろん、聞き手にとっても能動的な行為なのだと認識を新たにしました。

『余地』

～相談業務を楽しむ方法5～

<慣れないことをしてみた>

杉江 太郎

～研修計画～『慣れないことをしてみた』

今回は、普段、相談業務を行っている私が、経験したことについて、備忘録を兼ねて書かせていただきます。それは、職場での研修の計画から実施に至るまでの経過についてです。

過去の話にはなりますが、外部の講師をお招きして、職場を対象にした研修を実施いたしました。普段の仕事の中では、胃を痛めることのない私ではありましたが、今回の研修の計画～実施に至っては、胃が痛くなるという事態に陥り、本当に慣れないことをしたのだとしみじみと感じた次第です。

そのため、この場を利用して、業務と並行して研修を計画するに当たって、どのようなことに気を使い、どのように進めるのが良いのか記していきたいと思えます。

なお、胃を痛くしたことについては、私自身が普段の業務と異なることをしたことによるものであり、私個人の課題であります。講師の先生については、本当に協力的に、サポートタイプに研修を引き受けて頂きました。その点については、

誤解のないようにお願いします。

～目的～『誰の為？まずは自分の為』

今回の研修については、最初は、自身の個人的な思いからスタートしていません。本来なら職場内で計画的に実施しなければいけないところ、多忙な業務に押し寄せ、いわゆる『育成』の部分が蔑ろになっていました。さらに、今回の研修のテーマに関しては、児童相談所の中でも重要なテーマではあるにもかかわらず、その負担が一部の職員に偏っている状態が続いていました。

その状況を一掃したいと考えたときに、そのテーマの第一人者にお声掛けをしたいと思ったのが研修を実行しようと思った動機です。

実は、その先生には、3年前にも研修の講師を引き受けて頂いたことがあり、さらに別の研修でもご挨拶をさせていただく機会がありました。そのような縁もあり、日程、予算も不明、そもそも引き受けて下さるかわからない中でしたが、とりあえず研修会を開こうということだけが私の中で熱くなりました。

つまり、研修の開催については、大半

が私自身の個人的な思いによるもの＝「私の為のもの」であり、さらには、職場のマンパワーを見渡したときに必要だと考えた＝「他の職員の為のもの」であったのです。これは正直後付けですが。

～計画～『腐っても公務員』

しかし、業務として行う以上、私個人の思いだけで実行することは出来ません。私の働く自治体には、各児童相談所のメンバーが集まった専門分野のワーキンググループがあります。過去の研修もグループという単位で計画、実行に至ることが多かったことから、今回も同様にそのグループの中で、まずは提案をしました。

そして次は、予算の確保です。正直、予算体系がどのようになっているのかは、まったく把握をしておりませんし、まったく興味もありません。当然、公務員である以上、業務として研修をする場合には、予算があることが前提になります。

予算については、総務のリーダー相談をしました。その際、研修の目的・規模・参加対象者などのある程度、明確にするように指示を受けました。当然のことです。そのことを明確にするためには、今の職場の体制や、全体の育成状況、また課題となる部分が見渡せている必要があります。ワーキンググループを通して、他の児童相談所の状況は把握できていたため、その部分で手間を取ることはありませんでした。

～交渉～『メールに託された思い』

予算の確保が出来そうだという段階になり、講師の先生に研修講師を引き受けて下さるように調整を行うことになりました。過去の名刺を引っ張り出し、まずはメールを使って連絡を取ります。

そのメールでは、まずは、今の職場の状況、今回の研修の提案に至った理由、そして研修の講師を引き受けて頂きたいという依頼をまとめて、個人のアドレスから送付をしました。

講師の先生が忙しいことは当然把握していました。通常では、職場のアドレスでやり取りをする方が良いのかも知れませんが、職場のアドレスでは、私自身が休日や夜間にメールに気付くことが出来ません。それでは、ただでさえ忙しい先生と連絡を取ることが円滑に進まなくなります。そのため基本的に手から離さないであろう、スマートフォンから送れるように個人のアドレスで送ることにしました。科学の発展には感謝です。

メールが返ってくるまではドキドキしていました。思いが伝わるのか、そもそもメールに目を通してもらったのか、断られるのではないか……。でも先ほども記載した通り、サポートタイプに対応して下さる先生であったため、快く引き受けて下さることになり、安堵しました。

そして、現状や私の思いのたけを伝えるために直接出会って頂けることになりました。その打ち合わせでは、先生の助

言もあり、どのような研修にしたいのか、誰をターゲットにするのか、何を指すのかなどを確認することが出来ました。そしてその場ですぐに、日程の候補をいくつか頂くことも出来ました。予算については、お支払いは出来ることは決まっております、その旨はお伝えしましたが、正直、いくらお支払いが出来るのかは私自身が把握していませんでした。その点は反省点です。

～日程と参加者の調整～『100%はない』

先生と出会わせて頂いたことで、研修の大枠は、ぼんやりと見えている状態になりました。

次に、必要となるのが、職場内での調整です。

まずは日程について。大きく分けて、平日に行くのか、休日に行くのか決定をしなければいけません。当然、講師の先生の日程が最優先ではありますが、平日で行う場合と、休日に行く場合では配慮すべきことが大きく異なります。

例えば、休日にする場合は、プライベートの生活の調整がネックとなります。子どもが保育園に預けられない、家族で過ごす予定があるなど様々な要素が影響します。また、もし業務として行う場合、出勤扱いとなり、代休や時間外勤務の対応になる可能性も出てきます。当然、管理職は嫌がります。また職員の中には、いくら代休があるといっても、休日出勤

することに抵抗を感じる方もいるでしょう。しかし、メリットもあります。例えば、児童相談所を研修の会場として行おうと思った場合に、他の利用者が来所しにくい貸し切り状態であることです。普段、児童相談所は療育手帳の更新などで、発達障害をお持ちの方が来所されます。もしかしたら普段と違う光景を見てパニックになる方もいるかも知れません。そのことは休日に行くことで解決します。そして一番大きい、メリットは児童相談所の職員にとって、平日に時間を確保することが本当に困難な状況であるということです。平日の方が、緊急対応の割合は増えますし、予定が入りやすい状況があります。そのあたりは、休日に行くことで緩和されやすいかも知れません。

平日に行くことについては、時間の確保が難しいということ、他の来所者がいる可能性が高いことなどのデメリットがありますが、やはり、休日まで研修に行きたくないという方に参加をしてもらいやすいということ、そして、何よりも通常の業務時間内で実施できるということが大きなメリットでしょう。

次に参加者の決定についてです。参加者を希望制にするのか、それとも参加者を決めてしまうのか。今回については、結論から言うと、午前の部を経験3年以上の方、午後の部をそれ以上の方と分けて実施しました。そして参加者については、ワーキングの中で選定しました。自

由参加にすることで、意欲の高い方に積極的に参加をしてもらうということも出来たのかも知れませんが、それでは、今回の目的である、負担のバランスを解消するという事に繋がらない可能性があります。そのため、参加に対するモチベーションが低い人がいることを覚悟で、メンバーを確定することにしました。

そして参加者の範囲です。児童相談所には数多くの専門職である嘱託職員の方が多くいらっしゃいます。本来であれば、嘱託の方にも参加をして頂くべきであったのですが、多くの職員が職場を離れることや、遠方から来なければいけない嘱託さんにとっては、移動時間も負担になることを配慮し、公平性を担保する意味も込めて、今回については、正規職員の方のみの参加にしました。それでも参加者は、1日を通して50人は超えていたと思います。

日程と参加者が決まりました。そのことを周知する必要があります。職場が複数ある場合、それぞれの職場の状況や人員配置により、管理職によって、業務時間内に研修をすることへの考え方が違うと私は感じていました。当然、研修に参加することで、職場の人手が減り、緊急時に対応が早急な対応が出来なくなるというリスクもあります。その部分を管理職が懸念することもマネジメントする立場として必要なことだと思います。しかし、それでは、平等に参加して頂けなく

なることに繋がりますので、それを決定してもらう場として私は、管理職が一同に集まる会議、通称「えらいさん会議」に議題として挙げて頂きました。そこで決定されたことについては、個人で決めたものではなく、組織として決定したことになるという部分に大きな意味があると考えました。用は、決まったことに対して、文句が言いにくい状況を作ったのです。その会議に議題として研修内容、参加者案を議題として提出してもらい、トップの了解を得た上で、研修の開催が確定しました。

～チームとしての共働～『胃が痛む』

研修の細かい中身、準備物については、講師の先生とメールでやり取りを行いました。幸い、この研修の準備期間中に、講師の先生の研修を受ける機会があり、研修の中身についてもイメージをすることが出来ました。

これもやはり、個人のアドレスでやり取りを行いました。その方が即時的に反応出来るからです。

さて私の胃が痛くなり始めたのは、研修の1週間前くらいからでしょうか。前述した通り、ワーキンググループとして準備を進めていたのですが、講師の先生とやり取りをしているのが私一人であったため、私のイメージしていることをグループで共有できていないことに気付いたのです。リーダーが持つ研修のイメー

ジを周囲と共有が出来ていないと、周囲もどのように動いたら良いかわからないでしょう。

研修の枠組みに気を取られるばかりで、当日の運営に関するイメージが乏しく、当然、当日の運営を1人で行えるはずもなく、スタッフの役割分担が曖昧なまま日だけが過ぎていました。この辺りから、自身の中でなぜもう少し他者を頼ろうとしなかったのかと考えるようになっていたと思います。

このことについては、私より経験年数の長い職員のマネジメントもあり、当日の昼食を誰が買いに行くのかというようなレベルの細かい役割分担を行い、当日までの準備のスケジュールを組み、当日の進行予定もペーパーに落とし込み共有し、前日準備を経て当日を迎えました。

～研修当日～『胃の痛みはピークに』

さて、準備が滞りなく出来たにも関わらず、私の胃の痛みは当日ピークを迎えていました。それは、メンバーをこちらで選定したことによる責任や、当日の運営がスムーズに進むのかという不安、研修を経て「学び」の機会を得てもらうことに繋がるのかなど、いわゆるプレッシャーを感じていたのです。

このことは普段の仕事で感じることはない感覚でした。後から考えると、自分にも人間らしいところがあったのだと安堵する一方、組織の中でイベントを開催

することの難しさ、慣れなさを痛感しました。

当日は、走りっぱなしで私自身が研修を受ける間もなく、万歩計が今までにない数値を示していたことを覚えています。しかし、他者のロールプレイを見たり、ふとしたときに、耳に入ってくる講師の先生の言葉を聞いたりして、自分自身の思考の土壌が開拓されていくような感覚がありました。

～組織で学びの場を作るということ～

個人で学ぶことは簡単に出来ます。また個人で研修に参加することも簡単に出来ます。

しかし、組織で学びの場を作るということは、様々な要素が重なり、簡単には出来ません。

今、児童相談所はメディアでも大注目を浴びており、「専門性」に欠けると言われ、児童福祉司の国家資格化なんでものも検討されているようです。

業務に終われ、学びの場を十分に確保する時間がなかったり、学びの場にさえ行くような精神的余裕がなかったりする職員が溢れていると思います。今回の研修についても、緊急対応で当日5人程度の欠席が出ています。

このような状況で、トップダウンにより専門の資格を取りなさいと言われ、モチベーションを維持して学べる余裕のある職員がどの程度いるのでしょうか。ま

たその学び方にどのような意味があるのでしょうか。

今回、研修の立案、準備、実行を経て、業務と並行して研修を実施することの難しさ、多忙さを改めて実感しました。しかし、その中で得たものや、そのプロセスを経て、自分自身の思考の土壌を増やせたことは専門性を高める上で多いに役立つと思います。

自身の経験年数が増える中で、個人としての学びだけでなく、人材育成をどのように行っていくのか、さらにますます柔軟性が失われていく環境で、『潰れない職員』をどうやって育てていくのかが今後の課題です。

慣れないことをしてみたと書きましたが、今後の人材育成を考える中で、良い経験をさせて頂いたと思っています。次はもっと質の高い研修会を開催出来ることでしょう。これからも自分のやりたいことを自分に多少の負荷をかけながらしていきたいと思います。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

お弁当 ー14歳ー



松岡園子

3学期は短い。2月に入り、春休みまでの日数を数えだすと、残り少なさがより一層感じられるようになってきた。先生達も「もうすぐ2年になるんやから……」と話すことが増えた。

「2年では同じクラスになれたらいいな」

林さんは握ったカイロを上下に振った。朝8時。麦の穂が描かれた看板が見えてくる。

「うん、そうならいいなあ。今日もワールド、寄って行くね」

ゆりが自動ドアの前に立つと、温かく甘い香りが胸まで入り込んできた。

「あっ、新商品やっ。バレンタインが近いから？」

林さんの視線の先には5色のチョコスプレーで覆われた、手のひらほどのパンが並んでいる。ゆりはそのパンとサンドイッチ、野菜ジュースの紙パックをトレーに載せた。

祖母が亡くなってから9か月が過ぎた。独り言をつぶやき、家事もできなくなった母・夏子と神戸で二人暮らすことに、周囲は反対した。しかし、夏子と離れ、児童養護施設で暮らすことには納得がいかなかった。神戸の家に夏子と帰ってきたが、住む場所がなかなか定まらないことや夏子の入院など、それまでに経験したことのない出来事が次々と起きた。そのたびに、祖母の友人や近所の人、友達が支えてくれた。そうして9か月間やってくることもできたが、夏子は退院した昨年秋ごろから一日中、家で寝ていることが多い。

それでも、中学1年生でもあるゆりの生活は止まることなく続いていく。毎日の食事の用意や洗濯、学校の勉強も待つてはくれない。

4時間目の終わりを知らせるチャイムが鳴った。ゆりはカバンの中からワールドの袋を取り出そうと手を伸ばした。パン2個と飲み物を1本買うために、1日で400円ほどかかる。月曜から金曜まで一週間で2000円、一か月で8000円ほどかかっている。

「ゆりちゃん、あんな、うちのお母さんが、お弁当作るからそれ持って行ってあげ、って。」

水曜日だけやけど。だから明日はパン持って来んでええよ」

同じ班の板谷さんが言った。

「え、お弁当……いいの？」

板谷さんとは同じ班になるまで、特に親しいというわけではなかった。それなのに、と躊躇する気持ちがあった。

「うん。ゆりちゃんのことをお母さんに話したら、そう言ってた」

板谷さんは、眉の上で真っ直ぐに切り揃えられた前髪を揺らして微笑んだ。

次の日、4時間目が終わると、板谷さんがカバンから黄色いギンガムチェックの包みを取り出した。しっかりとアイロンがけのされているナフキンの結び目からも、愛情が伝わってくるような気がした。お弁当箱やお箸まで自分のために用意してもらうのは初めてだった。

お弁当箱の蓋をゆっくりと開けた。ゆりの予想とは違い、赤や黄色、緑が目飛び込んできた。これまで他の人のお弁当を細かい部分まで見たことがない。カラフルな色は、おかずを適当に詰めただけでは出すことのできない色合いだと感じた。自分のためにご飯を握り、おかずの色合いを考えて詰めてくれた人がいることに、胸のあたりがじんとあたたかく、膨らんでいくような気がした。

玉子焼きをかじると、甘さが広がる。ゆりがそれまでに食べたことのある玉子焼きの中で、一番優しい甘さだった。

「板谷さんの家の玉子焼きって……甘いんや」

思わず、声もれた。

「えっ、ゆりちゃん家は甘くないん？」

「うん、またちょっと違う味」

見た目は同じ玉子焼きでも、味が違う。祖母がよく作ってくれた醤油風味の香ばしさが口の中に広がることを想像していたゆりは、喉の奥に残るお菓子のような香りをかみしめた。

板谷さんのお母さんはこのお弁当を、どう思って作ってくれたんだろう。可哀想な子だと思って作ってくれたんだろうか。ゆりは、帰りに板谷さんの家に寄ることにした。

板谷さんの家は、ゆりの通学路とは別方向にあった。中学校を出て坂道を下りしばらく行くと、道路の左右が団地に挟まれた景色に変わった。板谷さんが「あそこの15棟」と指さした。

「おかえりい」

15棟と書かれた案内板の前で小学生ぐらいの女の子と男の子が声をかけてきた。「妹と弟」と板谷さんは照れくさそうに言った。板谷さんの後に続いて一緒に階段を上ると、右側のドアに手作りのような木製の表札がかかっている。ドアが開くと、焼き魚の匂いにふわっと包まれた。レースの暖簾の向こうから板谷さんのお母さんらしき人がエプロンを外しながら現れた。

「今日はお弁当、ありがとうございます。あの……洗ってなくてすみません」

自分が食べた後のお弁当箱を洗ってもらうなんて、恥ずかしいような気がした。

「お礼なんかいいよー。水曜日だけやけどね。無理な時は前もって言うからね」

板谷さんのお母さんは何も気にしていない様子で、ナフキンに包まれたお弁当箱 2 つを両手に持って揺らした。やっぱり「お母さん、ってこういう感じなんだな、と思った。夏子は今、家で寝ていることが多い。でも、つじつまの合わない話や独り言は減り、少し話ができるようになってきた。話ができるようになってきても全てができるようになるわけではなく、ゆりにも友達のことにも無関心で、誰かに何かをしてあげるといった気持ちを持つのは難しそうだ。

「お口に合ったかな？ どの家にも「うちの味」って、あるからね」

「えっと、玉子焼きが初めての味で……」

「甘かった？ それが、うちの味。ゆりちゃんの家も味もあるよね。どっちが良いとかじゃなくて、その「うちの味」っていうのでいいよ。その味は、他の家のものを味わってみないと気付けないものやから、良い機会やったね」

そう言って板谷さんのお母さんは丸い瞳で笑った。うちの味って他に何があるやろう、と考えた。おかずの味だけじゃなく、他にも「うちの味」がありそうだった。考えながら夏子の顔が浮かんだ。

残りの 3 学期、春休みもあつという間に過ぎ 2 年生になった。林さんとは違うクラスだった。

「8 クラスもあるんやから、ま、しょうがないなっ」

配られたクラス分けのプリントを見ながら北校舎の 2 階に上がった。

「私は 3 組やから、こっちやね。また帰りにね」

階段の踊り場で林さんと左右に別れた。2—6 のプレートを目指して歩く。

ゆりが教室に入ると、後ろから誰かが肩をたたいた。

「ゆーり」

奈央ちゃんだった。整髪剤ですだれのように根元を固めた前髪が前よりも一層、高さを増したような気がする。

「一緒のクラスやね」

「うん、よろしくね」

皆、新しいクラスになって落ち着かないのか、先生がまだ来ていない教室の中は話し声でいっぱいだった。

「奈央ー、同じクラスやん！」

声のした方を振り向くと、知らない女子が奈央の腕をつかみ、勢いよく引っ張っていった。その二人の後ろ姿を見ながら、ゆりは 1 年生の時とは違う雰囲気を感じた。2 年生になったからなのか、微かな変化に自分が気付いていなかったただけなのか。

一部の女子は、1年生の時にはひざ下丈だったスカートの長さも、ひざが見える位まで短くなっている。奈央もその一人だ。背が伸びたからではなく、スカートのウエスト部分を何回も巻き上げて、短くしているのだ。靴下も、よく見ないと履いているとはわからないほど短くなっている。そうすることで、足首がきゅっと締まって見える。ヘアアクセサリも黒のヘアピン以外は禁止だけれど、2本のピンをクロスさせて留めると、あか抜けて見える。規則通りの服装をしている子と、そうでない子が1つの教室の中にいる。全体を見渡すと、服装や髪形にアレンジを加えている子は、おしゃれでスタイルよく見えるような気がする。

クラス替えがあつてすぐに、奈央と同じ班になったことから親しく話すようになった。流行りのドラマや曲の話題、駅前の雑貨屋の情報など、話していると世界が広がっていくようだった。

「こんにちはー」

休み時間、ゆりの横にいる奈央に向かって1年生の女子2人が声を張り上げた。奈央は何も言わずに微笑み、手を振った。

運動部では先輩に校内や通学路で会った時に挨拶をするきまりが特に厳しいらしい。先輩を見た瞬間、廊下の隅に寄って頭を下げる。そこに笑顔はない。挨拶をしなければ、何か大変なことにでもなるのだろうか。先輩ってそんなに偉いものなんだろうか。

ゆりは子ども会で自分がピアノの弾き方を教えている、小学生の子どもたちを思い浮かべた。自分が先に学んだことを、年下の子たちに教えていく。ただそれだけの関係に、笑顔も出てこないほどの緊張感が必要なんだろうか。部活の先輩、後輩の関係って厳しいんだなと思った。

5月、奈央に数学のノートを貸した。

「今日、部活が終わったら、家にノート返しに行くね」

奈央はそう言って部活へ向かっていった。その日、奈央がノートを返しに寄り、ついでに家に上がってお菓子を食べた頃から、それまでとは違うことが起こり始めていた。

「今日、帰りに寄るから」

6時間目が終わり、ホームルームの時間になると、奈央はそう言うことが多くなった。いつもゆりの返事はイエスであると決まりきっているように、部活に行ってしまう。

「奈央ちゃんって、ちょっと怖くない？」

月、火、水と奈央が家に寄ることが続いた明るく日曜日、校舎を出て林さんと二人になったところで、おそろおそろ切り出した。

「うーん、気が強いところはあるなあ。小学校の時から奈央ちゃんは怖いよ。でも、何かされるっていうわけでもないし。私たちの言う“怖い”って……何なんやろうね」

ゆりは林さんの言葉を聞いて考え込んだ。怖かって、何が怖いんやろう。友達が怖いという気持ちは、事件の犯人を怖いと思うようなものとは違う。

「そういえば小学校の時、命令したり、思い通りにならなかったらほっぺを膨らませて怒

ってたよね」

その怒っている様子が怖いのもかもしれない。いや、それとも少し違う。違うけど、それが何なのかがわからない。会って話している時は楽しいし、怖いなんて感じないんだけど。

夕方、玄関のチャイムが鳴った。時計を見ると6時を過ぎたところだった。

「はい」

玄関の小窓から覗く。

「入るよ」

そう言いながら、すでに奈央は門を開けて入りかけている。ゆりは自分の家だけでなく、心の中にも当たり前のように入ってこられるような気がして恐ろしくなった。玄関のドアが開く。奈央ちゃんは短いスカートを揺らしながら、すぐ2階に続く階段を上り始める。自分の家のように階段を上っていく。奈央が家に上がっていることを、夏子は気づいているのだろうか。一階はしんとしたままだ。奈央が来て一緒にテレビを見たり、買い物に出かけることが多くなった。

奈央の望みは、次第にエスカレートしてきているような気がした。授業が終わり、部活に向かうまでに注文が入る。

「今日寄るから、アイス買ってきといてね。それと『りぼん』の発売日やから、それも」

奈央ちゃんは、私のことを何だと思っているんだろう。ゆりは都合のよい使い走りみたくて、情けなくなった。

「ただいまあ」

ゆりが玄関のドアを開けると、夏子の声が奥の部屋から聞こえてきた。玄関の床には、パンフレットらしきものが置かれている。

「お母ちゃん？」

パンフレットにクリップで留められた紙には「請求書」と書かれている。

「これなに？」

請求されている金額は15万円だった。心臓がどきん、どきんと大きく震える。喉の奥で息が止まる。項目のところには「屋根補修」とだけ書かれている。請求書を一枚めくると同じ金額で「領収書」と書かれた紙が出てきた。

もしかして、これ払ったの？ この前見た通帳の貯金は、確か60万円台だったはず。頭の中に、60マイナス15と計算式が浮かんだ。屋根の補修なんて、今やっている場合ではない。

「お母ちゃん、これ払ったん？」

奥の部屋で横になっている夏子に訊いた。

「うん。今日ね、業者さんが訪ねてきてね」

「何て言ってたの？」

思わず声が大きくなる。

「近所で壁の補修工事をしてたら、うちの屋根の状態が悪いのが見えて……って」

「で？」

まさか、すぐに払ったとか。背中が汗ばんでくる。業者さんとのやり取りがゆりの目の前で再現されるようだった。今の夏子なら、すぐに払うだろう。

「雨漏りしないためにもすぐに工事が必要って言って、屋根に上ってくれて」

で、払っちゃったのか。口の中が乾いてカサカサする。声が出にくい。

「そなん、今、雨漏りしてないし。屋根なんて見えへんやん。状態が悪いかどうかは、自分でも見てみなわからんやん。ちゃんと説明してもらったん？」

言いながら、あ、無理やと思った。夏子には無理だ。業者さんだって、話しながらわかったはずだ。夏子に判断が難しいということも。

「家族で相談してからにしてとか、言わなかったん？」

領収書の数字を見ていると、次第に腹が立ってきた。

「娘と2人暮らして言ったよ」

「何でそんなこと、初めて会った人に言うん！」

女2人で暮らしているなんて、自分たちの弱みをつかまれるような気がして、初めて会う人に言って欲しくはなかった。

ゆりは玄関に戻り、しばらく立ちつくしていた。自分で屋根を確認しようという気力も沸いてこない。夏子には判断が難しいのに、うまく言いくるめて代金を払わせるのは、ずるい。

ゆりは下駄箱を開けた。祖父の靴が3足入ったままだ。3年前に亡くなってからも、そのまま下駄箱にしまってあったものだ。この家に男の人がいないから、なめられるんや。下駄箱から取り出した紳士ものの靴を玄関に全部並べた。

「この家には、おじいちゃんが居るんや。だから、大事なことはおじいちゃんに訊いてからでないと、決められないんや」

そうでないと、この家のお金がなくなってしまう。

ゆりは埃をかぶった祖父の靴を力を込めて磨いた。ゆりのいない間に業者さんが来て何かを決めようとする時は、「父と相談する」と言って一旦、帰ってもらうよう、夏子に頼んだ。台所のホワイトボードにも『父と相談する』と大きく書いた。

夏休み期間の8月、駅前に「CD レンタルショップ・うさぎ堂」がオープンした。ゆりは看板を見ながら「オープンしなくていいのに」と思っていた。奈央は、関心のあるものを見つけるのが早い。

今までその道を通らないようにしていたのに、いつもの表通りが工事中だった。そのため、本屋さんに向かっていたゆりと奈央は、まわり道をしなければいけなかった。歩きながら「しまった」とゆりは思った。ここは、あのお店がある道だ。ビルの一階部分に「CD レンタル・うさぎ堂」と装飾されたガラスの扉が見えてきた。

「あ、新しくできたんやあ。行ってみよ」

やっぱり奈央は気づいた。

扉を開けると、2階へつながる階段が伸びていた。流行りの曲が耳に飛び込んでくる。

「へえ、結構せまいなあ」

奈央はどんどん階段を上っていく。

階段を上りきると CD シングルはその階にあり、「アルバムは3階」と張り紙がされていた。

店員のお姉さんと目が合った。

「初めてですか？ 中学生？ 高校生？」

「中学生です」

「だったらまずね、レンタルするには会員証を作ってもらわないといけないの。保険証とか、住所のわかるものが要るんだけど。今日、持ってるかな？」

「持ってません」

よかった。このまま諦めて忘れてくれたらいいのに、と思った。

「じゃあ、また持ってきてくれたら手続きするから、それからね」

ゆりは軽く頭を下げた。ほっとして、後ろにいた奈央の方に体の向きを変える。奈央は、CD から目を離さずに低い声で「行こ」と呟く。階段を下り、外へ出た。

「保険証があったらいいんやろ。この間、歯医者に行く時、持ってたやん」

結局、家まで保険証を取りに行き、CD を借りることになった。

「わあ、これ、聴きたかったやつ」

もう一度うさぎ堂に戻ると、奈央はもう CD しか見えていないようだった。ゆりは、何も言わずに奈央を見ていた。こんなに魅力的な空間にいと、奈央の欲望は際限なく広がっていきそうな気がした。

「次、3階行こ」

品物を入れるカゴには5枚ほどシングルが入っている。

「ゆりも、聴きたい曲ないん？」

あるよ、と言いかけて口をつぐんだ。

「うん……今はない」

聴きたい曲はあった。でも、そんなことをしたらレンタル代金が増えるだけだ。

2階に下り、カウンターで会員証を発行してもらった。代金を払う段になると、「払って」と奈央が言う。なんで奈央ちゃんの買い物なのに私が払うの、と心の中では叫んでいるのに、声にできない。ゆりは、奈央の満足そうな横顔を見ながら、心がひりひりと痛んだ。

それから週に3回ほどのペースで玄関のチャイムが鳴る。ここのところ頻繁に、奈央が家に来る。

「早く帰らんでも、大丈夫なん？」

時計は7時をまわっている。晩御飯の時間じゃないのかな。うちに来てテレビを見たり、お菓子を食べてゆっくりしている奈央の家のことが気になってきた。

「ん？ 大丈夫」

奈央のお母さんは、ゆりの家に寄っていることは知っているだろう。でも、帰りが遅くなったとしても電話ひとつかかってこない。

昨日、奈央と駅前のスーパーへ服を買いに行った。

「私が選んであげる」

そう言いながら奈央が選んでくれた服は、デニムのノースリーブシャツと白いスカートだった。奈央に言われるままに試着をしてみると、格好よく見えた。試着室から出てきたゆりを迎えたのは、カゴに入った奈央の服だった。

「これも一緒に払って」ゆりは、奈央がこの洋服を家に持って帰ったら、お母さんに叱られるのではないかと思った。買ってあげた覚えのない服を自分の子供が着ていたら、おかしいと思うだろう。「何しているの。そんなことやめなさい」そう言ってやめさせるだろう。

ゆりは期待した。

しかし、待っても待っても「その時」は訪れなかった。

奈央の要求を断るのが怖い。それに従わないと、どうなるんだろう。仲間外れにされるのかな。学校での居場所がなくなるのが怖い。だけど、今、ゆりがしていることは色々な人を裏切っている。今までお世話になった人たちはどんなに失望するだろう。そんなことしたくない。

ゆりが高熱を出した時に病院へ連れて行ってくれた、林さんのお母さんの笑顔が思い浮かぶ。ゆりが家のお金を持ち出して遊んでいると知ると、どう思うだろう。板谷さんのお母さんは？ 見守ってくれている酒屋さんのおじちゃん？ 子ども会の子どもたちは？

このままではいけない。

奈央のことを林さんに話した。2人で考えたが、林さんも奈央を怖いと言っている。どうすることもできない。でも、このままだとお金がなくなっていってしまう。2年生になってクラスが離れてからも、板谷さんは水曜日に6組を覗いてお弁当を手渡してくれる。そのたびに胸がちくりと痛む。板谷さんのお母さんは、ゆりがそんなことをしているなんて考えもしないだろう。作ってもらったお弁当を見ていると、その明るい色が自分には似合わないと感じる。今の自分には、こんな素敵なお弁当を食べさせてもらえる資格なんてない。

「お母さんに相談しよう」林さんが言った。

全部、話した。林さんのお母さんは、黙って聴いてくれていた。

「ゆりちゃん。おばちゃんに任せてくれる？ どうなっても、おばちゃんはゆりちゃんを悪いようにはしないから。一旦、家に帰り」

林さんのお母さんが真っ直ぐにゆりを見る目からは、強い力があふれていた。

家に帰ると電話が鳴った。ゆりは急いで出た。

「星が丘中学校の木下です。3組の林さんから電話をもらってかけています」

いつもの弾むような担任の声ではなく、静かな低い声にどきんとした。

「お母さんに代わってもらえますか」

電話の受話器を夏子に渡した。もうだめだ。何もかもどうにもできない。悪いのは私で、とんでもないことをたくさんしてしまった。私は屋根の業者さんよりひどい、ずるい人間だ。

夏子が電話で話している5分ほどの長さが、1日のように感じられた。電話を切った夏子はゆりのいる玄関まで静かに歩いてきた。

「今まで、勝手にお金、使ってたの？」

そうなの、ごめんなさい、そう言いたいのに言葉が出ない。その代わりに、自分でも驚くような言葉が出る。

「……知らん」

玄関に立つ夏子の目を見ることできない。その場から逃げ出したくなる。ゆりは、靴を履き、夏子の横を通り抜けて外に出ようとした。

その瞬間、頬に光が走った。「ぶたれたんだ」と気づくまで、少し間があった。

夏子を見る。血走った夏子の目とゆりの目が合った。大きく見開かれた目に吸い込まれそうになる。「しっかりしなさい、そう言われているような気がする。

「あなたがしっかりしないでどうするの、

夏子の目はそう言っている。

涙がじわりと目のふちに迫る。

お母ちゃんも私に関心がなかったわけじゃない。叱りたくても、今は病気で難しいだけなのかもしれない。

その後夏子は、奈央の家に電話を入れた。奈央はお母さんと一緒に謝りに来た。これまでの出来事を簡単に話し、今後、そんなことはしないとお互いが約束をした。その後も奈央がゆりの家に寄ることはあったが、お金を要求することは一切なかった。

「嫌やったら、言ってよ」

そういう風に言われることが増えた。謝りに来た出来事についても気にしていない様子だった。私が勝手に奈央ちゃんを怖がって、はっきり嫌だと言わないから勘違いをさせてしまったんだ。結局は自分が生み出した出来事だったんだ。

ゆりは、家のお金を使ってしまったことが気になっていた。夏子とは話ができるようになってきたが、働くのはまだまだ難しそうだった。

日本の法律では15歳になり中学を卒業した後なら働くことができると本に書いてあった。でも新聞配達は、学校が必要だと認めた場合に15歳未満であっても働くことができると聞いたような記憶があった。母親と2人暮らしでその母親が働けないのだから、必要だと認

めてもらうことはできそうだ。

ゆりは、駅前の新聞配達所の前に立っていた。ガラスの窓越しに、おじいさんが1人、チラシの束を運んでいるのが見える。5時を指す時計の下には、クリスマスリースが飾られている。日が落ちかけて辺りが薄暗くなり、年配の女性や男性がバイクで配達所へ戻ってきた。新聞配達員の人で若い人をあまり見かけない。中学生の自分が働きたいと言ったら何て言われるかな。でも、自分にできることはこれぐらいしかない。ゆりは深呼吸をした。ガラスの引き戸を右に引くとカラカラと音がした。その音に振り向いたおじいさんと目が合った。

「こんにちは、あのう……朝刊の新聞配達をさせてもらうことはできますか？」

おじいさんは、ゆりの頭からつま先までゆっくりと見た。

「お姉ちゃんは、何歳？」

「14歳です」

「えー、うーん、朝刊なあ……女の子は危なくてさせられへんなあ。お父さんやお母さんに訊いたの？ まず訊いてごらん」

今はまだ自分が働くことにも、お父さんやお母さんの許可がいる。女の子だと、危なくてさせられない仕事もあるのか。ゆりは、頭を下げて新聞配達所を後にした。

さっきまでの夕焼け空も、もう見えなくなっていた。息を吸い込むと、冬の冷たい空気が鼻の奥をツンとさす。通りかかった家の窓からカレーの匂いと笑い声が漂ってきた。ゆりは、夏子の待つ家に向かって歩き出した。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第 4 回 「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

—— 患者・家族・親族が一丸となって救った命 ——

一宮茂子

はじめに

肝移植は、現在でも余命 1 年以内を告知された患者を救命する最後の選択肢となっています。患者、家族、親族は、移植治療情報を得た時点から、否応なく移植に関するセンシティブな問題に巻きこまれます。その過程で彼らの関係性がポジティブにもネガティブにもなります。今回は子から親へ、ドナーをめぐる物語を紹介いたします。

1 なんとかしなくちゃ——父の病いと母の看病疲れ

一人娘の優子さん（仮名：30 歳代）は 10 年前に嫁いでおり、夫と 2 人暮らしです。両親は遠く離れて遠方に住み 2 人暮らしです。会社員である父（60 歳代）は肝臓病で時々入院していました。母（60 歳代）は薬剤師として勤めていました。母は「3 年くらい前から……（父は）次第に悪くなって亡くなる」ことを受け入れて、その心づもりをしていたようですが、この時点では優子さんにそのような情報を知らせていませんでした。優子さんの立ち位置から見た父は「普通の人以上に働き」、歳をとるごとに「目が黄色くなる」黄疸症状が見られたそうです。これは肝臓が悪くなっている徴候です。

その後の父は、さらに病状が悪化して食道静脈瘤⁽¹⁾や肝性脳症⁽²⁾を患い、意識がいまひとつはつきりせず、母が働きながら父の看病をしていました。しかし、それにも限界があり、父も母も倒れて、地元の病院で 2 人並んで点滴を受けるような状態になりました。優子さんはこのような両親の状態を見て「この状況を打破できるものはないのか」と思ったそうです。

あるとき地元医師から手紙を受け取った母から優子さんに連絡がありました。その手紙には父の「余命宣告のような内容が書かれていて」、ご家族に「一度お会いしてお話をしたい」という内容だったそうです。この時点で優子さんも母も移植に関する情報は知っていたのですが、その情報は医師から提供されるものだとして受け止めていました。しかし、その説明がなかったため「うちはもうアカン⁽³⁾のや」と思っていたそうです。父の在宅療養を考えてみたものの、母は「家では看きれない」として、結局、父は地元病院へ入院しました。

日を改めて優子さんと夫と母の 3 人で地元病院の医師に話を聞いたところ、父の余命は「長くて半年」と告知されたそうです。しかし肝性脳症で意識がはっきりしない父には内

(1) 食道の粘膜下にある細い静脈がこぶのようにふくれて、蛇行する病気。

(2) 肝臓で解毒できなくなったアンモニアなどの有害物質が、体内に蓄積されることで生じる意識障害。

密にしていました。

2 地元医師の情報提供のあり方

伯父（父の 5 歳年上の兄）は地元病院の医師に対して「移植とかできないのですか」「自分は歳をとっているけれど元気だから（肝臓の一部を）あげる」と自らドナーの意思表示をしたのです。それは優子さんも母も思ってもいなかった伯父の意思表示でした。それを聞いた地元医師は「そういうことを考えられているのですか……調べてみます」という反応だったそうです。

通常、患者には医師から効果が期待されるいくつかの治療法について、利益と危険性などの説明を受けたうえで選択肢を与えられ、患者自身で比較検討できるだけの情報を提供される「真実をしる権利」があります。それにたいして医師には患者が理解し納得できるように「説明する義務」があります [星野 1991: 83]。優子さんのケースでは、地元医師自身の医療観として「移植は家族の問題に踏み込んでしまうということを危惧していた」ため情報を提供しなかった、ということが後でわかりました。

しかしながら余命告知を受けている患者の家族としては、医師個人の医療観を考慮するのではなく、全ての治療法について情報提供したうえで、その選択の判断は家族がおこなうべきであったと考えます。このケースでは「なんで先生、早く言ってくれなかったのですか」という語りはあったものの、常日頃から世話になっている地元医師に対する信頼関係が強かったと思われ、それ以上のネガティブな語りはありませんでした。本来なら死を避けられない余命告知の時点で、最新医療として移植治療の選択肢が残されている情報を提示すればよかったのではないかと考えます。

3 誰がドナーになるのか？

腎不全患者には人工透析という代替医療がありますが、肝不全患者には医療が発達した現代でも代替療法はありません。生きながらえるには移植が必要となるのです。けれども生体肝移植治療を選択したとき、「誰がドナーになるのか？」という重要問題が浮上します。当然ながら脳死肝移植という選択肢もありますが、優子さんの父のように余命宣告された病状では、脳死肝移植を希望する登録患者が多いなかで待機期間や順番などは不明であり、何よりも父の命が脳死肝移植まで持つのかどうかわかりません。そうすると日本では生体肝移植を選択する患者や家族が多いのです。このケースでも、伯父の自発的意思によるドナーの意思表示を受けて、地元医師から提供された情報は脳死肝移植ではなく生体肝移植でした。

地元医師はドナーの適応条件として医学的条件（年齢、血液型、体格、健康状態など）の情報を提供したことが後述の語りからうかがえます。それは「伯父は高齢のためドナー不適応、母も高齢で体重が 40kg もなかったためドナー不適応」となりました。一人娘の優

子さんは父と血液型が一致していました。そうなる移植治療の話は、「伯父ではなく優子さんだけに一方的に」情報提供され、「とりあえず移植医療部のインフォームド・コンセントを受けてみて考えたかどうか」という説明を受けたのです。

このケースでは移植治療の話が出た時点で手術は「急ぐ」必要があったため、それなら親族は「応援する」し、必要な物は「そろえる」などの協力的な申し出がありました。優子さん自身は「父の存在が消えてしまうことを打破したい、という気持ちがとにかく大きかった」ことから、ドナーを拒否する心情の語りは一度もありませんでした。優子さんは「父を助きたいという気持ちはずーとあって……（ドナーは）私がやったらいいんか……なんとかなるんかという感じ」で引き受けたと語っています。

この時点の優子さんは移植の実態を調べることもなく、ドナーとして「伯父がダメっていうのなら私みたいな感じ」で、ドナーは優子さんとして決まっていたのです。さらに当時の Y 病院では、ドナーは患者の親族 3 親等（両親、きょうだい、甥姪の範囲）と配偶者、という縛りがあったため、この時点では伯父と優子さん以外にドナーの意思表示がなかったことと、両親と一人娘の家族構成上、結果的に家族規範による直系家族としての責任として優子さんがドナーを引き受けたとも言えます。

4 インフォームド・コンセント

Y 病院のインフォームド・コンセントは原則として生体肝移植手術を受けるまでに間隔をあけて 3 回おこなわれます。それは外来来院時、入院後、手術前夜であり、1 回のインフォームド・コンセントは約 2 時間です。場所はプライバシーの保たれる個室で、以下の関係者が同席します。それは、移植医、移植コーディネーター、ドナー候補者、レシピエント（体調によっては不参加）、家族（ドナー候補者とレシピエントが異なる家族ならば双方の家族とくに配偶者）、さらに場合によっては親族も同席します。一方、家族事情を配慮してレシピエントとドナー候補者が個別に説明を受ける場合もあります。インフォームド・コンセントは原則 3 回おこなわれ、初回時にドナー候補者の検査がおこなわれ、その評価結果はレシピエントとは別にドナーおよびその家族に説明しています [江川・上本 2007]。

説明内容は以下のとおりです。レシピエントにかんしては、手術内容、手術の危険性と合併症（拒絶反応と感染症）、免疫抑制剤の長期間の服用とその副作用、退院後の定期的通院と検査の必要性、生体肝移植の成績、手術による利益、他の治療法の可能性などです。ドナーにかんしては、ドナーとして受ける医学的処置（検査・手術）の内容、手術の危険性と合併症、ドナーの利益、他の治療法の可能性についてなどです。さらに「肝臓の解剖図」、「臓器提供者の肝臓切除部位」、「ドナーとレシピエントの手術の傷跡」などの資料も提示します。これらは「生体部分肝移植手術に関する説明書」として資料にまとめられ、説明後に患者、家族に全て手渡されます。

4-1 優子さんのインフォームド・コンセントの受け止め方

優子さんは、インフォームド・コンセントを受ける以前に Y 病院や他病院のホームページから移植情報を収集し、さらに移植体験患者の本を読んでいました [是永 2003: 河野洋平・河野太郎 2004]。また優子さんの夫が Web ニュースを見たことで知り得た移植後のドナー情報は有益だったと思われます。なぜならば、それは日本で初めておこなわれた全国規模の生体肝移植ドナーの実態調査結果だったためです。それによると、移植後ドナーの合併症、健康状態の配慮、費用などの経済面、家族やレシピエントとの関係性の変容について、これまでほとんど考慮されてこなかったことが明らかにされていたためです [日本肝移植研究会ドナー調査委員会 2005]。

優子さんはドナーのリスクを承知したうえで移植医の説明から以下の知識を得ました。それは、正常な肝臓は一部を切除しても生体の求めに応じて再生し、十分になれば再生が止まるという臓器特異性があること。したがって、その一部をとり出して人に移植すれば生着した肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していくこと。もちろんドナーの肝臓はほぼ以前の大きさまで再生することなどです [田中ほか 1992b; 笠原ほか 2002]。これらの情報は優子さんに安心感をもたらしたに違いありません。そして「出産とかに支障がなければ、(肝臓が) 元の状態に戻るなら別にいいんじゃないの」と受け止めたのです。この語りから、医学的理由で自らがドナーを引き受けたとしても、その背景に肝臓は「再生」という医学的な臓器特異性から自分なりに納得していたことがうかがえます。また妊娠、出産は過去のケースでも支障はなく、ドナーになっても影響をおよぼしていません。

そのうえで優子さんは「父がもう半年でア坎のやったら、移植に賭けなア坎」と受け止めて移植治療に積極的な気持ちで臨んでいたといえます。

4-2 母の立ち位置から見たインフォームド・コンセントの受け止め方

一方、母の立ち位置からすると、これまでの看病の経緯から夫が「だんだん昏睡(状態)になって静かに亡くなっていくのだろう」と思っている程度の覚悟をしていたことも影響してか、夫を助けることよりも、娘がドナー手術によって「どうになってしまうのか」がとてども気がかりでドナーになることに反対していたのです。

通常、肝臓の大きさはドナーの体格によって異なります。体格が大きければ肝臓も大きいのですが、当時の優子さんは父に比べて小柄であったため提供する肝臓の大きさが父には足りず「体格ミスマッチ」で移植不可能の場合が予測されました。移植医からその説明を受けた優子さんは、移植をすれば「父は絶対に助かると思っていたのが、いや、そうじゃないかもしれない」ことを知り、非常に落胆したそうです。その後、手術方式を変えて移植可能となりましたが、一連の経過を見ていた母は、逆に娘の本心を知る機会となり、やっとドナーになることを認めたのです。

4-3 夫の立ち位置から見たインフォームド・コンセントの受け止め方

また優子さんの夫は、妻がドナーになることを十分理解して承知したうえで、優子さんよりも熱心に医師の説明を聞いていたそうです。そのうえで「なんかあったら自分が責任をもちます」と優子さんの知らないところで母に伝えています。この夫の気遣いは母にとっては信頼感や安心感につながり嬉しかったと思われれます。

4-4 父の立ち位置から見たインフォームド・コンセントの受け止め方

移植前の父は、肝性脳症のため意識障害があり、受け答えがはっきりしなかったようですがインフォームド・コンセントを受けています。医師は次のように説明したことを優子さんは語っています。「先生が父に『ちょっとお座りください』って、『今から言うことは大事なことです』と言って、『あなたが助かる方法はお嬢さんから肝臓をもらわなければなりません』と。この時点で手術スケジュールは全部決まっていたため、優子さんは父が拒否したときのことを考えて「どうなるのかなあ」と不安だったそうです。けれども父は「お任せします」と答えたのです。移植後、父が元気になってわかったことですが、このときのことを聞いてみると「父は何も分かっていなかった」そうです。

このようにして娘から父へ生体肝移植手術がおこなわれ、移植手術は成功しました。

5 移植後の回復状態

健康体であった優子さんは、ドナー手術後は元の身体に回復するまでの一定期間は「患者」となります。以下、ドナーとレシピエントの術後の回復状態を見ていきます。

5-1 ドナーの回復状態

移植後の優子さんは病棟へ収容されました。手術直後の優子さんは麻酔の影響のためか「フワフワした」感じで「ベラベラしゃべっていた」と語っています。家族や親族はその様子を見て、安心して帰りました。優子さんはその夜「今まで体験したことのないような痛み」「手のしびれ」が出てきたそうです。移植前に読んでいた代議士でドナー体験のある「河野太郎さんのブログに書いてあった……今まで体験したことのない痛み」というのは「これだと思った」そうです。優子さんがこの時の痛みを言語化すると「後からガーってくるような」痛みだったそうですが、体験者でなければ理解できないと思います。

その当時、同室者に出産経験のあるドナーがいたため、優子さんはドナー手術と出産とどちらが痛いのかを尋ねると、彼女は「出産のほうが痛いかなあ」と言われて優子さんは驚いてしまいます。しかし彼女は「出産は生んだら終わりやと分かっているけど、これは終われへん」とも語ったことから、いつまで続くかわからない痛みに不安を募らせた優子さんは、その夜はナースコールを連打したそうです。さらに、その状態は「パワーって熱も出て……いろんなことしてもらったけれど効かなかった」と術後の辛かった体験になっていることが分かりました。

ドナーの痛み止めは、腰椎から術後 48 時間にわたって持続的に注入されるように予め設置されています。この術後の疼痛は人それぞれで異なります。全く無痛の人もいれば優子さんのような強い痛みの人もあります。大抵は日にち薬で月日の経過とともに痛みは消失します。優子さんはその後の術後経過は良好であったため、術後 2 週間で退院となりました。けれどもこれで終わりではありません。その後の状態について次章で紹介します。

5-2 レシピエントの回復状態

一方、レシピエントは術後 4 日から 5 日間は集中治療室 (ICU) 収容となって全身状態を管理したうえで、問題がなければ病棟の個室に転科します。レシピエントは病状によって異なりますが、術後 1 ヶ月から 2 ヶ月で退院となります。優子さんの父は約 2 ヶ月の入院で退院となりました。その後の父は、術後合併症として胆汁の流れが悪くなり、移植して約 1 年半後に再手術を受けています。その後のトラブルはなく、レシピエントは移植後 10 年以上経過した時点でも生存しています。優子さんの勇気あるドナー決断が父の命を救ったのです。

6 移植後の支援状態

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者、家族自体に大きな不安と負担をもたらします。ドナーは退院すればすぐに自分一人で日常生活を送れる状況ではありません。2 ヶ月から 3 ヶ月くらいの療養が必要です。

6-1 心理的支援と人的支援の重要性

優子さんは手術後、胆管ドレナージといって胆管にチューブをいれて胆汁を体外に排出する状態で退院しました。そのチューブは術後 3 週間にわたって挿入されるため、退院して 1 週間後に外来で抜く予定になっています。一方、優子さんの父は入院中であるため、母は家から病院まで毎日通って、日中は父に付き添っていました。その時の状況を優子さんは以下のように語っています。

「私も退院して、まさかこんなん (胆管チューブを) つけたまま退院するなんて思わなかったし……やっぱりひとりでは? と思ったし、そしたら『誰かが家に行かなアカンや』と言うて、私の伯父の娘の従姉妹と母の妹の叔母、その 2 人が 2 週間交替ぐらいいの感じで……全部で 2 ヶ月間ズーっと誰かが家にいてくれる状況で、ご飯つくってくれたりとか、私の面倒みてくれたりとか……家のほうのフォローはしてくれて……母は 1 日として病院に行かなかった日はなかったんで。それは家も近いし……車で行ったら 10 分、15 分で……車で送ってくれる人もいて、だから……気持ち、全員が助けあうっていうチームになっていた。」

このケースでは、最初に移植情報をもたらしたのは優子さんの伯父でした。しかし伯父は高齢で医学的にドナー不適合のため優子さんがドナーを引き受けた経緯はすでに述べました。その後の伯父は「俺が言ったから優子さんがドナーにな（らざるを得な）かった」ことを後悔していたのです。ドナーは一人で犠牲と負担を担わざるを得ないため、伯父は優子さんに負債感を抱いたと思われる。

しかし、優子さんの立ち位置から見ると「伯父が言ってくれなかったら移植の話もなかった」ため、会うたびに「大丈夫、大丈夫」と伯父に感謝と労いの言葉をかけていました。このことは、伯父と優子さんの相互の心理的支援になっているといえます。

また優子さんの夫は妻の意思を尊重してドナーになることに理解を示したことは優子さんへの心理的支援であり、不測の事態となれば夫自身が責任を持つと優子さんの母に伝えていたことは夫から優子さんの母への心理的支援といえます。

さらに移植後、元気になったレシピエントの父はドナーの娘に「大変だったんだね」と言葉をかけて労い、優子さんは父に「まあそんなにパパよりまし違う」と思いやりのある言葉をかけています。このようにドナーとレシピエントの相互の心理的支援はとても重要です。

生体ドナーは多くの犠牲と負担を一人で担っています。ドナーのリスクはあってもベネフィットはゼロです。強いて言えばドナーになることでレシピエントの命が助かることがベネフィットといえます。そのため、レシピエントはわざわざドナーに感謝や労いの言葉をかけなくても分かっていると感じたとしても、レシピエントは言語化してドナーに感謝や労いの言葉を直接かけてあげて欲しいのです。そうすればドナーになって良かったとポジティブに受け止めることができるはずです。

「嫁にきたからにはその嫁の体も嫁ぎ先の『家』のもの」[野間ほか 2005] という報告もあるなかで、優子さんは、自身が嫁の立場であることをわきまえたうえで姑に経緯を説明していました。すると姑は「頑張ってやりなさい」という励ましとともに同意を得ることができたのです。このように親族は移植をするならば「応援する」という意向をもっていました。

このことは優子さん自身が、移植が契機となって家族や親族の関係性に軋轢や確執が生じる可能性や、最悪時には親族間断絶などが生じるという情報を書籍や Web 情報から得ていたからこそ配慮できた対応だと言えます。

また母が父に付き添っていた期間、舅はその母を気遣って手術当日と翌日も来院して母の横に「付いていてあげたい」という申し出があり、母は心強かったと思われる。

こうして家族・親族にとっては、移植過程の情報共有がなされたうえでの移植術となりました。そして親族自体が優子さんの退院後の療養支援のために、優子さんの実家に泊まり込みで世話をする必要性に気づき、親族は交替しながら 2 ヶ月間の人的支援をおこなったのです。

6-2 支援体制のモデル

移植医療には目に見えない費用が必要となります。2004 年から保険が適応されて医療費は格段に安くなりました。ですが患者、家族が遠方から来院している場合は、家族が付き添うことによる食費、交通費、宿泊費など経費がかさみます。優子さんのケースでは、家族や親族の社会的地位が高い職種に就いていたことから、経済的支援や社会的支援などにかかわる問題の語りは見られませんでした。

幸いなことに優子さんの実家は Y 病院の近くでした。そのため必要時は親族が車で送迎しています。このような細やかな配慮は、優子さんの外来通院や、母が父の付き添いを継続できる支援となり、優子さんにとって療養に専念できる環境と安心感につながる心理的支援、人的支援になったといえます。

このケースでは、親族が非常に友好的であり、優子さんが語ったように「チーム」として家族、親族が一丸となって支援することで家族、親族間の凝集性が高まったことがうかがえます。またドナー決定をめぐって家族に潜在していた未解決の問題があぶり出されることがありますが〔春木 2008: 164〕、優子さんは「本家の家とも、家の両親とも仲良くして……何も問題がなかった」ことから肯定感がもてる理想的な支援体制のモデルになったといえます。

このケースから学ぶべきことは、移植前のドナー決定過程における情報共有は、家族間のみならず親族をも含めてなされると、移植後支援の必要性の共通認識によって親族の協力がえられることと、支援体制が整いやすいことだと思われます。そして、なによりも家族・親族間に潜在的な問題がなかったことが良い結果をもたらしたともいえます。

一方、情報共有によって強制的に作用すると親族に負担感をもたらすとも思われ、彼らの関係性が肯定的にも否定的にもなりうることが考えられます。このように移植治療には繊細な配慮や対応が求められているといえます。

7 社会復帰

ドナーである優子さんは、退院後 2 ヶ月にわたって親族から日常生活をスムーズに過ごせるように手厚い支援を受けていたことを前章で述べました。その後、体調が回復して元気になった優子さんは、術後 1 年半くらい経過したころ、自分の経験を生かして「移植医療に携われるような仕事ができないか」と思っていたところ、たまたま臓器移植ネットワークの事務員として週 3 回勤務の募集があり、応募した結果、採用されたそうです。優子さんは移植コーディネーターではなく、彼らを支える事務の仕事、たとえば脳死提供ドナーにつながるようなセミナーの開催や研修会などの業務のお手伝いをしているそうです。

この当時の優子さんは生体肝移植ドナーを体験して父の命を救えたからこそ、自分にもできる何かを「社会に返したいという気持ちが家族全員にあった」ことが、この仕事に就いた大きな理由だそうです。それは母にも同様に見られ、薬剤師として患者とかかわると

きは窓口対応だけではなく、窓口から外に出て話を聴くという対応の変化をもたらしたのです。

一方、レシピエントである父は、退院後は生涯にわたる定期的な外来通院と免疫抑制剤の内服が必要です。移植後数年を経て、私は元気になられた優子さんの父に Y 病院の外来で偶然にお目にかかりました。その時の父は、「娘はボランティアと社会貢献を兼ねて移植関係の仕事をやっているんですよ」と、誇らしげに語っていたのが記憶に残っています。私は移植医療関係者として、元気になられたドナーやレシピエントに会ったとき、この仕事に関わることができて本当に良かったと心から感謝しています。

8 関係性の変容

対人援助学マガジン 34 号 9 月 337 頁の分析モデルから、この事例を見ていくと、優子さんのケースで登場した関係者は、専門職は地元医師、移植医であり、非専門職はドナー、レシピエント、家族、親族でした。そして、移植前の時間軸では、患者の余命告知から始まって生体肝移植の選択と同時にドナー候補者を選定するのですが、もともと伯父がドナーの意思表示をしたものの医学的条件で伯父はドナー不適合となり、母も不適合だったため、ドナーは優子さんに決定しました。

生体移植でもっとも問題が顕在化するの、分析モデルでいうと「ドナー候補者の選定」や「ドナー決定」「レシピエントの生存死亡」「関係性の変容」の要因です。優子さんのケースでは、家族の一人が命に関わる重い病状にあって、助ける治療法があるのなら、家族も親族も協力するという一致団結するというポジティブな関係性が生まれました。これは家族、親族のダイナミズムと言えらると思います。

インフォームド・コンセントを受ける前からドナーになる優子さんは移植情報を集め、夫の協力も得て、生体肝移植によるリスクもベネフィットも承知した上で移植術を受けています。地元医師や移植医との関係性について、多くの語りはありませんでしたが、少なくともネガティブな関係性は見られませんでした。

このケースでは移植後の入院中や退院後に、ドナーやレシピエントは家族や親族から多くの人的支援、心理的支援を受けていました。そのためレシピエント、ドナー、家族、親族の関係性はとても友好的でした。それは移植という出来事によって即座に成り立つものではなく、やはり常日頃からこれまで生きてきた有り様が、レシピエントの命を救うために患者、家族、親族が一致団結して臨むという力を与えたと考えます。

またドナーは順調に回復し、レシピエントは 1 年半後に再手術を受けていますが、順調に回復して、10 年以上経た時点でも生きています。このようにレシピエントが生きているのか、亡くなったのか、どのように亡くなったのか、その意味づけによって関与者の関係性は、ポジティブにもネガティブにもなります。レシピエントの「生」「死」の要因は、その後の関与者の関係性に大きな影響をおよぼすことが分かっています [一宮 2016]。このケースでは、レシピエントは生きていて、移植前から移植後 1 年以上経過した時間軸上で

も患者、家族、親族の関係性は良好で、ドナーの優子さんは社会復帰して移植関係の事務仕事をしていることから、「移植を受けてよかった」とドナーの意味づけはポジティブでした。

おわりに

このケースの物語には 2 つの大きな山がありました。一つは移植前のドナー決定過程で、あり、もう一つは移植後から退院して体調が回復するまでの患者、家族、親族の心理的支援と人的支援とその関係性でした。このケースは全体的に見ると、理想的なポジティブモデルのサクセスストーリーだといえます。

しかし、誰でもこのように上手くいくとは限りません。次回は移植が成功しても、家族や親族関係に支障をきたすケースを紹介いたします。

9 文 献

江川裕人・上本伸二, 2007, 「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.

春木繁一, 2008, 『腎移植をめぐる兄弟姉妹 精神科医が語る生体腎移植の家族』日本医学館.

星野一正, 1997, 『インフォームド・コンセント——日本に馴染む六つの提言』丸善.

一宮茂子, 2016, 『移植と家族——生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.

河野洋平・河野太郎著, 2004, 『決断——河野父子の生体肝移植』朝日新聞社.

是永美恵子, 2003, 『生体肝移植を受けて——癌告知から八四〇日の闘い』光文社新書.

笠原群生・木内哲也・田中紘一, 2002, 「わが国における肝移植の現況」『消化器外科』25(3): 277-282.

野間俊一, 2005, 「置き換えられる身体／置き換えられる生——生体肝移植医療における精神医学的・心理社会的諸問題」山中康裕・河合俊雄編『京大心理臨床シリーズ2 心理療法と医学の接点』創元社, 98-116.

田中紘一・間中大・田野龍介ほか, 1992, 「生体肝移植の現況」『外科診療』34(7): 895-901.

10 オンライン文献

日本肝移植研究会ドナー調査委員会, 2005, 「生体肝移植ドナーに関する調査報告書」(http://jlts.umin.ac.jp/images/donor_survey_full.pdf, 2019.2.19)

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第3回

私って、何者なん？

身体障害者手帳が私に貼り付けるラベル

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう者」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

はじめに

今回は、私が自分の障害をどのように受容してきたかを、具体的に書いてみたい。耳の障害

も目の障害も進行性のため、障害を受容することは、私の人生そのものであり、過去の話ではないが、これまでのことを一度自分自身でしっかり振り返ってみることは意味があるだろう。

これを書く上で、健常者時代（0歳～28歳）と障害者時代（28歳～現在42歳）というふたつの時代にわけてみた。私は、28才までを、自分の「健常者」時代であると感じている。耳も目も悪かったが、自分が「障害者だ」と意識していなかった。人が自分自身を「障害者だ」と考えるのは、いったいどういうことがきっかけになるのだろう。今回のエッセイではそんなことを考えてみたい。

健常者時代（0歳～28歳）

■幼稚園のころ

ものごころがついたころの幼稚園から補聴器をつけていた。つまり、気づいたときには、私はすでに難聴の子供だった。徒歩圏内の、A

幼稚園に通う。当時、私の障害は、親も難聴だけだと思っていたが、あのころから視野狭窄は始まっていたのだろうと感じる出来事がある。

幼稚園で年に何回か避難訓練があった。クラスの集合場所に、何度頑張っても、うまく辿りつけずに、先生に毎回怒られていた記憶がある。視野障害があるとわかった20代の終わり、職場の避難訓練をおおぜいの人と一緒にして、集合場所にうまく辿りつけなかった。すぐに記憶が結びつかなかったが、幼稚園の避難訓練のときも、多分、難聴だけではなく、視野狭窄で、たくさんの幼稚園児の中、自分の先生やクラスメイトを探し出せなかったのだろうと思う。

■小学生のころ

徒歩圏内のB小学校に通う。多分、人生の中で一番、苦勞を知らず楽しく過ごせた時期だった。私の席はほとんど一番前の席だった。母が担任の先生と連絡を取り合い、PTAの役員をしながら、環境を整えてくれていた事も大きいと思う。

学校生活と並行して、週一回午後から少し離れたC小学校に1年生から通った。「きこえの教室」の言語聴覚士A先生から、手作りプリント、国語の教科書、絵本をもとに、発音や会話の練習、ひらがなと漢字の読み書きの授業を受ける。A先生からの宿題は、国語の教科書を音読と50音の発音を毎日することだ。「さ」「し」「す」「せ」「そ」と「つ」の発音が難しく、小学校4年の時に、ようやく50音の発音を全部正しく言えるようになった。A先生、親、教室に送迎するお母さま方に大変喜ばれて、50音を発音することが挨拶の代わりだったくらいだ。その後、私から親とA先生に、50音の発音のできたのでやめたいと伝えて、きこえの教室をやめた。私が社会人になり、接客や場内放送の仕事で人に言葉が伝わらない経験をして、A先生が卒業しても良いよというまで通

えば良かったと何度も後悔することになる。当時の私は、そんな事は想像にも及ばなかった。

習い事は、ピアノ・体操教室・習字・ソフトボール・そろばん・スイミング・スケート等を習わせてもらった。

■中学生のころ

中学校も、徒歩圏内のD中学校に通う。泳ぐのが大好きだったので水泳部に入った。授業は前方の席で受けたが、定期テストで40点代が取れたら良い方で数学で5点を取り、担任より「高校は難しいかもしれない」と言われる。同じ水泳部の友人が私塾に誘ってくれたことで希望の兆しがみえた。

私塾のB先生から、英語と数学を教科書にもとづいて学んだ。英語の読み書きをしっかりとさせてくれた。例えば英語の授業のときB先生が「cave」と英単語を言うと、日本語訳を答えるのだが、私は洞窟だと思って「どうくつ」を「どうつく」と言い続けた。「どうくつ」と言えるまで、みんなの前で何度も練習をさせてくれた。私にとって、第二の「きこえの教室」だった。数学は、教科書の例題を黒板で説明しながら解き、わかるまで教えてくれた。お陰で、英語の教科書の英文は自然に覚えて、数学の教科書の問題も全部解けるようになった。勉強が好きになり、他の教科の点数もアップした。私も学校も親も諦めていた高校に合格することができた。

■高校生のころ～

「網膜色素変性症」と診断

自転車を全力回転させて15分のE高校に通った。やっぱり泳ぐのが好きなので水泳部と、毎日泳ぐことができるFスイミングの選手コースに入った。学校へは病気以外は休まず遅刻もせずに行ったが、授業中は教室にいな

半分参加できず、半分参加せず。先生が書いた黒板をノートに写すことを途中でやめる事が多かった。視野狭窄で黒板が見えにくかったせいもあったと思うが、友達にノートを借りるわけでもなかった。授業中は受けるフリをして、遠くに住む友人に手紙を書いたり、泳ぎ方をイメージしたり、クラスの友達の真似をして、腕と手でイヤホンを隠しカセット式のウォークマンで音楽を聴いた。ある日、あんまり喋ったことがない後席の女の子が「尾崎豊好きなん？イヤホンから、ガンガン音漏れてるので～笑」と書いたメモをこっそりくれて、急いで音量を下げた事がある。難聴なので、「音漏れ」というものの存在を知らなかった。

定期テスト対策は、私塾のB先生から学んだ教科書を地道にやる方法を貫き、本屋の教科書の参考書を立ち読みしたりしながら、赤点を取ったり、高点を取り返したりして、なんとかか過ぎた。

網膜色素変性症と1年生の冬に診断された。第1回(第33号)のエッセイに書いたように、夕暮れの河川敷で友達と自転車競走を勝つつもりでスタートを切ったが、川と道の境目が見えずに、勝負にもならなかった。友達も私も目がおかしいと思い、親に相談すると「きつと夜盲やわ」「安心するために眼科に行こう」と言われ病院に行くと、経験のない検査をした。両眼に分厚いコンタクトのようなものを入れて、明るい光をずっと当てられ、眩しいけれど瞼を閉じることができず痛くて辛かった。検査の大変さから、病名が不安になった。家を出る前に本棚にある『家庭の医学』で「夜盲症」を調べた。「ビタミン不足」によるもので、症状は「夜が見えにくい」だけで安心した。ただ隣に同じ夜盲の症状の「網膜色素変性症」が並んでいて、「難病」「失明」の言葉に固まってしまった。網膜色素変性症だったら、嫌だなと思った。

予感的の中し、先生から「網膜色素変性症」

と診断され、「将来は失明する可能性がある」「視力があるし、良い薬が出ているから大丈夫」「紫外線が目には悪いので、外出する時はサングラスをかけなさい」と言われた。また、治療法がなく、経過観察と言われた。

そして、治療法がないため国の研究対象になること、それにより、医療費の一部を国が負担してくれるという「特定疾患医療受給者票」を、保健所で申請することをすすめられた。

長く黙っていた母が「水泳は続けても良いですか？」と訊ねた。先生は私が泳いでいることを知っていたので、水中ではゴーグル、屋外ではサングラスをすることを条件に、許可してくれた。

帰り道、母がすぐにサングラスを作りにいこうと言った。水泳を続けるかわりに、紫外線から目をしっかり守ることを約束した。そのとき母が「(特定疾患医療受給者票は)初めて社会から私の目を認めてもらえたみたいやな。」「興子の病気のためなら、お金は負担ではない、いくらかかってもいい。そこだけは間違えてほしくない。」と言ったことが印象に残っている。

私の想像だが、母にとって、私が「特定疾患医療受給者票」をもつことで、国から医療費を負担してもらえることよりも、それによって私の目の状態が普通ではないということを社会的に認められたと感じたことに意味があったのだろう。

私は3歳のとき、耳鼻科医から感音性難聴と診断されて、補聴器をつけていた。また、難聴のため、きちんと発音できず苦労してきた。それでも、身体障害者手帳の交付対象ではなかった。私がものごころついたときから、母が私の難聴を誰かに説明するときはずっと「軽度の難聴」だと伝えていた。社会的に認められる障害ではないが、普通の人と同じように聞こえない、人とはちょっと違うことを、表現するための言い方だったのかもしれない。私も母の表現を真似て、「軽度の難聴」と説明してきた。

網膜色素変性症と診断された後も、それまでどおり、夜や暗いところが見えにくい以外は、特に学校生活もクラブも何も変わらなかった。変わったのは、網膜色素変性症にかかる医療費を一部負担してもらかわりに、一年に一回、保健所に問診票の質問事項に答えて、保健師に目の変化や悩みを報告することだった。

当時は両眼とも裸眼視力が1.5もあり失明をイメージする事が難しかった。主に屋外で泳ぐため紫外線に当たることになるため、失明を早める危険性があった。水泳は本当に自分がしたかった事なので、続けられるなら失明しても良いとさえ思ったが、正直、失明とはどんなものだろうかとまったく想像できなかった。この先どうなるかわからないという大きな不安を抱えることになった。その不安感から、想像できる将来は、大学生くらいまでだった。

高校卒業後の進路を考えたとき、私には仕事ができない予感があった。働く時期を先延ばしするために大学受験を決めて塾にも通った。大学受験では、高校からもらった特別推薦枠1校と9校を受けたがすべて不合格だった。浪人して再チャレンジしたいと考え、予備校を探していると、阪神淡路大震災が起きた。幸い、私自身も、私の家族も家も無事だった。大震災で設けられた「特別枠」で大学受験のチャンスが訪れて、受かるはずなかった大学に現役で合格することができた。

■大学生のころ

強運のお陰で合格した G 女子大学文学部児童文学科には、バスと電車とバスを乗り継いで通うことになった。入学当初、難聴であることは、友達には言っていたが、ゼミの C 先生には言う機会がなかった。創作童話が楽しそうと思って入学したが、授業は創作童話だけではない。児童文学と子どもについて学んだ。授業にはついていけず、1回生の必修専門科目の3分

の2は「不可」、語学（英語・フランス語）も「不可」をもらって、再履修を重ねた。

■オーストラリア語学研修～障害と孤独

2回生の春休み、大学からオーストラリアの大学に語学研修へ観光気分で行った。滞在先は、仲の良い友人Dとペアだった。

ホームステイ先で、友人Dは一生懸命、ファミリーと英語でのコミュニケーションに挑戦し、私は隣で黙って聞いていた。英語なので日本語以上に何を言っているのかまったく聞き取れなかったが、いつもどおり黙って聞いていた。最初はとても元気だった友人Dはある日から元気がなく寝室に閉じこもるようになった。「ファミリーから『英語が前の日本人のほうが上手だったわ』と言われてショックを受けただけ、気にしないで」といいながら、学校と食事以外は早々に寝室に閉じこもる。それは、難聴の私が、時々ひどい孤独感に襲われ、落ち込んですることとよく似ていた。

友人Dを心配するファミリーと、今度は私が積極的に会話をしてみた。英語が少しわかり始めた頃、友人が復活して元気になりファミリーとの会話を楽しむようになった。

休日には郊外に出てファームステイをした。牧場の家族と友人Dと私とで、夜は空を見上げた。満点の星の美しさに、友人はこれまでに聞いたことのないような感嘆の声をあげて、感動して泣いていた。私と同じように夜空を見ても、星空はなく、ただ暗闇があるだけだった。このとき、同じ空間にいても、私は人とは同じものが見えない、みんなと感動を共有したくても、私だけ見たいものが見えない、ということに気付いた。人とくらべなければあまり自覚できなかった、自分の視覚障害を、このときに突然に痛感して、涙がぼろぼろとあふれ出て止まらなかった。

■私が見つけた「参考書」

3回生でも1回生から必須科目の再履修をしていたが、大学図書館によく行っていたお陰で、先輩方の卒業論文の存在に気づくことができた。先輩の卒業論文が授業の「参考書」となり、とても助けられた。卒業論文そのものだけでなく、引用文献を読むことで、児童文学が面白くなり3回生で再履修を終わらせることができた。

ゼミは希望した創作童話のゼミの選考試験に落ちて、児童詩のゼミに入った。卒業論文では阪田寛夫の方言を扱う児童詩をテーマに書いた。C先生から、「あなたの言いたい事がよくわからない」とよく怒られていたくらいなので、論文は目茶苦茶な構成だった。審査も厳しいものだったが、C先生が二年間で成長したこと、着眼点と引用文献を多く扱ったことを無理やり過大評価して、他の審査の先生を説得してくれた。C先生と強運のお蔭でG女子大学を無事に4年間で卒業できた。

■就職活動～「手帳が欲しい！」

就職活動はどう取り組めば良いかわからなかった。ホテル業界に憧れていたのでも、出せるだけハガキを書いて資料請求した。一次筆記試験はほとんどホテルの大宴会場で行われ、マイクで説明される内容は、素晴らしく会場に響き、難聴の私には聞きとれなかった。当時は自分が難聴だと伝える事は、「落としてください」とお願いするようなものだと思い隠した。奇跡的に面接まで進んだこともあったが、集団面接で落ちた。試験官の質問は聞こえにくく他の10名くらいの受験者の言葉は聞こえなかった。面接で質問に対する答え方を学ぶ、考えるという事もできなかった。聴覚障害を隠して就職できる可能性がないことを確信した。

東京で障害者向けの就職説明会があると大

学のポスターで知り、日帰りで朝から夕方まで色々な会社のブースに行った。身体障害者手帳がないと言うと、面談はやんわりと終わった。障害者向けの就職には身体障害者手帳が必須だった。

身体障害者手帳を持っていなければ、社会は私を「障害者」と認めてはくれない。認めてもらわなければ、就職も難しい。生きていくためには身体障害者手帳が必要だと感じた。心から「手帳が欲しい！！！！！」と思った。

■身体障害者手帳取得へ

病院で、聴力、視力・視野検査を定期的に受けていたが、検査結果に変化はなく、「良好」だった。また、毎年夏頃に保健所に行き、保健師に問診票を渡して、面談で悩みを報告したが、特に何の助言もなかった。(いま思うと、多分、保健師は助言する立場になかった。) 私が身体障害者手帳を取得したいと思っても、検査結果や保健師の反応で、取得できるほどの程度ではない事を感じていた。

自転車に乗る人から、よく睨まれるようになった。呼び鈴に気づかないせいかなと思った。歩いているとき、前方なら自転車が近づいていることは、気づくこともあったが、後ろや、横からくる自転車に気づけなくなっていた。

私は、白杖を持つと思った。初めて会う、一瞬で過ぎ去る自転車の人にも、私を睨まずに、納得して通り過ぎてくれるのには、どうしたらいいんだろうと、睨まれるたびに悩んだ。そこで、夏ごとに報告に行く保健所で、白杖を持つ同じ網膜色素変性症らしい人がいた事を思い出したのだ。私も白杖を持って良いのではないかと思った。難聴を知らせたくて白杖をもつ、おかしい話だが私は真剣にそう考えていた。

白杖は眼科で売っていると思い、近所の眼科行くと「障害者手帳を持たない人が白杖をもつことは、犯罪に近い」と言われた。その言葉を

真に受けたわけではないが、白杖が欲しいという気持ちはさらに強くなった。私の目は本当に悪くないのかなと思い、病院めぐりを始めた。

病院めぐりをした数年後、晴れて28歳の年末、視野障害だと認定され身体障害者手帳3級の交付を受けた時、とても嬉しく仕方がなかった。白杖を、堂々と持てるようになった。(実は、私は、白杖の便利さと素晴らしさを知ってしまっていて、すでに遠慮がちに使っていた。)身体障害者手帳によって、私は「障害者」だと社会に名乗ることができるんだと思うと、何かから解放された気持ちだった。

目で身体障害者手帳3級の交付をうけて障害者になっても、私は私であり、交付をうける前の私と何ら変わらない。そう思っただけでも、身体障害者手帳、また白杖というものが、誰の目にも疑いなく、私に「視覚障害者」というラベルを貼ってくれたのだ。

障害者時代 (28歳～現在)

■ 社会の変化、人の変化

その頃、仕事を探していることを会う人、会う人に伝えると、視覚障害者を探している派遣会社があると言われた。仕事内容は大学で事務と決まっていた、経験のない仕事で不安だったが、応募して採用された。身体障害者手帳がない時にはなかった、採用のプロセスに戸惑った。派遣会社の社長も担当者も障害のことを詳しく聞きいてくれて、嬉しかった。派遣先の大学では、パソコン業務と、書類の整理をした。

あるとき、職員の人たちの間を通ろうとしたとき、手をあげて私が当たらないように一斉に道をつくってくれた。大げさだな、視覚障害者イコール全盲と思われているのかな、でも、馬鹿にされているわけでもなく、顔をみると真剣に避けてくれていると感じ、なんだか温かいものを感じた。

白杖を持って街を歩けば、自転車に乗る人から睨まれることはなくなっただけではなく、知らない人が、次々と道を開けてくれて、なんだか照れくさかった。母と一緒に歩くときは、そんな反応を見てか、私が持つ重い荷物だけ、私が断っても母が持つようになった。また、バスに乗れば、白杖を持つ私に気づいた80代、90代のご高齢の女性までもが、立ちあがって、笑顔で私に席を譲ろうとしてくれた。その席に座るのは、誰から見ても、そのご高齢の女性だろうと、戸惑った。

幼少の頃からの私を知る、二人のご高齢の方に、私の白杖を持つ姿を見て泣かれてしまった事も忘れられない。一人は近所に住むご高齢の女性で、道端で会い、挨拶をすると、白杖を持つ私に驚かれて、立ち止まって声をあげて泣かれてしまった。もう一人は、母の親友のお母様だ。幼少の頃は母と泊まりで遊びにいき、よくしてもらった。母と母の親友と親友のお母様と私とで、一緒に食事をする事になり、久しぶりに会った。私の白杖を持つ姿に驚いて道に座り込んでしまい、泣き崩れられてしまった。二人とも、私が見えているから大丈夫といっても、伝わった気がしなかった。こんなに人生の先輩に泣き崩れられる事は、経験がなく、戸惑った。

あるとき大学時代に同じゼミだった友人Eと久しぶりに会い、白杖を見てちょっと驚いていたが普段通り一緒に歩いた。ひと段落して、一緒に街をあるくと道を開ける人たちに驚いたことを、言ってくれた。私も驚いているけど、白杖を持てたことはとても嬉しいことだと、嬉々と話した。私が調子にのるところもあると知る友人Eは、「気づかなくても、見ず知らずのたくさんの人が、あなたのために、道をあけてくれていることを、絶対忘れたらあかんよ」と言ってくれて、驚いたけれど嬉しかった。

■ 自分の変化

白杖を持ち、身体障害者手帳を取得した頃から、いろいろな集まりに誘われるようになった。

ある視覚障害者の集まりHは、大学病院の待合室の壁に、チラシを掲示されていたことがきっかけで知り、白杖を持ちたい旨の相談をメールすると、視覚障害者施設Iまで一緒に買いに付き合ってくれた。

その後Hの集まりに参加すると、20代から40代の自分と年齢が近い視覚障害者の人や、視覚障害に関わる仕事をしている人たちと出会った。一緒に料理をしたり、お茶をのみながら、仕事、友達、恋愛、結婚、子育てのことなど、いろいろな話をした。毎年夏に行く保健所では、同じ網膜色素変性症らしい人を見かける事であっても、年代はご高齢の方が多く、交流する機会もなかったのが新鮮だった。

また視覚障害のJ団体では、サロンを開き、白杖や眼球の動かし方などを教えてくれる講座をしていることを紹介されて参加した。サロンでは、参加者のみんなで、視覚障害の機器を取扱う業者の人の話や、クライミングをする当事者の話を聞いたり、講座では白杖の使い方、街の歩き方などを学んだ。終わった後、みんなでランチにいたり、仲良くなった人と遊びに行ったりすることも、楽しみの一つだった。幅広い年齢層の視覚障害の人や、視覚障害にかかわる仕事をしている人との出会いがあった。

私と同じ見えにくくて、聞こえにくい人にも、J団体のサロンで初めて出会った。Fさんとは、年は離れていたけれど、一緒にランチを食べることが楽しみだった。いろいろな視覚障害者の人や、それに関わる人との出会い、だんだん顔見知りになっていく。集まりに行けば、みんなに会える。

見えない人、見えにくい人、見える人の集まる場の多くは、お互いの存在が把握できるように声を出すことがとても重要で、必ず自己紹介タイムから始まる。名前、居住地、所属を簡単に伝えるだけでなく「自分の見え方」を紹介

する。視力、視野などの見え方、いつから悪くなったか、今はどうなのか・・・さらに、見えない、見えにくいことによってもたらされるもの、エピソードもついてくる。働くこと、家族、子供のこと、白杖のことなど、自己紹介が人生を語る時間にも変わることも少なくない。予定時間、予定プログラムを狂わせる恐れのある自己紹介タイムだが、個人的には、そんな時間に感動さえ覚えた事もある。今まで聞いたこともないような濃密な自己紹介タイムだからだ。私が自己紹介するときは、他の人の刺激をうけて長く喋ることもあるが、たいてい、こうだ。「K市から参りました、中條です。私は網膜色素変性症で手帳は視野狭窄で3級です。視野のかの欠け方は、中心が見えて、周辺部分が欠けています。」と伝える。難聴のことは、この場で言うほどのこととは思わなかった。

そんな出会いに恵まれ、視覚障害者になれて良かったと思った。私も視覚障害者の一員だと次第に強く感じるようになった。

■「視覚障害者」というラベルの重さ

一方、耳は相変わらず、聞こえにくいままで、家族や友達、職場の人との会話で、「え?」「なんて?」と聞きとれなかった言葉を聞き返しても、「そんな大した話じゃない」とか、「なんでもない」などと悪気はなく言われて、もう一度聞こえるように繰り返してくれる人は、ほとんどいなかった。白杖や手帳を持つことで、私の視覚障害のことは伝わっているけれど、正直、自分の見え方のせいで私が感じていた不自由は大したことはなかった。

「不自由」を感じなかった理由を、掘り下げて考えてみる。視野が狭かったが、その狭い視野で見えるものを見る世界で生きる「不自由」は、見えにくい足下にある洗濯物の籠を蹴飛ばしたり、扇風機にぶつかったり、車止めに当たって痛い思いをするぐらいだ。難聴が私に感じ

させる「不自由」と比べ、視覚障害が私に与える「不自由」は無いに等しかった。

大勢で話しているときに、会話にひとりだけいつもついていけなくなる。聴覚障害は、私をいつもいつも孤独にさせる。胸の奥が縮こまるように締めつけられ、とても痛くて、その場所にはいけないような、私は存在していないかのような気持ちにおとし入れられる。言葉は聞こえなくても、喋り方や声のトーンで、その人の話、面白そうだな、聞きたいな、と惹きつけられる。そんな中途半端な自分の「聞こえ」の状態に耐えるのが辛かった。誤解を恐れずに言えば、いっそのこと、全く聞こえなくなしてほしい、聞くことから解放されたいとさえ思った。

ファームステイの星空のことを思い出してみる。同じ夜空を見ても、友人や牧場の家族から漏れてくる感嘆の声から想像される、驚くほどの星空は、私にだけは見えていない。あのとき、見えないことが原因で、人と感動が共有できないという初めての経験に涙が溢れ出たが、現在の私が振り返っても、見えないことで涙が出るほどのつらさを感じた経験は、数えるくらいしかない。この時の涙と、私が日常的に難聴によって感じている「不自由」。共通するのは、孤独感だ。

自分が障害者として本当に辛いのは、孤独を感じる時なのではないか。もしそうだとすれば、身体障害者手帳がない聴覚障害の方が、ずっといつもいつも私に孤独を感じさせる。私にとってつらい障害だ。とても不自由だ。しかし、自分でも、自分の難聴を伝えるときは、障害者手帳を持っていないので、「軽度の難聴」「ちょっと耳が悪い」と伝える。そして、手帳のおかげで、自分自身も自分を「視覚障害者」で、「ちょっと耳が悪い」と、言葉通りに思いこんで過ごしてきた。

しかし、最近、私が入びとに伝えたい、知って欲しいと思う私の不自由さは、視覚障害ではなくて聴覚障害のほうだと気づき始めた。白杖

をもつ私にぶつからないように、私が気づかないうちに道をあけてもらうことより、「え？」と聞き返したら、もう一度ゆっくり、少し大きな声で教えてもらえることの方が、現在の私の障害のつらさを何百倍もやわらげてくれるだろう。そうしてもらえれば、私は一緒に話をすることができて、いつもやっているように聞こえているふりをしなくてすみ、孤独感から解放されるのだろうから。

確かに、身体障害者手帳の交付は、私に生きることを可能にしてくれた。この私の耳と目の状態では、働くために採用試験に合格すること、奇跡的に採用されたとしても雇用継続が難しかっただろう。しかし、交付を受けたことで、雇用形態が非正規職員でも、障害者雇用として採用され働くことができることは、とても大きかった。私はとても勇気づけられた。また白杖を、社会的に認められた視覚障害者として堂々と持つこともできた。そして、障害者になったからこそ出会えた人たち、視覚障害者の仲間がいた。視覚障害者になれて良かったと心から思った。仲間ができて、満たされたような気がしていた。

その一方で、自分自身が自分の辛さについてよくわからなくなっていた。中途半端な聴覚障害のせいで、私は孤独感をいつも味わい、それが私の今の一番の不自由だ。このことが、このエッセイを書きながら、明確になってきた気がする。このことに長く長く気づけなかったのは、視覚で身体障害者手帳をもらった事があまりにも大きかったのだ。それくらい、身体障害者手帳が私に貼り付けるラベルは重いのだ。社会だけではなく、自分自身が私に「視覚障害者」というラベルを貼りつけたのだろう。今、そう思える。身体障害者手帳に貼り付けられるラベルは、自分のこころの奥底の孤独感という本当の気持ち、とても大切な気持ちのもとさえ見えなくしてしまう。怖いくらい重い。そのことに、気づくことができた。

私の日常② 趣味は写真を撮ること



趣味は写真を撮ることだ。視覚障害者が写真を撮ることを、ええええええ???と驚かれるかもしれないが、写真を撮ることが好きだ。

私の視野は「360分の1度」だが、スマートフォンの画面の中にある、シャッターボタンを押すだけなので撮ることができる。写真のように、白杖を持ちながら撮ることも、よくある。

写真の良さは、あとで写真を見返すことができる。画像の端から端を見ることで、気づかなかったことにも気づく。また、私は網膜が悪いので、コントラストの感度がわるい。例えば虹が自分の目では見えにくいけれど、写真で見ると、色が鮮やかで、くっきりする。実物で見ると、きれいに見えるので好きだ。

そして、写真の映像が実物で見るとよりコントラストがはっきり、くっきりすることをいかして、落とし物を探すときにカメラを通して探す。例えば肌色の補聴器を床に落とした場合、床と補聴器が同化して見えても、カメラを通して探すと、くっきりと肌色の補聴器が私にも気づきやすくなり、とても役に立つ。

また、スマートフォンのカメラを通して、暗

いところが、それなりに見える。そう知ったのは、ある海外旅行の時の夕食時に入ったレストランだ。外のテラスしか席がなかったため、私を夜盲と知る友人は、手引きと言葉で食事を説明してくれるので不自由はなかった。しかし、私は一生、もうこの場所に来る事はない。「この美味しい料理を見たい!」「周りの景色も見たい!」という願望があふれる。写真で撮った後で見ることができるのではないかと思い、デジカメで撮り始めると、液晶モニターから料理が見えるではないか。私の突然の欲望をたまたま持つカメラが期待以上に満たしてくれた。

スマートフォンは、デジカメの性能より劣るかもしれないが、夜道であれば歩く道がくっきり見えたり、映画館であれば座席や通路、座席番号が見えたり、宿泊先でエレベータのボタン、ドアのキーを入れる場所を探すのに、役に立つ。私にとって、スマートフォンは、写真を撮るための道具ではなく、懐中電灯より薄くて軽く、私の暗闇を照らしてくれる。白杖に並んで大切に必要不可欠なものだ。

こころ日記 「ぼちぼち」 part II

脇野 千恵

「教員」からの卒業

昨年3月、30年以上働いてきた公立学校から退きました。大げさに言うなら、もう教壇には立たない、チョークは持たないと決心したということです。随分長く、学校現場に居座ってしまったなあというのが今の心境です。今学校は、人手不足。私のような60歳を過ぎた人間でも、まだまだ働き手として十分優遇されます。随分と引き留められました。実はこの仕事を辞めたいと思ったのは、もう5年程も前からでした。今の学校現場に魅力を感じなくなったというか、教育課程のめまぐるしい変化についていけなくなったということもあるでしょう。社会の変化に応じていかなければならないのに、慣例などにこだわり、相変わらずの閉塞感のある学校現場。本当に生きにくい場所だなと思いながら仕事をしていました。学校の常識は、世間の非常識だとよく言っていましたが、本当にあてはまる事柄をたくさん思い出すことができます。学校の組織しか知らないのだから、さして辞めて何ができるのと色々と思い巡らす日々です。

とりあえず、今は求められるままに、公立の適応指導教室の支援員として働いています。やっぱり、子どもと関わる仕事からは離れられないのだなと思いますが。

適応指導教室は、学校の別室にも入れない子が、相談や勉強、色々な活動にやって来る所です。まずは親子での相談を経て、教室に通えるかどうか体験します。実際に通室できる子は、年間5、6人くらいでしょうか。こういった機関はどこの行政も併設していますが、教室に来ると学校での出席扱いになるので、中学生などは進路のことを考え、頑張っってやって通ってきます。しかし、小学生は親の送迎が必要なので、通室にはどうしてもハードルが高くなってしまいます。送迎ができない親の元では、家庭に放置されがちな不登校生になってしまうのだなと思います。学校から離れると、見えなかったことが見えてくるなど、辛い時もしばしばです。

相談にやって来る子どもたちは、〇〇発達障じゃない？あるいはその傾向が強い？などと言われてきた子がほとんどです。心理業界の人たちとの仕事場は、診断、検査といった専門用語が飛び交っています。指導的な立ち位置にいる支援員との違いを感じますが、しばらくは、そういった子どもたちとも関わっていかうと思っています。

「塾」

少し自身のことを話すと、家庭の事情で教諭になる

機会を逸し、ずっと臨時講師として働いてきました。小学校、中学校合わせて13校の学校を渡り歩いてきましたが、義務教育での子どもたちの成長の過程をつぶさに見ることができたことは、良かったと思っています。

振り返ると、私と子どもとの関わりのスタートは塾経営でした。友人から引き継ぎ、一軒家を借りて細々と始め、自身の子どもと一緒に勉強をするという光景でした。その頃人気が出始めた近所のK文式塾は大はやりで、そっちの塾に生徒が流れていくなることがありましたが…。利益を上げる目的ではない私塾でしたので、あまり気にも留めてなかったように思います。

時間を決めず、「教室が開いている時間内なら、いつでも来ていいよ」という塾。生徒も少なかったので、個々への対応は充実していたように思います。時には、元気な中学生を家に招き、晩御飯を共にすることもありました。そういえば、生きたブラックバスをバケツに入れ、「刺身にしたらうまいで！」と届けてくれた生徒もいました。親子ハイキングなども企画し、保護者会も開き交流をしたのを覚えています。小学生と中学生との交流ができるほのぼのとした教室でした。

さて今、昼の支援員の仕事をしながら、夜、塾の手伝いをしています。早期退職をした友人の元教員が転職をし、塾長をしています。全国的に名の知れた塾ですが、まさか彼が転職として塾経営するとは、驚きでしたが。学校を辞めたのなら是非にと請われ、過去の塾での経験を活かせるのならと引き受けました。

それなりの偏差値の高い大学に通うアルバイト学生に交じって、「ばあば」と呼ばれるような私が、教えていいの？と初めは思いましたが、通ってくる生徒は様々で、なかなか面白いなあと思っています。

今の塾業界は、随分と様変わりをしてきています。予備校は別にして、ほとんどは個別式の学習方法を取り入れています。私が通う塾も完全個別式で、2人用の机に並んで座り、1時間に2人担当します。一方は国語、もう一方は数学といった感じで課題に取り組み

せ、残り30分は自主学習スペースに移り、自分で調

べ学習をしながら課題をして帰ります。宿題は必ず与えます。また、生徒の一人ひとりの記録シートがあり、授業後は毎時間細かく記録をします。授業態度、忘れ物はないか、遅刻しなかったか、宿題はやってきたか、課題の内容は何%できたかなどです。一番大変なのは、200字程度、その日の課題で何を教えたかを書かなければならないことです。できなかったことや、できたことも褒めなければなりません。教員時代の癖でしょうか、生徒の性格などに配慮しながら書くようにしています。タイムカードもあり、入退出の記録もします。記録カードは、その日のうちにメールにて保護者に送られます。指導者へのクレームがあれば、すぐに対処できるということもあるのでしょうか。幸い私へのクレームは今のところありませんが…。このようなことは、学校では到底できない対人サービスです。進路に関する情報も、学校は塾に負けています。きちんとしたデータをもとに、保護者会での綿密な話し合い。保護者からの信頼度は絶大です。

また塾に来る生徒の傾向として、不登校で学校へ行けない子が、学力をつけるためにと通って来る子が多いことです。個別授業というスタイルだから通えるのだと思いますが、人目を避けるために、隣町から来る生徒もいます。

私の担当する中学生にも、そういった子が何人かいます。「この部分は、中2で習ったよね？」と尋ねると、「学校へ行っていないので、わかりません」と答えます。学校現場にいるとき、「学校には来られんけど、塾には行ってるらしいで！」と憎々しげに悪口を言う教員がいましたが、親として子どもの進路を思えば、居場所と学力をお金で買えるのなら、塾も選択の一つなのだ。どんな形でも外に出られて勉強ができることに、それなりの価値はあると思います。

時々、「先生は学校にいたことがあるんですか？」と生徒に聞かれます。答えにつまってしまうのですが。たった週に一回、90分のふれあいではあるけれど、次第にそれなりの信頼関係が生まれてくるのが、ちょっと嬉しいです。

つづく

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●創刊当時、10年続くことなど考えていなかった。むしろ、すぐ潰れるとか、頑張っただけで続けろ！と思っていたのではない。毎号重ねていたら今号で9年を終え、いよいよ10年目を迎えることになったただけだ。続けようとしたというより続いた。多分、世の中には、こうした営みが溢れている。

ちょっとしたことで大騒ぎしたり、自慢したり、時代の寵児になりたがったりする輩も多い。そんな世界で、黙々と10年、20年、己のすべきことに従事する。こういう人々の成果の下に、私達は暮らしている。それが社会への信頼の根拠であり、安心である。

政治家や国家公務員批判が目的ではない。私達の日常、周囲にも散見される、あまりにも杜撰で誠実さを欠いた仕事が、社会の大切なものをどんどん崩していくのを心配しているのだ。日本のマスメディアの弱虫加減も、SNSの無知も、結局云ってるだけだから、あれで済んでしまう。何事によらず、具体化して実行する。それしかない時代なのだ。

●「病児保育所奮闘記」大石さんの連載が休止になる。事情は御本人の執筆者短信をご覧ください。臼井さんの連載は10回をもって一区切りとお申し出があった。しばらく休載、今回はお休み、いろんな方がある。

脇野千恵さんからは、復活、連載再開の宣言。そしてサトウタツヤさんは久々の登場だ。

10年目を迎えようとする本マガジン、時の変化を受けて、執筆者もいつまでも同じという訳にはいかない。世の中が刻々変化しているのだから、こちらの変化も当然だ。日々新たに引き締めていきたいと思えます。そんなこんなで、今号も300頁越え。関心の領域からぜひご覧下さい。

編集員(チバ アキオ)

日本のプロバスケットボール、Bリーグにはまって、半年も経っていない。それでも結構わかるようになった。父が亡くなって秋田に行ったときに、気分転換をしたくて、

実家近所のアリーナをホームとする「秋田ノーザンハピネッツ」の試合を観に行った。秋田でこれだけ人が集まり、これだけ興奮している秋田人をたくさん見るのは初めてだった。当然、相当熱心なファンがいる。そこでの有名な人もいる。今はインターネットとSNSの時代でどっぷりとハマり、横のつながりができる。それを甘受できる環境が整っている。炎上など、意見の交換には不向きではあるが事実を伝えることは十分できる。事実の威力からSNS禁止の職場も当然ある。公式にそうは言わなくても様々なルールでそれを明に暗に醸し出しているところもある。

そうした流れからは距離を置くのが対人援助学マガジンであり、その執筆陣である。意識しているのは社会である。たくさんのお客が物語をつくる。担保された事実が新しい時代への原動力になる。小さな事実の積み重ねからしか始まらない。きちんとした事実の積み重ねは報われないことはない。目の前の出来事にきちんと向き合う。世の中捨てたものではない。そう多くの人に伝えようとしている。社会への信頼の回復である。人間への信頼の回復である。未来への希望の回復である。

父と別れたこの時期に、ハマること。この心理的な意味は深く理解している。それでも幅が広がるし、経験も広がる。そういう時期があってもいいのだ！バモス(やってやろう)！

編集員(オオタニ タカシ)

「好きを仕事にする」。一見魅力的なようで、どこかの学校の入学者募集のキャッチコピーのような軽さも感じられる言葉。おそらく後者は、「なりたい職業」や「特定の職業のもつある(わかりやすく、典型的な)一側面」を表しているに過ぎないからだろう。仕事は苦勞してなんぼで現実はその甘くないよ、という声も聞こえてきそう。

そんなことを思いながら我が身を振り返ってみると、総じていえば、やりたいことを仕事にできているという実感がある。もちろん、細かな不満がないとは言わないけれど。今の職場に採用が決まったのは、ちょうど16年前の3月。4月1日の初出勤まで2週間ほどのことで、正直に言えば「好き」になる以前に、「知らない」職場だった。学部時代の恩師から他に決まっていなかったのなら行ってみないかと声をかけてもらったことがきっかけだった。

「面白そう」と思えたお誘いには、あまり先のことを心配し過ぎず、基本的にはのる方向で考えてみる。この行動方針が、今のところはいい方向で機能しているのかも知れません。このマガジンでの仕事も、好きなものの一つです。私にとってのよき導き手の方々に感謝しつつ、徐々に自分でしっかり選び取っていく力も備えていかなければいけない年齢になってきたとも感じているところです。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4 3 8
ランプラス二条御幸町4 0 2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻36号

第9巻 第四号

2019年3月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第37号は2019年06月15日
発刊の予定です。
原稿締切2019年05月25日！**

いよいよ10年目を迎えるマガジン。新たな書き手を求めています。新たなジャンルからの、書き手の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決まっているわけでもありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

ヒトコマ漫画「公園の生き字引」を描いたのは、何十年前のことだ。私は気に入っていて、今も通用する感覚だと思っているが、皆さんの目にはどうだろう。

たくさん見識を頭の中に持ち、体験を蓄積した高齢者達。肉体的な衰えは高齢化の常だが、人生は体育祭でも、ミスコンでもないから、活用の場はいくらでもあると思う。

しかしそう思えない多くの人達が、アンチエイジングだ、老後不安解消のための利殖だと落ち着きなく蠢く。

元同僚のNさんと話しているとき、この話題が登場して、PCに保存してあったこのマンガを見せた。社会学者の関心としたら、今日の日本社会に浮遊するあらゆるテーマとリンクする観点だ。

漫画家は上から目線で何かを語れるほど賢くない。そんなつもりで、偉そうに斜に構えた漫画家など、あっという間に消えてしまう。

加藤芳郎さんに代表されるような、かつての漫画家は、その道のインテリだった。だからちゃんと漫画家視線の教養人として物事を語っていた。

今、そういう賢者は少なくなって、マーケットのアイテムの一つとして漫画家も存在する。売れるか、売れないかと言われると、編集者のいろんな意見も呑まざるをえない。

更にもっと大きなうねりは、ヒトコマ漫画など必要としない社会の現実が、そこにこだわる漫画家に大きく覆い被さってきている。

(2019/03/15)